忍びの旗

池波正太郎

新潮文庫

忍びの旗

池波正太郎

新潮文庫

忍びの旗　池波正太郎

い 16 19

新潮文庫 640

9784101156194

1910193006408

定価640円（本体621円）

戦乱の渦がいやおうなく忍びの世界をも巻きこんだ豊臣秀吉の治世——甲賀忍者・上田源五郎は、亡父の敵とは知らず、その娘を愛した。彼の運命を変えたのは、実にこの時であった。〝忍びの生死は闇から闇へ消えるもの。だが俺は……〟組織の非情の掟にそむき、執拗な追跡をうけつつも、人間の熱い血と忍者の苛酷な使命とを、見事に溶け合わせて生きぬいた男の流転の生涯。

ISBN4-10-115619-0

C0193 P640E

新潮文庫

池波正太郎の本

忍者丹波大介
男（おとこぶり）振
侠客
剣の天地
食卓の情景
闇の狩人（上・下）
上意討ち＊
散歩のとき何か食べたくなって
闇は知っている
雲霧仁左衛門（前・後）
さむらい劇場
おとこの秘図（上・中・下）
忍びの旗
日曜日の万年筆
真田騒動
男の作法
あほうがらすおせん
男の系譜
味と映画の歳時記
剣客商売
剣客商売② 辻斬り
剣客商売③ 陽炎の男
剣客商売④ 天魔
剣客商売⑤ 白い鬼
剣客商売⑥ 新妻
剣客商売⑦ 隠れ簑
剣客商売⑧ 狂乱
黒白（上・下）
映画を見ると得をする
真田太平記（一）—天魔の夏—
真田太平記（二）—秘密—
真田太平記（三）—上田攻め—
真田太平記（四）—甲賀問答—
真田太平記（五）—秀頼誕生—
真田太平記（六）—家康東下—
真田太平記（七）—関ヶ原—
真田太平記（八）—紀州九度山—
真田太平記（九）—二条城—
真田太平記（十）—大坂入城—
真田太平記（十一）—大坂夏の陣—
真田太平記（十二）—雲の峰—
（全十二冊）
編笠十兵衛（上・下）
フランス映画旅行
むかしの味
あばれ狼
ドンレ・ミイの雨
谷中・首ふり坂
まんぞく　まんぞく
秘伝の声（上・下）
池波正太郎の銀座日記〔全〕
黒幕
原っぱ
ないしょ　ないしょ

＊の巻には、『新潮カセットブック』収録の作品が入っています。

カバー印刷　錦明印刷

名作を 新潮 耳で読む
カセットブック
新しい読書のスタイル
池波正太郎のカセット

●上意討ち／恋文
［1カセット］80分
朗読＝フランキー堺

敵討ちを命じられた十兵衛が、武士としての義務と人間としての情の板ばさみにあって思い悩む姿を描いた「上意討ち」。にせの恋文が様々な事件を巻き起こし、男と女の人生を意外な方向へ導いてしまう物語「恋文」。池波正太郎の時代小説より傑作二編。

新潮社版

カバー　池波正太郎

新潮文庫

忍びの旗

池波正太郎著

新潮社

忍びの旗
池波正太郎著

新潮文庫

忍びの旗

池波正太郎著

新潮社版

3064

忍びの旗

三方ヶ原

夕闇は、夜の闇に変りつつあった。

いつの間にか風が出て、暗く重くたれこめた雲を吹きはらい、その雲間に冬の星がまたたいている。

だが、三方ヶ原の台上で激烈な戦闘をおこなっている武田・徳川の両軍には、夕暮れもなければ日の出もない。

東北から西南にわたる三方ヶ原の高原は海抜・約百メートル。

この高原は南北三里(約十二キロ)・東西二里にわたっている。この高原の一角で、軍馬は狂奔し、将兵は乱戦の中で、

「敵も味方もわからぬ……」

ほどであった。

「引けい。引けい!!」

声をふりしぼって下知をあたえながら、徳川家康は闘っていた。

このときの家康は、三十一歳。

遠州（静岡県）・浜松城主である。
後年の家康ではない。
年少のころから、数知れぬほどの戦陣を経験し、馬も槍も太刀も、
「めったには負をとらぬ……」
徳川家康なのだ。
縦横に愛馬を乗りまわし、襲いかかる武田の兵を突き殪し、叩き伏せながら、
「引け、引かぬか。引け、引け!!」
将兵をまとめ、家康は必死に浜松へ退却しようとしていた。
家康の兜にも具足にも、敵と自分の血がこびりついている。
兜の下の顔は鬼神のようにすさまじく、巨大な両眼が顔から飛び出しそうに光ってい、その顔も躰も血と汗と土ほこりにまみれつくしていた。
大将の家康は、みずから後にとどまり、追撃して来る武田軍を喰いとめている。
家来たちを、
（先へ、引き退かせよう）
としているのだ。
家来たちは家来たちで、
「殿を……殿を早く……」
家康を先へ逃がそうとした。

だが、濃い夕闇と、朦々たる戦塵の中での乱戦だけに、
「えい、おう!!」
「おう、えい!!」
雄叫びをあげて繰り出して来る敵の新手にへだてられてしまい、主の家康が何処で闘っているのか、それもわからぬ。
黒い一隊が、旋風のように徳川家康を押し包んで来た。
「おのれ!!」
馬首をめぐらし、両股に馬腹をはさみつけ、左手から馬を寄せて来た敵へ槍を突き入れたとき、家康の双手が強い衝撃をうけた。
槍が折れたのだ。
（もはや、これまでか……）
歯を喰いしばり、槍の柄を投げ捨てた家康は、身をひねって太刀を引きぬいた。
徳川家康は、それからの自分がどのように闘ったか、よくおぼえていない。
敵の馬と、敵の槍と、敵の躰とが怒濤のように自分の躰へ押し寄せ、打ち当った。
気がついたとき、家康は槍をつかんでいた。
自分の槍は折れ飛んでしまったのだから、乱闘のうちに、敵の槍をうばい取ったとしかおもわれぬ。
そのかわり、太刀は家康の手から消えている。

右腕に槍を掻いこみ、左手に手綱を取った家康は、三方ヶ原を通っている姫街道に近い小松原を走っていた。

(おれは、生きている……)

このことであった。

浜松へ向けて愛馬を駆っている自分が自分ではないようにおもえる。

この栗毛の愛馬を、家康は「三郎」と名づけた。

「三郎」とは、家康の長男で、いまは岡崎の城をあずけている松平三郎信康の名をとった。

長男・松平信康へかけている徳川家康の期待は大きい。

(わが子ながら、たのみになるやつ)

この後継者を得ただけでも、これまでの艱難を切りぬけてきた甲斐があろうというものだ。

その長男の名をつけただけに、愛馬の三郎は、

「これほどの馬に、かつて乗ったことはない」

と、家康が感嘆をしたほどで、いかな戦闘の渦に巻きこまれても、三郎は狂奔せぬ。

背に乗せている主の躰のうごきを敏感に察知し、主の手足同様にはたらいてくれた。

あの危急を逃れることができたのも、

(こやつに乗っていたからだ)

家康は、そうおもった。

三郎の脚力も、いまは、ようやくおとろえかけている。

家康は、ただ一騎であった。

追撃して来る武田軍の喚声が遠退き、小松原の闇をぬって逃げる徳川家康を追って来るものはない。

家康は、喘ぎをしずめようとし、

「よし、よし……」

三郎のくびを軽く叩いてやった。

三郎が、低くいななき、足取りをゆるめた。

家康の喉の乾きは、痛みさえともなうほどであったが、むろん、水はない。

それにしても、総大将みずから退却の殿をつとめ、ただ一騎で逃げるなどとは前代未聞のことといわねばなるまい。

このとき、小松原の闇の底から浮き出た人影が一つ、声もなく音もなく、家康の背後へせまって来た。

この男の名を、飯田彦蔵という。

彦蔵は、武田方の「忍びの者」である。

忍びの者は「間諜」といってよいわけだが、それだけでは、彼らの複雑な活躍を表現したことにはなるまい。

ことに、幼少のころから忍びの者としての修行を積んだ飯田彦蔵のような男の肉体は、常人の想像を絶するちからをそなえている。

忍びの術は一種の兵法であって、往古から、さまざまな文化と人間が、海外から日本へ渡来し、双方の交流がおこなわれるにつれ、忍びの術も日本へ根をおろし、独自の兵法として発展した。

忍びの術といえば「甲賀・伊賀」の二流によって人びとに知られているけれども、むろん、その他にも、諸方へ土着した忍びの者たちが多く存在したのである。

武田信玄は、領国の甲斐（山梨県）の山間や木曾の谷々、それに伊那谷へ土着した忍びの者たちを召し抱えて、

「古今無類」

といわれるほどの間諜網を完成したという。

飯田彦蔵も、その一人だ。

一口に忍びの者といっても、それぞれの〔特技〕があり、その特技に応じた忍びの活動をする。

たとえば、生涯にただの一度も、得物を取って敵と闘った経験がない忍びもいる。

十年も二十年も、目ざす敵地へ潜入し、しかるべき職業につき、何くわぬ顔をして、敵方の情報を送りつづけてくる忍びもいる。

だが、飯田彦蔵は〔忍び道具〕を使って敵の城郭へ潜入もするし、いまのように戦場へ出てはたらくことも多い。

戦場へ出る忍びの者は、

「戦さ忍び」

と、よばれていた。

戦さ忍びは、多種多様の武器を取って闘うこともある。

一日に四十里を走破することなど、飯田彦蔵にとっては、

「わけもないこと……」

であった。

彦蔵は、徳川軍が浜松城へ退却しはじめたので、単身、浜松へ潜入し、やがては浜松城を包囲するにちがいない武田軍のために、

（ともかくも、浜松の様子を早く探っておこう）

味方の戦さ忍びと連絡もとれぬまま、此処まで駆けぬけて来た。

と、そこへ……。

騎馬武者があらわれた。

単騎である。

徳川家康の顔を見知っている飯田彦蔵だけに、すぐさま、それと気づいた。

（よし。おれが討ち取ってくれよう!!）

咄嗟に、彦蔵は決意した。

これが、またとない機会でなくて何であろう。

戦乱は、約百年もつづいていている。

果てしがないようにおもわれた。

室町幕府は、鎌倉幕府以来の武家の政権である。

その足利将軍も、六代・七代になると、政治力も威望もおとろえるばかりになり、日本は、長い長い戦乱の時代を迎えることになった。

将軍と幕府は、守護大名をもって、日本の諸国をおさめさせてきた。

当然、守護大名たちは、おのれが支配する国々において実力をたくわえることになる。

そして……。

しだいに、将軍や幕府のいうままにならなくなった。

将軍は、首都（京都）に、ぬくぬくと住み暮している。

さらに宮廷と密着し、ほんらいの武家のたくましさを忘れた。

好むままに奢り高ぶり、

「貴族に、なりあがってしまった……」

のである。

幕府の要職にあった大名たちの、勢力争いをすら、将軍は取りしずめることができなくなった。

日本の政権が、このありさまでは、その威令も地方へ行きとどくわけがない。

守護大名たちの下にいる、地方の豪族や百姓たちまでが、だまってはいなくなった。

「このような世の中では、何をしても、かまうものか」

「自分のちから一つで、土地も国も、わがものになる!!」

「そのとおりだ!!」

道理もなく、正義もなく、ただ戦乱につぐ戦乱があるのみなのだ。

京都で起った有力大名たちの戦乱は、十年もつづいた。

応仁の乱であった。

首都は、戦火に焼けただれてしまった。

また、他の国々でも、大小の勢力が大小の戦乱をくり返した。

何十年か後に、一つ一つの小勢力が大勢力の中に、ふくみこまれて行ったのは当然であったろう。

そうなると、つぎには大勢力と大勢力の戦争に変貌しはじめた。

こうして……。

日本諸国の戦乱は、ちからの弱い大名や豪族を淘汰してしまった。

実力のある大名たちが勝ち残り、勢力と領国を押しひろげた。

たとえば、越後（新潟県）の上杉謙信である。

中国地方を制覇した毛利家である。

また、尾張（愛知県）の小さな大名から急激に擡頭し、たちまち天下をのぞむダーク・ホースとなった織田信長である。

そしていま、三方ヶ原の台上において、徳川家康へ痛烈な打撃をあたえた甲斐の武田信玄

である。

天下の大権は、いま、信玄の目の前にあった。

武田家の祖は、源(みなもと) 義光(よしみつ)といわれている。

甲斐の国を朝廷からたまわった武田氏は、以来、三百年もの間、甲斐の山国をまもりおさめてきた。

四代の信義(のぶよし)のころ、甲府盆地に近い武田に居城をうつし、その地名をとって、姓を武田とあらためたのである。

それより十九代目の領主が、武田晴信(はるのぶ)だ。

晴信は三十九歳の折に、頭をまるめ、出家をして〔信玄〕と号した。

法体(ほったい)になったからといって、武田信玄は、経をよんで後半生を送るつもりではない。

これは、信玄の決意のあらわれといってよい。

人生の快楽に別れを告げ、おのれのすべてを戦陣へ打ち込もうという、激烈な決意であった。

信玄は、ひしめき合う戦国大名を制圧し、天下の覇権を、

「わが手におさめる」

ことに、生涯をかけた。

人も知るように、武田信玄の強敵は、越後の上杉輝虎(てるとら)であり、輝虎もまた出家して〔謙信〕と号した。

これも、信玄同様の決意を秘めていたからであった。

この両者は間断もなく、せめぎ合い、たがいに一歩も退(の)かなかった。

このため、信玄も謙信も、中央への進出に後れをとったといってよい。

もしも、双方のどちらかが、傘下(さんか)へ入って協力をしていたなら、織田信長の中央進出は、

「不可能となった……」

ことであろう。

信長は、武田・上杉の戦争が反復されている隙(すき)に乗じ、尾張・清洲(きよす)の一城主から、東海地方に君臨していた今川義元(いまがわよしもと)を討ち、さらに美濃(みの)の国（岐阜県）を平定した。

いま、信長は近江(おうみ)の国（滋賀県）を制しつつあった。

織田信長は、こうして、京都への最短距離に立つことができた。

京都を制することは、日本を制することなのである。

徳川家康は、織田信長にかけている。

信長の領国は富裕であり、その資性は英邁(えいまい)であった。

家康は、信長の擡頭と同時に同盟をむすんだ。

以後は、あくまでも信長のために、何年もの苦闘に堪(た)えぬいてきた。

（なれど……なれど、今日こそは、おもい知った……）

三方ヶ原の小松原の蔭(かげ)に、愛馬をとどめ、徳川家康は深いためいきを吐いた。

此処が、三方ヶ原のどのあたりなのか、よくわからぬほどに、徳川家康は疲れ果てていた。

ただ、自分と共に味方の将兵も退却にかかったことは、承知している。

そして、無我夢中の悪戦苦闘のうちに敵軍の包囲を切り破り、引き退いたのであるから、武田軍の本陣へ向って、

（逃げているのではない……）

ことは、たしかであった。

とすれば、家康は自分の浜松城を目ざしていることになる。

（どれほどの家の士が、討死をしたことか……）

それもわからぬ。

目も当てられぬ乱戦・混戦だったのだ。

五十二歳の武田信玄は、この年の十月はじめに三万余の大軍をひきいて古府中（甲府）を発し、家康の領国へ進攻して来た。

信玄は、今度こそ、徳川家康を三河（愛知県）・遠江（静岡県）から追い退け、東海地方を、

「わがものにする……」

決意であったらしい。

そうなれば、武田信玄の勢力は、甲州・信州から三河・駿河（静岡県）・遠江をふくめた宏大な地域にひろげられ、あとは、織田信長を押し破って、京都へ入るのみである。

そのときこそ、信玄は、

「天下人」

となる。

これまでに、徳川家康は頑強に武田軍の侵略をおさえて来た。

これはすべて、織田信長への〔忠誠〕のあらわれといってよい。

信長へかけた自分の期待を信じたからこそ、苦闘をつづけてきた。

だが、いま一歩のところで、信長の手は〔天下〕へとどかぬ。

今度も、三万の武田軍を迎えた徳川家康は、味方の属城や砦を信玄に奪い取られ、浜松の東方約三里の袋井のあたりへ出撃したけれども、

「怒濤のごとき……」

武田軍に打ち破られ、浜松城へ逃げもどった。

信玄は、すぐに浜松へ攻めかからず、浜松の北方六里のところにある二俣の城を一ヶ月余もかけて、ゆっくりと攻め落してしまった。

この間、浜松城にたてこもった家康は、

「手も足も出ぬ……」

状態であった。

家康が二俣城を救うことができぬのと同様に、織田信長も、また、家康を救援できぬ。

武田信玄が大軍を発したと聞いて、近江・越前（福井県）の大名や豪族たちも、にわかに不穏のうごきをしめしはじめた。

信長も、まったく気をゆるせぬ。

信長が、今度、家康へ送ってよこした部隊は、わずか三千余にすぎない。

そのかわり信長は、甲賀の頭領・山中大和守俊房に命じ、すぐれた忍びの者を十五名ほど浜松城へさしむけてよこした。

織田信長がさしむけた甲賀の忍びの者の中に、小杉重六もいた。

三方ヶ原の小松原の蔭で、一息入れている徳川家康へ、密かに迫りつつある武田忍びの飯田彦蔵と同じように、小杉重六も「戦さ忍び」として、今日の戦闘へ加わっていた。

重六は、散り散りに浜松へ向って退却する徳川の諸部隊の間を駆けまわり、連絡につとめた。

「殿は？」

「いずこにおわす？」

「生死も、わからぬままに……」

大将の徳川家康の、

徳川軍は退却しなければならなかった。

まさかに、家康が単騎で殿をしていようとは、だれもおもわぬ。

「浜松の殿を、お探し申せ」

と、甲賀忍びたちも四方へ散った。

忍びたちは、馬に乗っていない。

だが、その脚力は馬に匹敵するといってよい。

このような乱戦の中でも、忍びの者の目はあくまでも冷たく光っており、馬と馬とが打つかり合い、槍と槍とが叩き合い、突き合う中を潜りぬけ、戦況を見きわめる。

これが戦さ忍びの重要な役目といってよい。

織田信長が、甲賀の忍びたちをさしむけてよこしたのは、徳川家康の手許に、熟練の忍びの者がいなかった所為もあるけれども、一つには、自分がさしむけた甲賀忍びによって、

「正しい報告を得たい」

からでもあった。

さて……。

戦場を駆けまわっているうち、小杉重六は、

（浜松の殿は、討死をなされてはおらぬ……）

との確信を得た。

退却する徳川軍を、武田軍は追撃しつつあったが、その半数は、祝田の坂の武田本陣へ集結しはじめている。

しかし、家康を討ち取った気配がなかった。

（何としても浜松の殿の安否を見とどけねばならぬ）

と、小杉重六はおもった。

重六は四十一歳になっているが、体力も智能も忍びの者としては熟しきったところで、いまが、はたらきざかりといえよう。

甲賀には妻もいるし、虎松といって、八歳になる男の子が一人いる。

夜の闇の底を、小杉重六は吹きつける風と共に走りつづけた。

傷ついて倒れた軍馬や、まだ息絶えぬ兵士たちの呻きも、いまは耳へ入らなくなった。

いつの間にか、戦場の響みも消え、小松原を縫って音もなく走る小杉重六の聴覚は研ぎすまされている。

そのころ……。

徳川家康は愛馬・三郎の腹を軽く蹴って、歩み出し、家康に迫る飯田彦蔵が半身を起した。

飯田彦蔵は、すでに、腰の革袋から数箇の得物をつかみ出していた。

この得物は、武田忍びが使う〔投爪〕というものであった。

手指ほどの長さと太さをもち、尖端はするどい。根元のあたりに二箇所ほど、爪をかけるための窪みがきざみこまれてある。

一種の、手裏剣といってよい忍び道具なのだ。

彦蔵は、先ず〔投爪〕を家康へ投げ撃ち、それで仕とめることができぬときは、間、髪を入れずに忍び刀を抜きはらって家康へ飛びかかるつもりであった。

じりじりと、彦蔵は家康の背後へ近づき、投爪の投擲距離をちぢめ、効果を、より適確なものにしようとした。

徳川家康が呼吸をしずめていた時間は、わずかなものといってよい。

人馬ともに疲れ果ててもいたし、痛いほどに喉が乾き、苦しげに喘ぐ三郎を走らせているうち、家康は、ふっと気が遠くなりかけ、

（これではいかぬ……）

と、馬足を停めたのである。

愛馬の頸を軽く叩いてやりながら、

「三郎……これ、三郎」

よびかけた家康へ、馬が低い嘶きをもってこたえた。

あとは一気に、浜松城へ駆け込まなくてはならぬ。

武田信玄は、三方ヶ原から反転して浜松城を包囲するにちがいなかった。

「行くぞ」

愛馬へ声をかけた徳川家康が手綱を引き、馬首をめぐらしたのと、躰を起した飯田彦蔵が投爪を投げつけたのが、同時であった。

闇を切り裂いて疾った二箇の投爪のうち、一箇が家康の左腕へ喰い込み、一箇が馬の頸を切り裂いた。

馬が嘶き、竿立ちとなった。

彦蔵の奇襲は、一瞬遅れたといってよい。

いますこしの間、家康は休止していると、彦蔵はおもっていたのであろう。

「推参な!!」

馬上の家康が、小松原の蔭から躍り出た彦蔵を一喝した。

「ぬ!!」

忍び刀を引きぬき、走りよりざま、飯田彦蔵が六尺も跳躍し、家康の頸部をねらって薙ぎはらった。

家康が……というよりは、馬のほうが殺到する彦蔵へ備えた。馬は頸をまわし、向きを変えた。

このため、彦蔵が家康へ送り込んだ刀の切先は、家康の兜の緒を切り飛ばし、頰を浅く傷つけたにとどまった。

馬は、後足で飯田彦蔵を蹴りつけるようにしたかとおもうと、家康を乗せたまま、まっしぐらに走り出した。

徳川家康が右手で兜をむしり取り、投げ捨てるのを彦蔵は見た。

槍を傷ついた左腕に搔い込み、家康は馬腹を蹴った。

これを、飯田彦蔵が全速力で追った。

馬の尻が、家康の後姿が、たちまちに彦蔵の眼前へせまってきた。

家康の愛馬・三郎は、疲れきってもいたし、走り出したばかりのことで、まだ充分に速力が出ていない。

そこが、飯田彦蔵のつけめになった。

背後から、馬の尻へ飛び乗り、抱きすくめた家康を刺殺する。

躰の向きを変えることができぬ家康は、右手に持ち替えたばかりの槍を揮うこともできま

い。

(しめた!!)

いまや、飯田彦蔵は馬の尻を目がけて跳躍しようとした。

彦蔵は忍び刀を捨て、そのかわりに短刀を引きぬいていた。

その瞬間である。

異様な唸りが闇を縫って飯田彦蔵へ疾って来た。

(あっ……)

その唸りは、彦蔵の鼻先を掠めて行った。

跳びかけた足を倒すようにして、横ざまに身を投げた彦蔵へ、つづけざまに、何かが飛び疾ってきた。

いまは、徳川家康を追うどころではない。

何者かが、飯田彦蔵へ襲いかかって来たのだ。

この場合、家康を追う彦蔵を阻止したからには、

(徳川方の忍びの者か……)

このことである。

彦蔵は、小松原の蔭へ逃げ込むや、身をひねって彼方の闇へ〔投爪〕を飛ばしてみた。

こたえはない。

彼方の小松原の蔭に、相手は身を伏せてい、彦蔵のうごきを凝と見まもっているらしい。

彦蔵を襲ったのは、これも〔投爪〕と同じような忍び道具にちがいない。

(徳川方の戦さ忍びであるからには、おそらく織田信長がさしむけてよこしたものに相違ない……)

じりじりと、伏せた身を移しつつ、飯田彦蔵は唇をかみしめた。

すでに逃げ去った徳川家康を討ち取ることは、あきらめなくてはならぬ。

自分がうごけば、容赦なく相手の忍び道具が飛びかかってくるであろう。

(残念な……)

そのおもいは、邪魔をした相手への憎悪に変った。

飯田彦蔵へ襲いかかったのは、甲賀忍びの小杉重六であった。

重六の鋭敏な嗅覚が、徳川家康の退路を突きとめたのは当然といえよう。

だが、一瞬遅れたなら、おそらく家康は飯田彦蔵に討ち取られていたのではないか……。

むろん、家康はこのことを知らぬ。

曲者の追跡を自分と愛馬のみで振り切り、危急を脱したとおもっているにちがいなかった。

浜松城へ疾走する徳川家康の横合いから、

「殿。御無事でござったか……」

松明をかかげた一隊をひきいた騎馬武者が、よろこびの声をあげ、駆け寄って来た。

家康の臣・本多平八郎忠勝である。

のちに本多忠勝は、

「家康にすぎたるものが二つあり、唐の頭に、本多平八」

などと、天下にうたわれたほどの武勇の士だ。

「うむ……」

さすがに家康は、ほっとしたらしい。

しかし、飯田彦蔵に襲われたことなど口にすることなく、

「逸れてしもうた……」

こういったのみだ。

「それがしの、手ぬかりでござった。殿を御一人に……」

「いうな、さ、急げ」

家康を護った一隊は、曲りくねった急坂を一気に駆け下って行く。

浜松城は、間近であった。

(先ず、よかった……)

地に伏せて、小杉重六は会心の笑みを浮かべている。

小松原を縫って走りつつあったとき、重六は、すぐ近くで馬の嘶きを聞いた。

身を転じて、その場所へ走り着いたとき、重六は、これも武田方の戦さ忍びらしい男が、馬上の家康へ躍りかかるのが見えた。

小杉重六が曲者へ投げ撃ったものは、甲賀忍びの間で、

「飛苦無」

と、よばれている。
この武器は長さ二寸前後で、手の親指よりやや太めの円錐形(えんすいけい)をしており、その尖端と根もとには微妙な細工がほどこしてある。
飯田彦蔵が家康へ投げつけた〔投爪〕と、かたちもよく似ていた。
小杉重六は飛苦無を、飯田彦蔵は投爪をつかんだまま、およそ七間をへだてて闇の中に睨(にら)み合っていた。
双方とも、熟練の忍びの者だけに、いささかの油断もゆるされなかった。
二人とも、呼吸をととのえた。
つまり、呼吸を最小限にとどめるのだ。
呼吸は気配を生じ、体臭をただよわせるからであった。
このとき、吹きまくっていた強風が、ぴたりと絶えた。
「おい……」
飯田彦蔵が、突然声を投げた。
その声があがった闇の底を探るように、小杉重六が飛苦無を一箇、投げ撃った。
もとより彦蔵は、これを予期している。
「おい、これ……」
また、重六の飛苦無が、伏せている彦蔵の頭上を掠めた。
彦蔵は蛇のように身をくねらせて、位置を変え、

「こうしていても切りがないぞ。どうだ、おれと決着をつけぬか?」
と、よびかけた。
重六の返事はない。
飛苦無も投げてよこさぬ。
「たがいに、こうしていては身うごきもなるまい。というて、おれはおぬしを逃(のが)しはせぬ」
「……………」
「どうだ、いさぎよく闘おうではないか」
「それも、よいな」
と、重六の声が返って来た。
「承知か?」
「よし」
「では、名乗ろう。おれは武田忍びにて、飯田……」
いいさした彦蔵へ、小杉重六が、
「忍びどうしが、名乗ることもあるまい」
「それも、そうだな」
「おぬし、いま一息のところであったな」
「いま一足、おぬしが遅れてくれれば、おれは家康を討った」
「うふ、ふふ……」

「憎いやつだな、おぬしは……」

「それは、たがいのことよ」

「おぬしは、甲賀の人か？」

「さよう」

「では、まいるぞ」

「応!!」

二人は同時に小松原の蔭から身を起し、飛苦無と投爪を投げ合った。

闇を切り裂き、怪鳥の声のような音を発して、双方の忍び道具が相手を襲ったが、二人とも、目まぐるしいまでに走りまわりつつ投げ合ったので、無傷であった。

しかし、双方の躰は露呈されている。

手にあるかぎりの飛苦無と投爪を投げつくしたかと見る間に、

「む!!」

「やあっ!!」

気合声を発し、二人が走り寄った。

小杉重六が抜き打った忍び刀は、飯田彦蔵の脚を切りはらい、彦蔵は跳躍してこれを躱しつつ、宙に一回転し、ななめ横に飛び下りざま、地に落ちていた自分の忍び刀をつかみ取った。

すかさず、重六は彦蔵へ襲いかかっている。

それから、どれほどの時間が過ぎたろう。

小杉重六と同じ甲賀忍びで、

「夜張り」

と、よばれている助七が、この場所へあらわれた。

助七は他の甲賀忍び五名と共に、あわよくば、武田の本陣へまぎれ込み、武田信玄を奇襲し、

「討ち取ってしまおう」

と、乱戦の中を縫って祝田の坂の信玄本陣へ接近したが、やはり、どうにもならなかった。

信玄の本陣は、

「びくともしてはおらぬ……」

のである。

つまり、それだけの余裕が武田軍にあったわけだ。

大将みずから槍を揮って、殿をつとめたほどの徳川軍とは、あまりにもちがう。

白綸子の頭巾に面を包み、具足の上に朱色の法衣をまとった武田信玄は、本陣の床几へ悠然と腰をおろして、精鋭の本隊がこれを護っていた。

いかに甲賀の忍びといえども、これでは手の出しようがない。

彼方の乱戦は、ついに信玄陣まで波及してこなかった。

このため、甲賀の戦さ忍びたちは、隙を見出せなかった。そして、甲賀忍びたちも、散り

散りに戦場から離脱することになった。

夜張りの助七は、これも戦場を駆けまわり、徳川家康の安否をたしかめようとしていたが、

「いまは、仕方もなし」

あきらめて、浜松城へ向って走るうちに、この小松原へさしかかったのだ。

(や……?)

助七は、地に伏せた。

どこからか微(かす)かな呻き声がただよってくる。どちらかの戦士の一人が、重傷を負っているらしい。

武田方の負傷者なら、かまうこともないが、場所からみても、これは浜松へ退却する徳川方の戦士のものと考えてよい。

「もしも、しかるべき身分のある人ならば、放ってもおけまい」

夜張りの助七は、そうおもった。

あたりに気をくばりつつ、助七は呻き声のするあたりへ近寄って行った。

一人、倒れている。

これといって、具足も身につけていないようであった。

「あっ……」

おもわず低く叫び、身を起した助七が走り寄った。

「重六殿ではないか……」

倒れている男を抱き起し、耳もとへ口をつけた助七が

「しっかりなされ、重六殿。助七でござる。これ、重六殿……」

「しっかりなされ」

助七は、ふところをまさぐり、黒い丸薬を口うつしに、小杉重六へのみこませた。

重六は、おびただしい血にまみれていた。

短刀が重六の胸下(むなした)へ深ぶかと突き刺されている。

「重六殿……重六殿」

「う、うう……」

「気づかれたか。助七でござる」

「お……」

辛うじて両眼をひらいた小杉重六が、

ためいきを吐くようにいった。

「やられた……」

「あ、相手は何者でござる?」

「見て、わからぬか……相手は、おれを、このようにして仕とめたほどの男よ」

「では、武田方の忍びで……?」

「うむ」

「おのれ……」

助七は、怒りをこらえかねた顔つきになった。
夜張りの助七は、まだ三十には二つ三つ間のある年齢で、長年にわたり、小杉重六の下についで忍びばたらきをしてきたのである。
助七の目にも、重六の傷が致命的なものであることはあきらかであった。
「相手は……相手の名は？」
「忍びどうしの闘いに、名も身分もいらぬわ」
小杉重六は、自分に勝った飯田彦蔵については一言もふれたくないらしい。
それのみか、自分が徳川家康の危急を救ったことも、ついに洩らさなかった。
「われらの、はたらきの一切は闇から闇へ消ゆる。それでよいのだ。それでこそ、忍びのはたらきなのだ」
いつであったか、そう語った重六の声が、助七の脳裡(のうり)へよみがえってきた。
「す、助七……」
「はい。しっかりして下され。背負うてまいります」
「何を申すことか……」
微かに苦笑を浮かべた小杉重六の面(おもて)を、早くも死の影が被(おお)いかけている。
「むだなことは、おぬしも、知っていよう」
「は……」
重六の呼吸が、せわしくなって、

「たのむ……」
「は……？」
「せがれを……せがれ、虎松の面倒を、たのむ」
重六の一人子(ひとりご)で、八歳になる虎松は、いま、甲賀の地で忍びの修行に入っている。
まだ骨のかたまらぬうちから、忍びの修行は始まる。心も躰も素直で、やわらかいうちに仕込まれなくては、到底すぐれた忍びの者にはなれぬ。
「た、たのむぞ」
「しかと……しかと、引きうけ申した」
うなずいたのが、小杉重六の最期であった。
重六の頸が、がっくりと助七の腕の中でかたむいた。
三方ヶ原の戦闘における徳川方の戦死者は、千三百余人（三千余ともいわれる）であった。
武田方の戦死者は、五百にも足らなかったという。
これは重軽傷者をふくめていない。
激烈な、短時間の戦闘で、三倍余の兵力に包み込まれた徳川軍の悪戦苦闘がしのばれる。
三方ヶ原から敗走した徳川軍は浜松城へ退却したが、
「大手(おおて)の城門は、開いておけ」
と、徳川家康が命じた。
後から逃げて来る味方のためにである。

武田軍の将・馬場信春が、大手まで追って来たが、開けたままの城門内へ突入することは、さすがにためらわれた。

馬場信春も、まとまった兵力をひきいていたのではない。

敗走する徳川勢を、しゃにむに急追して来たのだから、当然といえよう。

「家康が、大胆にも城門を開いてあるのは、われらが攻め入るのを、奇計をめぐらして待ち構えているにちがいない」

馬場信春がそういって引きあげたというのは、俗説であろう。

だが、武田信玄は全軍をまとめ、やがて浜松へ押し出して来た。

浜松城の北方、犀ヶ崖に信玄は本陣を構えた。

武田軍の、おびただしい篝火が浜松城を包囲したのである。

犀ヶ崖には、三方ヶ原台地の陥没した谷間が東西に走っている。

そして、この谷間の一端が、浜松城外の沼につらなっていた。

「このままでは、気がすまぬ」

というので、城から出た徳川の奇襲部隊が、沼のほとりから谷間づたいに、突然、信玄本陣へ夜襲をかけた。

「驚破こそ……」

武田軍も、まさかとおもっていただけに、一時は相当の混乱があったようだ。

徳川方は、敵をおどろかせておき、すぐに城内へ引きあげてしまった。

双方に、これといった損害はなかったけれども、

「徳川め、しぶとい」

あれだけ、手ひどく打ち破った後だけに、徳川家康の闘志がまだ燃えているのを知って、武田の諸将は驚嘆した。

武田信玄は、三方ヶ原で、

「何としても……」

家康の首を討ち取ってしまいたかった。

なればこそ、充分の勝算がある戦いに、おもいきって小荷駄隊の兵力まで投入したのであった。

それだけに、まさに、家康は危うかったといえよう。

武田信玄は、備えをかためた浜松城へ攻めかかるようなことをしなかった。

武田の軍団は三方ヶ原の北端の台地を下り、刑部へ到着した。

信玄は、刑部の本陣において、天正元年（一五七三年）の正月を迎えたのである。

武田軍の大勝利は、たちまちに諸国へひろまって行った。

信玄もまた、ちからもない名のみの足利将軍をはじめ、諸国の大名へ、三方ヶ原の勝利を報じている。

いずれにせよ、古府中を出陣したときの武田信玄は、今度こそは東海地方をすべて手中におさめ、京都へ向けての進発を開始する決意であったろう。

一月の末になって、武田軍は、刑部から程近い野田(のだ)城への攻撃をはじめた。
この城は、三河の国における徳川方の重要拠点であり、野田が落城すると、すでに武田軍の手に帰した二俣城との線が一つにむすび合わされ、徳川方は手も足も出なくなってしまう。
家康は、
「野田だけは、何としても救わねばならぬ」
と、すぐさま織田信長へ援兵を請うたが、その援兵が着く前に、野田城は武田軍の手に落ちてしまった。
武田信玄が、城内の飲み水を絶ち切ってしまったからだ。
野田城を落した武田信玄は、それから、東へ五里ほどのところにある鳳来寺(ほうらいじ)へ入った。
この山寺の由緒は古い。
開創はあきらかでないが、かつては薬師仏を奉じ、いまは天台・真言の両宗・両学頭十二坊に別れ、切り立った火山岩の山峰にかこまれた鳳来寺の本堂へは、千数百の石段を登らねばならない。
武田信玄は、この鳳来寺へ入ったきり、春を迎えても、兵をうごかそうとはせぬ。
信玄が、発病したのであった。
病気は、かねてからの肺患が重くなったといわれる。
そして、初夏が来ると、病体の武田信玄を輿(こし)に乗せた武田の軍団は、甲斐へ向って帰国の途についた。

しかし、信玄は、ついに故国の空を見ることができなかった。
信州の駒場(こまば)まで来たとき、武田信玄の容態が悪化し、死去した。
五十三年の生涯であった。
信玄の死は、武田家によって秘密にされたが、到底、隠しきれるものではない。
信長も家康も、このことを知ったとき、おどろきもしたろうが、そのよろこびは何といって表現したらよいか、
「わからぬほど……」
であったにちがいない。
長年にわたって、気も狂いそうになるほどの重圧を受けていた相手が、突然、死んでしまったのだ。
織田信長は勇躍し、天下を目ざして猛進しはじめた。

十七年後

男は二十五歳。
女は、十八歳であった。
男の両腕が、しっかりと女の腰を巻きしめてい、女の開(はだ)けた胸もとから、ふっくりとした

白い乳房が零れている。
「げ、源五郎どの……」
喘ぎを高めつつ、女がいった。
「聞いて下され、源五郎どの……」
源五郎とよばれた男が、こたえもせず、女の乳房へ顔を埋めた。
「あ……」
女が低く呻き、両眼を閉じた。
男の右腕が女の腰からはなれ、微妙に闇の中でうごきはじめた。
「ああ……源五どの……」
「声を……」
と、男が女の耳朶へ唇を押しあてて、
「おしずかに……」
「あ……」
「外に洩れてはなりませぬ」
女は微かに、うなずいたようである。
ここは〔塩部屋〕とよばれている、一種の納戸のようなところで、七坪ほどの板敷きの部屋であった。
器物や道具類を収納してある戸棚の傍で、この男女は密会していた。

女は、この屋敷の主・山岸十兵衛直勝の長女で、名を正子という。
男は、山岸十兵衛の家来・上田源五郎だ。
つまり、家来が主人のむすめと、人目を忍んで密会していることになる。
抱き合って、ひそやかながらも激しい仕種をしているところをみても、二人の密会は、かなり以前からおこなわれていたらしい。
むろん、山岸十兵衛夫妻は、このことを知らぬ。
山岸十兵衛は、武蔵の国（埼玉県）の、鉢形城主・北条氏邦に仕え、勇猛の家臣として知られている。
上田源五郎が、山岸十兵衛の家来となったのは、一昨年の春であった。
召し抱えられてから、わずか二年を経ただけの源五郎だが、たちまちに山岸十兵衛の気に入られ、いまでは十兵衛の側を片ときもはなれぬようになった。
気転がきくばかりではなく、戦場へ出てのはたらきぶりも、
「まことに、みごとなもの……」
であって、それは取りも直さず、北条氏邦に召し抱えられた山岸十兵衛の場合と同じであった。
十兵衛が北条家の臣となったのは、六年前の天正十一年の夏のことで、以来、戦場へ出るたびに目ざましい活躍を見せ、北条氏邦をよろこばせた。
そして、いまの十兵衛直勝は主・氏邦の侍臣として重用されている。

束の間ながら、無我夢中の一時をすごし、源五郎が正子の躰からはなれた。

半身を起した上田源五郎の顔だちは、十七年前に三方ヶ原で討死をした、若き日の小杉重六そのものである。

似ているのも道理だ。

まさしく上田源五郎は、小杉重六の一子・虎松であった。

武田方の忍びの者・飯田彦蔵と闘って討たれた小杉重六は、いま、三方ヶ原の、あの小松原の土の中で、白骨化している。

重六の最期を見とどけた、同じ甲賀忍び・夜張りの助七が、その場の土中へ埋めたのである。

虎松は……いや、上田源五郎は、父の遺体が埋められた場所へ、これまでに数度、足を運んでいた。

はじめは、助七が案内をしてくれたのだ。

この物語では小杉虎松を、上田源五郎の名で書きすすめて行きたい。

源五郎は、いまも時折、夜張りの助七と会う。

助七は、闇の底から微風のようにただよいつつ、眠っている源五郎の枕もとへあらわれる。

これは、源五郎との連絡をつけるためであり、源五郎が助七へもたらした報告は、甲賀の頭領・山中大和守俊房の耳へとどけられる。

つまり、上田源五郎は亡父・重六の跡をつぎ、甲賀の忍びの者としてはたらいていることになる。

なればこそ、上田源五郎の名をもって、山岸十兵衛に仕えている。

甲賀からの指令は、山岸十兵衛の身辺を探れというのではない。

十兵衛が仕えている北条氏邦の動向を、

「探れ」

と、いうものだ。

この、武州・鉢形城の内外の様子は、すでに源五郎が助七を通じて、くわしく甲賀の頭領へ報告してあった。

この十七年の間に……。

天下は、目まぐるしい変貌をとげた。

だれもが、今日を予想し得なかったにちがいない。

三方ヶ原の戦闘がおこなわれた翌年の初夏に、武田信玄が急死したのち、武田家は信玄の子の四郎勝頼が跡をついだ。

武田勝頼は勇猛の大将であったけれども、父・信玄とくらべられては気の毒というものであろう。

いまにも、日本の天下をつかみ取ろうとしたほどの父の権勢と実力を、自分がそのままに保ちつづけたいと、勝頼は必死になった。

それだけの器量がないだけに、当然、非理が生まれる。

勝頼は焦った。

焦る武田勝頼へ、徳川家康が反撃に転じた。

家康が織田信長と合同し、武田軍を迎え撃った長篠の戦闘で、武田勝頼は決定的な敗北を喫した。

武田家が、織田・徳川両軍の進攻をうけて、完全に滅び去ったのは、七年前の天正十年である。

これで織田信長は、天下人の座についたのも同然といってよかった。

武田家を討滅した織田信長に残された課題は、中国地方に君臨する毛利一族を制圧することであった。

これが終れば、

「名実共に……」

信長の天下となる。

ところが、どうであろう。

その直前に、織田信長が急死してしまった。

おもいもかけぬことではある。

信長の重臣で、信長と共に中国へ出征することになっていた明智光秀が、突然、信長を襲撃した。

信長は大軍をひきいて中国へ出馬するため、京都の本能寺へ泊っていたところを、光秀に

襲われ、みずから火を放って自害をとげた。

この事件については、くわしく書きのべるまでもあるまい。

これまで、信長に忠誠をつらぬき通してきた明智光秀が、

「何故、謀叛をおもい立ったのか……？」

それは、いまのところ、だれにもわからぬ。

いろいろと憶測が生まれ、うわさはありすぎるほどにあるけれども、真実は不明であった。

いずれにせよ、新しい時代の英雄・織田信長は死んだ。

そして、これも信長の重臣で、中国攻めの先鋒として出陣していた羽柴秀吉が、

「あっ……」

という間に引き返して来て、明智光秀を討ち破ってしまったのだ。

光秀は、山崎の戦さに敗北し、近江の坂本城へ逃げる途中で、土民に殺された。

しかし、いつであったか夜張りの助七が上田源五郎に、こういったことがある。

「わしは、どうしても、日向守（光秀）が死んだとはおもえぬ」

おどろいた源五郎が、

「小父ご。そりゃ何故だ？」

と、問うた。

父の小杉重六の死後、間もなく母も亡くなり、それからの源五郎は、亡父の下忍びであった助七に育てられたといってもよい。

忍びの者としての修行にも、助七がつきそい、甲賀では助七の小屋に寝泊りをして育った。助七の小屋は、頭領・山中大和守の屋敷内にあって、大和守も源五郎がひとり前の忍びに成長するまでは、助七を外へ出さぬようにしてくれたものである。

「何故といわれても……」

と、夜張りの助七は微かに苦笑を浮かべて、こういった。

「われら、忍びの者の世界には人知れぬ隠し事が、いくらもある。それは、この身が八つ裂きになっても外へ洩らしてはならぬものなのだ。わが子同様のおぬしゆえ、酒に酔うて、つい、口をすべらせてしもうたわ。虎松よ。二度と、このことについては尋ねてくれるな」

さて……。

明智光秀を討滅した後の羽柴秀吉は、わずか七年の間に諸国を平定し、いまは、

「関白太政大臣・豊臣秀吉」

となってしまった。

関白太政大臣といえば、天皇を補佐して天下の政事をおこなう最高の役職である。

この位を天皇と朝廷にゆるされた豊臣秀吉は、ほとんど天下人の座をしめたといってよい。

尾張・中村の貧しい家に生まれ、織田信長の足軽から身を起した豊臣秀吉に、徳川家康は後れをとった。

信長が本能寺に害せられたとき、家康は信長の招きをうけ安土城へおもむいたのち、大坂・堺のあたりを見物中で、明智方の包囲を受け、一時は、その身が危険となったほどだ。

家康は伊賀の山地を抜け、ようやくに領国へもどったのである。

その後は、秀吉の猛進があまりにすばらしく、家康は中央進出をあきらめざるを得なかった。

一時は家康も秀吉と戦闘をまじえたものだが、秀吉のほうから、むしろ折れて出て、家康の機嫌をとるようにして、味方につけてしまった。

家康も、秀吉と長期にわたる戦闘をまじえることの不利を、よくわきまえていたのである。

しかし、現在の徳川家康の地位は、十七年前のそれとは、

「くらべものにならぬ……」

といってよい。

長年にわたり、織田信長をたすけて苦闘をつづけた実績が、そのまま家康の実力ともなり、勢力ともなっている。

ところで……。

豊臣秀吉も、これをみとめぬわけにはまいらぬ。

秀吉は妹の朝日姫を家康の妻にあたえ、ついに、わが傘下へ入らしめることに成功をした。

ただ一人だけ、豊臣秀吉の威風に、

「逆らおうとする……」

大名がいる。

関東の北条氏であった。

関東の北条氏の祖は、北条早雲であって、はじめ伊勢新九郎と名乗り、流浪の境涯にあった早雲は、戦国動乱の中に相州（神奈川県）・小田原を本拠とし、関東の南半を制覇した。

それより、五代目の当主が、いまの小田原城主・北条氏直だ。

そして、上田源五郎の主人・山岸十兵衛が仕えている北条氏邦は、氏直の叔父にあたる。

北条氏邦の武州・鉢形城は、小田原の本城を支える重要な城であった。

その城内に、上田源五郎はいる。

源五郎が甲賀の密命を受けていることは、だれも知らぬ。

山岸十兵衛直勝の屋敷は、鉢形城内・三の丸にある。

その山岸屋敷内の塩部屋の中で、主・十兵衛のむすめの正子と密会をしている上田源五郎にしてみれば、

（正子どのと、このような間柄になることは、おもってもみなかった……）

ことになる。

山岸十兵衛の言動を通じ、城主の北条氏邦や、ひいては小田原の本城の様子を探るために、忍びの者が婦女子を利用するのは、めずらしいことではない。

だが、源五郎の場合、女を利用しなくとも、山岸十兵衛の信頼は厚くなるばかりだったのである。

「源五郎どの。聞いて下され」

と、衣服をつくろったのち、正子がふたたび双腕をさしのべ、源五郎の頸すじを巻きしめながら、

「怒ってはいや。怒ってはいや」

耳もとへ唇をさし寄せて、ささやくのである。

「正子さま。何のことでござる？」

「怒りませぬか？」

「あなたさまに、私が怒ることなど、何一つありませぬ」

「きっと……」

「きっとでござる」

「うれしい」

この夜の密会は、二人にとって何度目になるだろうか。

すでに正子は、源五郎へ奔放なふるまいをするようになっていた。

それもこれも、みな、源五郎のいざないによって正子の肉体が、

「おぼえこんだ……」

ものなのである。

「源五どの……源五どの……」

またも、正子の喘ぎが高まってくるのを、源五郎はいささか、もてあます気味になって、

「正子さま。いったい、何のことでござる。お聞かせ下され」

「私は……あの、私は……」

「さ、お聞かせ下され」
「このことを耳にした上からは、源五どのも、覚悟をしてもらわねばなりませぬ」
上田源五郎は、正子にとって父の家来だ。
そこで、ともすれば源五郎を見下げる態度になる。
「覚悟と申されるは？」
「覚悟をして下さるか、いかがじゃ？」
正子は、いつになく執拗に確認をせまる。
（はて……？）
源五郎は、正子の胸の内をはかりかねた。
このとき、塩部屋の外の廊下へ、足音も気配もなく近寄って来る男がいるのを、正子も源五郎も気づかなかった。
これは、忍びの者の上田源五郎としては不覚といってよい。
それもこれも、つぎに正子がささやいた言葉が、源五郎に一種の衝撃をあたえたからであろう。
正子は、こうささやいた。
「源五どのの子が、やがて、生まれます」
「まさか……」
「何が、まさかなのです。男と女が、かようなふるまいをすれば、身ごもるのは道理じゃ」

そのとおりであった。
だが、忍びの者として、女の肉体を愛撫しても、懐妊をさせぬ方法はいくらもある。
甲賀忍びの上田源五郎が、それを心得ていないはずはなかったにもかかわらず、正子が身ごもったというのは何故なのか……。
そこにはやはり、源五郎が忍びの者としてではなく、一人の男として正子に応じたからといってよい。
「源五どの……これ、源五郎どの」
「は……」
「かくなったからは、しっかりと肚を据えて下され」
別人のように、正子の低い声音にちからがこもってきた。
「源五どのと私のことを、父上にも母上にも、申しあげねばなりませぬ」
「そ、それは……」
「申しあげて下さるか？」
否とはいえなかった。
微かに、源五郎はうなずいて見せた。
「では、いつ？」
「いつと申して……」
「七日のうちに、申しあげて下され」

「…………」

「わかりましたか？」

「わかり申した」

「もしも、源五どのが約束を違えたときは、私が父上に申しあげるつもりじゃ」

おそらく、正子も必死のおもいなのであろう。

十八歳の女とは見えぬ強さが、源五郎を圧倒した。

（これは、困った……）

もしも、主の山岸十兵衛が、源五郎の所業を怒り、

「おのれ、手討ちにしてくれる」

といわれても、仕方がないのだ。

この鉢形城内から逃げることは、わけもないことだが、そうなっては、甲賀の密命を遂行することができなくなってしまう。

実は、いま一人、上田源五郎と共に、北条氏邦に仕えている甲賀の忍びがいた。

この忍びの者は、名を飯道弥平次という。

弥平次は、夜張りの助七と同年輩の下忍びである。弥平次は北条氏邦の足軽となって入り込み、いまは、鉢形城と荒川のながれをへだてた高山にある鐘撞き堂の鐘打ちをつとめている。

鐘打ちは合わせて七人で、いずれも北条家の足軽であった。

いざというとき、この高山の鐘を乱打することによって信号が諸方へつたわり、近隣にある北条方の砦や城塞が、たちまちに非常体制に入ることになっているのだ。

上田源五郎と飯道弥平次は、たがいにそ知らぬ顔をしている。

弥平次は高山の鐘撞き堂に詰めきっていたし、双方が顔を合わせる機会は、めったにない。

源五郎と弥平次との連絡は、夜張りの助七がおこなう。

助七は月に一度か二度、鉢形城へ忍び入って来る。

月の無い夜をえらび、闇に溶け入った助七は、わけもなく警備の城兵の目を晦まし、源五郎や弥平次の眠っている枕もとへあらわれるのだ。

ちなみにいうと、上田源五郎は、柴田勝家の遺臣というふれこみで、山岸十兵衛直勝の家来となった。

柴田勝家は、織田信長の老臣であった。

信長が変死してのち、勝家は豊臣秀吉（当時は羽柴秀吉）と争い、ついに越前の北ノ庄の居城を秀吉に攻撃され、自殺をとげている。

それは、六年前のことであった。

「源五郎の父親も、北ノ庄で自害をとげたそうじゃが……この上田源五郎と申す男、若いが、なかなかに見どころがある。家来にしてみてはいかがじゃ？」

と、山岸十兵衛にすすめたのは、相州・小田原城下の法城院という寺の心山和尚である。

心山は、七十をこえた老僧で、小田原の法城院の和尚となったのは、二十余年も前のこと

だ。

心山和尚は、北条家の本拠である小田原城へも親しく出入りをしており、城主・北条氏直や、氏直の父で、いまは隠居をしている北条氏政から深い信頼を寄せられていた。

鉢形城主・北条氏邦は、氏政の弟にあたる。

こういうわけで、山岸十兵衛も、主の北条氏邦の使者として、小田原の本城へ出向くことが多い。

したがって、心山和尚とも顔見知りになっていた。

十兵衛直勝が小田原へ来た折に、心山和尚が上田源五郎を引き合わせるや、

「なるほど……」

山岸十兵衛は、一目で、源五郎を気に入ってしまったらしい。

「では、これより、わしと共に鉢形へまいるがよい」

その場から、源五郎の身柄を引き取った。

以後、二年にわたって、源五郎は主の側近く仕え、失態はなかった。

十兵衛直勝の妻・於丹にも、源五郎は気に入られている。

もしやすると正子は、両親が源五郎へよせている親愛のこころを見ぬいていたのやも知れぬ。

「源五どの。大丈夫ですよ」

別れぎわに、正子は力強くいいきった。

塩部屋の中の、二人の密会が終ろうとしている。

外の廊下に佇んでいた男が、それと看て、しずかに塩部屋の板戸の前から離れて行き、どこかへ消え去った。

屋敷の内でも、この塩部屋がある辺りは、夜に入ると廊下を通る人影もない。

闇に消えた男は、立派な体格をしていた。

その顔はさだかでなかったけれども、塩部屋の中の上田源五郎と正子ならば、闇の中でもわかったろう。

ほかでもない。

この屋敷の主・山岸十兵衛直勝であった。

もしも、このとき、十兵衛が塩部屋の戸を開け、

「何をいたしておる？」

と誰何したなら、むしろ正子は、よい機会と、おもったにちがいない。

源五郎は、どうしたろう。

これも一層、肚が据わったやも知れなかった。

だが十兵衛は、足音も荒らげずに立ち去った。

さて、そこで……。

あり得ることではないが、もしも、三方ヶ原の土に埋もれ、白骨化している小杉重六が、

山岸十兵衛の顔を見たら、何というであろうか。

「あのとき、見事に、おれを討ち取った武田忍びだ」
決して、見あやまることはなかったに相違ない。
まさに山岸十兵衛は、十七年前に小杉重六を討った武田方の忍びの者・飯田彦蔵なのである。
武田家がほろびたのち、飯田彦蔵は〔山岸十兵衛〕と名を変え、北条氏邦の家来となったことになる。
では、小杉重六の子の上田源五郎は、このことを知っているのか。
いや、知っているはずがない。
十七年前の、あのときの、忍びの者どうしの決闘は、二人きりでおこなわれている。
目撃者は、三方ヶ原の台上に吹きまくっていた風と、夜の闇のみであった。
わずかに遅れて駆けつけ、小杉重六の死を見とどけ、これを、その場に葬った夜張りの助七も知らぬことだ。
ゆえに、上田源五郎は、山岸十兵衛が亡父の敵（かたき）だとは、
「夢にも……」
おもっていない。
源五郎は、ひたすら、甲賀の頭領・山中大和守の配下として、忍びのはたらきをしているにすぎない。
そして、山中大和守俊房は、豊臣秀吉のためにはたらいている。

「では、かならず、七日のうちに……」
ささやいた正子が、共に立ちあがった上田源五郎の口を激しく吸った。
そして、源五郎より先に、塩部屋を出て行った。
その後で、源五郎は塩部屋の闇の中に坐り込み、長い間、身じろぎもせぬ。
（おれは、まだ、ひとり前の忍びの者ではなかったのか……）
屋敷内の、自分にあたえられた部屋へもどり、臥床（ふしど）に身を横たえてからも、上田源五郎は、なかなかに寝つけなかった。
忍びの者は、その肉体のはたらきを極限まで可能にするため、年少のころから、厳しい鍛練を積まなくてはならない。
同時に、常人と同じような欲望を絶ち切らねばならぬ。
いざともなれば、肉親の危急をさえ見捨てて、任務を果さねばならぬ。
源五郎がまだ年少のころ、父の小杉重六は、
「われら甲賀の者は、遠いむかしのころより天皇（みかど）の庇護（ひご）を受け、この甲賀の地に祀（まつ）られてある数かずの神社（やしろ）を守ってきたのだ。なればこそ、諸方の権勢とはむすびつかず、もしも、天皇に一朝、事あるときこそ出（い）でて戦い、常づねは平穏に田畑をたがやしつつ、忍びの術の修行にはげんだものよ」
と、甲賀武士の成り立ちを語り、
「なれど、いまは、そのような世の中ではなくなってしもうた……」

と、父が深いためいきを吐いた顔を、源五郎は、いまも忘れていない。

戦乱が諸方へおよぶにつれ、甲賀の地も、甲賀武士も、

「好むと好まざるとにかかわらず……」

権力と戦乱の渦の中に、巻きこまれていったのである。

ことに、甲賀の地は近江の国の東南にあり、往古から京都・伊勢・奈良など、政治・文化・経済の中心であった地域と関東をむすぶ行道がひらけてい、山岳と河川による自然の要塞をなしていた。

甲賀とは山脈ひとつをへだてて隣接する伊賀の国も同様であった。

甲賀・伊賀は、いずれも二十里そこその近くに、日本の首都をのぞんでいる。

したがって、戦国の世となって以来、京都を中心にして起る戦乱・動乱や、

「京を目ざして……」

進攻する諸大名に、無関係ではいられなくなったのも当然といえよう。

ことに伊賀の国は、大小の勢力がせめぎ合い、侵略し合ったものだから、忍びの者たちが一つに団結するという余裕もなく、彼らは、それぞれに分散し、諸方の勢力にむすびついた。

「なれば、伊賀の忍びには、わが住む土地をまもるというこころが、いつしか消え果ててしもうたのだ」

小杉重六は、源五郎に、そう語った。

このため、伊賀の忍びの者は、

「忍びのための忍び……」

という一念に徹しているところがある。

それにくらべると、甲賀の忍びたちの躰には、

「まだ、暖かい血が通うておる」

父は、わが子にいった。

むかし、甲賀の地には、

「五十三家……」

と、よばれる土豪の指導者たちがいて、いささかも油断なく、諸国に間諜を放ち、彼らの報告を検討し、

「時勢のながれに、押しつぶされてはならぬ」

それが、取りも直さず甲賀の地をまもることになるわけで、五十三家の豪族たちは団結し、ちからを合わせ、かずかずの危急を切りぬけてきた。

いまの甲賀に、五十三家の豪族はない。

一応は、二十一家ということになっているが、死に絶えた家もあるし、小さな豪族は大豪族の傘下に入った所為であろう。

その中で、もっとも威勢をもつ豪族が、山中大和守俊房である。

山中家は、往古から甲賀の地に土着してい、伊勢大神宮の領地となっている甲賀・柏木郷の代官をつとめ、鈴鹿山守護の役目をもかねている。

柏木郷の惣社・若宮八幡宮に近く、飯道山の峻嶮を背負った山中俊房の屋敷は、二町四方にもおよぶ。

屋敷のまわりは、深い濠にかこまれている。

こうしたわけで、山中大和守俊房は、甲賀の豪族たちの中の指導的な地位をしめていた。

けれども、いまは、

「甲賀の人びとの、こころとこころが離ればなれになってしまった」

と、亡き小杉重六が源五郎に洩らしたことがあった。

つまり、長年にわたってつづいた日本諸国の戦乱が、しだいに、いくつかの大勢力にまとまり、それが、日本の天下を制するための戦さにしぼられてきた。

こうなると、甲賀の豪族たちも、

「最後に勝ち残る……」

大勢力に味方をしておかねばならぬことになった。

「さ、それがむずかしい……」

のである。

何故というに……。

勝ち残った後で、味方についたところで、どうにもならぬ。

勝ち残る前に、その大名のためにはたらくからこそ、

「よくやってくれた」

というわけで、甲賀の地も安堵されることになるのだ。

武田か、上杉か、毛利か、織田か！……。

そして、ついに、豊臣秀吉が天下を制したといってよい。

その秀吉や家康のために、山中俊房が配下の忍びの者をひきいて、はたらいているということは、よほど巧妙に、戦国の動乱を切りぬけてきたからであろう。

十七年前の山中俊房は、織田信長のために、間諜活動をおこなっていたはずだ。

このように、むかしから山中大和守俊房の指揮下に入って、今日を迎えた甲賀の豪族たちがすべてかというと、そうではない。

この間には、山中俊房の考えに不満をもつ人びとも、多くあらわれた。

あるいは、武田家のために……。

あるいは、中国の毛利家や、すでに名のみとなっていた室町幕府の最後の将軍・足利義昭のために……。

その他、越前の朝倉家や、北近江の浅井家に……と、それぞれの豪族のうちの過半数が、

「それぞれに、おもうところへ……」

散って行ったのである。

ただし、それらの忍びの者たちも、本拠は依然として甲賀にあるのだ。

それぞれの頭領たちが、配下の忍びの者を送り込み、しかるべき報酬を得ていたのだ。

こうなってくると……。

むかしは結束を誇っていた甲賀忍びたちも、敵味方となって闘い合うことも起ってくる。

当然、たがいに牽制し合い、胸と胸とが通い合わなくなってくる。

中には、朝倉・浅井軍と織田・徳川軍が血戦をした近江の姉川で、一族から配下まで、すべて討死をとげた豪族もあった。

けれども、そうした豪族たちは、甲賀の地にあるかぎりは、たがいに闘うこともなく、探り合うこともなかった。

そこには無言のうちに、どこまでも甲賀の地を依り所にしておきたいと願うこころを、それぞれに理解し合っていたのであろう。

つまり、これが甲賀忍びの伝統ともいうべきものであった。

忍びたちにも妻があり、子があり、家がある。

生死をかけて遠国へはたらきに出ていても、甲賀のわが家へ帰れば常人と同じように、落ちついた暮しをする。

秘命を受け、その遂行のためには、人間としての血も冷えきってしまうという忍びの者もいないではないが、

「甲賀の忍びの者には、あたたかい人の血が胸の奥底ふかく通っていなくてはならぬ。それでこそ、甲賀忍びなのだ」

と、いまは亡き小杉重六がいった言葉を、上田源五郎は、いまも忘れてはいないし、

「おれも、そうおもっている……」

のである。

そうした源五郎だけに、主人のむすめの正子の、ひたむきで激しい求愛に、おもわず、さそい込まれてしまったものか……。

甲賀忍びの掟は、任務のためになら、

「何をしてもよい……」

ことになっている。

しかし、そのために失敗をまねくことがあると、これはゆるされぬ。

その制裁のきびしさが、どのようなものかを、上田源五郎もわきまえていぬはずはない。

（さて、どうしたらよいものか……？）

ともかくも、正子の腹中には、自分の子が育ちつつあるのだ。

そのとき、源五郎の部屋の一隅に微かな人の気配が起った。

上田源五郎が、はっと身を起し、

「小父ごか……」

「さよう」

滲み出るように、夜張りの助七が、いつの間にか源五郎の前へ坐っている。

五十には、まだ間がある助七だが、痩せていて小柄な上に、顔の皺が深いので、六十の老爺にも見えた。

「久しいのう、源五どの」

なつかしげに、助七の唇(くち)がうごいた。

唇はうごいても、声は洩れぬ。

「しばらく見えなんだので、案じていたぞ」

うれしげにこたえた源五郎も声には出さぬ。

灯(あか)りもない闇の中で、二人の唇がうごくのみなのだ。

その唇のうごきで、言葉を読みとる。

つまり〔読唇(どくしん)〕の術技は、忍びの者ならば、だれでも心得ていなくてはならぬ。

また、暗中の視力には、常人の想像を絶したものがある。

源五郎は幼少のころ、甲賀の飯道山の奥深い森や谷間で、夜張りの助七から忍びの手ほどきをしてもらったわけだが、あるとき助七は、谷川の激しいながれの前に立ち、

「この谷川の水が一粒一粒の生きもののように見えるまで、いつまでもいつまでも見ていなされ。食物は、この助七が運ぶゆえ、な」

それから約三ヶ月もの間、その場に源五郎を置き、渓流を凝視させたことがある。

雨の日も風の夜も、かたちばかりの板囲いの中に坐り込み、幾日も幾日も谷川のながれを見つづけるということは、六つ七つの子供にとってどのようなものか、およそ察しがつこう。

（ああ、めんどうな……）

おもわず怠けて、源五郎が木登りをはじめたり、昼寝をしたりすると、何処(どこ)から見ていたものか、突然、夜張りの助七があらわれ、

「このことを、父(てて)ごの重六殿へいうてもよいのか!!」

恐ろしい顔をして、源五郎を睨(にら)み据えるのであった。

そして三ヶ月もすると、谷川のながれが、

「ひとつ、ひとつの粒になって見えてきた……」

ではないか。

これが、忍びの者の眼力(がんりき)を鍛えるための初歩の修行であって、同時に幼年のかたまりきらぬ肉体へ忍耐を体得させるのだ。

「源五どのよ。そろそろ、われらも忙(せわ)しゅうなりそうな……」

「では、北条方が関白殿下へ戦さを仕掛けるとでも……?」

「さて、な……」

「まさかに、そのようなことはあるまい。北条方は、むかしの威勢が忘れられず、殿下に拗(す)ねて見せているだけではあるまいか……」

「それもあるだろうが、いつまでも拗ねているわけにもまいるまい。お気の短い関白殿下は、しびれを切らせておられるようじゃ」

「それは、どういうことだ?」

おもわず、源五郎はひざを乗り出した。

「ま、追々(おいおい)に、わかってこよう」

助七は、はっきりとした返事をしなかった。

これは、まだ、助七のような下忍びの耳へは入っていないらしい。

それだけに助七は、自分の推測を源五郎に語りたくなかったのであろう。

すべては、甲賀の頭領・山中大和守の腹中に秘められている。

ところで、甲賀の忍びの者として、上田源五郎と夜張りの助七とは、どちらが上位の忍びなのかというと、それは、小杉重六の遺子である源五郎のほうが上ということになる。

助七は、これまで妻も子もない暮しをつづけてきており、長らく小杉重六の下についてはたらき、重六亡きのちは源五郎の養育に専念した。

他の甲賀の人びとの前では、源五郎に丁重な言葉づかいをする助七だが、二人きりになると、まるで親子のようであった。

源五郎は八歳の折に父を失い、ついで、母も亡くなっただけに、夜張りの助七を真の父親のようにおもっている。

いや、亡き父の印象が、そのまま助七へ重ねられてしまったかのようだ。

「ところで、虎松どのよ」

と、助七は源五郎の本名を口にのぼせて、

「その後、別に変ったことはござらぬか?」

「信濃（長野県）の真田家との紛争も、関白殿下の仲立ちによって始末がついたことゆえ、戦さ仕度もしてはおらぬが……」

「ふうむ、そうらしいのう」

うなずいた助七が、

「では、わしはこれから、高山の鐘撞き堂へおもむき、飯道弥平次殿に会うてまいる」

「もう行くのか、小父ご」

「忍びどうしが敵の城の内で、よもやまばなしを長々とするわけにも、まいるまい」

「このつぎは、いつだ?」

「わからぬ……というよりも、わしは、しばらく頭領様のおいいつけにて、別の場所へまいることになるらしい」

「どこへ?」

「そりゃ、まだ、わしの耳へは入っておらぬ」

「では、小父ごの代りの連絡には?」

「お万喜に、きまったらしい」

お万喜は、甲賀の女忍びである。

ここ三年ほどの間、お万喜は九州の諸国へ潜入しており、甲賀へはもどっていなかった。

だが、豊臣秀吉の九州平定が終ったので、甲賀へ呼びもどされたのであろう。

源五郎は、もう十年ほど、お万喜を見ていなかった。

「そういうことじゃ。このつぎには、お万喜がつなぎにまいる」

「小父ご。もう行くのか?」

「達者でのう」

「あ、待ってくれ。小父ご……」
「何ぞ、はなしがあるのかな?」
「う……」
　上田源五郎は、口ごもったが、
「いや、別に……ただ、これから、しばらくは小父ごの顔を見られなくなるとおもうと、いましばらく、語り合いたくて……」
と、いった。
　実は、正子とのことを知らせようとおもったのだが、いざとなると、やはり打ち明けきれなかったのだ。
「まるで、子供のようなことをいうではないか、虎松どのよ」
　それでも助七は、うれしげに目を細めた。
　こういうときの助七は、源五郎を本名でよぶのであった。
「こたびの事が相すめば、また二人して、甲賀で暮せよう……と申しても、そのときまで、たがいに無事であればのことじゃが……」
「やはり、戦さになろうか?」
「それは、北条方の出様(でよう)しだい」
「小父ごは、何とおもっている?」
「わからぬ。なれど、このひろい天下の成り行きをおもえば、北条方とて、あさはかなまね

はできまい。いずれにせよ、来年のうちには決着がつこう」
「来年一杯も、かかるのか?」
「さて、そこまではかかるまい。関白殿下は、明日にも北条父子のどちらかが京へのぼり、手をつき、頭(かしら)を下げて、臣下の列に加わることをのぞんでおられるのじゃ」
「ふむ……」
「では、虎松……いや、上田源五郎どの。さらば」
　夜張りの助七の矮軀(わいく)が、一筋のけむりになって消えた……常人の目には、そうとしかおもえなかったろう。
　入って来るときと同様に、音もなく気配もなく、助七は去った。
「ああ……」
　おもわず、源五郎が嘆息を洩らした。
（七日……あと七日のうちに、おれの子を正子が身ごもったことを、山岸十兵衛へ打ち明けねばならぬのか……）
　それができぬときは、正子自身が父に告白するという。
　いま正子は、必死である。
　愛する男と自分の幸福を得るために、いのちがけの突きつめたこころになっている。
（まさかに、手討ちにもすまい）
　山岸十兵衛が、自分に目をかけてくれている様子から推してみても、そのようにおもわれ

る。

また、源五郎にしても、甲賀の忍びとしてではなく、一箇の人間として十兵衛を看るとき、これを敬愛せざるを得ない。

武田信玄・勝頼の父子に仕えていたというだけに、まだ、この目にたしかめてはいないが、おそらく武勇の士にちがいないし、それでいて、いつも微笑を絶やさず、温厚で、奉公人たちへのこころくばりに親情があらわれている。

（このような主人になら、一生、仕えてみてもよいな）

ふと、源五郎はそうおもうことがあった。

上田源五郎は甲賀の忍びの者としての任務を忘れているわけではない。

これまでに、源五郎が甲賀へ送った情報については、

「さすが、亡父の血を引いているだけのことはある」

と、頭領・山中大和守俊房が、夜張りの助七へ洩らした。

だが、助七は、これを源五郎の耳へつたえていない。

忍びの者としては、源五郎が、

（まだ、若い……）

だけに、山中大和守の誉め言葉を聞き、気をゆるめるようなことがあってはならぬと、助七は考えているのであろう。

たしかに、源五郎の報告によって、この武州・鉢形城は、

「裸にされたも同然……」

なのである。

秘密にされている通路や逃げ道、各曲輪の防備なども、源五郎は、あますところなく探り出していた。

城の機構については、探り出すべきものが、

「何一つ、残っていない……」

といってよいほどなのだ。

ために、上田源五郎の緊張が、いま、すこしくゆるみかけていないでもない。

それに甲賀からは、いまのところ、新しい指令がとどかぬ。

いまや源五郎の日常は、山岸十兵衛直勝の、

「忠実な家来……」

としての明け暮れになっている。

そうした日々、山岸十兵衛に仕えていて、おもわず源五郎は、甲賀の秘命を受けている自分を、忘れかけることがあった。

山岸十兵衛夫妻が、自分を慈しんでくれるあたたかい心は、源五郎の胸に通わぬはずがない。

山岸十兵衛の主家であった武田家は滅亡し、源五郎の主家の柴田家も滅び消えたと、十兵衛夫妻はおもい込んでいる。

主家を失った者どうしが主従となり、いまここに、北条家へ仕えている。

それが十兵衛夫妻に、源五郎をいたわるこころを生じさせたのであろうか。

上田源五郎が、ようやく眠りについたころ、山岸十兵衛は臥床へ身を横たえ、両眼を開けて寝所の闇を見つめたままである。

正子と源五郎が、密会をしているらしいことに気づいたのは、一ヶ月ほど前のことであった。

しかし、正子が懐妊しているのを知ったのは、今夜がはじめてである。

(それにしても……あの上田源五郎の顔は、どこかで、見たような気がしてならぬ……)

いまさらに十兵衛は、このことをおもい返してみた。

小田原城下の法城院で、心山和尚に引き合わされ、はじめて源五郎を見たときも、

(はて……どこかで見たような……)

山岸十兵衛は、そうおもったものだ。おもったが、その以前に出合っているはずはない。

世の中には、よく似た顔が、いくらもある。

まさかに、十七年前の三方ヶ原の戦場で、自分が討ち果した徳川方の戦さ忍び・小杉重六の子が、上田源五郎だとは、おもいもよらぬことであった。

あのときの山岸十兵衛は、武田忍びの〔飯田彦蔵〕であり、双方が睨み合って、

「このままでは際限もなし」

と、たがいに看て取り、声をかけ合い、躍り出て闘った。

十兵衛は相手を殪したのち、小杉重六のかぶっていた戦闘用の忍び頭巾を除き、顔をあらためたのち、

「見事に、はたらかれた……」

瞑目し、合掌したのちに引きあげた。

重六の顔を見ていればこそ、その子の上田源五郎を、何処かで見たようなと感じたのは当然だが、そもそも山岸十兵衛は、小杉重六の名も知らぬ。

忍びの者らしく、たがいに名乗ることなく闘ったからだ。

ゆえに、源五郎もそれと知らぬ。

知らぬからこそ、かえって十兵衛に怪しまれることがなかった。

知っているのは、三方ヶ原の土中にねむる小杉重六の霊魂のみなのだ。

(さて、どうしたものか……?)

正子と上田源五郎のことをである。

微笑が、十兵衛の口辺にただよった。

(夫婦に、してやってもよいな……)

(源五郎の子を、わがむすめが腹に宿しているからには、もはや、いたしかたあるまい)

十兵衛の妻も、源五郎を気に入っている。

十兵衛から説けば、おそらく、否やはあるまい。

武田家が、ほろびてのちの十兵衛は、あくまでも忍びの者・飯田彦蔵であった前半生を捨

てしまっている。

そして北条氏邦に仕えるまでには、十兵衛も相応の苦心を重ねた。

いまは、山岸十兵衛直勝になりきっているわけだが、それにしても、行先のことをおもうと、笑ってもいられなくなる心境なのだ。

関白・豊臣秀吉の圧力を受けて、

「屈服をするのか、反抗をするのか……」

二つに一つの道をえらばざるを得なくなった主家の北条家の愚かさに、十兵衛は、いささか呆れているのだ。

その夜

埼玉県の北西部にある寄居町は、秩父市の北東に位置している。

奥秩父の山脈を水源とする荒川が、秩父市・長瀞をながれてきて、その川幅が大きくひろがるあたりに寄居町はある。

駅前から南へ通ずる通りの両側は、美しい柳の並木だ。

この通りを十五分も行くと、荒川に架かる正喜橋のたもとへ出る。

ここまで来ると、荒川をへだてた前方右手一帯の断崖の連なりが、いやでも目に入ってくる。

この断崖上が、武州・鉢形城の址だ。

大手口を南西に、搦手口を北東にした鉢形城は、東西三百七十メートル、南北七百五十メートルにおよぶ。

深い木立に被われた城址に、むかしの建造物は何一つ残っていない。

だが、本丸・二の丸・三の丸の曲輪址は、いまもあきらかに見てとれる。

この城の歴史は、古い。

平安朝のころには、すでに豪族の居館がいとなまれていたという人もある。

さらに下って、平将門や、畠山重忠の居城があったともいう。

鉢形城が、はっきりと歴史の上にあらわれてくるのは、やはり戦国動乱の時代になってからであろう。

そのころ……。

山内・上杉氏（室町幕府に命じられて、関東を治める管領職）の重臣・長尾景春が、本格的な築城をおこなった。

以来、鉢形城をめぐる攻防は何度となく繰り返されたわけだが……。

永禄三年（一五六〇年）にいたって、小田原の本家・北条氏康の三男・氏邦が鉢形城主となった。

北条氏邦は、古びて破損しつくしていた鉢形城を改修し、大城郭としたのである。

同じ武州の八王子城と共に、この城は、北条氏の本拠をまもる二大支城といってよい。

武田氏がほろびてのち、北条氏は旧武田の勢力の下にあった国々へ侵入を開始した。

北条氏康は、すでに病歿しており、小田原の本家には、氏政と氏直の父子がいる。

当主は、まだ若い氏直だけに、父の氏政がこれを後見していた。

そして、北条氏直は徳川家康の女を妻に迎え、徳川と同盟をむすんだ。これは武田氏がほろびた後のことで、徳川家康も関東の北条氏と手をむすんで、新しい時代に対応しなくてはならなかった。

北条父子にとっても、それは同様なのだが、

（そのところがよく、のみこめているのであろうか……？）

と、山岸十兵衛は不審におもわずにはいられない。

鉢形城主の北条氏邦は、さほどでもないが、本家の北条氏政・氏直父子には、激しく変りつつある時代のながれが、

（よく見えぬらしい……）

のである。

小田原の北条父子には、

「わが祖・早雲以来、五代にわたって関東の覇権を維持している」

という自尊心がある。

ゆえに、豊臣秀吉に対しても、

「素姓も知れぬ成りあがり者……」

ひそかに、きめつけている。

秀吉が九州を平定し、関白太政大臣となり、だれの目にも〔天下人〕と見えるようになっても、

「何で秀吉ごときを、天下人とおもえようか」

冷笑していたものである。

そして、

「われらこそ、天下の御弓箭である」

と、ふれ出し、領民に軍役を課したり、領内の山伏なども召集したりした。

また、鉄砲や大筒などの鋳造にも、ちからを入れはじめ、弾薬や兵糧を大量にたくわえはじめた。

それに、小田原は海をひかえている。

そこで、軍船の建造も新たにおこなったりする。

これは、あきらかに戦備をととのえていることになる。

「天下を、わがものにした……」

つもりでいる豊臣秀吉にとっては、おだやかでない。

「ともあれ、上洛せられよ」

と、秀吉は北条父子をうながした。

そうなると、北条父子は、

「われらに会いたくば、そちらから小田原へまいれ」

ともいえぬ。

やはり、豊臣秀吉の威勢を怖れていないわけではないのだ。

その証拠に、婚姻の関係ができた徳川家康へ、

「こちらの威信を傷つけぬよう、うまく、取りなしていただきたい」

などと、ひそかに申し送っている。

この年は、この調停に、徳川家康は随分と骨を折った。

結局、北条父子が、つぎのような条件を秀吉に出した。

「上州（群馬県）の沼田領八万石を、沼田城と共に真田家から北条家へ引きわたしてもらいたい」

真田家とは、信州（長野県）の上田に本城を構える真田安房守昌幸のことである。

上州の国と、沼田城をめぐる真田・北条両家の争いは、むかしから執拗につづけられてきた。

侵略したり、奪い返されたりするたびに、両家の執念は募るばかりとなっている。

いまは、真田家が沼田城に入り、北条軍の侵入をゆるさない。

このところ、北条軍は、いかに攻めかけても沼田を落すことができなかった。

上州は、関東と信州との中間に位置する。

真田家にとっても、北条家にとっても、ゆるがせにできぬ要衝であった。

真田家は、清和天皇の皇子・貞元親王のながれを引いているそうな。

そして、当代の真田昌幸の父・幸隆のころ、信州の真田ノ庄に居城を構え、真田姓を名乗るようになった。

すでにのべたように、戦乱のうちに小勢力どうしの戦いは、しだいに大勢力へふくみこまれたわけだが……。

小勢力の真田家がたよった大勢力は、ほかならぬ武田信玄である。

そして、武田氏の庇護のもとに、真田氏は上信二州に覇をとなえるようになった。

武田氏が織田・徳川の連合軍の侵入をゆるしたとき、真田昌幸は武田勝頼へ、

「それがしの居城、上州・岩櫃へお移り下され。どこまでも、おまもりいたす」

と、進言をした。

だが、武田勝頼は天目山まで逃げて自害をとげ、ここに武田家は滅亡したわけだ。

支柱をうしなった真田家は、孤立した。

けれども、孤立のままではすまぬ。

一時は信州・上田の本城へ押し寄せた徳川軍を迎え撃ち、これを、みごとに撃退して勇名をうたわれたりしたけれども、だからといって、そのまま孤立をつづけるわけにはまいらぬ。

そこへ、

「ま、一度、京へのぼってまいるがよい」

と、手をさしのべたのが、豊臣秀吉である。
真田昌幸は上洛して、秀吉に目通りをし、その傘下へ入った。
そこで、かねてからつづいていた真田・北条両家の紛争を、
「わしにまかせるがよい」
豊臣秀吉が、調停に乗り出した。
秀吉は、真田昌幸へ、
「沼田は北条家へ、ゆずってやるがよい。そのかわりの領地をあたえよう。これよりは、この秀吉の天下じゃ。みだりに戦さが起ることもない。決して悪しゅうはせぬ」
こういわれては、昌幸も不満をこらえ、秀吉の指図に従うよりほかはなかった。
ただし、真田昌幸は、一つの条件をつけた。
それは……。
沼田城の近くに、名胡桃の城と領地があって、ここは真田家累代の墓所もあることゆえ、
「名胡桃だけは、ゆずりわたすことはでき申さぬ」
というものだ。
秀吉は、これをもっともの事として、北条父子に承知させた。
こうして、今年の晩夏のころに、沼田城の引きわたしがおこなわれた。
しかし、北条父子には、名胡桃を真田家に残したことが、大いに不満であった。
その不満が、まだ尾を引いている。

北条父子は、かつての沼田城攻防戦において、真田軍に何度も、
「煮え湯を、のまされてきた……」
のであって、このさい、真田勢力のすべてを、上州から追い退けてしまいたい。
それなのに、沼田城の、すぐ近くにある名胡桃城に真田家の城代・鈴木主水が依然として腰を据えているのは、
「油断がならぬ」
と、いう。
豊臣秀吉の調停を、うけいれはしたが、
「おもしろくない……」
のである。
ために、秀吉から、
「真田家との事も、すべておさまったことゆえ、上洛せられよ」
さいそくを受けても、
「このようなあつかいをされて、それを恩に着せられてはたまらぬ」
ぐずぐずと腰を上げないのだ。
秀吉も、いまは、怒りをこらえているらしい。
徳川家康も、煮え切らぬ北条父子の態度を案じて、
「上洛なさるがよい」

しきりにすすめるのだが、北条氏直は、
「小田原城は天下の堅城である。たとえ、豊臣の大軍が押し寄せて来たとて、びくともいたさぬ」
というような放言をしていて、それが家康の耳へもつたわってくるのだから、当然、秀吉の耳へも入っているにちがいないのだ。
「何と、愚かな……」
徳川家康は呆れている。
これは、山岸十兵衛直勝も同様なのである。
武田家ほろびてのち、一時は秀吉に反抗した家康も、いまは秀吉の天下の強大さをみとめぬわけにはまいらぬ。
そこのところが、北条父子には、まったくわからない。
(天下のうごきをとらえる耳を、もたぬのか……)
山岸十兵衛は、かつて、すぐれた武田忍びであっただけに、北条家の情報網の貧しさにおどろいている。
真田家に油断はできぬといっても、いまは豊臣秀吉の天下なのだ。
その臣下である大名や武将たちが、わけもなく戦さを仕掛けたりすることは、秀吉に対して罪を犯すことにもなる。
あり得るはずがない。

真田家が、多くの犠牲をはらって獲た沼田城を、秀吉のことばを受けいれ、いさぎよく北条家へゆずりわたしたことは、
(賢い仕様(しよう)じゃ)
山岸十兵衛は、そうおもっている。
そもそも十兵衛は、真田昌幸に対して一種、特別の好感を抱いていた。
旧主人の武田勝頼をまもって、織田・徳川の大軍を岩櫃城に迎え撃とうとした真田昌幸なのだ。
もしも、これが実現していたら、
(わしも、岩櫃へ駆けつけ、共に戦うたやも知れぬ……)
このことであった。
すでに決着がついた調停について、いまさら不満があるといったところで、どうしようもないではないか。
不満があるなら、沼田城をゆずり受ける前に、
「何としても、名胡桃を真田家へ残しあたえることはできぬ」
と、何故、豊臣秀吉へ申したてなかったのか。
もっとも、それだけの反抗をするからには、
「それだけの覚悟もいる」
ことなのである。

その覚悟も決まらず、内心には豊臣秀吉の威勢を怖れたからこそ、秀吉の調停を受けいれたのではないか。
そのくせ、いまになって、秀吉の申し入れにこたえようとはせぬ。
（いったい、どのようなつもりでいるのか？）
山岸十兵衛は、いまさらながら、
（ああ……北条家へ仕えるのではなかった）
そうおもう。
十兵衛は、飯田彦蔵として武田家の忍びの者をつとめていたが、単なる忍びではない。
そもそも武田信玄は、忍びの者だからといって、これを卑しむようなことをしなかった。
なればこそ、武田家の諜報網は、内側からも充実し、結束していたのだ。
ことに山岸十兵衛は、しかるべき身分があった家柄で、祖父の代から武田家に仕えていた。
そして、信玄が武田家の当主となったとき、十兵衛の父・飯田彦右衛門が、忍びの者の束ねをつとめるようになった。
十兵衛が、父の配下の忍びの者から忍びの術技を修得するようになったのは、このためであった。
武田信玄は、長年にわたって伊那谷へ住みついていた忍びの者をあつめ、彼らを中心にして、独自の諜報網をととのえたのである。
こうしたわけで……。

武田家がほろびたのち、その遺臣たちや、また忍びの者の一部も、ひそかに徳川家康の手に引き取られた。
また、北条家にも、わずかではあるが、武田の遺臣が引き取られた。山岸十兵衛もその一人であった。
これは、武田勝頼の妻（夫と共に自害をとげた）が、北条氏政の妹に当り、かつては両家が同盟をむすんでいたこともあって、秘密裡に、さまざまな手蔓があったのだ。
（このような愚かな主人に仕えるほどならば、むしろ牢人のままでいたほうがよかった……）
とさえおもう。
（さて、これより、どうなることか……？）
おもてにはあらわさぬが、山岸十兵衛は嘆息している。
しかし、十兵衛は一箇の武人として、最後まで北条家に仕えぬくつもりである。
それはさておき、上田源五郎が正子と約束をした七日の日限が、明日にせまってきた。
その日の夕暮れどきになってから、
「いささか申しあげたいことがございます」
と、上田源五郎が、主人の居室の杉戸の外から声をかけた。
「おお」
夕餉のひとときである。

山岸十兵衛直勝は、読書をしていたが、
「ま、入れ」
「はっ」
源五郎があらわれた。さすがに緊張の面もちであった。
「何のことじゃ?」
「は……」
「申してみるがよい」
「実は……」
「いかがした。何をためらっておるのだ。何ぞ、申しにくいことなのか?」
「はい」
十兵衛が微かに笑い、
「では、やめたがよかろう」
「いえ……ぜひとも、申し上げねばなりませぬ」
「では、申してみよ」
奥庭にのぞむ、この居室の外の廊下の隅に、正子が蹲り、息をころしている。
「申しあげまする。実は、正子さまが、身ごもりまして……」
「むすめが身ごもった……?」
「はっ」

「だれの子を、身ごもったと申すのだ?」
「私めの子を……」
いいさして、源五郎は両手をつき、目を伏せた。
山岸十兵衛の口から、呻きに似た低い音声が洩れ、その後は何もいわぬ。
だが、顔を伏せた上田源五郎には、激怒している主人の形相が目に見えるようであった。
このときの源五郎は、甲賀の忍びとしての感覚をまったく失っている。
主人のむすめと通じ、これを懐妊させてしまった若い男にすぎなかった。
山岸十兵衛が、つぎの言葉を発するまでの時間は、さほどでもなかったろう。
だが、源五郎にとっては、一刻(二時間)にも二刻にも感じられた。
十兵衛の、つぎの言葉が源五郎の耳へ入った。
「それで源五郎は、いかがするつもりなのだ?」
「……?」
どうするつもりか、とは、こちらが主人に尋きたいほどだ。
「どうする?」
「は……」
おもいきって顔をあげた源五郎を、山岸十兵衛が凝と見まもっている。
その顔は、笑っていなかった。
また、怒っているようにも見えなかった。

むしろ、冷然と、十兵衛は源五郎のこたえを待っている。
夕闇が濃くなっていたが、まだ灯りはつけぬ。
すぐそこまで冬がやって来ているのに、火の気もなかった。
燈油や火を、それほど大事にした時代だったのである。
おもいきって、上田源五郎がいい出た。
「わが妻に、申し受けたく存じます」
すると……。
山岸十兵衛の、冷たい光りを湛えていた双眸が、わずかに細められた。
「よろし」
と、十兵衛はいった。
源五郎は、わが耳をうたぐった。
聞き違えたのではないか……。
「あの……」
「ゆるす」
「あ……」
「子まで成したからには、夫婦になるよりほかに仕方はあるまい」
このように、わけもなく十兵衛から許しが下りようとは、おもいもかけぬことであった。
むしろ、源五郎は茫然となっている。

「源五。いかがしたぞ」
「は……」
「うれしゅうはないのか?」
「かたじけなく……」
ふたたび、両手をついたとき、得体の知れぬ感動が源五郎の胸の底からわきあがってきた。
(この人は、かほどに、こころの寛い人だったのか……)
このことである。
同時に、
(よかった……)
全身のちからがぬけてしまった。
正子との結婚をゆるされたからには、引きつづき、このまま山岸十兵衛直勝に仕えていられる。
それならば、夜張りの助七にも高山の鐘撞き堂にいる飯道弥平次にも、
「山岸父娘に、のぞまれたからには、ことわるわけにもまいらなんだ」
いってのけることができる。
甲賀の指令を遂行するためには、いかに婦女子を利用することもゆるされているからだ。
そうなれば、子が生まれようとてかまわぬ。
すべてが終り、上田源五郎が甲賀へ引きあげるときは、妻も子も捨て去り、忽然と消えて

しまえばよい。

「なれど……」

と、十兵衛が何かいいさしたとき、外の廊下で、正子の押しころしたような涕泣の声が起った。

十兵衛は、ほろ苦い笑顔を見せ、

「なれど源五郎、わしの聟になるからには、相応の覚悟をいたしておろうな?」

「覚悟、でござりますか……?」

「さよう。われらが仕えている、この北条家と命運を共にする覚悟のことじゃ」

「申すまでもござりませぬ」

「いまの、北条家が、どのような立場にあるか、心得ていような」

「はい」

「これよりは、いよいよ、むずかしいことになってまいる、と、おもわねばなるまい。なれど、わしは、どこまでも、われらの主に従ってはたらきぬくつもりじゃ。それが、いかに愚かな事であっても……」

「うけたまわりました」

「そこで源五郎。正子と夫婦になることをゆるすかわりに、一つ、誓約をしてもらいたいことがある」

「は……?」

「もしも、このわしに……と申すよりも、この山岸家に危急の事あるとき、源五郎は、わしのいいつけに叛いてはならぬ。どうじゃ?」

いまこのときの源五郎としては、

「叛きませぬ」

こたえるよりほかにないではないか。

すると、山岸十兵衛が、

「それも、両三年の間のことじゃ」

自分へ、いい聞かせるかのようにつぶやいてから、

「ともあれ、承知してくれて、うれしくおもう」

このとき、侍女が入って来て、居室の燈台に火を灯した。

すでに、夕餉の時が過ぎている。

別の間で、十兵衛の妻と、十五歳になる長男の勝千代が、十兵衛を待っているにちがいない。

「さ、源五も共にまいれ。このことを、みなに告げねばならぬ」

このように、たやすく、自分の所業がゆるされるとは、おもってもいなかった上田源五郎だ。

山岸十兵衛は、すでに、正子と源五郎の密会を知り、正子が懐妊したことを盗み聞いていただけに、すこしも、おどろかなかった。

それにしても、あの夜、塩部屋の外の廊下へ忍び寄った気配を源五郎にさとられなかったのは、さすがに山岸十兵衛である。

正子と源五郎のことを、十兵衛が妻の於丹へ告げるや、

「ま……すこしも、存じませなんだ……」

於丹はおどろき、前に両手をついた源五郎を睨んだ。

だが、その眼は憎悪しているのではない。

自分や夫・十兵衛の目をかすめ、むすめの正子を抱いていた源五郎の大胆さを咎めているにすぎぬ。

「どうじゃ。かくなっては仕方もあるまい」

と、十兵衛。

「まことにもって、おどろきました。正子が、そのようにふしだらなことをしておりましょうとは……」

「いや、われらとて、そうも申せまい」

十兵衛がこういったのは、若い日の自分と於丹がむすばれたときの経緯をさしたものであろうか。

「ま、何を、おおせられますことやら……」

わずかに顔を赤らめた於丹へ、

「どうじゃ、ゆるしてやってくれぬか?」

「はい、いたしかたもありませぬゆえ……」

「源五郎が正子と夫婦になり、われらが家に長く仕えてくれるなら、そなたも勝千代も安心というものだ」

その十兵衛の言葉には、妙に実感がこもっていたようだ。

「源五。ここへ、正子をつれてまいれ」

十兵衛の声は、明るかった。

山岸十兵衛直勝は、正子と上田源五郎の仮祝言を、ともかくも、

「年の内におこなう」

と、いった。

正子が懐妊をしたからには、それも急がねばならぬ。

しかし、豊臣秀吉の圧迫を受け、北条家では去就に迷っている。

十兵衛から看れば、

(何も、迷うことはない……)

のだが、重苦しい空気が、この鉢形城内にもただよっている。

そうした現状ゆえ、どこまでも質素に、内々の事として、祝言をすませることにした。

ちかごろ……。

鉢形城主・北条氏邦は、小田原の本家へ出向いて行くことが多くなった。

そして、以前は、小田原へおもむく折に、

「共にまいれ」

気に入りの山岸十兵衛を従えて行ったものだが、

（ちかごろは、御供をせぬようになったな……）

源五郎にも、それがわかる。

十兵衛が北条氏邦の供をするときは、源五郎も十兵衛につき従うのが例になっていた。

だが、氏邦が十兵衛を疎んじ、遠ざけているわけでもない。

鉢形城内では、以前のように十兵衛を居館によび、酒の相手をさせたりしている。

それでいて、小田原へ出向くときは、供まわりから十兵衛を外すようになった。

（これは、わしに何かを気取られまいとしておられるのであろう）

いかに主の気に入られていても、たとえば、北条家の向背にかかわる重要な密議がおこなわれているとするなら、それも当然といってよい。

山岸十兵衛は、北条家の譜代の家来ではないのだ。

北条の家臣となってから、わずかに六年を経過したのみであった。

北条家の重臣たちは、主の気に入られて急速に立身をとげた十兵衛直勝を、不快の目で見ているらしい。

そこは十兵衛も、よくわきまえている。

どこまでも、つつましく奉公をするようにこころがけていたし、事実、山岸十兵衛には、この上の立身をのぞむつもりはない。

旧主家の武田家が滅び消えたとき、

「これよりは、戦乱の世がつづくものとおもうてはならぬ」

妻の於丹に、そういったものだ。

百年余にわたってつづけられた戦乱に、諸国も人びとも疲れ果てている。戦う武士たちも倦み疲れた。

北条家に仕えてから、家臣として武功をあらわしたのも、十兵衛にしてみれば、

「好んでしたのではない。もはや、戦うことはむだなこと……」

なのである。

ゆえに十兵衛は、関白・豊臣秀吉が、好戦的な人柄でないのを、

「何よりのこと……」

ひそかにおもっている。

織田信長が、凄烈な奮闘の後に大半を統一した日本を、秀吉は受けついだ。

はじめから秀吉がやったのでは、このように急速な平定は、あり得なかったろう。

秀吉は、信長に仕えて数々の戦陣へ出ているが、敵味方の出血を最小限度にとどめる戦さをしてきた。

十兵衛にいわせると、秀吉は稀代の謀略家であった。

謀略と懐柔により、秀吉は輝かしい戦果をあげてきた。

そこが、十兵衛の気に入っている。

それは十兵衛が、いまも、
「敬慕してやまぬ……」
旧主・武田信玄に、よく似ているところが、
（あるような……）
おもいがするのである。
敵ならば、その一族郎党をことごとく根絶やしにしてしまわなくては、気がすまぬように見えた織田信長とはちがい、
（関白殿下には、あたたかい人の血がながれている……）
ように感じられてならぬ。
いうまでもなく、山岸十兵衛は、旧主の武田信玄こそ、
「天下を治めるべく生を受けられた御方だ。この御方でなくては天下は治まらず、世の人びとに平穏は来ぬ」
と信じ、いのちをかけてはたらいて来た。
信玄の人格と経綸（けいりん）について、身近く仕えていた十兵衛は知りつくしている。
そのすばらしさは、織田信長も豊臣秀吉も、徳川家康も、
「到底、およばぬ」
十兵衛は、いまも確信していた。
だが、武田信玄の急死によって、すべては空（むな）しくなった。

それにしても、信長の変死により、秀吉が〔天下人〕になったことは、わずかに十兵衛のこころをなぐさめてくれる。
いまの豊臣秀吉の武器は〔微笑〕である。
先（ま）ず、笑いかけて服従させようとする。それでも従わぬときは、二度三度と笑いかけてくる。
この笑いの底にひそむ決意を、北条父子も、分家の北条氏邦も、よくわきまえていないのではあるまいか……。
初冬の冷気が日いちにちと加わるにつれ、正子の双眸はよろこびに輝き、源五郎と正子との婚約は、鉢形の北条家中（かちゅう）の耳へも聞こえるようになった。
或夜（あるよ）……。
上田源五郎の部屋へ、小さな黒い影が闇にまぎれて、微風のようにながれ込んで来た。
その気配は、夜張りの助七のものではない。
源五郎は、臥床（ふしど）に身を横たえ、まだ眼をひらかぬ。
部屋の片隅へ滲（にじ）み出た黒い影は、子供のように矮小（わいしょう）である。
黒い影は、源五郎の臥床の裾の方へ、するすると近づいて来た。
「もし……もし、源五どの」
「弥平次か」
依然、目を閉じたまま、源五郎が、

「何ぞ、用か？」
「おどろきまいたぞ」
そういった飯道弥平次の声には、源五郎を咎めるようなひびきがふくまれている。
躰（からだ）つきが子供のような弥平次の顔は、皺（しわ）が多く、しかも深い。細い両眼と口は、その皺の中に埋め込まれたようになってい、すこし離れて見ると、
「目と口がなく、鼻だけの顔……」
のように見える。
常人ならずとも、気味の悪い顔であった。
弥平次の年齢は、夜張りの助七は、
「わしと同じほどではないか……」
というが、六十にも七十にも見えた。頭髪は、ほとんど抜けてしまってい、そのくせ、弥平次の声は若い女のように細くてやさしい。
「何におどろいた？」
「山岸家のむすめと、夫婦（めおと）になるそうではありませぬか」
「聞いたか？」
「同じ鉢形にいる、この弥平次の耳へ入らぬわけがない」
あきらかに、不満げな弥平次の声だ。
飯道弥平次は、夜張りの助七と同じ下忍（した）びであるが、下忍びの中にも上下があって、助七

は弥平次に一目（いちもく）を置かねばならぬ。
それだけに弥平次は、上田源五郎に対しても、遠慮をすることがなかった。
「何故、このことを、わしに聞かせてはくれなんだ？」
「…………」
夜更けてから山岸屋敷を脱（ぬ）け出し、だれの目にもとまらず、荒川の彼方（かなた）の高山の鐘撞き堂にいる弥平次を訪ねることなど、源五郎にとっては、わけもないことだ。
それなのに、源五郎は来なかった。
「これは大事のことでござる。何ぞ火急のことあった場合、わしが心得ておかねばならぬことでござる」
「わかった。なれど、急なことだったのだ」
「何故、山岸のむすめを？」
「貰ってくれといわれた。ことわるわけにはまいらぬ」
弥平次が沈黙した。
臥床の裾に蹲ったまま、源五郎を睨んでいるらしい。
源五郎は臥床から、まだ身を起そうとはせぬ。
飯道弥平次を、夜張りの助七は嫌っている。
「このことを、夜張りの助七は知ってござるのか？」
「いいや……」

「先夜、助七が、此処へも忍んでまいったそうな」
「うむ」
「そのときに、何故、告げなかったのでござる?」
と、飯道弥平次は執拗である。
その執拗さが、上田源五郎には不快であった。
「このようなことは、いちいち、甲賀へ告げずともよいのではないか、弥平次。われらは、それぞれに、鉢形の北条家に仕える者になりきらねばならぬ。おれが、この屋敷の家来であるからには、おれがおもうままにはたらく。それは甲賀の頭領様も御存知のはずだ」
「甲賀のことを申しているのではござらぬ」
押えつけるように、弥平次がいった。
こういうときの弥平次の声は、むしろ、しわがれたものに変ってくるのだ。
「これは、甲賀よりも、われらがわきまえておらねばならぬことじゃ」
「いずれ、助七の耳へ、告げておこうとおもっていたのだ」
「何故、早う告げなんだのか、お聞かせ願いたい」
「他意はない」
「ふうむ……」
息を引いた飯道弥平次が、急に、黙りこんでしまった。
源五郎は、まだ身を起さぬ。

ややあって、飯道弥平次が細い声で、つぶやくようにいった。
「わしは、このことを、いままで、われらに告げなかった源五どのの胸の内を、はかりかねているのでござる」
源五郎は、こたえなかった。
「うわさによれば、すでに、山岸のむすめは源五どのの子を孕んでいるそうな。それは、まことか?」
「うむ……」
「なるほど」
何が「なるほど……」なのか、弥平次の声が源五郎には不気味であった。
甲賀の忍びとしてではなく、一人の若者として、正子の求愛を受けいれてしまった自分に、源五郎は一種の後ろめたさを感じないでもない。
飯道弥平次の声が絶えた。
(弥平次め、まだ、おれを睨んでいるのか……)
不快がつのるばかりとなった上田源五郎は、
「もう、よい。わかったゆえ、もどるがよい」
と、半身を起した。
いない。
弥平次は、いつの間にか、忽然と姿を消してしまった。

その気配に、源五郎は、まったく気づかなかった。
（どうじゃ、源五どの。この弥平次には、まだ敵(かな)うまい）
闇の底から、弥平次の細い声が聞こえるようなおもいがして、源五郎は顔を顰(しか)めた。
翌日の昼すぎから、雪が降りはじめた。
初雪である。
その雪の中を、上州の沼田城の城代をつとめている猪股(いのまた)能登守(のとのかみ)の使者が、鉢形城へ到着をした。
猪股能登守は、むかし関東管領の上杉憲政(うえすぎのりまさ)に仕えていたが、上杉憲政が北条氏の圧迫と攻勢にたまりかね、越後の長尾輝虎(ながおてるとら)（のちの上杉謙信）の許(もと)へ逃げたのち、北条家の家臣となった。
そして、鉢形城の北条氏邦の下に属していたのである。
能登守は、これまでに戦功が多い。
北条家では、勇猛の武将として評判が高く、北条氏邦の信頼も厚かった。
それゆえ、上州の沼田城が真田家からゆずりわたされたとき、氏邦も、また小田原の本家でも、
「沼田の城代は、猪股能登守がよい」
として、彼に精鋭の部隊をあたえ、沼田へ送った。
北条家と真田家が、上州の沼田を中心に繰り返してきた戦闘に、猪股能登守は何度も出陣

しており、真田家の反撃に合って苦杯をなめてきている。
それだけに、豊臣秀吉の裁決によって、沼田に近い名胡桃の城が真田家の手に残されたことを、
「残念じゃ。名胡桃を真田に残しておいたのでは、沼田城が我物になったとはいいきれぬ」
と、能登守は、痛憤していた。
名胡桃の城は、真田家が、これも上州の吾妻(あずま)の山地に構えている岩櫃城と密接にむすびついていた。
岩櫃は、かつての真田昌幸の本拠ともいってよい城である。
いまの真田家は、発祥の地に近い信州の上田へ堅固な本城を築き、そこへ移っているが、岩櫃には老臣・矢沢頼綱(やざわよりつな)を城代に置き、名胡桃の城は鈴木主水という忠誠な武将にまもらせている。
ことに、矢沢頼綱は、以前の沼田城代として、攻めかける北条軍を寄せつけなかった。
頼綱は、真田家の当主・安房守昌幸の叔父にあたる。
山岸十兵衛も、沼田城攻撃に一度だけ参加したことがあった。
その折の真田勢の、戦場での駆け引きは、十兵衛にいわせると、
「到底、猪股能登守殿では、歯が立たぬ」
ということになる。
名胡桃城からも鈴木主水が手勢をひきいて、沼田の矢沢頼綱を応援し、両者が呼吸を合わ

せ、熟知した地形を利用しての反撃を受けた北条軍は、さんざんに悩まされたものだ。
そのときの屈辱を、猪股能登守は決して忘れてはいない。
いまは、忍びの者としての感能から、ことさらに、
「遠ざかろうとしている……」
山岸十兵衛直勝であったが、ちかごろの北条氏邦の様子を看ていると、
（殿は、何やら、ひそかに事を行おうとしているらしい……）
ことが、感じられた。
沼田城代の猪股能登守から、たびたび、密使がさしむけられて来る。
これに対して、鉢形城から沼田への使者は、ほとんど出ていない。
これも、十兵衛にいわせるなら、
「妙な事……」
なのである。
それでいて北条氏邦は、たびたび小田原の本家へおもむき、何やら密議を重ねているらしい。
以前は、山岸十兵衛を供の人数に加え、小田原城に滞在中は、酒の相手をつとめさせながら、
「本家の弱腰には、呆れるほかはない」
などと、憤慨を洩らしたりしたものだ。

氏邦は、四十九歳になる。
長身白皙の美男子で、髪も黒ぐろとしており、十歳は若く見える。
外貌は、このように優しげなのだが、一面、非常に好戦的なところがあるのだ。
氏邦は、先々代の小田原城主・北条氏康の三男に生まれた。
のち、秩父の岩田天神山城主・藤田重利の養子となった。
妻の大福御前は、重利のむすめである。
その後、北条氏邦は、妻の弟でもあり、自分には義弟にあたる弥八郎重連を毒殺したりしている。
これは、小田原本家が、自分をさしおいて義弟を重用したからだといわれている。
このため、つぎの弟の藤田弥六郎信吉は身の危険を感じ、武田勝頼の許へ逃げた。
そして、武田家滅亡の後は、越後の上杉景勝に仕えている。
この毒殺事件について、鉢形の北条分家では、
「口にのぼせてはならぬ……」
ことになっているが、事実を知らぬものは、ほとんどない。
以前は、武田家に仕えていた山岸十兵衛も、武田勝頼をたよって来た藤田信吉を見知っている。
藤田信吉が、義兄の北条氏邦へかけている恨みは激しく強い。
いまの北条氏邦は、分家の鉢形城主として、関東防衛の第一線にあり、本家の北条父子も、

何かとたのむところが多い。

ゆえに、若いころの過激な性格は表にあらわれず、山岸十兵衛などには、まことに温和な接し方をする。

だが、それは氏邦の真の姿ではないと、十兵衛は見きわめていた。

沼田城から駆けつけて来た密使は、間もなく鉢形城を出て、沼田へ引き返して行った。

何やら、あわただしい気配がする。

雪は、夕暮れになると、熄んでしまったが、つぎつぎに重臣たちが、本丸の北条氏邦の居館へ急行した。

「何事でありましょう?」

上田源五郎が、三の丸の山岸十兵衛の居室の外の廊下から声をかけると、

「さて、わからぬ」

十兵衛の、しずかな声が返ってきた。

城内の二の丸・三の丸には、重臣たちの屋敷のみであって、ほんらいなら、山岸十兵衛の屋敷がゆるされるはずはない。

だが、それには、それなりの理由があった。

北条氏邦の気に入られていることもあったろうが、もしも、この鉢形城が敵の攻撃を受けたとき、十兵衛は兵をひきいて三の丸の防備に就くことになっていた。

三の丸の南端は、水をたたえた深い濠と、その濠が東へ向けて大きくひろがった弁天池に

突き出したかたちになっている。

大手門を東にひかえた、この曲輪は、城の重要な防禦地点であった。

山岸十兵衛の屋敷は、三の丸の南端にある。

そして、徒の屋敷ではない。

いざとなったとき、この屋敷は、一つの小さな堡塁ともなるのである。

三の丸の濠と池に面した外郭には武者走といって、城兵が敵と闘うための通路がつけられているほどだ。

三の丸の外側から、十兵衛の屋敷をながめると、それは小さな多門のように見えた。

多門とは、城塁の上へ建てられた櫓と塀を一つにしたようなもので、弓や鉄砲で応戦するための設備がととのえてある。

このため、山岸十兵衛の屋敷は、

「多門屋敷」

などと、よばれている。

ゆえに、平常は十兵衛が、この特殊な屋敷を管理しているわけなのだ。

地下蔵もあって、これは武器庫にもなっている。

「ほれ、このように……」

と、密かに描きしたためておいた多門屋敷の絵図を、忍んで来た夜張りの助七へ見せながら、源五郎は、探り取った屋敷内の構造を、つぶさに説明したものであった。

「なるほど。なるほど……」
うなずきながらも、助七は、
「うまくできてはいるが、所詮は役に立つまい」
と、いったものだ。
つまり、一時代前の遺物のようなものだといいたかったのであろう。それは、半年も前のことであった。
北条氏邦と、重臣たちの密議は、夜更けまでつづいた。
そして突然、城内の諸方に馬蹄の音が起りはじめた。
伝令の騎士たちが、城門を開いて何処かへ駆け去ったらしい。
山岸十兵衛は、家来たちに、
「何事が起っても、あわてぬようにいたしておけ」
と命じ、自分も身仕度をととのえ、居室に端座している。
やがて……。
本丸の北条氏邦から、
「お召しにござる」
と、使いが来た。
すぐに十兵衛は、本丸へ向った。
十兵衛同様に、この夜更けの召集を受けた家臣たちが、大手口から城内へ入って来る。

いつの間にか、城内の諸方に篝火が燃え立っていて、
「何事であろうか?」
「さて……?」
「まさかに、戦さが?」
「わからぬ」
こうした突然の召集には、城内の太鼓が打ち鳴らされるはずだが、それもない。
召集を受けた部将たちの屋敷へは、いちいち、使者が走ったのである。
本丸の居館の主殿とよばれる板敷きの大広間に、重臣たちをはじめ、二十七人の部将があつまった。この中に、山岸十兵衛もふくまれていたのである。
北条氏邦は、主殿に立ちならぶ大蠟燭の灯りを受け、凛然として見えた。
氏邦の白い顔に興奮の血がのぼり、切長の両眼が輝いている。
重臣たちとの長い密談の内容は、どのようなものだったのか……。
「申し聞かすことがある」
北条氏邦が、ほとばしるような気勢をもって言い出た。
部将たちは平伏する。
「面をあげよ」
得体の知れぬ緊張のうちに、部将たちは顔をあげた。
「いま、このとき、沼田の猪股能登守は兵をひきいて、名胡桃の城を攻めていよう」

と、北条氏邦がいいはなった。

声にならぬざわめきが起った。

部将たちのだれもが、

（おもいおよばぬ……）

ことであった。

山岸十兵衛は、おどろくというよりも呆れ果てた。

（これは、まことのことなのか……？）

おもわず、北条氏邦の顔を見やると、氏邦は空間の一点を見据えたまま、

「まだ知らせは届かぬが、名胡桃が落ちることは必定である。となれば、真田安房守が黙っていようはずもない。またも、真田との戦さが始まろう」

と、いった。

名胡桃の城址は、上越線の沼田駅のつぎの後閑駅の近くになる。

いまも、月夜野の町外れに突き出した崖の上に、曲輪や濠の址が、まざまざと残されている。

この城の主・鈴木主水忠則は、かつては沼田城に在って上州一帯に君臨した沼田顕泰の家臣であったが、沼田が真田昌幸の手に落ちて以来、これに臣従し、以前と同様に、名胡桃城の守護を命じられた。

それだけに、鈴木主水は、真田家に対し、深い恩義を感じている。

このたび、沼田城を北条家へゆずりわたしたのちも、

「これよりも、名胡桃をたのむ」

真田昌幸の信頼にみちた言葉を受け、鈴木主水は責任の重さを痛感していた。

北条家が、名胡桃城を窺窬していることを、主水は、よくよくわきまえている。

「いささかも油断はならぬ」

周辺の警戒をきびしくして、鈴木主水は沼田城代の猪股能登守に、つけこむ隙をあたえなかった。

ところが、その日の昼ごろに……。

信州・上田の本城にいる真田昌幸から、鈴木主水へあてて、

「このたび、伊那の箕輪へ、新しい城を築くことになった。そこで、いろいろと相談をいたしたいので、すぐさま、上田へ来てもらいたい」

という手紙が届けられた。

その手紙の文字は、まぎれもなく真田昌幸の直筆……と、鈴木主水は見た。

そこで主水は、家来三十余名をひきい、すぐさま上田へ向った。

名胡桃から上田へは、山越えに吾妻高原をぬけて行くのが、もっとも早い。

その途中に、これも真田の城が一つある。

真田昌幸の叔父・矢沢頼綱が城代をつとめている岩櫃城だ。

鈴木主水は、岩櫃に一泊し、翌朝早く上田へ向うつもりであった。

ところが、岩櫃へ到着した主水のいうことを聞いて、

「はて……?」

矢沢頼綱が、不審そうに、

「それは、妙じゃな」

「と、申されますのは……?」

「伊那の箕輪へ上田の殿が城を築くことなど、わしの耳へは入っておらぬ」

鈴木主水も、嫌な予感をおぼえた。

真田家の老臣筆頭の矢沢頼綱が、この事を知らぬはずがない。

頼綱をさしおいて、主水に、

「相談をしたいから、上田へ来てくれ」

などと、真田昌幸がいってよこすはずはないのである。

「まこと、御存知ないと……?」

「知らぬ。いささかも聞いてはおらぬ」

「これに、上田の殿よりの御書状がござる」

「ほう……」

「ごらん下され」

「かまいませぬか?」

「ぜひとも」

「では……」

真田昌幸からの書状を鈴木主水から受け取り、矢沢頼綱は二度三度と読み下し、読み返した。

その頼綱の老顔が、たちまちに険しくなってゆくのを、主水は固唾をのんで見まもった。

矢沢頼綱が、書状を巻きおさめもせずに主水の前へ置いた。

頼綱が、深い嘆息をもらした。

「さ、薩摩守殿。この書状は?」

「上田の殿の筆跡ではござらぬ」

「えっ……」

「なれど、まことに、よう似せてある」

「すりゃ、偽の……?」

「余人は知らず、この薩摩守の目は騙せませせぬ」

「う……」

「主水殿が、この書状の筆跡を上田の殿のものとおもわれたのはむりもない。さほどによく似せてござる」

鈴木主水は、声もなかった。

「この書状は、上田から名胡桃へ届きましたのか?」

「いえ、それが……」

いいさして、主水がはっとなった。

そういわれてみると、この書状は上田城からの使者が直接に届けて来たのではなかった。

名胡桃城の西方二里ほどの山の鞍部に、見張り小屋がある。

そのあたりは切ヶ窪とよばれてい、近くには、中山の城があった。

中山九兵衛実光という武将が、以前は中山の城主だったのである。

そして、中山九兵衛は、鈴木主水の妻の栄子の実弟にあたる。

だから当然、中山九兵衛も義兄の鈴木主水と共に、真田方の宿将の一人であった。

ところが、真田・北条両家の戦闘が反復されるうち、中山城は北条軍に攻め取られてしまった。

そこで中山九兵衛は、わずかな家来と共に名胡桃の義兄の許へ逃れたのだ。

九兵衛の家来たちの大半は、いま、北条家に仕えている。

中山九兵衛にしてみれば、

「何としても、中山の城を取りもどしたい」

と、熱望するのもむりからぬことといえよう。

いまの中山城には、むろん、北条方の部隊が入っていて、名胡桃城を窺っている。

「義兄上。油断はなりませぬ。切ヶ窪のあたりへ、見張りの小屋を設けておかねばなりますまい」

と、鈴木主水へ進言をしたのは、ほかならぬ中山九兵衛であった。

鈴木主水は、義弟の進言を、

「もっともじゃ」

受けいれることにした。

そこで、切ヶ窪の山林の中へ見張り小屋を設けたのである。

小屋といっても、一応は〔砦〕の構えになっており、万一にも北条勢が攻めかけて来たときは、防ぎ戦いつつ、名胡桃へ引き退くだけの備えがしてあった。

「切ヶ窪は、それがしが守りまする」

と、中山九兵衛がいった。

これまた、当然のことといわねばなるまい。

そのあたりの地形に、中山九兵衛とその家来たちはくわしいからだ。

「よし。おぬしにまかせよう」

鈴木主水は、切ヶ窪の見張りを九兵衛実光にまかせた。

そこで中山九兵衛は、中山城から従って来た家来たちを五人ずつ、交替で切ヶ窪へ詰めさせることにし、自分も三日に一度は見廻りに出向いた。

切ヶ窪の見張り小屋については、鈴木主水が上田の真田昌幸へ報告をしてあり、

「それは、よいことじゃ」

昌幸もよろこんでいたし、矢沢頼綱も、わざわざ岩櫃城から検分に来てくれた。

さて……。

真田昌幸からの書状は、この切ヶ窪の見張り小屋へ届けられたのである。

折しも、中山九兵衛が切ヶ窪の見廻りに来ていて、

「よし。では、わしが義兄上へお届けいたそう」

書状をたずさえ、名胡桃へ駆けもどって来た。

そのとき鈴木主水が、

（はて……？）

一瞬だが、怪訝におもったことはたしかだ。

真田昌幸からの使者は、いつも、名胡桃城へ直行して来る。切ヶ窪へ大切な書状を届け、そのまま帰ってしまうことなど、かつて一度もなかった。

しかし、中山九兵衛は妻の弟であり、長年にわたって、自分のよき協力者でもあった。九兵衛をうたがうことなど、主水は夢にも考えたことがない。

しかも書状の筆跡は、まぎれもなく真田安房守昌幸のものと、鈴木主水は確信したので、ふっと胸の底にきざした不審のおもいも、すぐに消えてしまった。

「なるほど……」

声を慄かせて語り終えた鈴木主水へ、矢沢頼綱が、きっぱりと、

「これは、北条方のはかりごとでござる」

「なれど……」

「そこもとには申しにくいことじゃが、中山九兵衛が、おそらく北条方へ寝返ったのではな

いか。それがしには、そのようにおもわれる」

では、鈴木主水を城外へ出しておいて、その後に、北条勢が名胡桃城へ攻めかけて来るとでもいうのか……。

（まさかに……）

主水には、信じられなかった。

だが、事実は事実である。

（中山九兵衛が……妻の弟の九兵衛が、わしを裏切った……）

主水は、あらためて、偽の書状を読み返して見た。

主水の目には、やはり、真田昌幸の筆跡としかおもえなかった。

「薩摩守殿。それがし、すぐさま名胡桃へ……」

「もどられるか」

「ごめん」

「待たれよ」

と、矢沢頼綱が、

「われらも、すぐさま後より馳せつけ申す。そこもとは先へ出られて様子を見とどけておいていただきたい。決して事を急いではなりませぬ。よろしいか」

一語一語にちからをこめて、鈴木主水へいいふくめた。

「承……承知……」

こたえはしたものの、主水は惑乱していた。
ともかくも、名胡桃へ引き返してみれば、
（すべてが、わかる……）
このことであった。
岩櫃城で用意してくれた松明をつらね、主水一行は夜の山道を名胡桃へ引き返して行った。
これを見送った矢沢頼綱は、急を上田の本城へ知らせると共に、出動の準備に取りかかった。
鈴木主水が、名胡桃へもどったのは、つぎの日の未明である。
すでに、名胡桃城は、北条勢によって占拠されている。
やはり、中山九兵衛が裏切ったのだ。
「こなたへ味方すれば、かならず、中山城をお返しいたそう」
沼田城代・猪股能登守の、このさそいに、九兵衛は乗った。
九兵衛は、このまま、義兄の下にいて、真田家の傘下にいたのでは、永久に、
（わが手に、中山城はもどらぬ）
と、おもったのであろう。
真田昌幸の偽筆も、九兵衛の手によるものであった。
なるほど中山九兵衛ならば、安房守昌幸の筆跡を見知っているはずだ。
いずれにせよ、これは、かなり前から謀略がすすめられていたにちがいなかった。

「もはや、これまでである」
敵が充満している城内へ入ることができぬと知った鈴木主水は、すぐさま、城下外れの正覚寺という小さな寺へ入った。
そして、上田の真田昌幸へ短い遺書をしたためた。
つき従う家来たちは、口ぐちに主の自決をおもいとどまらせようとしたけれども、主水は断乎として聞かない。
義弟の中山九兵衛と沼田城の猪股能登守との間に、このような謀略がすすめられていたことを、鈴木主水はすこしも気づかなかった。
九兵衛のみではない。九兵衛の家来たちも、主をたすけたのであろう。
猪股能登守が指揮する北条勢は、日暮れから夜にかけて、ひそかに名胡桃城を包囲した。
それを、城内の中山九兵衛主従が内側から木戸をひらき、みちびき入れたにちがいなかった。
これでは、たまったものではない。
鈴木主水は、おのれの不明を恥じていた。
わが恥は、死をもってそそがねばならぬ。
理屈も何もない。
当時、物事に責任を負う男たちは、みな、この一事に徹しようとしていたのである。
そこには、思念が入る隙もない。

自分の死によって、真田昌幸へ、

「ゆるしを請う」

のである。

また、自分の家来たちへも、

「ゆるしを請う」

のである。

事は、急がねばならなかった。

ためらっているうちに、城を占拠した敵が、城外の探索をはじめるにちがいなかった。

主水につき従っていた家来たちは、尚も自決をおしとどめようとし、

「若殿のことを、お考え下され」

と、いい出た者がいる。

名胡桃城内にいて、おそらく敵に捕えられたであろう主水の長男・小太郎は十六歳の少年にすぎぬ。もしやすると討死をとげたやも知れなかったが、もしも生きて在った場合には、

(自分の死によって、武将というものの進退を息子に教えると同時に、息子の胸の内へ永久に自分が生きることになる……)

さらにはまた、自分が自決して真田昌幸にゆるしを請い、息子と家来たちの行末をたのむというふくみもある。

鈴木主水は、家来たちへ、

「あわてふためくな。かならず、城を奪い返せ」

叫ぶや、いきなり短刀を腹へ突き入れ、

「介錯せよ」

と、いった。

鈴木主水の首を布で包み、遺体を正覚寺へ埋め隠した家来たちは、主人の首を抱え、

「急げ」

名胡桃からの脱出をはかった。

空は白みかけている。

ちょうど、そのころ……。

鉢形城外の高山にある鐘撞き堂の鐘が鳴りはじめた。

その鐘の音は、鉢形城・周辺の砦や見張り小屋へ、つぎつぎに受けつがれて行った。

武州・鉢形城が、

「臨戦体制に入った……」

のである。

〔多門屋敷〕の山岸十兵衛邸へも、武装の兵が詰めかけて来た。

本丸から退って来た山岸十兵衛は、すぐさま、身仕度にかかった。

「何事でござります。戦さが、はじまるのでござりますか?」

十兵衛の仕度の介ぞえをしながら、妻の於丹が気づかわしげに尋くのへ、

「まだ、くわしいことは何もわからぬ」
十兵衛は、しずかにこたえた。
上田源五郎も邸内の自室へ入り、武具を身につけはじめた。
源五郎には、正子が介ぞえをした。
正子は、もはや、源五郎の妻になった心境なのであろう。
ここでも、十兵衛夫妻と同様の会話がかわされた。
顔(おもて)には出さぬが、源五郎は気が気でなかった。
高山の鐘撞き堂にいる飯道弥平次も、鉢形城の臨戦体制を知ったにちがいない。
だが、沼田の猪股能登守が名胡桃城へ攻めかけ、おそらくは奪い取ったであろうことを、
(弥平次は知っていようか……いや、まだ知ってはいまい)
と、源五郎はおもった。
源五郎自身、本丸から帰邸した山岸十兵衛から耳にしたばかりなのである。
「また、真田勢が沼田へ攻めかけてくるのでしょうか?」
源五郎の胸へ取りすがるようにして、正子がいった。
「さて……」
「もはや、戦さは絶えたものと、おもうていましたのに……」
「いずれにせよ、万一の場合をおもってのことなのでありましょう」
顔をさしよせた源五郎は、正子の唇(くち)をやさしく吸ってやり、

「まさかに、この城へ攻めかけて来ることもありますまい」
「まことに?」
「受け合います」
すると正子は、さもうれしげに、愛らしくうなずいて見せた。
そこへ、家来があらわれ、
「源五郎殿。およびでござる」
と、告げた。
これでは到底、鐘撞き堂の弥平次へ急を告げることもならぬ。
こうしたときには、おそらく弥平次も源五郎の立場を考え、何らかの方法をとるにちがいない。
(迂闊(うかつ)にうごいて、怪しまれてはならぬ……)
上州・沼田城にも、山中忍びの目は光っているはずであった。
(ま、落ちつくことだ)
上田源五郎は正子と共に、山岸十兵衛の居室へ向った。
夜は明けたが、依然、灰色の雲が空をおおいつくしている。
上田源五郎が居室へあらわれると、
「さがっておれ」
山岸十兵衛は、妻の於丹や、源五郎につきそって来た正子や家来たちに、そういった。

人ばらいをしたのである。

「源五。ま、もそっと近くへまいるがよい」

「は……」

「このたびのことを、源五は何とおもう?」

「さて……」

「殿には、取り返しのつかぬことをなされた!……」

十兵衛の声音(こわね)は、あくまでも落ちつきはらっていたが、両眼は沈痛の色をたたえている。

いや、沈痛というよりは、あきらめの眼の色といってよい。

「猪股能登守殿が名胡桃へ攻めかけたことを、何とおもう?」

「真田家にても、黙ってはおりますまいか、と……」

「そのようにおもうか?」

「はい」

これは、豊臣秀吉が仲介をしたときの誓約を、北条方が自ら破ったことになる。

この一方的な奇襲に対して、真田昌幸は激怒したにちがいない。

「おのれ!」

真田昌幸が、名胡桃の奪回に兵をひきいて駆けつけたとしても、むりからぬことだ。

たとえ、真田勢が沼田城へ攻めかけたとしても、これは当然のことといってよい。

天下に対しても、真田の反撃は、有利な立場を得るにちがいない。

なればこそ、上田源五郎は、

(真田は、黙っていまい)

と、看た。

すると、山岸十兵衛は、

「いや、真田方の出様(でよう)がどうあろうと、それは別のことじゃ」

「と申されますのは?」

「このたびのことは、関白殿下のお怒りをよぶにちがいない」

これも当然であろう。

天下の仕置(しおき)をする秀吉の仲介を破ったのだ。

秀吉も、黙ってはいまい。

秀吉が、きびしい態度でのぞんできたら、北条父子は、いったいどのようないいわけをするつもりなのか。

まさかに、秀吉へ戦さを挑むつもりではあるまい。

小田原の北条父子も、鉢形の北条氏邦もそれほどの愚か者ではないはずであった。

では、名胡桃奇襲のねらいは何処にあるのか。

いずれにせよ北条父子は、秀吉の前へ屈服の誓いをせまられている。

その前に、名胡桃を奪い返し、北条家の気勢をしめし、何とか体面をうしなわぬかたちで、秀吉の圧迫を凌(しの)ごうというのか……。

それにしても、わからぬことだ。

これまで、豊臣秀吉は、過去の栄光にしがみついて煮え切らぬ北条父子に対し、微笑を絶やさなかった。だが、その微笑の蔭には天下人となった秀吉の威厳が隠されている。

北条家のみへ、特例があたえられるわけのものではない。

一の特例は、十の特例をよぶ。

これでは、天下が治まるはずはない。

天下人は、「一人でよい」のである。

山岸十兵衛直勝が、上田源五郎にいったのは、北条父子や北条氏邦や、それに、

「この、わしをもふくめて……」

古い時代が終った、ということであった。

「そのことが、ようわかっていながらも、おのれでおのれを、どうしようもない」

と、十兵衛はいう。

いまこのとき、信頼をうしなった主家を捨てて、何処かへ去り、新しく生きる道を見出すことは、十兵衛ほどの男ならば、不可能なことではないと、源五郎はおもった。

「なれど、わしは疲れた……」

ためいきのような、十兵衛の声であった。

十兵衛は、亡き武田信玄に一命を捧げ、信玄の天下統一を念願し、必死にはたらきぬいてきた。

武田家がほろびたとき、十兵衛は武田忍びを指揮して諸方を転戦しており、それゆえに生き残ったともいえる。

それまでが、山岸十兵衛の武士としてのすべてであった。

北条氏邦に仕えたのは、豊臣秀吉の天下統一が成って後の、平穏をのぞんだからだ。

「もはや、この上、あれこれと身の始末に苦しむことが面倒になった。ゆえに、わしは、このまま、この鉢形城にいて、おのれの一生のとどめを刺したい」

十兵衛は、こういってから、はじめて明るい笑顔を見せ、

「源五は、いざともなったとき、わしから離れ、正子と共に逃げてもらいたい。尚、勝千代をもたのむ。於丹は、わしの妻ゆえ、それなりの分別もあろう。若い三人なれば、これからの新しい世に呼吸を合わせて行けよう」

源五郎に、こたえるすべはなかった。

「たのむぞ、源五……」

正子と夫婦になることをゆるしてくれたとき、十兵衛は、

「そのかわりに、この山岸家に危急の事あるとき、源五郎は、わしのいいつけに叛いてはならぬ」

と、いい、源五郎は「叛きませぬ」と誓った。

「承知いたしました」

結局、源五郎は、正子と勝千代の身柄を托されることになってしまったのである。

戦雲

北条氏邦は、鉢形城の戦備をととのえると共に、千余の部隊を沼田城へ送った。

これによって、沼田城代の猪股能登守は、占領した名胡桃城の防備を強化し、真田勢の反撃にそなえた。

ところが……。

すぐさま、名胡桃を奪い返しに攻めかけて来るはずの真田勢は、

「鳴りをひそめている……」

ではないか。

真田安房守昌幸は、名胡桃城を敵の手にゆだねたまま、沈黙している。

いや、北条方へは沈黙していたけれども、京都の豊臣秀吉へは訴え出た。

「殿下のお口ぞえによって、自分は忍びかねるところを忍んで、沼田を北条家へゆずりわたしたにもかかわらず、相手方が、このように乱暴きわまるふるまいに出たのでは、関白殿下の御威勢にもかかわろうかと存ずる」

この始末を、殿下は、どのようにつけるおつもりなのか、と、いい送った。

真田昌幸が、何故、正当の防衛といってもよい反撃に出なかったかはさておき、この昌幸

の態度は、まさに適切であった。

豊臣秀吉は、すでに、諸国大名の私闘を禁じている。

この掟を破った北条家は、天下に叛いたことになるのだ。

秀吉は、何としても、これを裁かねばならぬ。

豊臣秀吉は、奉行の大谷吉継を駿府（静岡市）の徳川家康へつかわして、

「かくなれば北条父子に誅戮を加えなくてはならぬ。それでなくては天下のしめしがつかぬ。そこもとも、よくよく御承知ねがいたい」

と、いい送った。

これは、家康の女が北条本家の当主・氏直の妻になっていたから、念を入れたのだ。

徳川家康も、秀吉の宣告に、異議をとなえるわけにはまいらぬ。

今度ばかりは、どこまでも北条方が悪い。

何で、また、そのように愚かなまねをしたものか……。

家康も、呆れるほかはなかった。

手のほどこしようがない。

折しも、北条氏直の使者として石巻康敬という家臣が京都に来ていた。

秀吉の上洛要請に対し、例によって煮え切らぬ返事をもって来たのであろう。

石巻康敬は、秀吉が激怒し、

「いよいよ、関白殿下は小田原を攻められるらしい」

しきりに、うわさがながれはじめたので狼狽し、秀吉の側近であり、有能な奉行でもある石田三成をたよって、秀吉に弁解をこころみようとした。

すると秀吉は、

「目通りはゆるさぬ。石巻康敬を引っ捕えよ」

と、命じたものである。

やがて豊臣秀吉は、北条氏直へ、きびしい詰問状を送りつけた。

直き直きに送りつけたのではない。

秀吉は、どこまでも、北条家と姻族の関係にある徳川家康の顔を立て、家康を通じて小田原の北条家へ届けさせたのだ。

その文面は、およそ、つぎのごとくである。

北条父子は、年来、朝命を軽んじて上洛出仕をせず、関東において、ほしいままの振舞いをつづけてきた。

よって、自分は去年、まさに誅戮を加えようとおもったが、北条家の姻戚である駿河大納言（家康）が、ひたすら、ゆるしを請うたので我慢をしてきた。

そもそも、北条家が沼田城を我物にできなかったのは、おのれの力が弱かったからではないか。そのことを、いささかもかえりみることなく、これまでに何かと自分や徳川をあざむき、上洛を延ばしてきた。

さらに、沼田を我物にすることを得たら、かならず出仕をするとの誓書まで出しておきながら、自分の仲立ちによって沼田を手に入れるや、あとはまたしても以前のごとく、上洛をせぬ。

それのみか、このたびは突然、真田家の所領である名胡桃を乱暴にも奪い取ってしまった。北条父子の無礼には、つくづく、おどろくほかはない。

自分は年少のころより織田信長公に仕えて、いくたびも戦陣へ出て功を積み、ついに中国経略の重い役目につくまでになった。その折、はからずも本能寺の変が起り、自分は逆臣・明智日向守（光秀）を誅し、信長公の恩顧に報い、その大業を受けつぎ、関白の位についたのである。

これよりは、天皇をお助けして戦乱を絶やし、そむく者はこれを誅し、従う者はこれをいつくしみ、いまは東海・東山・山陰・北陸・山陽・西海・南海七道の大名たちは、いずれも自分の命に従っている。

ところが、北条家のみは天地の公道にそむき、人臣の礼節を捨てて、一向にかえりみない。

天下に、ただの一人でも、勅命にそむくものがあってはならぬ。

自分は来年こそ、北条父子の罪を糺し、非理をあきらかにする決意である。

「何とぞ、おあらため下さるようにと、関白殿下のおおせにござります」

と、秀吉の使者・新庄直頼がいったので、徳川家康は秀吉の詰問状を読み、
「まことにもって、もっとものおおせである」
家康は、また自ら筆を把ってむすめ聟であり、北条本家の当主でもある左京大夫氏直へ、
「このたびの不法を、関白殿下へ謝罪するように」
と、書き送った。
このとき、徳川家康は、
（もはや、手のほどこしようがない……）
けれども、まだ、一縷の望みはあるとおもった。
それは、豊臣秀吉が、
「来年は北条父子の罪を糺す」
と、いっていたからだ。
新しい年は、間もなく明けるが、それまでに、こちらの出様ひとつで、秀吉の怒りをやわらげることは、
（できぬものでもない……）
と、考えた。
豊臣秀吉が、詰問状を直接、北条家へ送りつけず、家康に目を通させたというのは、家康を重んじているばかりでなく、
「そちらから、速かに、北条父子へ、しかるべくいい送ってもらいたい」

との意味が、ふくまれているのではないか……。
そこで家康は、
「自分ならば、こうする」
と、北条氏直へ書き送った。
体面も何もない。
いまは、何も彼も捨てて、秀吉へ謝罪することだ。
先ず、すぐにも北条氏政か氏直が京都へのぼり、秀吉への臣従を誓い、謝罪をする。
むろん、同時に、奪い取った名胡桃城から、北条勢を引きあげさせ、城を真田家へ返さねばならぬ。
その他にも、秀吉が出した条件には、すべて承服しなくてはならない。
こうすれば、秀吉も怒りを解くであろう。
その上、尚も北条父子を攻めるような秀吉ではない。
家康は、秀吉の性格を、よくよくわきまえている。
北条父子は、家康の忠告に対し、尚もためらい、こそこそと手をまわして謀略じみたことをやったらしい。
秀吉へは、
「自分たち父子が上洛をせぬのは、そのまま京都へ押しこめられてしまうのではないか……または、小田原の本城から他へ移されるのではないか。それを怖れているからでござる」

などと、返事を送ったりしている始末なのだ。
徳川家康は、ついに、匙(さじ)を投げてしまった。
いまさら、そのようなことをいい立てて何になる。
小田原から他国へ移されても、
「攻めほろぼされるよりは、増(まし)ではないか」
このことであった。
そして、北条父子は、家康へ、
「関白へ、取りなしをたのみ入る」
などと、いってよこした。
だから家康は、手紙に書いたのだ。自分のいうことを聞いてくれるなら、取りなしようもある。
北条父子は、依然、名胡桃城からも引き退(の)かず、真田家へ謝罪もしていない。
豊臣秀吉に屈服したなら、
「小田原の本城から、他国へ移されるのではないだろうか……」
その不安は、北条父子にとって、真実のものであったやも知れぬ。
名胡桃の異変が起る前に、豊臣秀吉は、諸侯の妻子を、
「京へ、とどめおくように……」
との、令を発していた。

これは、北条父子を攻めるときにそなえての、一種の〔人質〕といってよい。
「ついに、追いつめられたな……」
と、山岸十兵衛が、上田源五郎へ、
「これは、戦さになろう」
「はい」
鉢形城では、戦備に狂奔しはじめた。
小田原の本家と鉢形城との間に、使者が駆け交いはじめた。
それならそれで、
「天下は、われ一人の物とおもうていようが、この北条家のみは、屈服せぬ」
と、勇ましく秀吉へ挑戦状を叩きつけるのかとおもえば、そうでもないのだ。
依然として北条氏政・氏直の父子は、徳川家康をたよって、局面の打開をはかろうとしている。
しかし、家康は、
「もはや、自分の手では、どうにもならぬ」
と、豊臣秀吉の招きに応じて、京都へのぼって行った。
これは、小田原攻めの軍議に参加するためであった。
こうなっては、本家の北条父子も、
「いまは、これまでである」

開戦の肚(はら)を決めたらしい。

京都へおもむいた徳川家康から、使者が駿府城へ駆けつけて来たのは、年の瀬も間近い十二月の十三日だ。

使者は、家康の、

「出陣の仕度を、ぬかりなくいたせ」

という指令をつたえた。

その、夜ふけのことである。

鉢形城内・山岸十兵衛屋敷の中の自室の臥床(ふしど)に身を横たえていた源五郎は、

(明日からは、この部屋とも別れることになる……)

そのことを、鐘撞き堂の飯道弥平次に知らせておかねばならぬとおもい、半身を起した。

明日は、源五郎と正子の婚礼がおこなわれる。

といっても、戦時体制に入ったことだし、ただ、夫婦のかための盃(さかずき)をかわすだけのことだ。

客も招(よ)ばぬし、祝いも受けぬ。

山岸十兵衛の家族・家来・奉公人たちだけで、あわただしく事をすませるのだ。

そして源五郎は、屋敷内の正子の居室へ移ることになっている。

連絡(つなぎ)にあらわれる甲賀の忍びに、このことを告げておかねばならぬのは、当然であった。

鉢形城内は、戦時体制に入ったので、諸方に篝火(かがりび)が燃えたち、警衛がきびしい。

しかし、甲賀・山中忍びの上田源五郎が山岸屋敷を脱(ぬ)け出し、城外をながれる荒川をわた

り、高山の鐘撞き堂まで、人目にふれず連絡に行くことなど、

(わけもないこと……)

なのである。

半身を起し、臥床からぬけ出そうとしたとき、

(や……?)

おもわず、源五郎は呼吸(いき)をつめた。

部屋の中を塗りこめている闇の一隅(いちぐう)に、二つの眼が光っている。

これは、夜張りの助七のものではなかった。

「お万喜(まき)どのか……」

低く、よびかけながらも、源五郎は自分の不覚に舌打ちをしたい気もちになった。

この部屋の中へ相手が忍び込んで来るまで、

(気がつかなんだとは、何ということだ。これでも、おれは甲賀の忍びなのか……)

このことであった。

相手が夜張りの助七ならば、これは自分に忍びの術を教え込んでくれた男だし、助七は山中忍びの中でも屈指の術技を使える老練の忍びの者だ。

それゆえ、源五郎は、

(小父ごには、とてもかなわぬ)

かねがね、そうおもっているし、これは事実だ。

助七に後れをとることは、仕方がないとしても、女忍びのお万喜が、これほどの手練のもちぬしだとは考えてもみなかった。

しかも、

(おれは、目ざめていた……)

のである。

微かな含み笑いと共に、女忍びのお万喜が闇の底から浮いて出た。

お万喜は、百姓の女房の姿をしてい、その上から、甲賀の忍びたちの間で、

「墨流し」

と、よばれている黒い布をかぶっていた。

甲賀の忍びが使用する〔墨流し〕は、簡略な〔隠れ蓑〕の役目を果してくれる。

折りたためば、ひとにぎりほどになってしまう黒い薄布にすぎぬ墨流しだが、これを使う忍びの手にかかると、想像以上のはたらきをする。

「ふ、ふふ……源五どのよ。わたしが忍び入って来たのに、気づかなんだな」

どちらかというと、しわがれたような、お万喜の声であった。

源五郎は、こたえぬ。

「ねむっていたわけでもないのに……」

「………」

「ふ、ふふ……」

「笑うのは、やめてくれ」

「まあ、こわい」

近寄って来た、お万喜の躰が、急に女の匂いをただよわせはじめた。

お万喜の躰が匂い出したのは、この女忍びが呼吸をゆるめ、緊張を解いたからだ。

忍びの者が呼吸をつめているとき、その体臭も気配も、ほとんど消えてしまう。

これが、〔整息の術〕なのだ。

「源五どの。大きゅうなられたなあ……」

墨流しの蔭で、お万喜の眼が笑っていた。

上田源五郎は、少年のころ、何度かお万喜を見ているが、語り合ったこともない。

お万喜の父は、岩井万蔵という甲賀忍びであった。

源五郎の亡父・小杉重六より、わずかに年上だったらしい。

だが岩井万蔵は、小杉重六が三方ヶ原で討死をした二年ほど前に、

「消えた……」

そうな。

甲賀忍びの間で「消えた……」ということは、死亡を意味する。

どこで、どのようにして死んだかは、甲賀の頭領・山中大和守俊房のみが、よく知っている。

いや、いま一人、岩井万蔵のひとりむすめであるお万喜も、父の死様を知っているにちが

いない。

何故というに、お万喜は、少女のころから父の万蔵に従い、忍びのはたらきをつづけていたからだ。

この父娘は、山中大和守の特殊の秘命をうけて甲賀をはなれていることが多かった。

いずれにせよ、岩井万蔵の死は戦場においてではない。

何か、山中大和守からの重要な秘命によって遠国へ潜入し、そこで岩井万蔵は「消えた……」のであった。

父と頭領との連絡は、いつも、お万喜がつとめていた。

年に一度か二度、お万喜は父からの報告をもって、甲賀の山中屋敷へ帰って来た。

少年の上田源五郎が、お万喜を見たのは、そうした折においてである。

そのころのお万喜は、枯木の小枝のような女に見えた。

年も若かったのに、源五郎の印象では、

「四十にも、五十にも……」

おもわれ、そのことを夜張りの助七に洩らすと、

「女忍びに年齢はござらぬ。お万喜どのは源五郎どのより、さよう七つ八つは年上のはず。なれど十三の小娘にもなれようし、六十の婆にもなれる。あのように細い躰をしているのは、さまざまな女になるための用意なのでござる」

笑いながら、助七は、そういった。

当時のお万喜は、山中屋敷の中で源五郎に出合っても、じろりと一瞥をくれるのみで、口をきいてくれたことなどは、一度もない。

それだけに、今夜のお万喜の親しげな素振りが、源五郎を戸惑わせた。

十何年かぶりで見るお万喜の躰は肉置きも充ちてい、むかしとは、まるでちがっていた。

けれども墨流しを除ってあらわれた顔は、まさに、お万喜そのものである。

むかしの、老婆のように乾いた肌が女の脂に照っているというちがいはあるにせよ、お万喜はお万喜だ。

「源五どの。この屋敷のむすめと、夫婦のちぎりをかわすそうじゃな」

「聞いたのか、お万喜どの」

「何をいうことやら……」

声もなく、お万喜が笑った。

「のぞまれたのだ。仕方もないことではないか」

「咎めてはおらぬ」

男のような言葉づかいで、お万喜が、

「甲賀の頭領様も承知しておらるる」

「そうか。それで安心をした」

「きれいな女ごではないか、山岸十兵衛のむすめは……」

「見もせぬのに、何を申されることやら……」

「見たぞよ、見たぞよ」
「どこで、見た?」
「今夜、この屋敷で、先刻、源五どのに抱かれる夢でも見ているような寝顔を、見とどけてきた」
「ふうむ……」
なるほど、お万喜ならばやりかねない。
「ちょうど、来てもらってよかった」
と、源五郎は、はなしを転じた。
「ほう……」
「明日から、おれは、ここにはおらぬ」
「花嫁の部屋へ移るのかえ?」
「仕方がない……」
「あの、むすめ、もはや源五どのに何度も抱かれているらしい」
甘やかに、ささやきかけつつ、お万喜の躰が、源五郎の胸もとにまで接近してきた。
「のう、源五どの。抱いたであろう」
「知らぬ」
「ま、顔をそむけなくともよい」
「そのようなことは、どうでもよいことだ。ちがうか」

「ふむ、ふむ」
うなずいて、お万喜が手指を源五郎の躰の何処(どこ)かにふれた。
源五郎の肩が、わずかにうごいた。
「源五どの。あの正子というむすめの肌は美しいかえ?」
むかしとは、あまりにちがうお万喜の態度と言葉に、上田源五郎は目をみはっている。
むかしの、お万喜の印象がなかったら、これほどにおどろきはしなかったろう。
「のう……のう、源五どの」
ひたと、お万喜が源五郎の胸へ顔をよせた。
その、お万喜の躰から、得もいわれぬ芳香が源五郎の鼻腔(びこう)へながれ入ってきた。
(こ、このように女の肌が匂うものか……)
上田源五郎は、惑乱しつつあった。
これは一つに、お万喜が同じ山中忍びゆえ、源五郎の警戒が解けていたためであろう。
そうなれば源五郎も、一箇の若い男にすぎぬ。
「源五どの。この家(や)のむすめと夫婦になったからとて、甲賀の忍びの本分を忘れまいぞ」
「何といわれる」
「ほ……怒ったのかえ」
「当り前だ。弄(いら)うのも、ほどほどにしてもらいたい」
「すまぬ」

急に、お万喜は、しおらしい口調になった。

「ゆるして下され」

「…………」

「のう、ゆるして……」

と、執拗なのである。

「うむ」

仕方なく源五郎がうなずくと、お万喜は、ひたと男の躰へ取りすがるようにして、

「うれしい」

源五郎の耳朶へ唇をさし寄せ、ささやいた。

源五郎の動悸が激しくなった。

何故、お万喜は、このような仕種をするのであろう。

（十何年かぶりに会ったばかりの、このおれに……）

であった。

「お万喜どの……」

「あい……」

お万喜の熱い息づかいが、源五郎の頬に感じられる。

「おれは……おれは、明日から、この部屋にはおらぬゆえ、そのことを、高山の飯道弥平次へ知らせておかねばならぬ」

「それは、わたしから知らせよう」

「高山へは、はじめてではないのか？」

「この屋敷へも、はじめて来たのじゃ」

それもそうだ。

お万喜ほどの女忍びに、つまらぬことをいったものではある。

「源五どのよ。この屋敷の主・山岸十兵衛直勝のことを、よう知ってござるのかえ？」

「むかし、武田家に仕えていたと聞いている」

「それだけかえ、知っていることは……」

「知らねばならぬのか？」

「さあ……」

お万喜は一瞬、黙っていたが、

「わたしも近頃になって、耳にはさんだことなのだけれど……」

「それは、どのような？」

源五郎が顔を左へ向け、お万喜を見やった。

お万喜の顔が、ほとんど、ふれ合うばかりのところにあったので、源五郎はあわてて顔をそむけようとした。

その源五郎の口が、湿って、やわらかいものにぴったりと塞がれた。

それは、お万喜の唇であった。

それから後のことは、上田源五郎にとって、

（われながら、どうかしていたのではないか……）

としか、おもわれぬ。

何故に、お万喜は、

（あのような振舞いを、おれにしたのか……？）

それもわからぬ。

源五郎は、お万喜の為すがままになってしまった。

甲賀の忍びとしての源五郎が、これまでに知った女の躰は、何も正子のみではなかった。

だが、お万喜の唇、舌、手指のみか、その肉体の細胞のすべてが、源五郎の躰へ玄妙にはたらきかけ、吸引し、粘着し、圧倒した。

（こ、このような、女の躰もあったのか……）

このことである。

ついには何も彼も忘れ果てて、源五郎はお万喜を抱きしめ、無我夢中になってしまった。

気づいたとき、源五郎は、茫然と臥床の上に横たわっている自分の裸身に気づいた。

「お……お万喜……お万喜どの……」

いない。

すでに、お万喜は消えてしまっている。

「何たることだ」

源五郎は、いまいましげに舌打ちを洩らした。

女忍びのお万喜のさそいに、むざむざと幻惑された自分が、いまになってみると不快でたまらぬ。

お万喜は、

（してやったり……）

とばかり、北叟笑んでいるにちがいない。

（お万喜に、試された……）

そうとしか、おもえぬではないか。

「源五どのは、まだまだ、真の甲賀忍びとはいえまい。若いことよ」

などと、お万喜が飯道弥平次や夜張りの助七へ、苦笑しながら語る情景が目に見えるようなおもいがして、源五郎は居たたまれなくなってきた。

源五郎の居室が、明日から変ることは、お万喜から弥平次へ伝えるという。

そうなれば、もはや、眠り直すよりほかはない。

臥床へ仰向けに寝て、眼を閉じると、冷えきった冬の闇のどこかに、まだ、お万喜の躰の匂いが残っているような気がする。

いや、それは、源五郎の肌から匂ってくるのであった。

（お万喜の匂いが、おれの肌に……）

そうなると、口惜しさも忘れてしまい、

（あのような女が、ようも、いたものだ……）
悩ましげに源五郎は、先刻の、お万喜の激しい仕種や、甘やかなささやきをおもい浮かべはじめた。
そのうちに……。
（そうだ……）
はっと、源五郎は我に返った。
お万喜は、
「源五どのよ。山岸十兵衛直勝のことを、よう知ってござるのかえ？」
と、尋（き）いた。
それは、十兵衛が、単に武田家の遺臣だということのほかに、
（何やら、隠されている事があるのではないか？）
そう感じたので反問すると、お万喜は「近頃になって、耳にはさんだこと……」と、いいかけながらも語るのを中断し、急に、源五郎を挑発しはじめたのである。
（はて……？）
気がかりでならなくなってきた。
源五郎が、夜張りの助七から聞いた山岸十兵衛の経歴は、まことに簡短なものであった。
そのとき、
「小父ご。そのほかに、こころしておくことはないのか？」

源五郎は念を入れた。
すると助七は、
「甲賀にも、これだけのことよりほかに、十兵衛についての知らせが入っておらぬらしい。ゆえに、武田の遺臣ということのみを心得ておられれば、それでよいと存ずる」
と、こたえた。
だから、この事について、上田源五郎に落度はない。
また、お万喜にしても、くわしいことを語らぬままに去ったのは、まだ、真偽のほどがつかめていないのであろう。
それならば、何も源五郎が気にかけることはない。
ないが、しかし、気にかかる。
間もなく、戦さが起るとすれば、山岸十兵衛は甲賀忍びにとって、
「敵の部将……」
なのだ。
けれども、いまや上田源五郎にとって、十兵衛を敵だと看る感覚はきわめてうすい。
源五郎は意識していないが、つまり、それだけ山岸十兵衛へ、
「情（じょう）が移りはじめた」
と、いってよい。
十兵衛が自分へかけてくれる信頼、親切……そしていまは、主従というよりは、

「岳父と、むすめ聟」

と、なった。

この状態は、山岸十兵衛を通じ、鉢形城の動向を探りつつある上田源五郎にとって、非常に有利な事であった。

いざとなれば、山岸十兵衛も正子も、それこそ、

「見殺しにして……」

甲賀へ帰ってしまえばよい。

だが、いまの源五郎に、それができるか、どうか……。

さらに、たとえば甲賀の頭領・山中俊房から、山岸十兵衛を、

「暗殺せよ」

との指令が下ったら、源五郎は、これを遂行できるであろうか。

もしも、上田源五郎に、

「できるか?」

問いかけてみたとしようか。

むろん、源五郎は、

「できない」

とは、こたえまい。

だが、おのれの胸の底に潜むものに、源五郎は気づいていないはずだ。

もっとも、夜張りの助七にいわせると、

「わが正体を隠し、相手方へ取り入るときは、真底から、その気にならねばいけませぬよ」

とのことだ。

つまり、舞台上の、すぐれた俳優のように、おのれの偽りの役に、

「なりきってしまえ」

と、助七はいった。

それが、甲賀忍びの本然（ほんねん）であるというのだ。

それほどにしなくては、相手方が手強（てごわ）ければ手強いほど、

「こなたに、気をゆるしてはくれぬ」

これは、源五郎の亡父・小杉重六も同意見であったそうな。

同じ甲賀の忍びたちの中でも、小杉重六や夜張りの助七の考えとは全く別の意見をもつ者が多い。

いや、時代が移り変るにつれて、重六や助七のような甲賀忍びは少なくなってしまった。

「相手方に、こなたが気をゆるし、情が移り、通い合うてしまっては、忍びのはたらきなど、できるものではない」

彼らは、そういうにちがいない。

それに対して、助七は、こうこたえるであろう。

「いや、そこまで行きついて尚（なお）、いざというときにこそ、忍びの役目を忘れぬというのが本

当なのじゃ。相手方が凡庸の者ならば、何も、こころをゆるさずとも、手玉に取れよう。わしが申すのは、手強い相手、一筋縄では行かぬ者を相手にするときのことじゃ」

とすれば、上田源五郎の現状は、間ちがっていないことにもなろう。

山岸十兵衛直勝は、まさに、忍びにとって手強い相手といわねばなるまいからだ。

さて……。

源五郎は、その翌日から、山岸屋敷内の正子の部屋へ移った。

夕餉の折に、それこそ、かたちばかりの、夫婦のかための盃をかわしたのみであったが、

「ああ、うれしい……」

正子は、夜に入って二人きりになると、源五郎へ、

「これで、天下はれて、夫婦になりました」

ささやいて、泪ぐんだ。

戦さが始まれば、父や源五郎の身が、どのようになるか……などということは、いまの正子の念頭から消えてしまっているらしい。

熱く燃える正子の裸身を抱きながらも、源五郎は何か落ちつかなかった。

寝所の闇の何処からか、お万喜が、凝と見つめているようなおもいがしてならなかった。

軍議

やがて、新しい年が明けた。

天正十八年（一五九〇年）である。

正月三日。

徳川家康は、十二歳になった嗣子の長丸（後の徳川秀忠）を、京都の豊臣秀吉の許へ送った。

つまり、人質であって、自分が秀吉に対し、

「二心なきことの誓い……」

を、かたちでしめしたことになる。

間もなく家康は、領国の諸将へ動員令を下すにちがいない。

豊臣秀吉は、来る二月一日から約一ヶ月の間に、小田原攻めの進発をおこなうと発令し、徳川家康・北畠信雄（織田信長の次男）・蒲生氏郷らを東海道から進軍させ、前田利家・上杉景勝らを東山道から進攻させることにした。

名胡桃城を奪われた真田昌幸は、東山道軍に参加することになっている。

このときの北条家の勢力圏を、現代の呼称でしめすと、つぎのようになる。

神奈川県（相模）静岡県（伊豆）東京都・神奈川・埼玉両県の一部（武蔵）千葉県（上総と安房）群馬県（上野）茨城・千葉の両県（下総）茨城県（常陸）栃木県（下野）
それに静岡県（駿河）の、僅少な一部であり、すべてを合わせると、二百八十五万石ほどであったろう。兵力としては、十万におよばぬ。

これらの北条家の勢力圏に在る諸将は、それぞれに城や砦を構えているわけだから、豊臣秀吉は、そうした北条方の属城を、ことごとく征服しなければならぬ。

武州の鉢形城は、その中でも、

「もっとも手強い城……」

の一つとされている。

これに対して……。

豊臣秀吉は、まだ完全に屈服したとはいえぬ東北地方を除き、北条家以外の諸国五十八州を切り従え、通計一千六百五十万石におよび、その兵力も北条方の四、五倍はあろう。

（どう看ても、勝目はない……）

といってよい。

「この上は、手痛く戦って、関白の目をみはらせるよりほかはない」

山岸十兵衛は、上田源五郎に、そういった。

豊臣秀吉は、むかしから、味方の出血を、

「好まぬ……」

大将であった。

北条軍と戦ってみて、味方の犠牲が大きいとなれば、おそらく秀吉は、講和をもちかけてくるにちがいない、と、十兵衛はおもっている。

まさか、そのときになれば北条父子も、

「煮え切らぬ様子は見せまい」

と、十兵衛はいった。

いずれにせよ、勝てぬ戦さなのだ。

ともかくも、敗北を覚悟で必死に豊臣軍を迎え撃ち、緒戦において、敵に痛烈な打撃をあたえてしまわなくてはならぬ。

そして、秀吉が講和をもちかけてくるなら、それは、このまま、負け潰されるのを待っているよりも、

「はるかに、よい……」

条件により、北条家は生き残ることができよう。

「おそれながら……」

去年の、年の瀬も押しつまってから、山岸十兵衛は、北条氏邦へ目通りを願い出て、自分のおもうところを具申した。

豊臣の大軍に、きびしい打撃をあたえるためには、先ず、こちらの戦意と闘志が燃えさか

っている緒戦でなくてはならない。
　緒戦ならば、将兵も、
「疲れ切ってはおらぬ」
　のである。
　そのためには、小田原の本城をはじめ、他の属城においても、敵が城を包囲するまで、指をくわえて見ていてはならぬ。
　北条方の城という城、砦という砦の将兵は、一斉に城外へ打って出て、捨身となって、果敢に戦う。
「いま、このとき、籠城などという事は、いっさい成り立ちませぬ」
　と、十兵衛はいった。
　もっとも、十兵衛がいうように戦っても、果して、豊臣秀吉が講和をもちかけてくるとは断言できまい。
　しかし、北条軍が生き残ろうとおもうならば、
「これよりほかになし！」
　十兵衛は、おもいきわめていた。
「いかにも」
　北条氏邦が、すぐさま、同意をしてくれた。
「十兵衛。そのほうの申すとおりじゃ」

「ははっ……」
「わしも、いままで、そのようにおもいつつも、迷いが生じて心を決めかねていたのじゃ」
「さようでござりましたか……」
「ようも、申してくれたぞ」
「は……」
「十兵衛。こたびは、わしのおもいちがいであった」
　北条氏邦が、しみじみとした口調になった。めずらしいことではある。
「と、おおせられますのは？」
「名胡桃のことよ」
「名胡桃を、落したことでござりますか？」
「いかにも」
　氏邦は、名胡桃を奇襲して奪い取れば、かならず、
「真田安房守が、戦さを仕掛けてくる。あの安房守ならば、かならず、名胡桃を奪い返さんとするにちがいないと、おもいきわめていたのじゃ」
　真田昌幸が名胡桃奪還に攻めかけて来れば、北条家としても、豊臣秀吉に対して、
「いかようにも、口実がつく」
　と、考えたらしい。
　北条家としては、

「真田が戦さを仕掛けて来たから、こなたも、沼田城の安全のために、名胡桃を落したのである」

と、いえる。

山岸十兵衛から看れば、そのような甘い考え方が秀吉に通じるとはおもえぬけれども、そうなれば、一応、真田家も、

「私闘を禁ずる」

という秀吉の命令を、破った形になるわけだ。

豊臣秀吉は、ふたたび、北条・真田両家の争いを裁くために、乗り出して来るにちがいない。

その政治的な紛糾の中で、北条家は、有利な講和条件へ持ち込むことができるのではないか……。

北条父子が秀吉へ屈従する条件は、このまま、いつまでも関東を、

「わが領国にしていたい」

やはり、このことだったのである。

秀吉に屈服すれば、

「関東から他の国へ移されるにちがいない」

その北条父子の不安は、あながち、杞憂ではなかったやも知れぬ。

これは、後にわかったことだが……。

やはり、豊臣秀吉は、北条父子を屈従せしめた後で、

「徳川三河守（家康）を、関東へ……」

という構想を抱いていたらしい。

自分が、完全に天下統一を成しとげたのち、諸大名を、おもうところへ移して、独裁政権の確立をはかる。

これは、天下人として、当然のことであった。

そこが北条氏政・氏直父子には、わからぬ。

ところで、つぎのようなはなしが残っている。

それは……。

武田・上杉・今川・織田などの有力な戦国大名を相手に戦いつつ、政治的にも軍事的にも、関東の盟主としての地位をまもりつづけてきた北条氏の三代の当主・氏康が隠居し、長男の氏政に本家を継がしめた後のことだが、

「ああ……」

或夜、重臣たちをまじえた宴席で、隠居の身となった北条氏康が、嘆息をもらした。

「いかがなされまいた？」

いまは、小田原城主となった北条氏政が尋ねると、

「ああ……」

父・氏康が、またしても、深いためいきを吐くではないか。

それのみか、氏康は急に、不機嫌な顔つきとなり、押しだまってしまった。

その様子が徒事ではない。

重臣たちも、

（おかげんが悪くなられた……）

と、おもったらしい。

だが、そうではなかった。

北条氏康は、じろりと我子の氏政を見やって、

「北条の家も、わしの代で終ってしまうのか……」

いいはなったものである。

これには、重臣たちもおどろいたが、もっとも衝撃を受けたのは、父の跡を継いだばかりの北条氏政であったろう。

「父上。何を、おおせられます……？」

いささか気色ばみ、向き直った氏政へ、

「何でもない。おぬしがことじゃ」

と、氏康がいう。

「それがしの……？」

「わからぬか」

「は……」

「いま、おぬしが食べているのを見るに、一膳の飯に汁を二度もかけている」

「それが、何といたしました？」

「人たるものは一日に二度、飯をくらうゆえ、愚か者でないかぎり、食事の修練をつむが当然じゃ」

当時の食事は、一日に二食である。

「よいか。しかるに、おぬしは一膳の飯にかける汁の量も、まだ、わきまえておらぬのか。一度かけて、まだ足らぬからというて、また汁をかける。まことにもって、愚かなまねをするものじゃ。日常の朝夕にすることさえ忖度ができぬのでは、一皮へだてた人の肚の内を知ることなど、とてもかなわぬ」

北条氏康は、我子を睨み据えつつ、

「人の心底がわからぬようでは、よき家来も従わず、まして、敵に勝てようはずもない。なればこそ、北条の家も、わしの代で終ると申したのじゃ」

満座の中で、我子をはずかしめたのは、よくよくのことであったのだろう。

しかし、北条氏政は蒼ざめながらも、冷笑をもって父にこたえたのみであった。

このような氏政であったから、父・氏康が亡くなると、たちまちに本体をさらけ出してしまい、ここ十余年の間に、北条家は、しだいに激しく移り変る時代のながれに乗り遅れてしまったのだ。

その氏政が、いまは隠居し、我子の氏直が本家の当主となっているわけだが、氏直もまた、

資性は凡庸である。

ゆえに、隠居の氏政の発言力は、いまも大きい。

「それが、むしろ、困ることなのじゃ」

と、鉢形城の北条氏邦は、兄にあたる氏政が何かにつけて口をさしはさむのを、よろこんではいない。

北条氏政は、豊臣秀吉からの宣戦布告を受け取った折に、

「秀吉めは、怪しからぬやつである」

弟・氏照や重臣たちの前で、大声をあげ、

「われに向って、このような書状を使者に持たせ、われらを脅かそうとしているが、何条、その手に乗ろうか。もし、秀吉めが関東を我物にしたいと申すなら、いつにても攻めてまいるがよい。水鳥の羽ばたきで、秀吉めを追いはらってくれよう。わしは、この小田原の城に居据わったままで、秀吉が平維盛の二の舞いを演ずるのを見物してつかわす」

などと、威張って見せた。

そのくせ、

徳川家康という、またとない仲介者からも見はなされてしまい、氏政は胸の内では豊臣軍の来攻に怯えながらも、強がりをいってみせる。

「いざともなれば、城を出て全軍を指揮する勇気もない」

と、北条氏邦は看て取っている。

ともかくも、開戦は必至となったのだから、これからは隠居の北条氏政が口をさしはさむことを、

「ゆるしてはなるまい」

北条氏邦は、決意をみなぎらせた口吻で、山岸十兵衛にいった。

そして、新年早々に、小田原城で開かれる軍議の席では、断乎として、

「籠城をやめ、城外へ出て豊臣勢を迎え撃つ」

ことを力説することにした。

そのため、氏邦は、八王子城を守る兄の氏照をはじめ、岩槻・松井田・忍などの諸城主に対し、密使を飛ばし、同調をもとめた。

このときから、俄然、北条氏邦は山岸十兵衛を見直したらしい。

これまでの氏邦は、十兵衛を信頼していながらも、そこはやはり、武田家の遺臣ということで、重臣たちは十兵衛を、

「新参者」

としている。

北条氏邦としても、その声を無視するわけにはまいらなかった。

ゆえに、名胡桃急襲の密計を十兵衛に洩らすことが、

「憚られた……」

のであろう。

しかし、いまは譜代も新参もない。
北条家の命運を賭けた戦争が始まろうとしているのだ。
鉢形城では、十二月三十日に、重臣たちをあつめて、第一回の軍議がおこなわれたが、その席へ、山岸十兵衛もつらなることをゆるされた。
「これならば、わしも、はたらき甲斐がある」
十兵衛は、軍議を終えて三の丸の屋敷へもどったとき、上田源五郎に、
「なれど源五郎。いつぞや、わしに誓ってくれたことを、忘れてはいまいな？」
「忘れませぬ」
「うむ。それで、わしも、はればれとして死花を咲かすことができる」
北条氏邦は、新年早々にひらかれる小田原城での軍議で、
「城外へ出て、全力をつくし、箱根の天嶮に豊臣勢を迎え撃つべし」
積極的な主戦を唱えることになった。
これを、上田源五郎が、
（一時も早く、甲賀の頭領様へ知らせねばならぬ……）
ことは、いうまでもない。
以前の源五郎ならば、余人に見咎められる心配はなかったが、いまは妻となった正子と共に眠る。
正子は、毎夜のように源五郎をもとめてやまぬ。

開戦が近づくにつれ、正子は正子なりに切迫したこころになってきている。
父や夫が戦死すると決まったわけではないけれども、味方の不利は、女の目にも判然としているのだ。
母の於丹も、正子や勝千代に、
「覚悟をきめておきなされ」
と、いった。
於丹は、夫の十兵衛直勝と共に、武田家の盛衰と滅亡を体験しているだけに、いささかも狼狽してはいない。
源五郎も、
（さすがに……）
と、感嘆していた。
そうした緊迫が、正子に愛のしるしをもとめさせるのだ。
源五郎の愛撫を、わが躰に受けとめることによって、正子は一日一日を生きぬこうとしているにちがいない。
三十日の夜……。
源五郎は、香炉に香を焚いた。
「まあ……めずらしい匂い……」
夫の胸に顔を埋めつつ、正子がささやいた。

「以前、手に入れたものだ」
源五郎の口調も、ようやく正子の夫らしく変ってきたようだ。
激しい愛撫が終るや、正子は、そのまま、深い眠りに落ち込んだ。
それと見るや、すぐさま源五郎は戸を細目に開け、先ず冷たい夜気を吸い込んだ。
源五郎が焚いた香には、甲賀独自の催眠の薬草が混じてあった。
源五郎とて、これを吸い込んでいるのだから、眠気をさそわれぬことはない。
しかし、そこは甲賀の忍びの者ゆえ、呼吸の仕方ひとつで、常人よりは眠りへ落ち込む時間が遅くなるのだ。
（よし……）
と看て、源五郎は寝所から脱け出し、例の〔墨流し〕をまとい、鉢形城を後にして、荒川をわたり、高山の鐘撞き堂へ走った。
飯道弥平次は、他の鐘撞きたちと共に、小屋へ寝泊りをしているが、その枕元へ源五郎が微風のように忍び寄ると、
「源五どのか……」
すぐに弥平次は、両眼をひらいた。
この小屋には、鐘打ちの足軽が七人、起居している。
二人ずつが三交替で、鐘撞き堂に詰め、残る一人は、諸方への連絡をつとめ、この一人だけは常時、鐘撞き堂下の小屋に寝泊りをしていた。

いま、小屋に眠っている鐘打ちは、飯道弥平次をふくめて四人であった。
鐘打ちたちの鼾声が、小屋の中にこもり、彼らは、潜入してきた上田源五郎にまったく気づかぬ。
源五郎は、弥平次をうながし、小屋の外へ出た。
「実は……」
と、源五郎が北条氏邦と山岸十兵衛の積極的な戦術について語るや、
「ふむ、ふむ……」
弥平次は、緊張の面もちで聞き終え、
「それは、容易ならぬことだ」
つぶやいた。
「何ぞ、甲賀からの御指図でもあったのか?」
弥平次の様子を見て、源五郎が問いかけるや、
「いいや、別に……」
弥平次はかぶりを振って、
「たしかに、うけたまわり申した。お帰り下され」
膠もなくいった。
甲賀者として、源五郎より身分が低い弥平次だが、自分の肚の内を決して明かそうとはせぬ。

そして、自分が若い源五郎よりも、はるかに重い任務についているという自負が強い。

たとえば……。

こうして源五郎が弥平次に告げた情報を、甲賀へ急報する場合には、むろん、弥平次が甲賀へ駆けつけるわけにはまいらぬ。

ゆえに飯道弥平次は、この鉢形の近くへ常時、待機している甲賀忍びへ情報をつたえるにちがいない。

その甲賀者は二人か三人いて、すぐさま、甲賀の山中大和守俊房の許へ駆けつけることになっているのであろう。

いや、そうなっているにちがいないのだ。

ところが、その連絡（つなぎ）の者たちが、この近くの何処（どこ）に、何人いるのかを、弥平次は一度も源五郎に知らせたことがない。

源五郎が問いかけると、

「それは、お前さまに関（かか）わり合いのないことでござる」

薄笑いと共に、はねつけてしまうのである。

源五郎は、

「怪しからぬやつではないか」

弥平次は、おれを見くびっている。

いつか、忍んで来た夜張りの助七へ、鬱憤を洩らしたことがある。

助七は、

「弥平次は、だれにでもそうなのでござる。気にせぬがよい」

と、いった。

しかし、事態がこのように切迫してきているのだから、

「ぜひとも、いま、聞いておきたい」

と、源五郎は弥平次にせまった。

もしも、弥平次に万一の事があった場合、源五郎自身が、城外の連絡（つなぎ）の場所へ駆けつけねばならぬからだ。

「いや。源五どの。この弥平次に、万一の事などあるはずもござらぬ」

弥平次の口もとからは、薄笑いが消えていなかった。

「それは、甲賀の頭領様の御指図か？」

「何がでござる？」

「何……」

「では、申しあげる」

「おれに、連絡の場所を打ち明けぬということがだ」

「源五どのとて、この弥平次に大事を打ち明けてはくれなんだ」

「何を、だ？」

「山岸十兵衛のむすめとの事をでござる」

「う……」
たしかに、そうだ。
源五郎にしてみれば、他意あって打ち明けなかったのではない。
正子との事などは、自分一人が心得ていればよいと、考えていたからだし、なればこそ、夜張りの助七へも打ち明けていなかった。
「自分勝手のことを申されるわ」
笑いを消した弥平次が、吐き捨てるように、
「われら忍びの者として、それぞれにおもうことがござる。源五どのは源五どの。わしはわしじゃ」
「何……それで、忍びのはたらきがつとまるとおもうのか?」
「これまで、何事もなくつとめてまいったではござらぬか。これより先のことは知らぬが……」
いいさして、飯道弥平次は源五郎へ背を向け、小屋の中へ消え去った。
その後姿が、いかにも憎らしく源五郎には見えた。
（おのれ……）
怒りがこみあげてきたが、源五郎はあきらめて、高山を下り、山岸屋敷へもどったのである。
怒るといっても、激しく頂点に達することはなかった。

怒りも悲しみも、それが収拾がつかぬほどに乱れるということは、忍びの者にはない。そのように、自分のこころのうごきを制御できるように訓練をされているからであった。
たとえば感情が激したとき、常人とちがって、肉体機能がこれを鎮めてしまう。怒りや悲しみが起ると、呼吸が乱れるのではなく、却(かえ)ってゆるやかになるとか、危険がせまったとき、無意識のうちに笑いが浮かぶとか……そのように肉体そのものが訓練されてきているのだ。
ゆるやかな呼吸は激した感情を平静にさせ、無意識のうちに浮かべた笑いは、精神の余裕(ゆとり)をまねきよせる。
ともかくも……。
こうして、上田源五郎は新しい年を迎えた。
天正十八年の年が明け、その正月四日に、とりあえず、小田原城内で軍議がおこなわれた。
前日の三日に、北条氏邦は五十余騎を従え、鉢形城から小田原へ到着している。
山岸十兵衛も、むろん、氏邦に従い、小田原へおもむいた。
上田源五郎は十兵衛に、
「私も、お供を……」
と、願い出たが、
「いや、平常の期(とき)ではない。源五には、この屋敷をまもってもらわねばならぬ」
十兵衛に押しとどめられた。
正月四日の軍議を終えた北条氏邦は、六日の午後に一先ず鉢形へ帰城した。

この第一回目の軍議は、北条氏邦からの、

「ともかくも、急ぎ軍議を……」

との強い要請にこたえてのものであったから、不参加の諸将もあり、つぎは来る十七日から、北条家の傘下に在る諸将のすべてが小田原へあつまり、軍議を決定することになったという。

「なれど、先ず、こなたのおもうようになるであろう」

山岸十兵衛は、屋敷へもどり、源五郎にそういった。

北条氏邦は、八王子城主の兄・氏照と共に、

「姑息の籠城をしたところで、何の益もない」

ことを、北条父子に進言した。

本家の当主である北条氏直は、若いだけに、この二人の叔父の勇気ある発言を支持したらしい。

しかし、隠居の氏政が、どうも煮え切らぬ。

氏政は、むかしから決断力に欠ける性格で、

「この、小田原の本城があるかぎり、めったなことでは、北条の家がほろび消えることはない」

その一事に、しがみついているようなところがある。

けれども、氏政にとっては二人の弟である氏邦と氏照が大いに力説したので、

「御本家の御老公様も、どうやら、こなたへかたむかれたらしい」

と、満足げに山岸十兵衛はいった。

軍議につらなった他の諸将も、ほとんど同意したそうな。

十七日からはじまる軍議では、何よりも隠居の氏政が肚を決めてくれなくてはならぬ。

それゆえ、北条氏邦は至急に、氏政を説得しておかなくてはと考えたのであろう。

「御老公様は、いざともなったとき、お心が変りませぬでしょうか?」

「先ず、大丈夫であろう」

北条氏邦も、軍議を終えて後、十兵衛をよび、

「御老公に否やはない。これで安心じゃ」

と、いったそうだが、十兵衛は軍議の席にいたわけではない。

北条氏邦は何よりも、当主の北条氏直が、自分の進言に賛成してくれたことを、

「心強いことじゃ」

と、いった。

天正十八年を迎えて、氏直は二十九歳になった。

氏直は、徳川家康の女を妻にしているだけに、最後には、岳父である家康のすすめによって非戦論にかたむきつつあったといわれている。

だが、父の氏政を押え切れず、また、氏邦・氏照など、強硬派の叔父たちにも遠慮があって、苦慮していたらしい。

だが、いまとなっては何も彼も手遅れとなった。

そこで氏直は、叔父たちの積極的な戦法を支持したのだ。

隠居した父に頭のあがらぬ氏直ではあるが、何といっても北条家の当主なのだから、その賛同を得たとなれば、北条氏邦と氏照も、非常に心強いわけであった。

正月六日の夜ふけ……。

小田原から帰城した山岸十兵衛に、軍議の模様を聞いた上田源五郎は、

（このことを、甲賀へ知らせねばならぬ……）

と、おもった。

おもったが、しかし、高山の鐘撞き堂へ忍んで行き、飯道弥平次に告げることを考えると、

（また、あの弥平次の、嫌な面を見るのか……）

気がすすまなくなってきた。

そうした私情にとらわれることが、甲賀の忍びには、

（あってはならぬ……）

ことだと、わきまえていながら、源五郎は先日の弥平次の、自分を見下した言葉づかいや態度が、まだ生なましく脳裡に残っているだけに、

（さしたることではないゆえ、いますぐ、甲賀へ知らせなくともよい）

ついに、鐘撞き堂へおもむくことをやめてしまった。

（このようなときこそ、お万喜どのが忍んで来てくれればよいのに……）

と、おもった。

（よし。今度、お万喜どのが来たら、たのんでみよう。飯道弥平次を通してではなく、おれから直かに、城外の何処かにいる連絡の者へ知らせてもよいことにしてもらおう）

このことであった。

豊臣秀吉の小田原攻撃は、春になってからであろう。

来る十七日からの小田原軍議の結果を看てから、これを甲賀に急報すればよい。

また一つには、源五郎の直感として、

（果して北条氏邦や、山岸十兵衛がいうように、事が、うまく運ぶであろうか……？）

その疑問も、ないわけではない。

いずれにせよ、この夜の上田源五郎には、忍びの者としての怠慢があったといえよう。

正月十一日の夜ふけのことだが……。

京都の、豊臣秀吉の〔城館〕ともいうべき〔聚楽第〕の塀を乗り越え、きびしい警衛の目を事もなげに掠めて、邸内へ忍び入った甲賀の忍びがいる。

この男は、下中の清松といい、武州・鉢形城下で刀剣の研師をしている長谷重左の徒弟なのだ。

つまり、この研師の家が、甲賀忍びの〔忍び宿〕ということになる。

したがって、長谷重左も清松も、甲賀の頭領・山中大和守俊房の配下であり、鉢形城内の上田源五郎と飯道弥平次からの通報を受け、これを連絡する役目を帯びている。

〔聚楽第〕という豊臣秀吉の居館は、
「皇居に匹敵すべきスケールをもって、いとなまれた……」
というが、その豪壮華麗さは、当時の皇居など、およびもつかぬ。
現代の私たちが京都へ行って、東は大宮通、西は浄福寺通、南は出水通、北は一条通と、むかし、聚楽第が存在したといわれる区域をさぐって見ると、この秀吉の城館が、いかに壮大なものであったかがわかる。
そのころの秀吉は、居城である大坂城よりも、聚楽第で日を過すことが多かったようだ。
宏大な聚楽第の〔北の丸〕は、豊臣秀吉の生母・大政所の居住区であり、濠をへだてて、南に四層の天守と本丸をのぞむことができる。
この天守の一階は、秀吉の側室の一人である〔まあ殿〕の美麗な御殿になっているそうな。
〔まあ殿〕は、のちに豊臣家の大老の一人となった前田利家のむすめである。
さて……。
北の丸の西側の一隅は、聚楽第がいとなまれる以前からの地形を残し、窪地を利用した庭園になっている。
その庭園の、池に面した深い木立の中に、二つの茶室が設けられてあった。
そのうちの一つは、秀吉が野趣にみちた庭園を観ながら、茶をたのしむためのものだが、別の一つには、人が住み暮していた。
その人の名を、

「山中内匠長俊」
と、いう。
山中長俊は、秀吉の〔御伽衆〕の一人だ。
御伽衆は「御咄衆」ともよばれている。
つねづね主人の側近くにいて、その話相手をつとめるわけゆえ、諸国の情勢にもくわしく、人生経験も豊富でなくてはならぬ。
いま、秀吉には約十人の御伽衆が仕えているけれども、山中長俊のみは、あまり人前へ出たことがない。
長俊は、甲賀の頭領・山中俊房の〔従弟〕にあたる。
山中長俊は、若いころに甲賀の地をはなれたらしい。
したがって、従兄の山中大和守俊房とは別に、独自の忍びの活動をおこなってきた。
少数ではあるが、配下の忍びたちもいて、むかしの山中長俊は自分がおもうところの大名や武将のために、はたらいてきたようだ。
その長俊を豊臣秀吉に引き合わせたのは、当時、秀吉に仕えていた竹中半兵衛であった。
竹中半兵衛は、美濃の国の守護で稲葉山（岐阜）城主の斎藤義龍の子・龍興の家来だったが、のちに、主人を見かぎって、牢人となった。
それを、豊臣秀吉が召し抱えたのである。
そのころ、織田信長に仕えていた秀吉は、竹中半兵衛の、すぐれた智能と適切な進言を活

用し、目ざましい手柄をたてたものである。
　半兵衛は秀吉にとって、
「なくてはならぬ宝物……」
　であったそうな。
　それだけに、半兵衛が病歿（びょうぼつ）したときの、秀吉の悲しみようは非常なものであったといわれる。
　その竹中半兵衛が、
「行末（ゆくすえ）、かならず、御役に立つ人（じん）でござる」
　と、山中内匠長俊を秀吉に引き合わせた。
　秀吉は、竹中半兵衛のいうことなら、何事も受けいれるほどに信頼をしていた。
　そこで、山中長俊を、自分の目と耳にし、秀吉なりの諜報網（ちょうほうもう）をつくりあげたといわれる。
　以後、山中長俊は秀吉の期待にこたえ、
「竹中半兵衛は、よき形見を残してくれた」
　と、秀吉の信頼は深まるばかりである。
　山中長俊が、絶えず秀吉の側をはなれぬのも当然であった。しかし、長俊の忍びのはたらきを知るものは少ない。
　ところで……。
　山中長俊は、甲賀の頭領であり、従兄でもある山中大和守俊房と、いまも密接な関係にあり、蔭（かげ）へまわっては、たがいに協力を惜しまぬ。

　いま、山中俊房のほうは、主に徳川家康のためにはたらいている。家康の前は織田信長に仕えていた。
　となれば、秀吉に仕える山中長俊との間に、摩擦は起らぬはずだ。
　一時、秀吉と家康の間が険悪となったときは、
「さて、困ったのう」
「いや、長いことではありますまい」
　この二人の従兄弟（いとこ）は、しばらくの間、会うこともなく、連絡を取り合うこともなかったが、いまや、家康は秀吉の傘下へ入り、忠誠を誓っていた。
　そして、山中長俊と俊房の関係も、また、旧に復した。
　ゆえに……。
　甲賀の山中大和守俊房も、従弟・山中長俊のためにというのではなく、豊臣秀吉のために、小田原攻めの戦略の一端を担っている。
　もっとも、これは忍びのはたらきゆえ表面にはあらわれぬが、秀吉から甲賀へあたえる報酬は相当なものといってよい。
　俊房は、秀吉のためにはたらいていることを、ことさら徳川家康に隠しているわけではないが、だからといって、別に了解を得ようともしていない。
　家康のためにも、また、山中俊房は別箇の忍びの活動をおこなっているのだ。

つまり、それほどに、甲賀の頭領としての山中大和守俊房には配下の忍びの者の人数も多く、組織もととのっているのだ。

たとえば、いま、聚楽第に忍び入って来た下中の清松と共に、鉢形城下で研師をしている長谷重左にしろ、このたびの豊臣・北条の間が不穏になってから、鉢形城下へ住みついたのではない。

もう、五年も前から住みつき、刀剣の研師になりきって暮しているのだ。

その五年間には、北条氏邦の家臣たちの刀剣もあつかうことになるし、家臣たちの口からも、知らず知らず情報が入ってくる。

長谷重左自身は、あくまでも研師の暮しをつづけてい、城内へ潜入したりすることはない。

そして、いざとなったとき、飯道弥平次、下中の清松などが鉢形城下へ送り込まれ、長谷重左の家を忍びの基地にして活動することになる。忍びの世界でいう〔忍び宿〕というものは、およそ、このようにして設けなくてはならぬ。

いざとなってからでは、この非常時に見知らぬ研師が住みついたということになってしまい、怪しまれかねない。

山中俊房は、このようにして、わが思うところへ忍び宿を設け、何年もかかって情報をあつめ、

（自分が、どの大名のためにはたらいたら、有利であろうか……）

を、決定する。

もともと、甲賀の豪族の中で、もっとも高い地位と配下をもっていた山中俊房ではあるが、これまでの俊房のうごきには、ほとんど、むだがないといってよい。

さて……。

下中の清松は、闇に溶け込みつつ、わけもなく〔北の丸〕へ潜入し、山中長俊が住む池畔の茶室へ近寄って行った。

清松も豊臣家のために、はたらいているのだから、何も敵地へ忍び込むようなまねをしなくともよいのだが、研師の徒弟姿の上へ例の墨流しを纏った風体で、番所の士へ名乗り出たりしたら、山中長俊の許へ行くまでに、長い時間がかかる。そしてまた、長俊まで怪しまれかねない。

甲賀の者は、そのような面倒を好まないのだ。

下中の清松は、池に面した戸を叩き、

「清松でござります」

低く、声をかけた。

戸が内側から開き、清松の姿を吸い込むと、また、音もなく閉められた。

茶室は、二間から成っている。

山中内匠長俊は、池にのぞむ部屋にいて、清松を迎え入れた。

長俊の前には、小田原城の絵図面がひろげられてある。

「重左殿からの書状にござります」

清松は、髪へ手指を入れてまさぐり、細く巻きしめた密書を取り出した。

この密書は、薄くて丈夫な小さな紙へ、細字でびっしりと書きしたためたものを、固く巻きしめ、その上から蠟を塗り、長さ四寸ほどの細い棒状にしたものだ。

使いの忍びは、これを髪の中へ隠し入れたり、着物の襟へ縫い込んだりして、携行するのである。

山中長俊は蠟を削り落し、密書をひろげ、二度三度と読み返した。

鉢形城下の研師・長谷重左からの密書の内容は、先ず、北条氏邦が山岸十兵衛の進言を容れ、このたびの戦陣では、すべての北条勢が城外に出て、

「果敢に戦う……」

ことを、小田原の北条父子に進言し、その主張に大勢がかたむきつつあることを知らせている。

そして、長谷重左は、およそ、つぎのようなことを書き添えてきた。

上田源五郎が、山岸十兵衛の女・正子と夫婦の盃をかわしましたることは、すでに、お聞きおよびの事と存じまする。

この一事につきまいては、取り立てて申しあぐることもございませぬが、このたび、高山の鐘撞き堂におりまする飯道弥平次より、容易ならぬことを聞きおよびまいた。

それは、上田源五郎が正子に心を移し、ひいては山岸十兵衛の聟になりきってしまい、

このたびの軍略についても、源五郎より十兵衛へ進言し、十兵衛がこれに同意し、北条氏邦へ言上したというのでござります。

もとより、真偽のほどにつきまいては、わが目にたしかめたわけではありませぬが、飯道弥平次は長年、私めの下につき、はたらいてまいりました者ゆえ、めったな事にては、このような知らせをいたすものではござりませぬ。弥平次は、おのが目にて、源五郎の変心を見きわめたものと存じまする。

ともかくも、いまは、関白殿下の小田原攻めも日に日にせまり、いささかの油断もならぬ期ゆえ、取りあえず、急ぎ、お知らせいたしまいた。

何分の、お指図をお待ち申しあげまする。

山中長俊は、密書を折りたたみ、腕を組み、沈思した。

小肥りの躰を、まるめるようにして坐っている山中長俊の頭は、すっかり禿げあがってい、そのしわがれた声から推してみても、六十をこえた老人におもわれるが、実は四十八歳なのである。

「清松……」

ややあって、腕組みを解いた長俊が、

「こたびは、甲賀の従兄上への密書はないのか？」

「はい。内匠様へのみにござります」

「ふうむ……」

前々からの取り決めによって、八王子城に潜む忍びたちは、山中長俊が指図をあたえ、鉢形城と小田原本城のそれは、甲賀の山中大和守俊房が指揮することになっていた。

「清松。これを読んでみよ」

と、山中長俊が重左からの密書を清松へわたした。

「かまいませぬので？」

「かまわぬ」

「では……」

一礼した清松が、これも、二度三度と密書を読み下した。

清松は、別に、おどろく様子もない。

おそらく、密書の内容については、わきまえていたのであろう。

「読んだか？」

「はい」

「何とおもうぞ？」

「飯道弥平次殿の申すことが、狂いを生じたことは、これまでに一度もございませぬ」

「さようか……」

「はい」

迷うことなく、下中の清松がうなずいて見せた。

内匠長俊は軽くうなずき、これも、重左の密書と同様の紙へ何か書きしたためたが、その途中で、机上の鈴を振って何やら合図をしたようである。

それから、また、密書を書きしたため、これを細く固く巻きしめ、蠟を溶かして塗り、

「これを、重左へわたすがよい」

「はい」

そのとき、次の間の襖の外で、人の気配が起った。

これまで、次の間に人がいた様子は、まったくなかったのだ。

「柏木市兵衛、まいりましてござる」

と、次の間で声がした。

「入るがよい」

「ごめん下され」

男がひとり、入って来た。

細長い顔には深い皺がきざまれているが、躰つきから看て、年齢は四十前後であろう。中肉中背の、よく均整がとれた体軀のもちぬしだ。

柏木市兵衛を見るのは、はじめての清松であったが、その名は何度も耳にしている。

むかしから山中長俊の下にあって、忍びのはたらきをつづけている市兵衛なのだ。

「市兵衛、これを見よ」

山中長俊が、また、重左からの密書を、こだわりもなく市兵衛へわたした。

柏木市兵衛が密書を読み返している間に、山中内匠長俊が下中の清松にうなずいて見せた。

これは、鉢形へもどってよいということだ。

「では、これにて……」

清松は、長俊と市兵衛に目礼をし、長谷重左へあてた密書を髪の中へ隠し、戸外へすべり出て行った。

見送った山中長俊が、戸を閉ざし、

「読んだか？」

「はい」

「何とおもうぞ？」

「さて……」

くびをかしげつつ、柏木市兵衛が、

「忍びの者も人でありますゆえ、こうしたこともあって不思議ではございませぬが……」

「甲賀の者は、そこまで情を移さぬと、忍びのはたらきも物にならぬと、われらも教えられてきた。さすれば、いま直ちに上田源五郎をうたがうのも、如何なものであろう」

「さよう……源五郎の父は小杉重六と申し、甲賀の者の中でも聞こえた手練者でございました」

「うむ。わしも二度ほど、顔を見たおぼえがある」

「源五郎は、その子でござります。それに、こたびは、夜張りの助七という、これもてだれが共にはたらいておりますことゆえ、まさかに間ちがいが起ろうとはおもいませぬが……」

山中長俊も柏木市兵衛も、このところ、鉢形への連絡が助七からお万喜に変ったことを知っていない。

もっとも、甲賀・山中忍びの配置は、頭領の大和守俊房にまかせてあることだし、長俊と市兵衛が、

「知らなくともよい……」

ことだといってよい。

「市兵衛。これより、甲賀の従兄上の許へ行ってもらいたい」

「心得まいた」

山中長俊は、また筆を把って、大和守へあてた長い密書をしたためつつ、

「関白殿下は、北条父子の小田原籠城をのぞんでおられる」

つぶやくように、いった。

「北条勢が外へ打って出たなら、これは面倒じゃ。まだまだ、戦さするちからは強い」

「いかさま……」

「しかも、箱根の天嶮がひかえておるゆえ……」

「はい」

「何としても……せめて小田原のみは、相手方に籠城させねばならぬ。これは、関白殿下よ

りの、きびしいお達しなのじゃ」

「うけたまわりまいた」

「委細は、これに書きしたためておいたが、そのほうからも従兄上へ、わしの意中をつぶさにつたえてもらいたい。事は急がねばならぬ。すぐさま甲賀へ発ってくれ」

間もなく市兵衛は聚楽第を出て、甲賀の里へ疾走した。

柏木市兵衛は、京都から近江の甲賀の里まで、約十二里を走りつづけ、夜が明けぬうちに、山中大和守の屋敷へ到着した。

京都から山科を経て琵琶湖の南岸を東へすすみ、草津の宿駅を過ぎると、間もなく野洲川のほとりに出る。

そこから野洲川に沿って南へ入るにつれ、両岸には山がせまり、やがて、甲賀の里だ。

野洲川は、三雲のあたりで、横田川と杣川の二流に分れるのだが、その横田川沿いの東海道を行けば、水口の城下となる。

山中大和守俊房の屋敷は、水口の手前の、柏木郷・宇田の村に在る。

山中俊房は、単なる甲賀の頭領ではない。

伊勢大神宮の領地である柏木郷の代官をつとめているだけに、その屋敷の構えも堂々たるものだ。

その屋敷は、若宮八幡宮の社の南にあり、背後は飯道山の峻嶮である。

甲賀の忍びたちの大半は、この飯道山へこもって、忍びの修行の第一歩を踏み出す。

上田源五郎が年少のころ、夜張りの助七に鍛えられたのも飯道山の山中においてであった。

柏木市兵衛は、足音もなく、山中屋敷へ近づいて行った。

宏大な山中屋敷の周囲は、深い空濠に囲まれていた。

いざともなれば、攻めかけて来る敵を防ぎ、戦うための備えが屋敷の内外に設けられてあるのは、この山中大和守の屋敷のみではない。

大小のちがいはあっても、甲賀の豪族の屋敷ならば、みな同様の備えがしてあるはずだ。

その屋敷構えを見ただけでも、長年にわたった戦乱の時代に、甲賀の豪族たちが、どのような役割を果してきたか、よくわかるであろう。

市兵衛は、表門前の空濠に架けわたしてある〔はね橋〕をわたった。

〔はね橋〕は、敵襲があるとき、これを引きあげてしまう。

〔はね橋〕をわたりきった市兵衛が何の合図もせぬのに、屋敷門の一角が口を開けた。

大きな門扉の一部が開いたのだ。

人ひとりが、ようやく潜りぬけられるほどの空間へ、柏木市兵衛の躰がするりとすべり込むと、その口は微かな軋みをたてて閉じられた。

朝の光りがただようまでには、まだ、かなりの時間を待たねばなるまい。

門内に、人影はない。

近づいて来る市兵衛を、何処かで、だれかが見ていて、門の口を開けたに相違なかった。

屋敷の内は、いくつもの区域に分けられ、その一つ一つが塀に囲まれている。

門内に入った柏木市兵衛を、出迎える者とてない。

市兵衛も、それを当然の事としているかのように、右側の内塀に沿って歩み出した。

市兵衛が入って来たのは表門なのだが、門の内へ入ったからといって、玄関構えが見えるわけでもない。

深い木立におおわれた通路を、市兵衛は右へ曲った。

その正面に、石造りの低い塀がある。道路は行き止まりになっていた。

だが、ためらわずに市兵衛は、その石塀の前へ立った。

と……。

急に、市兵衛の姿が石塀の中へ吸い込まれた。

石塀の一角に嵌(は)め込まれてある板戸が開き、市兵衛は向う側へ抜け出たのだ。

これも、どこかで、だれかが近づいて来る市兵衛を注視しており、板戸の仕掛けを外したにちがいない。

石塀の向うに、はじめて、山中屋敷の玄関構えを見ることができる。

小さな玄関構えである。尋常の民家と、すこしも変らぬ。

市兵衛は、玄関へ向わず、右へ逸(そ)れて、木立を突き抜けた。

そこに、また、土塀がある。

土塀の下側に隠されている〔押し口〕の楔(くさび)を足で押すと、土塀の一部が割れて、市兵衛を呑(の)み込んだ。

市兵衛が〔仕掛け〕を、わが手でうごかしたのは、このときがはじめてであった。

そこは、山中屋敷の奥庭で、ほとんど手入れがされぬままになってい、木立も深かった。

奥庭の一角に、銀杏(いちょう)の大樹がある。

その根元へ、市兵衛は屈(かが)み込んだ。

市兵衛の目の前に、母屋(おもや)の一部らしい白い壁が闇の中に浮いて見える。

市兵衛は押し黙ったまま、いつまでも、うごかぬ。

自分が入って来たことを見とどけた者が、この屋敷の主(あるじ)・山中大和守へ知らせる間を、市兵衛は待っているのだ。

ややあって、

「市兵衛か……」

声が、聞こえた。

その声は、白壁の内から発せられたものである。

「はい。内匠様よりの御書状を持ってまいりました」

「さようか……」

ものやわらかな声なのだ。

白壁の何処からか、その声が洩れてくる。

「入るがよい」

声と共に、白壁の一隅が、三尺四方ほどの口を開け、その向うに燈火のゆらめきが見えた。

「ごめん下されましょう」
柏木市兵衛が白壁の内部へ入ると、白い扉が音もなく閉じられた。
そこは幅一間の廊下であり、その向うの板敷きの間に、一人の老人が坐っている。
それが、山中大和守俊房であった。
山中大和守は、薪が燃えている大きな囲炉裏の前にいた。
柏木市兵衛が差し出した従弟・内匠長俊の密書を読み終えるまで、大和守俊房は眉毛一筋うごかさず、
「たしかに……」
うなずいて見せた。
頭巾を乗せている所為か、こうしているときの山中俊房は、六十をこえた老齢におもえるが、おそらく五十前後なのではあるまいか。
しかし、外を歩むときの姿は、三十の壮年にも見えるそうな。
「大和守様、これは、いかが、はからいましょうや？」
「上田源五郎のことかの？」
「それもござりますが、間近にせまった小田原の軍議のことでござります」
「わしの耳へは、北条方は籠城の覚悟と聞こえている」
「それが……」
「うむ、この長谷重左からの密書によると、いささかも油断はならぬな」

「はい」
「内匠殿は、われらのほうで取り仕切ってもよいと申しているが……これは、やはり、わしが引き受けよう」
「さようでござりますか……」
「うむ。それがよい。さて、上田源五郎のことじゃが……これは、わしの手の者ゆえ、まかせておいてもらいたい。かならず、悪しゅうは計らわぬ」
「はい」
「わしが申したことを、そのまま、内匠殿へつたえるがよい」
「承知つかまつりまいた」
柏木市兵衛は、この甲賀の郷名である〔柏木〕を姓にしているだけに、上田源五郎や、その亡父・小杉重六などよりも、格が上なのである。
市兵衛の父も、山中長俊に仕えていたが、本家の山中大和守からの信頼も深かったそうな。
もっとも、市兵衛の父が生きていたころ、本家の当主は、いまの山中大和守ではない。先代の大和守俊行であった。大和守俊行は、五年ほど前に、九十二歳の高齢をもって病歿したが、甲賀の里人は、ほとんど、それを知らぬ。
忍びの者と、その頭領の家では、冠婚葬祭を、人の目にふれるようにはおこなわぬ。
ために、甲賀の人びとは、まだ、先代の大和守俊行が、
「生きておわす」

と、おもっているにちがいない。

たまさかに、顔を頭巾に隠し、彼方の道を歩む現・大和守俊房の躰つきは、先代そのままに見えたのである。

「市兵衛。これよりは、いよいよ、甲賀と内匠殿の間の連絡を密にせねばならぬ。おぬしも忙しゅうなろうが、たのむぞよ」

「いかようにも、お使い下され」

「関白殿下が小田原へ御発向の折は、内匠殿も御供するのじゃな？」

「はい」

「よし、わかった。内匠殿へ、よろしゅうな……」

柏木市兵衛が山中屋敷を去ったころ、空が白みはじめた。

山中大和守は囲炉裏の端に坐ったまま、瞑目をしていたが、しばらくすると袂から鈴を出して振った。

これは、京都の聚楽第内の茶室で山中長俊が市兵衛をよんだときに鳴らした鈴と同様のものだ。

二つの大きな鈴を組紐に結びつけてある。

大和守が鈴を袂におさめたとき、幅がひろい廊下の一隅へ滲み出すように、人影が一つ、あらわれた。

「およびでござりますか？」

人影が、低い声をかけると、

「おお。夕暮れに小田原から、助七がまいっている。まだ、屋敷内にいよう。此処へと申せ」

「はい」

人影が、すっと廊下の闇に溶けた。

この大和守俊房の居室へは、音も気配もなく、人が出入りするのだ。

大和守は立ちあがって、板敷きの間の片隅にある机の前へ坐り、密書をしたためた。

これも、従弟の内匠長俊が密書をしたためるのと同様の紙を用い、これを細く巻き固め、蠟を塗るのである。

それが終ったとき、廊下から夜張りの助七の声がした。

「およびでござりますか？」

「おお。まだ、いてくれたか」

「明朝に発とうと存じまいて」

「ちょうど、よかった。これへまいれ」

「は……」

しずかに、助七が炉端の向うの廊下へあらわれた。

「このところ、助七は源五郎に会うてはおらぬな」

「はい」

「これを見よ。鉢形の忍び宿から届いた」
大和守が長谷重左からの密書を、夜張りの助七へわたした。
「よろしいのでございますか?」
「かまわぬ。見よ」
助七が密書を丹念に読み終えた。読み返しはせぬ。
巻きおさめた密書を大和守俊房の前へ置き、助七は廊下まで下る。
「何と、おもうな?」
「解せませぬ」
「さようか……」
「相手方へ忍び入ったる甲賀の者は、その相手方へ溶け込まねばなりませぬ。高山の鐘撞き堂にいる飯道弥平次殿には、鉢形城内の山岸屋敷に暮す源五郎どのの生きざまがわかろうはずもないと存じまする」
「生きざま、か……」
「はい。甲賀・山中忍びとしての生きざまでござります。それは頭領様が、よくよく御承知のはずでござります」
柏木市兵衛などより、ずっと身分が低い夜張りの助七だが、山中大和守の信頼は厚い。
夜張りの助七にとって、わが手に育てたも同様の上田源五郎であった。
その源五郎が、

「寝返った……」
と、いわぬばかりの、飯道弥平次の報告ではないか。
報告というより、助七には〔密告〕の感じがする。
しかし、飯道弥平次と長年にわたってはたらいている長谷重左や下中の清松にいわせるなら、
「弥平次の申すことに、間ちがいはない」
のである。
これは、どうしようもないことだ。
近年のように甲賀の……ことに山中大和守がおこなっている忍びの活動が、
「むかしとは、くらべものにならぬ……」
ほどの広範にわたることになれば、それぞれの分担の責任者を、
「信ずるよりほかになし」
と、いうことになる。
「なれど……」
夜張りの助七が冷静に、
「打ち捨ててもおけませぬ」
「このような知らせがあったからにはのう」
「はい。私めをまた、鉢形へ……」

「行ってくれるか」
「ぜひとも」
「では、たのむ。様子をたしかめた上、ともかくも甲賀へもどって来てもらいたい」
「承知いたしましてござります。では、これにて……」
大和守俊房に一礼し、夜張りの助七は廊下から消えた。
それから大和守は、机の下の一角に手をのばした。
そこに、小さな木の蓋がある。
その蓋を外すと、細長くて深い穴が見えた。
穴の中へ、大和守は机の上に置いてあった小石を落し込んだ。
穴の下の方で、微かな水の音がした。
蓋を閉めた大和守が炉端へもどり、先刻、書きしたためて袂に入れておいた密書を取り出した。廊下へ、人影が浮いて出た。
この人影は、助七が出入りをしたのと反対の方向からあらわれた。穴の中へ落し込んだ石の水音が呼び出しの合図であったらしい。
「およびでござりますか」
「捨三。これへまいれ」
「はい」
奥庭は、朝の光りに明るみを増してきつつあったが、この廊下や居室には、まだ、夜が残

っている。
戸や窓を開けぬかぎり、外光は一切、遮断されるように造られていた。
「この密書を、小田原の法城院へ届けよ」
「はい」
「口上はいらぬ。ただし、心山和尚よりの返事をもらってまいれ」
「心得まいた」
「急げ。よいな」
「はっ」

謀略

翌日の夜ふけになって……。
山中大和守俊房の密書を髪の中におさめた甲賀忍びの捨三が、相州・小田原の城下へ到着していた。
近江の甲賀から、約九十余里を、まる二日で走破したことになる。常人ならば、いかに急いでも十日はかかる行程であった。
小田原城下は、幅五メートル、高さ十メートルの土手によって囲まれ、その中に城があり、

城下町がある。
　土手の延長は五里におよんだ。
　その土手の諸方が土塁になり、濠をめぐらし、いまは通行の人びとの監視もきびしくなっているが、捨三は、わけもなく城下・城外に設けられた木戸を抜けて行く。
　例の墨流しを身にまとい、音も気配もなく、通り抜けてしまう。
　捨三は、数ある甲賀・山中忍びの中でも、屈指の脚力をほこっている。
　なればこそ山中大和守は、手許から捨三をはなさぬのであろう。
　小田原城の外濠の南面にある松林の中に、法城院があった。
　すでにのべておいたが、この寺の和尚・心山は、法城院へ来てから二十年にもなり、歌も詠むし、学識も深く、先々代の城主・北条氏康の気に入られ、城内へも自由に出入りすることをゆるされた。
〔老公〕とよばれている隠居の北条氏政も、現・城主の氏直も、心山和尚に深い信頼を寄せており、心山は三代にわたって北条本家の愛護を受けていることになる。
　法城院は、この二十年の間に三度も改築された。
　それを見ても、北条本家の心山和尚へ対する信頼がわかろう。
　夜がふけて、法城院は冷え冷えとした闇に包まれている。
　月もない曇った夜空が赤く染まっているのは、いよいよ、戦時体制に入った城の内外に、篝火が増えたからである。

　寺の奥庭に面した寝所で、心山和尚は、こころよげな寝息をたてている。
　眉毛が白く太く、耳朶が異様に大きい。七十余歳の寝顔は童子のように愛らしかった。
「もし……もし……」
　枕もとで、ひそやかに呼びかける声を聞いて、
「お……」
　目を覚ました心山が、
「捨三ではないか……」
「はい」
　案内も請わず、捨三は法城院の塀を乗り越え、この寝所の中へ潜入して来た。
　心山は、それにおどろく様子もなく、咎めもせぬ。
「これを……」
　髪の中から取り出した密書の蠟を削り除り、捨三が差し出した。
「大和守殿が、急ぎの用らしい」
「さようでござります」
　うなずいた心山が、密書を読みはじめた。
　心山和尚と甲賀の頭領・山中大和守俊房との結びつきは、いつごろに生まれたものか、定かではない。
　先代の大和守俊行のころから、心山は山中家と関わり合いをもつようになっていたのやも

知れぬ。

心山は、甲賀の人ではない。

若いころは、近江の浅井家に仕えていたともいう。

もっとも、浅井家が織田信長に討ち滅ぼされたのは十七年ほど前のことだから、そのときすでに、心山は小田原の法城院の住職になってい、甲賀・山中家のための諜報活動をはじめていた。

おそらく、甲賀と心山との関係は三十年以上も前に遡るのではあるまいか……。

心山和尚は、山中大和守からの書状を三度、読み返したのちに、

「これ、捨三」

「はい」

「お万喜は、いま、何処じゃな?」

「たぶん、小田原の御城下にいるかと存じまする」

「すぐに、呼べるかの?」

「御城下におりますなれば、直ちに……」

「では、此処へ連れてまいるがよい。その間に、わしは大和守殿への返書をしたためておこうかの」

「心得まいた」

捨三は、奥庭の闇へ消えた。

心山は、眠り燈台の火を明るくし、机に向い、書状をしたためはじめた。

これは甲賀の忍びが書く、例の密書ではない。

尋常の書状なのである。

書状は、二通。

一は、山中大和守へあてたもの。

一は、徳川家康の老臣・本多佐渡守正信へあてたものだ。

本多正信は一介の鷹匠から身を起し、徳川家康にとって、

「なくてはならぬ……」

老臣に立身をした人物で、狩りに使う鷹をあやつり、家康の供をしていたものが、これほどになったというのは、その資性・才能が、

「なみなみならぬもの……」

であったに相違ない。

家康は、

「佐渡守は、わが家来ではない。わが友である」

とまで、いいきっている。

その本多佐渡守へあてた書状をしたため終えたとき、奥庭に面した廊下へ人の気配が起った。

捨三が、お万喜をともない、引き返して来たのだ。

この小田原城下にも、甲賀の忍び宿が設けられてい、そこに、お万喜がいるのであろう。

「和尚さま。お呼びでございますか」

廊下から声をかけた今夜のお万喜は、つつましげな町屋の女房になりきって、神妙そのものであった。

「ま、入るがよい」

お万喜と捨三が前後して法城院を出て行ったのは、それから間もなくのことだ。

捨三が先に出て行き、その後で、お万喜は心山和尚と何やら打ち合わせをすませたのち、法城院を去った。

捨三は、甲賀の山中屋敷へもどり、お万喜は駿府へ向った。

駿府では、いま、徳川家康が小田原攻めの戦備を急ぎつつある。

豊臣秀吉は、小田原攻撃の先鋒を家康に命じた。

家康にとって、このたびの敵将・北条氏直は、わが〔むすめ聟〕なのだ。それだけに、

(懈怠は、ゆるされぬ……)

のであって、家康は三万の大軍を動員し、攻撃に当ることにした。

「さて、これでよし」

二人を送り出した心山和尚はつぶやいて、また臥床へ這い込み、安らかな寝息をたてはじめた。

あとは、家康の老臣・本多佐渡守正信からの連絡を待つのみだ。

その連絡しだいによって、心山は腰をあげねばなるまい。

二十年もの間、北条家の愛護を受けてきた心山は、以前、徳川家康にも一度、目通りをしているし、去年の夏ごろには、一度、駿府へおもむき、事態の急変にそなえ、本多正信とも綿密な打ち合わせを遂げていた。

そのときには、山中大和守俊房も甲賀から駿府へあらわれ、密議に加わった。

そこで、はじめて、小田原城下の法城院が、甲賀の〔基地〕であることを本多正信は知ったのである。

さて……。

甲賀を発した夜張りの助七が、武州・鉢形城内へ忍び入ったのは、翌日の夜ふけであった。

「ほほう……さすがに、な……」

荒川の対岸の木立に身を潜めた助七は、城郭の諸方に燃え立つ篝火が増えたのを見て、ひとりうなずいた。

ここまで来る間にも、木戸や番所が増え、城下の警備が格段にきびしくなっている。

助七は、あるときは大胆に、あるときは慎重をきわめつつ、その警備網をくぐりぬけて来た。

たとえば……。

番兵が詰めている木戸口へかかって、その警備に隙を見出せぬときなどは、助七のほうから隙をつくってやるのだ。

甲賀には〔散らし〕と呼ばれる忍び道具がある。

それは、小さな竹筒のようなもので、筒の上部の紐を引きぬくと、圧搾されていた筒の中の空気が特殊の仕掛けによって外部へ走り出し、独特の音を発する。

紐を引きぬきざま、散らしを投げると、番兵たちが、その奇妙な、低い音に気づいて、

「や……?」

視線を転じた隙に、助七は一条の矢のごとく、しかも、足音も気配も起さずに木戸を走りぬけてしまう。

夜張りの助七は鉢形城・本丸の西面から荒川をわたり、鉤縄を崖に投げ、山猿のような身軽さで城の外壁へ取りついた。

これは以前に、上田源五郎の許へ忍んで来たときの経路があって、そのころは、まだ警備がきびしくなかったのを倖いに、鉤縄を投げる箇所にも、助七は仕掛けをほどこしておいた。

それから、二箇の〔散らし〕を使っただけで、助七は三の丸の山岸屋敷内へ潜入することを得た。

上田源五郎は、正子と共に寝所に眠っていた。

外は、氷のような夜気が張りつめているけれども、寄り添った若い男女の体温に蒸された夜着の中は、汗ばむほどであった。

正子は、激しい愛撫の後の疲れで、ぐっすりと寝入っている。

はだけた胸元から乳房の上部のふくらみがのぞいてい、ゆったりと呼吸していた。

ふと……。

源五郎は眠りから覚めた。

そして、眠り燈台の淡い灯影を避け、寝所の闇の一隅から、まるで空気がゆれうごくかのように近寄って来た夜張りの助七に気づいた。

助七は、寝ている源五郎の右側へぴたりと身を横たえ、

「外へ……」

と、声にもならぬほどの声で、ささやいた。

「いや、塩部屋がよい」

「心得た」

助七の姿が、たちまちに消えた。

源五郎は、正子の寝息をうかがった。

その熟睡の深さに、あらためて催眠の薬草が入った香を、

（焚くまでもない……）

と看て、源五郎はしずかに臥床から離れた。

かつて、源五郎と正子が密会をしていた塩部屋の中で、助七は待っていた。

「小父ご。よう来てくれた」

一足おくれて塩部屋へ入った源五郎が、なつかしげにいった。

「お万喜どのに会われたか?」

「うむ……」
「お万喜どのに会うたのは、久しぶりでござったろう」
「うむ……」
「いかがでござる？」
「何が、だ？」
「お万喜どのと、忍びの呼吸が、うまく合うとよいが……」
「案ずるな、小父ご。ときに、今夜は何ぞ急ぎの事あってか？」
「さよう」
「何のことだ？」
助七は、沈黙した。
「小父ご。どうしたのだ？」
「小田原での軍議が、間もなく、はじまるとか……」
「そうだ。山岸十兵衛も、北条氏邦の供をして小田原へまいることになろう。小父ごは、いま、小田原の忍び宿にいるのか？」
「小田原と甲賀との間を、行ったり来たりして、な……」
と、夜張りの助七はいった。
「甲賀の頭領様に、お変りはないか？」
「お達者じゃ」

「小父ご。ときに、急ぎの用とは？」
「それよりも、源五どのは、山岸十兵衛のむすめと夫婦の盃をかわしたそうでござるな」
「む……」
「わしの耳へは、いささかも入っておらなんだが……」
「そうだった、な……」
「お万喜どのから聞き、はじめて知ったのでござる」
「さようさ。あのとき、お万喜どのではなく、小父ごが忍んで来てくれたなら、小父ごの耳へ、このおれの口からつたえたはずだ」
「なるほど……」
「そのことを怒っているのか？」
「何を申されることやら……」
助七は、声もなく笑い、
「怒っているのではござらぬ。案じているのでござる」
「何を……何をだ？」
「わかりませぬかな、源五どの……」
「おれが、正子に、こころを奪われたとでもいうのか、小父ごは……」
「いや、わしではない」
「では、だれだ？」

「長谷重左殿から、頭領様へ知らせがござってな……」
「長谷、重左殿から……」
いいさして上田源五郎が、はっと気づいたようだ。
「では重左殿が研師として、この鉢形城下に住みついているのだな」
「う……」
「そうだ。それにちがいない」
源五郎も、長谷重左が忍びの世界で、どのような役目をつとめるかをよくわきまえている。
「ふうむ。重左殿の忍び宿が城下に在ったのか……」
そうなれば、長谷重左と飯道弥平次との密接な関係も、おもい出されてくる。
「そうか……」
源五郎は唇をかみしめた。
「あの、飯道弥平次め。あらぬことを、長谷重左殿に告げ口をしたのだな」
「いや、待ちなされ、源五どの」
「いや、そうだ。それにちがいない」
「早まってはならぬ、源五どの。それもこれも早いうちに、このわしの耳へつたえておいてくれたなら、こうしたことにはならなかったのじゃ。いかがでござる」
夜張りの助七のきびしい声に、源五郎は沈黙した。
たしかに源五郎は、正子との関係を、

「これも、忍びのはたらきのためだ」
と、率直に助七へ打ち明けるのが、ためらわれた。これは事実であった。
何故、打ち明けられなかったのか……。
そこに、助七は疑念を抱いているのではなかろうか。
他の忍びどうしではない。親子同然の間柄といってよい助七と源五郎なのである。
それは、やはり、正子に対する源五郎の心情が、
「忍びの手段として、女を利用している……」
ことからいささか逸脱していたからではあるまいか。
いまは、源五郎も、その自分の心情の推移が、
(わかるような……)
おもいがしている。
「小父ご……」
辛うじて、源五郎がいった。
「手をさしのべてきたのは、女のほうからなのだ」
夜張りの助七は、うなずきもせず、じろりと源五郎を見やった。
源五郎は、後の言葉がつづかず、目を逸らせた。
(小父ごは、おれの胸の底の底まで、見透してしまったにちがいない)
このことである。

いまさら、助七に何をいい出そうとも、それは言訳にすぎない。
忍びの世界には、常人が用いる言訳などというものは、不用なのだ。
双方の鋭敏な感能によって、すべてを看て取り、すべてを解決するのである。
長い沈黙の後に、夜張りの助七から口を切った。
「のう、源五どの。忍びの者とて人の子でござる。女に、こころを移したのを咎めているのではない。こころを移そうが、移すまいが、行きつくところは一つでござる。よいかな、源五どの……」
助七の手が、源五郎の手をにぎりしめてきた。
痩せていて小柄な助七にしては、意外に湿り気のある、肉の厚い掌であった。
「行きつくところは、一つ……」
「さようでござる、源五どの。甲賀・山中の忍びの者であることを忘れなさるな。この一つを忘れねば、源五どのが何をしようと、頭領様はお見とおしでござるわい」
「おれが忍びの役目を忘れようか」
「ふむ、ふむ。助七には、ようわかってござる。なれど……」
「なれど、とは何だ、小父ご。おれは、それを聞きたい」
「申しあげよう」
手塩にかけて育てあげ、鍛えあげた源五郎だけに、夜張りの助七は、よほどのことが起っても、

(源五どのが、前後を忘れるようなことはない)
と、信じている。
亡父・小杉重六に似て、源五郎の忍びのはたらきには、
(何やら、余裕がある……)
そこが、助七には好ましい。
遠いむかしの甲賀忍びのはたらきぶりが、源五郎に感じられるのだ。
「決して、逆上してはなりませぬぞ」
「せぬとも」
「では……」
と、助七が、長谷重左から山中長俊へあてた密書の内容を語りはじめた。
「……源五郎は、山岸十兵衛の聟になりきってしまい、このたびの軍略についても、源五郎より十兵衛へ進言し、これを十兵衛より北条氏邦へ言上したのでござる」
と、飯道弥平次は、長谷重左に告げたらしい。
すべてを聞き終えたとき、上田源五郎には、いささかも興奮の色が見えなかった。
胸の内は知らぬ。
おそらく、弥平次に対し、激怒しているにちがいないが、それが挙動や顔色にあらわれぬのは、
(さすがじゃ……)

夜張りの助七は、やはり、おもいきって、すべてを打ち明けてよかったとおもった。

「まさかに小父ごは、その長谷重左殿の密書に書かれていることを……」

「申すまでもない。なれど、飯道弥平次に、そのような疑いをもたれたことを、源五どのも考えてみなくてはならぬ」

「む。わかった」

源五郎は、素直にうなずき、

「山岸のむすめとのことは、こちらから仕掛けたのではない。なれど、おれも嫌うていたのではなかった」

「なるほど」

「まさかに、夫婦となるつもりはなかったのだが……」

いいさして、源五郎が苦笑を浮かべ、

「孕んでしまったので、な……」

「ほう……」

「それで、正子からせまられた。いたしかたもなかったのだ」

「山岸十兵衛が、ようも許しまいたな」

「おれを、深く頼んでいるらしい」

「なるほど」

夜張りの助七は二度三度とうなずき、

「これで、よう、わかり申した」

「わかってくれたか、小父ご」

「それでこそ、真の甲賀忍びでござる。なればこそ山岸十兵衛ともあろう者が、源五どのに心をゆるしたのでござろうよ」

助七にそういわれて、源五郎は背筋のあたりが、むず痒くなってきた。

「やはり、ここまでまいった甲斐がござった」

「これより、甲賀へもどるのか?」

「申すまでもない。このむねを頭領様へ申しあげねばならぬ」

「よしなに申しあげてくれ、小父ご」

「心得た」

「今度の小田原での軍議へ、山岸十兵衛が北条氏邦の供をして行くことは決まったが、おれは、この屋敷に残ることになった。十兵衛は、留守中のことが気にかかるらしいのだ」

「さほどに、源五どのはたのみにされているのか……」

「そうらしい」

今度は、自分も十兵衛の供をしたいと申し出ていたのだが、はじめは「よかろう」と、承知してくれた山岸十兵衛が、この日の午後、源五郎をよび、

「やはり、鉢形に残ってもらいたい」

と、いったのである。

しばらくして、夜張りの助七は塩部屋から消えた。

籠城策を捨て、積極的に豊臣秀吉を迎え撃つという作戦は、

「何も、おれが言い出したことではない。山岸十兵衛が北条氏邦へ目通りをして、進言をしたのだ」

と、源五郎は助七にいっておいた。

それにしても、

（飯道弥平次とは、面妖なやつだ。味方の忍びといえども、気はゆるせぬ）

呼吸が合わぬ忍びの者の場合は、どうしても、こうしたことが起りがちになる。

また、飯道弥平次にしても、それなりの確信があってのことなのであろう。

ただし、それは実証的なものではない。

どこまでも、推測にすぎない。

しかし、その自分の推測に、弥平次は自信をもっているのであろうか……。

一度も源五郎の目にふれたことはないが、あるいは弥平次が高山の鐘撞き堂をぬけ出し、鉢形城内へ潜入し、独自に探りを入れているのやも知れなかった。

寝所へもどった上田源五郎は、寝入っている正子の臥床へ、しずかに身をすべりこませた。

「むうん……」

鼻声をあげた正子が、夢現に双腕を差しのべ、源五郎の頸すじを巻きしめてきた。

「よし……よし……」

抱き寄せ、ゆっくりと躰を摩ってやると、正子が薄目をあけて源五郎へ笑いかけた。

「どうした？」

こたえはない。

またしても正子は、眠りに落ちていった。

安らかな、まるで童女のような寝顔を見ていると、

（この女の腹に、おれの子が入っているのか……）

ふしぎにおもえてならぬ。

闇の中でも、鍛練された源五郎の眼力は、正子の寝顔をつぶさに見ることができた。

夜張りの助七は、塩部屋で別れるときに、

「いずれにせよ、北条方が勝てる見込みはない戦さゆえ、長くはかからぬことでござる。それゆえ、何事にも怠りなく……」

念を入れてくれ、

「これよりは、お万喜どのに、足繁く鉢形へ忍んでもらうよう、頭領様へ申しあげてみよう」

と、いった。

「いや、大丈夫だ。飯道弥平次のことは、おれもよくわきまえている。安心をしてくれ」

正子と臥床を共にしているところへ、お万喜に忍んで来られては、たまったものではない。

（や……？）

ふと、源五郎は、床下で微かな微かな気配がしたのを感じとった。

その気配は、一瞬のうちに消えたが、

(飯道弥平次が、この寝所の床下へ忍び込み、聞耳を立てていた……)

と、源五郎は直感した。

お万喜とはおもわれない。

とすれば、先刻の塩部屋で、

(小父ごと語り合っていたことも、弥平次は知っていたのか……?)

このことであった。

もっとも、盗み聞かれたとて、困る内容ではなかった。

むしろ、弥平次の耳へ聞かせてやりたいほどなのである。

闇の中で、源五郎は舌打ちをした。

その瞬間に、突然、源五郎の脳裡へ閃いたものがある。

それは、想念ともいえず、声にも言葉にもならぬ……強いていえば、一つの感覚のようなものにすぎなかったが、

(そうだ!)

胸の底から、源五郎はちからがわいてくるのをおぼえた。

禅僧などが、長い月日を深山の中で静座し、何かの折に、突然、大悟するという。

このときの源五郎が、それに似ていないとはいえまい。

「悟りを得た……」

というには大形にすぎるが、ともかくも、

(これからのおれは、こうすればよいのだ!)

それが感覚として、源五郎の五体をつらぬいたのであった。

源五郎は、抱き寝をしている正子の鼻のあたまへ唇をつけ、軽く吸ってやった。

正子は、目ざめない。

愛する男の胸に抱かれていることだけで、女は何も彼も忘れることができるのであろうか。

(何という、安らかな寝顔なのだ……)

あらためて源五郎は、正子を愛しくおもった。

いまは、もう、甲賀の頭領・山中大和守も夜張りの助七も、また、飯道弥平次も長谷重左も、お万喜のことも上田源五郎の心をしめてはいない。

籠の中に閉じ込められていた一羽の野鳥が解き放たれ、大空へ舞いあがったかのようなおもいに、源五郎は恍惚となっている。

また、床下で気配が起りはじめた。

あきらかに、これは飯道弥平次であった。おそらく、今夜がはじめてのことではあるまい。

何度か、弥平次は鐘撞き堂をぬけ出し、鉢形城内や山岸屋敷へ潜入していたにちがいない。

床下の気配など、気にもとめずに源五郎が、正子の唇を激しく吸ったので、

「あ……」

さすがに目ざめた正子が、
「源五どの。どうなされた？」
「どうもせぬ」
源五郎は、正子の乳房へ顔を埋めつつ、
「こうするのだ……」
正子が、切なげに喘ぎはじめた。
天正十八年の年が明けると、相州・小田原の城下には、日に日に緊張がみなぎり、夜を日についでの防備工事や、諸方から集まってくる部隊の陣所構築がはじまった。
それはまた、一種、異様な活況をもたらしたともいえる。
城下の町民たちの商売は多忙となり、遊女町などの繁昌ぶりは、すさまじいばかりとなった。
こうして見ると、さすがに、関東の盟主を自負してきた北条氏の城郭だけに、周囲五里にわたる築地には、望楼や矢倉が、びっしりと建ちならんでいる。
その築地内には、城もあり、侍屋敷もあり、町屋もあり、町人も住んでいる。
「御老公」とよばれる北条氏政は、
「いまより、気が塞いでは、戦さに勝てようはずもない」
と、いい、城郭内の遊女町や商家の繁昌ぶりにも、
「何よりのことじゃ」

と、余裕を見せている。
「茶をたのしみ、乱舞もよい。酒宴も咎めぬ」
というわけだ。
「御由緒方」とよばれる北条家の親族や老臣たちも、つぎつぎに小田原城へ参集しつつあった。
陣所の持口には、それぞれの部将の旗や馬印が立ちならび、町屋の人びとも、
「この御威勢のほどを見るがよい」
「関白の軍勢とて、このありさまを見たら、城攻めする気も失せてしまうにちがいない」
「先ず、大丈夫じゃ」
などと語り合い、その顔色も、まことに明るい。
北条氏の老臣の一人で、箱根の宮城野の支城を守っている松田尾張守憲秀も、一月十五日になって、宮城野の城の備えをかため終え、小田原へあらわれた。
松田憲秀は、相模の大庭氏の一族だが、老公・北条氏政の信頼が、まことに厚い。
尾張守憲秀の屋敷は、小田原城・大手門内に在る。
憲秀が帰邸した十五日の夕暮れに、
「茶を差しあげたいと存ずる。おこし下され」
と、法城院の心山和尚からの招きが松田憲秀へとどけられた。
北条父子の愛顧を受けている心山和尚は、当然ながら、松田憲秀とも親交が深い。

いや、北条家の家臣たちの中で、心山を悪しくいいたてるものは、
「ほとんどない」
と、いってよい。
「かたじけない。ただちにまいるとおつたえあれ」
松田憲秀は使僧(しそう)にこたえ、身仕度にとりかかった。
心山和尚は、居間の隣りに設けられた茶室で、松田憲秀を待ち受けていた。
尾張守憲秀は、心山の点前(てまえ)でもてなしを受けてから、
「今日の昼すぎに、宮城野からもどってまいりまいた」
「さようでおざるか。このたびの大変には、さぞ、御心労の事と、お察し申す」
心山の声音(こわね)には、しみじみとした共感がこもっている。
いよいよ、開戦と決まって以来、憂悶(ゆうもん)のおもいに閉ざされていた松田憲秀だけに、心山のなぐさめの言葉が、肚(はら)の底まで染み通ってくるかのようであった。
「われらも、お胸の内を、お察し申すだけにて、いかがしたらよいものやら……つくづく、途方に暮れるばかりにおざる」
ささやくようにいう心山和尚の声が、微かにふるえているのに、松田憲秀は気づいた。
(かほどまでに、心痛をなされていたのか……)
と、尾張守憲秀は感じ入った。
すでに、五十をこえた憲秀だが、連歌や茶道のたしなみも深く、どちらかというと戦場の

勇将ではない。それだけに、豊臣秀吉と主家(しゅか)の間が険悪となるにつれ、何としても戦争だけは避けたいと、苦慮しつづけてきた。
だが、豊臣秀吉の擡頭(たいとう)ぶりは、あまりにも速かった。
秀吉が、主人・織田信長を害した明智光秀を討ったのは、わずか八年前のことであった。
徳川家康が北条家と同盟をむすび、秀吉と会見し、その傘下(さんか)へ入ったのが、四年前である。
九州へ出陣した秀吉が、これを制圧したのは、三年前にすぎない。
すぐれた情報網をもたぬ北条父子にしてみれば、豊臣秀吉の威勢というものを、
(まことのことなのか……まことに秀吉は、天下(てんが)を治める器量があるのか……?)
実感として、のみこめていない。
北条父子としては、まだまだ、秀吉が天下を我物にしたとはおもえなかった。
「関東には、われらがいる」
そして、東北の諸大名も、完全に秀吉へ屈服したわけではない。
「さて、これより、いかが相なるのでおざろうか?」
心山の曇った声が、松田憲秀へ問いかけてきた。
「さて……」
「近きうちに、御城中にて戦さの評定(ひょうじょう)がおこなわれるそうでおざるな」
「さよう」
うなずいた松田憲秀が、

「かくなっては、もはや……」
「やはり……?」
「関白を相手に、戦うよりほかに道はござるまい」
松田憲秀も、いまは決意をかためたようであった。
尾張守憲秀は、はじめ、老公と同様に籠城戦を主張していた。これは憲秀の性格として当然であったろう。
ところが、この正月四日の、小田原城内の軍議に列したとき、憲秀のこころに変化がみられた。
正月四日の軍議は、鉢形城主・北条氏邦の急な要請によって開かれたものであって、来る十七日からの本格的な軍議にそなえ、北条氏邦の積極作戦の根回しがおこなわれたことになる。
その折、松田憲秀は、箱根・宮城野の支城にいて、
「鉢形の殿の申されることは、およそ、わかっている」
あまり気乗りがせず、小田原へ下るつもりはなかったのだが、老公・北条氏政が、
「ぜひにも登城いたすように」
と命じてきたので、やむなく列席したのである。
ところが、北条氏邦の熱のこもった進言を耳にしているうちに、
(なるほど……)

こころが、うごいてきはじめた。
北条氏邦は、無謀な積極作戦を唱えているのではない。そのことが、よくわかったからだ。
籠城戦となれば、
「むざむざ関白の、おもう壺へ嵌(は)まり込むことになる」
と、北条氏邦はいった。
いずれにせよ、籠城ともなれば、豊臣秀吉の大軍に包囲されてしまうのだから、敵が攻めかけて来なければ、当然、食糧も不足し、士気もおとろえることになる。
食糧は、すでに一年余をまかなうことができるほどに備蓄してあるけれども、この間に豊臣軍が、北条氏に従う関東の支城・属城をつぎつぎに攻め落してしまったら、
「どうなさる?」
と、北条氏邦はいう。
外部の味方を失い、孤立した本城が一つだけ残っても、どうしようもない。
籠城というものは、外部からの支援あってこそ、効果をあらわすものなのだ。
老公は、小田原が籠城して保(も)ちこたえていれば、東北諸国の諸大名も、
「だまってはおるまい」
などと、考えている。
たしかに東北地方は、まだ、豊臣秀吉に屈服しきっていない。
雪に閉ざされた冬が長く、嶮(けわ)しい山岳地帯が立ちはだかる宏大な地域へ、中央から、はる

ばると大軍をすすめ、これを武力によって征服するのは、
「容易なことでない……」
のである。
なればこそ豊臣秀吉も、これまで、東北の国々へ兵をすすめなかった。
そして、東北の諸大名が、
「もはや仕方もなし」
戦わずして、自分の威風に屈服するのを待とうとしている。
その、わが威風を天下へ見せつけるために、豊臣秀吉は何としても、北条父子の小田原籠城を望んでいた。
ゆえに、北条氏邦は、秀吉のおもう壺だといったのだ。
積極的に迎え撃たれ、多くの犠牲をはらい、苦戦の末に、
「勝つことができた」
というのと、戦わずして敵の本城を睥睨（へいげい）し、これを降参させるのとでは、秀吉にとって大変なちがいがある。
それに、北条軍が猛烈果敢に戦い、豊臣の大軍を悩ましていることが天下にひろまることになれば、そのときこそ、東北の諸将も、だまってはいまい。
ことに、会津・黒川（現・会津若松市）の城主・伊達（だて）政宗（まさむね）は、後年、一代の名将とうたわれた人物だけに、奥羽の戦乱につぐ戦乱を、激しい闘志と巧妙な戦略をもって勝ちぬき、豊臣

秀吉から、
「上洛（じょうらく）して、われに従え」
たびたびの催促をされても、素直に、これを受けいれようとはせぬ。
だが、これは、北条父子の抵抗とはいささか異なる。
宏大な東北地方の覇者（はしゃ）といわれるほどの戦力があり、謀略にも長（た）けている伊達政宗は、秀吉の大軍が東北を制圧することのむずかしさを、よくわきまえている。
それに、東北では、いまだに大小の勢力の戦乱が熄（や）んだわけではない。
政宗は領国の安泰をはかるため、いまも出陣をつづけてい、その一方では豊臣秀吉に馬を献じたりして、柔軟の姿勢を見せたりする。
つまりは……。
伊達政宗も北条父子と同様、秀吉に屈服したのち、
（果して、わが領国を安堵（あんど）されるか、どうか……？）
それが不安なのだ。
北条氏直は、豊臣秀吉との開戦がせまるにつれ、伊達政宗へも使者を送っている。
何らかのかたちで、政宗の助力をもとめ、秀吉を牽制（けんせい）しようというわけだが、政宗は、
「体（てい）よく、あしらって……」
ほとんど、相手にもせぬ。
それというのも、天正十八年を迎えた伊達政宗の胸の内には、

（関白殿下との間を、このままにしておくわけにはまいらぬ。やはり、屈服したほうがよい）

そのおもいが、しだいに、かたちをととのえつつあったからだ。

けれども、開戦を迎えた北条軍が、本城を出て勇敢に戦い、秀吉を悩ませたりしたら、伊達政宗のうごきは、

「容易ならぬもの……」

と、なるにちがいない。

豊臣秀吉が、何としても北条軍との激戦・苦戦を避けたいのも、このためであった。

北条氏邦の積極作戦によって、

「有利に和睦の機をつかむ……」

ことが、北条父子にも松田憲秀にも納得できたのは、

（いずれにせよ、戦うことにきまったのだから……）

と、氏邦の熱のこもった説得を受けいれる心境になったからであろう。

このため、十七日から小田原城で開かれる軍議は、その積極作戦のためのものになると看てよい。

「ふむ、ふむ……さようでおざるか……」

松田尾張守憲秀の決意を聞き終えた心山和尚が、

「関白殿下のことはさておき、駿府の徳川公と戦さするのは、われらも残念に存ずる」

沈痛な口調で、つぶやくようにいい出た。

すると、打てばひびくかのごとくに、

「いかさま」

と、松田憲秀が口惜しげに、

「そのことでござる」

「と申して、徳川公が関白の軍勢に味方されるは、当然のことゆえ……」

「なればこそ家康公は、これまでに、たびたび、御老公や御屋形（氏直）に、上洛のことをおすすめなされたのでござるが……」

「はい。そのことは、われらもうけたまわっております」

「まことに、残念でござる」

徳川家康は、自分の女を北条氏直へ嫁がせ、北条家と同盟をむすんでからは、何くれとなく、豊臣秀吉との間を取りなしてくれた。

徳川・北条両家の交際がはじまり、双方の使者が、小田原と駿府との間を往来するようになった。

家康は、東海地方の三河・遠江・駿河と、甲州・信州の南半部を領国としている。

これらの国々と関東は、隣り合わせていることでもあり、それだけに家康は、北条家を重く見ており、

「これよりは、何事につけ、ちからを合わせてまいりたい」

そういっていたのだ。

もとより、北条父子にしても、家康の実力を知りつくしていたから、両家に婚姻の関係が生じたことをよろこび、家康をたのみにおもっていたのである。

北条氏政は、

「このような期に、徳川は何故、われに味方をしてくれぬのか」

嘆いていたものだ。

そしていま、弟・北条氏邦の進言をいれたとき、

「なるほど。こなたに勝目が出れば、徳川もかならず、関白を見捨てて、われに馳せ参ずるであろう」

と、洩らしたそうな。

「ところで、尾張守殿……」

いいさして、心山和尚が、かたちをあらためた。

「われらも、御当家より御恩をこうむっている身でおざるが、何としても徳川公を、憎い敵とはおもえませぬ。これは尾張守殿も同様かと存ずるが、いかが?」

松田憲秀は、うなずいた。

これは憲秀のみではなく、北条父子にせよ、他の家臣にせよ、当主の氏直の岳父にあたる徳川家康が、これまでに北条家へ寄せてくれた好意をおもえば、憎悪の念が起るはずもない。

家康にしても、やむなく、秀吉に屈服したのだとおもっている。

「かようなことを、口にいたすは、いかがなものかと存じたなれど、尾張守殿ゆえ、あえて申しあげたのでおざる」

「よう、わかっております」

「まこと、おわかりでおざるか?」

「申されるまでもない。それがし、これより関白の軍勢と戦さをはじめてよりも、徳川公にお取りなしを願うようなことがあろうかと存ずる。すなわち、関白との和睦の機会を見出せたるとき、何よりも、たのみとなるのは徳川公でござる」

大きくうなずいた心山和尚が、

「では、われら両人、北条家の御安泰を願うこころは同じでおざるな」

「いかにも」

「その、お言葉をうけたまわり、心山、安心をいたしました。実は、尾張守殿、そこもとを訪ねて、密かに小田原へ忍んでまいられたるお人が、当寺におられます」

「何と、おおせある……?」

「お会い下さるか?」

「いずれの人でござるか?」

「よう御存知のお人じゃ」

「はて……?」

「では、御案内を……」
と、心山が立ちあがった。
松田憲秀は不審をおぼえつつも、警戒のおもいはなかった。
それほどに、心山和尚を敬愛していたからであろう。
密かに小田原城下へ入り込み、法城院へ隠れ、心山和尚を通じて自分をよび出したというからには、いまの小田原へ堂々と入って来られぬわけがあるにちがいない。
小廊下の突き当りの小さな部屋へ、心山は松田憲秀をみちびいた。
部屋の中に、立派な中年の武士がひとりいて、入って来た尾張守憲秀へ、
「久しゅうござる」
と、一礼した。
「そこもとは……」
と、おもわず松田憲秀が、顔をあげた武士の前へ坐り込み、
「松倉殿……松倉左近殿ではござらぬか」
「さようでござる」
以前にくらべると、顔も躰も肥え、鬢のあたりの白さが増しているけれども、まぎれもなく松倉左近である。
松倉左近景弘は、もと、武田勝頼の家臣であった。
武田家がほろびたのち、松倉左近が徳川家康に仕えていることを、松田憲秀は、このときはじめて知った。

かつて、北条・武田の両家が同盟をむすんだとき、武田勝頼は北条氏政の妹を妻に迎えた。
勝頼が天目山に追いつめられ、自害をした折に、
「自分と共に死んでもむだなことじゃ。小田原へ帰ってくれい、たのむ」
勝頼は、妻にいった。
勝頼夫人の兄・北条氏政は、このとき、織田・徳川両軍と共に武田家の敵となっていた。
ゆえに、わが妹が逃げて来れば、北条氏政がこれを害するはずはない。
だが、勝頼夫人は、ついに承知をせず、
「黒髪の乱れたる世ぞ果しなきおもいに消ゆる露の玉の緒」
と、辞世を残し、夫・勝頼に殉じたのである。
こうしたわけで……。
両家が戦乱に巻き込まれる前までは、双方から使者が行き交い、交誼が絶えなかった。
松倉左近景弘は、武田家の使者として、たびたび小田原へ姿を見せていたし、老臣の松田尾張守憲秀とも、顔見知りの間柄であった。
武田家の遺臣たちが、徳川家へ抱えられた例は、いくらもあるし、松田憲秀も、いまここに徳川家の臣となった松倉左近を見て、そのことにおどろいたのではない。
いまは敵となった徳川の家臣が、小田原城下へ潜入して来て、自分に密会をもとめたことに、憲秀は緊張した。

「さようか……松倉殿は徳川公へ仕えておられたか……」
「まさかに、このような事になろうとは、おもいませなんだ」
「いかさま……」
徳川家康は、やむを得ず、豊臣秀吉に従って小田原を攻めねばならぬ。
それがわかっているだけに、松田憲秀は松倉左近に警戒心を抱く気にはなれなかった。
それに、松倉左近の温厚な人柄にも、かねてから、尾張守憲秀は好意をもっていた。
「まことにもって、困ったことになり申した」
左近は、深いためいきを吐いた。
松倉左近は、あくまでも真摯な態度をくずさない。
「これより申しあぐることは、主人・三河守よりの言葉にござる。それがしは、ただ、この言葉をおつたえいたすために、忍んでまいりました」
「それがしへ、徳川公が……?」
「さようでござる」
「何と……?」
「あるじの言葉と申すよりも、これは、関白殿下よりの御言葉でござる」
つまり、豊臣秀吉が徳川家康へ、
「わが言葉を、松田尾張守へつたえてもらいたい」
命じてよこしたというのだ。

そこで家康は、松倉左近を密使にえらんだ。
左近ならば、北条家や小田原城下の事情に通じているし、法城院の心山和尚とも昵懇の間柄である。
おそらく左近は、変装をして小田原城下へ潜入し、法城院へ入ってから服装をととのえたのであろう。
秀吉は、松田憲秀へ、
「われらに内応いたしてくれるなら、相模・伊豆の二国をあたえよう」
と、いっている。
それには先ず、来る十七日からの軍議において、北条父子のこころが籠城戦にかたむくように、松田憲秀から説きふせてもらいたいというのだ。
松倉左近は、簡潔に語り終え、
「それがしよりは何も申しあげませぬ。なれど、主人・三河守は、尾張守殿のおはたらき一つにて、戦さの後の御当家の安泰も、しかるべく、はからうことができよう、と……」
「徳川公が、そのように?」
「はい。尾張守殿の、おはたらきを、あるじはたのみにいたしおります」
松田憲秀は、こたえない。
細い両眼の光りが凝って、空間の一点を見つめたまま、身じろぎもせぬ。
北条家の当主・氏直は、徳川家康にとってむすめ聟なのだ。

武田勝頼がほろびたとき、北条氏政は、勝頼夫人となっている、わが妹の身を案じ、

「このような戦さを、したくはない」

さも無念そうに、いいはなったものだ。

しかし、織田信長の威勢の前には仕方もなく、武田攻めに参加することになったが、おもいのほかに早く武田家が攻めほろぼされてしまったので、北条軍は戦場へ出る間もなかった。

それが、せめてものさいわいといえたろう。

いまの徳川家康の心境は、

（武田攻めの折の、御老公そのままではないか……）

と、松田憲秀は考えている。

「これにて、それがしの役目、終りまいてござる」

松倉左近が、しずかに頭を下げた。

左近は、松田憲秀に対し、おのれの意見というものを一言ものべなかった。

左近は、ただ、秀吉と家康の言葉を、そのままに尾張守憲秀へつたえたのみである。

その言葉を、松倉左近が生強に補足するよりも、却って迫力を生むことになった。

松田憲秀は黙然として、身じろぎもしなかった。

すでに、心山和尚は席を外している。

憲秀と左近の沈黙は、まことに長かった。

大蠟燭の火が瞬いている。

遠くの方で、男たちの太い唄声が聞こえはじめた。

どこかの木戸口に屯している軍兵たちへ酒が出たのであろう。

士気をおとろえさせぬために、

「いまのうちは、酒もよし。唄うもよし」

ということらしい。

いまのところ、小田原城下には活気がみなぎっている。

「入って、よろしいかの？」

廊下で、心山和尚の声がした。

「お入り下され」

と、松倉左近。

入って来た心山が、二人の顔を交互に見やりつつ、

「もはや、相すみましたか？」

うなずいた松田憲秀が、

「まことにもって、御面倒をおかけ申した」

「いやなに、親しき御二人をお引き合わせいたしたまででおざる」

「かたじけのうござった」

松田憲秀の声に、あきらかに感謝のおもいがこめられているのを、心山和尚も松倉左近も感得した。

心山と左近が、ちらりと眼と眼を見かわしたのを、心山へ一礼していた松田憲秀は気づいていない。
「尾張守殿に申しあぐる」
と、松倉左近が、
「これよりは、何も申しあげませぬ。何事も尾張守殿の御存意におまかせいたす」
「うけたまわった」
「では、これにて……」
「松倉殿には、御苦労をおかけ申した」
「いやなに、これは主命(しゅめい)でござる」
二人は礼をかわし、松田憲秀が席を立った。
「いかがでござったな?」
尾張守憲秀を見送った心山和尚がもどって来て、松倉左近へ、
「はい。いまだ、何ともわかりかねますが……」
いいさした左近の顔に、失望の色はない。
「ふむ、ふむ……。さようでおざるか」
「和尚殿。それがし、姿をあらためます」
「おお、心得申した」
心山が手を打つと、甲賀のお万喜が、町屋の者が身につける衣類を運んであらわれた。

「お万喜、松倉殿が城下を出られる。手引きをたのむぞよ」
「かしこまりました」
甲賀の頭領・山中大和守俊房は、小田原城下に、すくなくとも二箇所の忍び宿(やど)を設けてあるらしい。
鉢形城下に、五年も前から研師(とぎし)として住みついている長谷重左と同じような忍び宿が、小田原にも数年前から用意されていたにちがいない。
お万喜が、この忍び宿を利用し、町の者に変装した松倉左近を脱出させることなど、
「わけもないこと」
なのである。
上田源五郎は、小田原の忍び宿について何も知らぬが、甲賀の山中忍びの何名かが、北条方の軍兵として、
(入り込んでいるに相違ない)
と、看ている。
さて……。
法城院を出て、大手門内の屋敷へもどった松田尾張守憲秀は、
「夜に入って、まことに恐れ多いが、御老公へお目通りをねがい出てまいれ」
と、家来へ申しつけた。
家来が去った後で、憲秀は湯漬けを一椀食べた。

しばらくして、北条氏政よりの、
「すぐに登城いたせ」
との返事をもって、家来が松田屋敷へもどって来た。
このとき松田憲秀は、登城のための身仕度を、すでに、ととのえ終えていた。
（御老公が、わしの願いをしりぞけるはずはない）
確信をしていたからであろう。
小田原城内の、わが居館の奥深い一間(ひとま)で、北条氏政は松田憲秀を待っていた。
すでに、夜ふけである。
氏政と憲秀の密談は、ごくわずかな時間で終り、憲秀は自邸へもどっている。
だれも、二人の密談を怪しまなかったであろう。
以前から、こうした例がめずらしくない主従であった。
北条氏政が隠居する前などは、箱根・宮城野の城塞(じょうさい)から松田憲秀が小田原へあらわれると、夜ふけであろうが早朝であろうが、
「急ぎ、まいれ」
声をかけて、氏政は憲秀と語り合うことが多かった。
松田憲秀は城を下(さが)り、自邸へ帰ると、すぐに寝所へ入った。
家来たちの目には、屋敷を出て行くときの主人と、帰って来たときの主人との顔色(がんしょく)が、まったくちがって見えた。

出て行くときの松田憲秀は、寄りつきがたい、きびしい顔つきであったが、帰って来たときは、むしろ、晴れ晴れとしており、長い間、腫(は)れあがっていた腫物(できもの)の膿(うみ)が出切ってしまい、心身が一度に軽快となったような面もちであった。
寝所へ入った憲秀は、たちまちに深い眠りへ落ち込んだ。
そのころ、鉢形城主・北条氏邦が半武装の五十余騎を従え、松明(たいまつ)をつらね、小田原へ到着した。
山岸十兵衛も、この五十余騎の中に加わっている。

変転

一月十六日の朝になって、
「急ぎ、まいれ」
と、北条氏政が松田憲秀を呼びよせた。
憲秀は、すぐさま登城したが、このときも、主従の密談は短かった。
松田憲秀が退出した後に、北条氏邦が、
「御老公へ、お目通りをいたしたい」
申し入れたとき、北条氏政は寝所へ入り、臥床(ふしど)へ横たわっていた。

急に、気分が悪くなったというのである。
明日は、いよいよ本格的な軍議がおこなわれるのだし、
「格別に申すことあらば仕方もないが、さもなくば、今日は躰をやすめたい」
氏政が、そういったと聞いて、
「それはいかぬ、いま、御老公のお躰にさしさわりがあってはならぬ」
北条氏邦は、兄の氏政へ到着の挨拶をするつもりであっただけゆえ、目通りを強いて願わず、北条氏直の居館へおもむいた。
氏邦の控屋敷は、小田原城の三の丸の東南・箱根口の城門内に設けられてある。
当主の北条氏直は、氏邦の甥にあたるわけだが、氏邦は氏直に対して、言葉づかいや態度をくずしたことはない。
どこまでも本家の主として、敬うかたちを失わぬ。それでないと、他の家臣への、
「しめしがつかぬ」
というのだ。
こうしたところは、まことに律義なものであって、若いころに、妻の弟を毒殺したほどの凄まじさは、すでに消えている。
小田原本家の家臣たちも、
「鉢形の殿」
と、氏邦をよび、信頼を寄せているようだ。

北条氏邦は、必死の戦陣を目前にひかえているとはおもわれぬ小田原城下の活況を見て、心強くおもったらしい。
「これならば、大丈夫じゃ」
と、山岸十兵衛へ、
「明日よりの評定が、何やら、たのしみになってまいった」
「それは、何よりのこと」
「十兵衛。そのほう、城下のありさまを、つぶさに見てまいれ」
「承知いたしてござる」
十兵衛は、城内へ向う主を見送ってから、騎乗で控屋敷を出た。
上田源五郎が、
「ぜひとも、お供に……」
しきりに願い出たのを、十兵衛は受け入れなかった。
源五郎が自分のむすめ聟となってみると、いよいよたのもしくおもわれ、留守をまもってもらいたかったのである。
従者一名をつれ、箱根口の門を出た山岸十兵衛へ、彼方から馬を走らせて来た武士が、
「久しいのう」
と、声をかけてよこした。
「おお……」

見返した山岸十兵衛直勝が、

「太兵衛ではないか……」

「いかにも」

その武士は、杉太兵衛忠行といって、これも武田家の遺臣であった。

太兵衛は、十兵衛のように忍びの者としての修行を積んだわけではないが、武田信玄在世のころは、その側近く仕えてい、したがって山岸十兵衛とも親しい間柄であった。

杉太兵衛のように〔御側衆〕とよばれていた家来たちが、十人ほどいて、信玄はこれを、

「手足のごとく……」

使いこなしていたものだ。

山岸十兵衛の亡父・飯田彦右衛門も、この〔御側衆〕の一人で、武田忍びの束ねをつとめていたが、忍びの者ではなかった。

その子の十兵衛が忍びの術技を身につけたのは、父の配下の忍びたちによってである。

ところで……。

杉太兵衛が、武田家の滅びたのち、八王子城主の北条氏照の家来になっていることは、山岸十兵衛の耳へも聞こえていた。

旧主家が滅亡したのち、顔を合わせたのは今日がはじめてゆえ、

「八年ぶり……」

の、再会ということになる。

馬を寄せて来た太兵衛が、

「彦蔵……」

なつかしげに、十兵衛の旧名を低くよんで、

「いま、鉢形にいると、な」

「うむ。おぬしが八王子にいることは知っていたが……」

杉太兵衛は、山岸十兵衛よりも二歳ほど年上であるが、体軀は、どちらかといえば小柄で、たくましい十兵衛直勝の顔を下から見あげるようにして、

「ときに彦蔵……」

「待て。いまのわしの名は、山岸十兵衛だ」

「ほ、そうか……」

「太兵衛の名は、変っておらぬのか?」

「むかしのままじゃ。うむ、そうか。なるほど……」

太兵衛が、ようやく納得がいったようだ。

山岸十兵衛は亡父とちがい、単に、忍びの束ねをしていただけではない。

十兵衛自身が忍びの者としての活動をつづけていたのだから、新しい主人に仕える身となったとき、名を変えたのは当然というべきであろう。

しかも十兵衛は、忍びの者としての過去を、いっさい捨てて、第二の人生へ出発したのだ。

いつしか二人は馬首をならべ、箱根口の門から離れていた。

杉太兵衛も単身、小田原城下を見まわるつもりでいたらしい。

太兵衛が仕えている北条氏照は、老公・氏政の弟で、鉢形城主の氏邦の兄にあたる。

氏照もまた、弟・氏邦の積極作戦を支持し、いざ開戦となったときは、自分の八王子城の守備を重臣にまかせ、みずからは小田原の本城へ入り、竹の下口をかためる決心であった。

十兵衛と太兵衛は、広小路口から海辺へ出た。

相模湾は凪いでいた。

陽光が、惜しみもなく海にも陸にもふりそそぎ、汗ばむほどであった。

海辺へ出てしまうと通行の人びともすくないが、海面の彼方には平常のように漁船が出ていたし、

「これで、戦さがはじまるのかのう」

杉太兵衛は、あまりに長閑な風光が信じられぬような面もちで、

「海というものは明るいのう」

と、いった。

「よう晴れわたっているからであろう」

「なれど、八王子とは、まるでちがう。いや、甲斐の国ともちがう。相模の国はよいところじゃ」

「太兵衛。北条氏照様は、この小田原で戦われると聞いたが、まことか?」

「うむ」

「おぬしは?」

「わしは三日前に、八王子の城から、殿をおまもりして小田原へまいったのだが、明日は帰る」

「八王子へか?」

「そうじゃ。おぬしは?」

「われらの殿は、評定がすみしだい、鉢形へもどられよう」

「では十兵衛。おぬしも……」

「うむ。鉢形で戦うことになる」

「のう、十兵衛……」

「何じゃ?」

「たがいに、つまらぬことになったのう」

と、杉太兵衛が苦笑を浮かべ、

「こりゃ、とても、勝てる戦さではない」

「なれば、せめて、うまく負けることよ」

「ふむ……いずれにせよ……」

「どうした?」

「これからが、おもいやられるわい」

かつては、武田信玄という偉大な主の側近く仕えてきた二人だけに、今度の戦争の無意味

さが、よくわかるのであろう。
「十兵衛。おぬしの家人に変りはないか?」
「達者でいる。せがれの勝千代は、十六歳になった」
「ほう。むすめごは?」
「それが、な……」
はじめて、山岸十兵衛の顔がほころびた。
「このほど、聟をもろうてな」
「それは、めでたい」
「ほれ、小田原城下の法城院の心山和尚が三年ほど前に、上田源五郎と申す若者を引き合わせてくれ、それが縁となって、わが家来にいたした」
「ふむ。その若者を、むすめごの聟に迎えたのか」
「さよう。なかなかに、こころきいた男で、わしもほっとしている。あの男なれば、後のちのことをまかせても大丈夫。わしも安心をして死ねると申すものだ」
「死ぬる、と……?」
杉太兵衛が、意外そうに、
「まことか?」
「おぬしは、どうなのだ?」
十兵衛の反問に対して、言下に、

「死ぬる気はない」
きっぱりと、太兵衛はこたえた。
「おもうてもみよ。かほどに愚かな戦さがあろうか。いかにおもうても勝てる戦さではない」
「いかにも、な……」
「いや、負くるもよい。死ぬるもよいが……」
と、腹立たしげに太兵衛が、
「負くるも死ぬるも、われらの腑に落ちればそれでよい」
「なるほど」
「なれど、このような戦さでは、むざむざと死ぬる気にはなれぬ。十兵衛は、さようにおもわぬのか?」
「いや、おもわぬこともない」
「それ見よ。これなれば、武田家の滅び戦さのほうが、ずっとよい。あのときはまだ、死ねるとおもうていた」
杉太兵衛は、堂々といってのける。
これは、卑怯でも、いい逃れでもないのだ。
太兵衛はおそらく、機を見て八王子城を脱出するつもりらしいと、山岸十兵衛は看た。
だが、咎めるつもりは、いささかもない。

自分が仕えている主人に叛き、
「このような戦さに出るのは、ごめんこうむる」
とばかり、勝手に脱け出し、姿を晦ましてしまうことは、美徳とはいえぬが悪徳でもない。
それが戦国の世の習いといってもよかった。
これより先、日本に戦乱がまったく絶えてしまえば、武士のありようも、おのずから変ってくるであろうが、いまのところは杉太兵衛のような武士を探すのに、骨が折れることはないのだ。
だからといって、死を怖れているのではない。
「死んでもよいほどに……」
自分が見込んだ主人ならば、損得も打算もなく、
「死ねる！」
のである。
天下のうごきもわからず、ただ、ひたすらに、むかしの栄光にすがりつき、優柔不断のままに、
「戦うのでもなく、戦わぬのでもなく……」
というよりも、むしろ、
「戦さをしたくもないくせに、むざむざと敗戦へ引きずり込まれてしまった……」
北条家の愚かさが、杉太兵衛には我慢できぬのであろう。

（むりもないこと！）
と、山岸十兵衛はおもった。
武田信玄という偉大な英雄の側近く仕えてきた二人の目には、豊臣秀吉や徳川家康でさえ、
（何やら、物たらぬ……）
ようにおもえてならない。
まして、いまの二人が仕えている主ともなれば、格段に、その資性が劣って見えるのである。
これは、どうしようもないことであった。
杉太兵衛が仕えている八王子城主・北条氏照は勇猛の武将である。
けれども、それだけでは杉太兵衛にとって、
「物たりぬ……」
のではないか。
家来となってから数年にすぎないし、いまだに太兵衛としては、
「武田家の家来……」
という感覚がぬけきれていないのであろう。
また、北条氏照に目をかけられて、目ざましい昇進をしたわけでもないのだ。
その杉太兵衛にくらべると、山岸十兵衛の場合は、大分にちがうといってよい。
鉢形城の北条氏邦は、新参者の山岸十兵衛の力量をみとめ、これを大いに活躍させると共

に、惜しみなく昇進をさせた。

　これには、重臣たちの反対もあったが、

「かまわぬ。十兵衛直勝ほどの男を抱えたからには、これが至当のことである」

と、北条氏邦はいった。

その新しい主のこころを、山岸十兵衛が知らぬはずはない。

しかも氏邦は、三の丸の多門屋敷を十兵衛へあたえた。

　このことによって、十兵衛は、自分にかけている氏邦の信頼の大きさ厚さを、はっきりと感じとったのである。

　さらに、今度の軍議についても、北条氏邦は十兵衛の進言をこころよく受けいれてくれた。

自分へかたむけてくれた氏邦の信頼に、十兵衛はこたえようとしている。

武州・鉢形城の命運に、自分の一身をあずける決意をかためた。

　つまり十兵衛は、北条本家の命運よりも、自分の主人のために一命を捨ててもよいと考えたのだ。

　そこが、十兵衛と太兵衛のちがいであって、もしも、

(わしが太兵衛の立場にあれば、迷うことなく脱け出したであろう)

と、十兵衛はおもった。

　十兵衛には、太兵衛を責める気など、毛頭なかった。

　海岸では、厳重な柵を築く作業がおこなわれていて、人夫を指揮する半武装の足軽たちが、

大声に何か叫んでいる。

　砂浜へ、ゆったりと波が打ち寄せ、引いてゆくのを、杉太兵衛が馬上からながめやりつつ、

「おぼえていような、十兵衛……」

「何をじゃ?」

「三方ヶ原の戦さを、よ」

「うむ……」

　忘れるものではなかった。

「わしはな、十兵衛。三方ヶ原で徳川勢を散々に打ち破ったとき、いよいよ、天下は御屋形の御手に、しっかりとつかまれたも同様だとおもった……」

　御屋形とは、故武田信玄をさす。

　杉太兵衛にとって、おのれの真の主人とは、武田信玄以外の何者でもないらしい。

「あのときの……三方ヶ原の勝鬨が、いまだに、わしの身からはなれぬ」

　杉太兵衛はこういって、夢を見ているような眼ざしとなった。

　それから間もなく、武田信玄が急死しようとは、だれもが予想すらしていなかった。武田軍は勝利に酔っていた。

(そうだ。わしは、あの三方ヶ原で、家康公の一命を頂戴するところであった……)

　もしも、あのとき、武田の戦さ忍び・飯田彦蔵として徳川家康を追いつめた山岸十兵衛の手にかかり、家康が死んでしまったなら、その後の状況も、かなり変っていたのではないか。

家康が死んでも、結束の固い徳川勢は、家康の長男・信康をまもり、武田勢に対抗したろう。

また、こちらも信玄が急死し、武田勝頼の代となったわけだが、家康亡きのちの徳川家なら、猛将・武田勝頼の進攻を防ぎ切れなかったろう。

そうなれば、武田の軍団は、ふたたび東海地方を席捲（せっけん）したにちがいない。

織田信長にしても、背後を徳川家康にまもられていたからこそ、上洛（じょうらく）の道へ手がとどいたのだ。

となれば……。

いまだに、天下の行方は混沌（こんとん）としていたやも知れぬ。

武田家も滅びることなく、十兵衛自身も〔飯田彦蔵〕として、はたらきつづけていたのではあるまいか……。

（そうじゃ、あのとき……）

山岸十兵衛の胸も、熱くなってきた。

馬を駆って逃げる徳川家康の背後へせまったとき、十兵衛は、完全に家康の息の根を絶ったとおもった。

馬の尻へ飛び乗り、家康を背後から抱きすくめて刺殺する。

馬上に、躰の向きを変えることができぬ家康は、どうにもならなかったにちがいない。

まさに、十兵衛は家康の馬の尻へ飛びあがろうとした。

その瞬間に、闇を切って十兵衛へ襲いかかった甲賀の忍び道具が、家康と十兵衛の運命を変えた。

（それにしても、あのときの甲賀忍びは、みごとな男であった……）

最後には、二人とも、隠れていた小松原の蔭（かげ）から躍り出て、ちからのかぎりをつくして闘った。

そして、ついに十兵衛が勝った。

息絶えようとする甲賀忍びを抱き起し、十兵衛は、おもわず、

声をかけたものだ。

「みごとであったな」

すると、甲賀忍びは微笑し、

「おぬしも、な……」

ささやいて、息絶えた。

その後で十兵衛は、相手の頭巾を除（と）り、顔をあらためた。

いま、その甲賀忍びの顔が、あざやかに十兵衛の脳裡（のうり）へよみがえってきた。

「あっ……」

十兵衛が、何ともいえぬ異様な声を発した。

「十兵衛、何とした？」

馬を寄せて、杉太兵衛が山岸十兵衛の顔を、のぞき込むようにした。

それほどに、十兵衛は衝撃を隠しきれなかったのであろう。

三年前に、この小田原城下の法城院で、心山和尚が、

「柴田家の遺臣の子でおざるが、なかなかに、こころ利いた若者ゆえ、家来になされても後悔はなさるまい」

　こういって、十兵衛に上田源五郎を引き合わせてくれた。

　そのとき山岸十兵衛は、はじめて上田源五郎を見たわけだが、見た瞬間に、

（はて……どこかで、見たような顔(おも)だちじゃ）

　そうおもった。

　しかし、だれに似ているのか、おもい出せなかった。

　いずれにせよ、若い源五郎を以前に知っていたはずはないのだから、十兵衛の記憶に残っている別の男の顔に、よく似ていることになる。

　以後も、源五郎を見ていて、

（やはり、この顔は、むかし、わしが知っていた男の、だれかに似ている……）

　おもわぬではなかったが、こうしたことはよくあることで、十兵衛直勝は気にもとめてはいなかった。

　ところが、どうだ。

　いま、杉太兵衛と三方ヶ原の回想にふけり、あの甲賀の戦さ忍びの顔が、まざまざと十兵衛の頭へよみがえったとき、

（まさに……）

　その顔が、上田源五郎の顔へ、ぴたりと重なったのである。

（そうか……そうであったのか……）

　単に似ているというだけではない。

（これは、まさに、父と子の顔じゃ）

　このことであった。

（ふむ……なるほど……）

　一つ一つ、自分の家来になってからの上田源五郎の言動が、十兵衛の腑に落ちてきた。

「十兵衛。これ、十兵衛。何としたのじゃ？」

「う……」

　山岸十兵衛が、夢から覚めたように、

「いや、別に……」

「そうでない。いまの、おぬしの顔は徒事(ただごと)ではなかったぞ」

「さようか……」

「さようかもないものだ。何ぞ、あったのか？」

「もう、よいわ」

「なれど……」

「ふと、むかしのことを、おもい起したまでのことよ」

十兵衛の挙動は、早くも落ちつきを取りもどしている。
「案ずるな、太兵衛。いまのわれらには何の関わりもない、むかしのことなのだ」
「そうか、それならばよいが……」
「女のことを、な……」
「何じゃと……そうか。そうであったのか。何のことじゃ、つまらぬ」
太兵衛忠行が、笑い出した。
山岸十兵衛と杉太兵衛は、それから間もなく別れた。
太兵衛は、しきりに、鉢形城脱出を十兵衛へすすめた。
「これからは、天下が、どのようにうごき変るか、それは知れてある」
と、太兵衛はいった。
関白・豊臣秀吉の天下に定まったも同然というのに、
「いまさら、負け戦さをして何になる」
「なれど、戦さの仕様によっては、北条家も生き残るやも知れぬぞ、太兵衛」
「いやもう、愛想がつきたわ」
「脱け出してのち、おぬしは何とするのだ？」
「死なぬことだけは、たしかじゃ」
杉太兵衛は、妻も子もない。
武田家に仕えていたころ、妻を迎えたのだが、子も産まぬままに病死してしまった。

それからは、
「天下が落ちつくまでは、妻も要らぬ、子も要らぬ」
と、独り身を通してきている杉太兵衛だけに、北条家を見捨てることなど平気なのだ。
「いずれにせよ、十兵衛。おぬしほどの男が犬死をするな。つまらぬことじゃ。これより、天下が落ちつけば、また新しい生き方もできよう。わしは、それをたのしみにしている」
「おぬしの言葉は、ありがたく受けた」
「忘れるなよ、十兵衛」
にっこりと笑った杉太兵衛が馬首をめぐらしつつ、
「また、何処ぞで、めぐり会おうではないか」
と、いってよこした。
「うむ」
逆らわずに、十兵衛はうなずいて見せた。
馬上の杉太兵衛が、海辺の木戸の向うへ立ち去ったのちも、十兵衛直勝はうごかなかった。
十兵衛は、凝と海を見つめている。
旧主家が滅びてのち、忍びの世界からきっぱりと身を離した自分の感能が、
（かほどに、おとろえていようとはおもわなんだ……）
むかしの十兵衛ならば、上田源五郎を見た瞬間に、三方ヶ原の、決闘の夜が胸によみがえってきたにちがいない。

だが、おそろしいものだ。
あの夜の甲賀忍びの顔は忘れていなかったが、それが上田源五郎の顔とむすびつかなかったところに、忍びの者としてのおとろえがある。
もっとも、いまの十兵衛は、そのことに落胆したわけではない。
むしろ、
（そうか……これほどに、わしは、忍びの者・飯田彦蔵から遠ざかることができていたのか……）
十兵衛は一種のよろこびをさえ、おぼえた。
一箇の武人・山岸十兵衛として、あきらかに再生しつつある自分を、そこに見たからである。
（さて、どうするか……？）
上田源五郎を、である。
甲賀忍びの源五郎が、豊臣か徳川か、いずれかのために、自分の家来となって鉢形城へ入り込んだことは、
（先ず、間ちがいはあるまい）
と、十兵衛は看た。
三方ヶ原で、まさに息絶えんとしていた甲賀忍びの名は知らぬが、夜の闇の中でも十兵衛の鍛えぬかれた眼力は、相手の顔をしっかりと見定め、声を聞いている。
（源五郎は、たしかに、あの甲賀忍びの子じゃ）

そうなると、
（法城院の心山和尚へも、甲賀の息が、かかっているのではないか……？）
このほうが、いまの山岸十兵衛にとっては重大な意味をもつ。
（となれば、さすがに甲賀じゃ。これほどまでに、忍びの網が丹念に張りめぐらされていようとは……）
それにしても、上田源五郎は、
（わしが、源五の父を討ち取ったことを知っているのであろうか？）
そのようには、おもえぬ。
また、あのときのことは、だれの目にもとまってはいないはずだ。
あの甲賀忍びが息絶えるのを見とどけたと、十兵衛はおもいこんでいる。
その後で別の甲賀忍びが駆けつけて来て介抱をし、いったんは息を吹き返してから息絶えたことを、山岸十兵衛は知っていない。
もっとも、十兵衛に討たれた小杉重六は、夜張りの助七が口にふくませた丸薬によって息を吹き返してからも、
「せがれを……せがれ、虎松の面倒を、たのむ」
の一語を遺しただけにすぎない。
忍びの生死は、
「闇から闇へ消えるもの……」

ゆえ、小杉重六は自分を討った武田忍びの名も知ろうとはしなかった。

(源五郎は知らぬ。わしが父の敵であることを知らぬ)

ようやくに、山岸十兵衛は確信をもてた。

(上田源五郎という名も、偽りの名であろうが……それにしても源五という男、奇妙なところのある忍びの者じゃ)

はじめて、十兵衛直勝の顔に苦笑が浮かんだ。

源五郎が、これほど巧妙に自分のふところへ入り込んだほどであるから、この小田原城下には、豊臣・徳川の忍びの網が二重三重に、

(張りめぐらされているに相違ない)

のである。

その中心となっているのが、

(心山和尚なのではあるまいか……?)

十兵衛は、敵方の忍びの者を聟にしてしまった自分へ、激しい怒りがこみあげてこないのが、ふしぎでならなかった。

風が出てきて、海が声をあげはじめた。

深いためいきを洩らし、山岸十兵衛は馬首をめぐらした。

翌一月十七日。

小田原城内において、軍議が開かれた。

このため、小田原へあつまった北条家の一族は、およそ、つぎのごとくだ。

北条氏照(武州・八王子城主)
同　氏邦(武州・鉢形城主)
同　氏規(伊豆・韮山城主)
同　氏堯(武州・小机城主)

以上の四人は、老公・北条氏政の弟であり、当主・氏直の叔父にあたる。

いま一人の叔父で、下野の佐野家へ養子に入り、佐野城主である佐野氏忠は、この日、まだ小田原へ到着をしていない。

そのほかに、武州・岩槻城主の太田氏房(氏政の次男)や、相模・玉縄(いまの鎌倉市・大船)城主の北条氏勝(氏直の従弟)などが参集した。

これに、松田憲秀・大道寺政繁(上野・松井田城主)などの老臣・重臣が軍議に列したのである。

北条氏邦は、すでに、軍議の筋は、積極作戦として決まったも同様であるとおもっていた。

そこで氏邦は、

「御老公には、この小田原の本城を守っていただき、御大将(氏直)は、われらと共に、先ず、沼津の城を攻め落とし、これを、われらが本陣といたしたい」

と、いい出た。

沼津城は、以前、武田家の城であったが、武田家滅亡後は徳川家康のものとなっている。

こちらから箱根の山を越え、沼津まで進んで豊臣軍を迎え撃とうというのだ。
そして、さらに、北条氏邦は、兄・氏照と共に先鋒をつとめ、
「富士川まで押し出して、戦う決心でござる」
と、いい放った。
または、本陣を三島へ置き、黄瀬川で戦ってもよい。
ともかくも、この緒戦において、猛烈果敢に戦えば、豊臣軍は長途の行軍で疲労をしているし、攻撃の陣形もととのっていないわけだから、相応の戦果をあげることができると、北条氏邦はいった。
そうなれば、徳川家康も、だまってはいないはずだ。
かならず、北条家を有利にみちびくような措置を講じてくれるに相違ない。
「徳川公は、ちからをつくして下されよう」
と、氏邦はむすんだ。
北条安房守氏邦の、たくましい体軀から熱気が発散し、その声音は勇気にみちみちている。
諸将の間に、声にはならぬどよめきが起った。
「安房守。しばらく……」
老公・北条氏政の声がかかったのは、このときである。
北条氏政は、

「その後、さまざまに考えつくしたが、やはり、小田原に籠城いたそう」
きっぱりと、いいきったので、北条氏照も氏邦も、唖然となった。
「御老公。なれど、この正月四日にわれらが申しあげたることを、お聞きとどけになられたではありませぬか……」
氏邦が詰め寄るのへ、
「はきと聞きとどけたわけでない。安房守の申すことは、なるほど勇ましゅうはあるが、また、それだけに危うい」
「御老公。危ういのは同じことでござる」
と、氏邦が叫ぶようにいった。
「いや、そうではない。われらの城は、箱根の山々に囲まれ、一人が箱根を守れば、万人の兵も、これを越すことができぬといってよい」
北条氏政の大形な言葉を、松田尾張守憲秀が、
「いかにも」
すぐさま、受けた。
「箱根の嶮にまさる要害はござらぬ」
「尾張守が申すとおりじゃ」
「たとえ、箱根が破れましょうとも、小田原城中には、三年をまかなう兵糧がたくわえてござる。関白の軍勢は、この長い年月を小田原に滞陣することができましょうか。いや、でき

ますまい。滞陣が長引くにしたがい、関白より和睦を申し入れてまいることは必定でござる」

　すると間、髪を入れずに、老公の北条氏政が、

「尾張守の申すとおりである」

　大声にいうのだ。

　北条氏照と氏邦が口をさしはさむ間もなく、すぐに松田憲秀が、籠城戦の有利さを滔々とのべたてるのである。

　そして、いきなり、老公が立ちあがり、

「今日は、これまでじゃ」

　颯と、軍議の席から出て行ってしまった。

　その後で、北条氏邦が松田憲秀と激論をたたかわした。

　尾張守憲秀は、顔面蒼白となりながら、一歩もゆずらず、結局は、

「なれば明日、御老公の御出座を得てのことにいたしたく存ずる」

　こういって、松田憲秀も退出してしまった。

　そこで、氏照と氏邦の兄弟は、当主の北条氏直を説き、氏直はすぐさま父・氏政の居館へおもむき、説得をすることになった。

　ところが、どうも、却って結果は悪かったようだ。

　氏直のほうが、氏政に説き伏せられてしまったらしい。

　翌十八日の軍議になると、氏直が氏政を支持する気配を見せはじめたではないか。

　松田憲秀は、ふたたび、気力を取りもどし、諸将に向って籠城戦の有利を説いてやまぬ。

　この日の軍議も、翌十九日に持ち越された。

　二日間の軍議によって、諸将に動揺が起りつつある。

　長い月日の間、豊臣軍が小田原を包囲するとなれば、当然、充分な補給が得られず、士気がおとろえることはあきらかである。

　そのとき、城内から突撃、夜襲を繰り返すならば、いよいよ、敵は困憊するにちがいない。

　これが、北条氏政と松田憲秀の説であり、いまは北条氏直も、これを支持しはじめた。

　本家の老公と当主が、籠城戦を唱えているのだから、他の諸将たちも、しだいに、これを支持するようになる。

　豊臣の大軍を野外で迎え撃つだけの気魄をもっているものは、もともと多くはなかったともいえよう。

「まことにもって、ふしぎなことよ」

　北条氏邦は、山岸十兵衛に、

「御老公と尾張守は、この小田原城が落ちぬとおもいこんでいる」

　と、いった。

　北条父子や松田憲秀がいうように、果して小田原城が長い月日を持ちこたえることができようか……。

北条氏邦としては、そこのところがわからぬ。
いや、落ちぬとおもいこんでいる心理がわからぬ。
たとえ、北条父子が天下に誇る小田原の本城が落ちなくとも、八王子が落ち、鉢形が破れ、その他の属城が、つぎつぎに落ちてしまったら、
「どうなるのじゃ」
このことであった。
いうまでもない。
小田原の本城は、
「孤立してしまう……」
ことになる。
籠城戦というものは、外からの応援があってこそ、はじめて成り立つものなのだ。
本城一つが残ってしまえば、これを包囲する敵軍は、おもうままに、相模の海から魚を獲り、関東の田畑から米を得、野菜を得ることができる。
そうなれば、豊臣軍の兵站(へいたん)の不安などは、
「消えてしまう……」
ではないか。
山岸十兵衛も同感である。
だが、十兵衛は沈黙していた。

山岸十兵衛は、このとき、武田忍びの〔飯田彦蔵〕としての感覚を取りもどし、いま一つの自分の分身の眼から見たとき、
(これは、松田尾張守殿へ、豊臣か徳川の手が密(ひそ)かに差しのばされ、味方に抱き込んだのではないか……)
そのおもいが、強まるばかりとなった。
しかし、確証はない。
それゆえ、十兵衛としては口に出せぬ。
また、もし、十兵衛の直感が適中しているなら、法城院の心山和尚も、
(怪しい……)
ことになる。
十九日の軍議も、紛糾したままに終った。
翌二十日の軍議において、ついに、
「小田原籠城の事」
と、北条氏政・氏直父子の決定がなされた。
何といっても、老公の威力は大きく強い。
それに、老臣・松田憲秀は軍議を重ねるにつれ、説得が巧妙となって、熱とちからがこもり、しだいに、諸将もこれに賛同をするようになってしまったのだ。
軍議を終え、三の丸・箱根口にある控屋敷へもどって来た北条氏邦は、

「おのれ、尾張守め！」

吐き捨てるようにいったが、まさかに松田尾張守憲秀へ、豊臣・徳川の手が密かに差しのべられているとはおもわぬ。

「御老公はさておき、いずれも臆病風に吹かれて、武士の魂を消し飛ばされたと見える」

氏邦は、しきりに味方の諸将を罵倒(ばとう)した。

山岸十兵衛は、沈黙していた。

（これは、やはり、心山和尚が怪しい……いや、心山が密かにはたらいているにちがいない）

すでに十兵衛は、大手門の番士たちへ、それとなく問いかけてみて、一月十五日の夕暮れに、法城院の使いの僧が松田憲秀邸へ入ったことを探り取っていた。

それから間もなく、松田憲秀が大手門を出て、法城院へおもむいたらしい。

これは、何を意味しているのか……。

「十兵衛。そのほうは何とおもうぞ？」

氏邦の声に、十兵衛が、

「かくなりましたからには、いたしかたもござりませぬ」

「なれど、あまりと申せば……」

「籠城ともなれば、鉢形の城から小田原へ兵を差し向けることもなりませぬ」

「そのことじゃ」

この上は、最善をつくすのみであった。

十兵衛は、一応、心山和尚のことを、北条氏邦へ、

（告げようか……？）

ともおもった。

しかし、そうなれば、上田源五郎のことも告げなくてはならぬ。

心山の口ききによって、源五郎が十兵衛の家来となったことは、氏邦も知っている。

その源五郎を、十兵衛は自分のむすめの聟にしているのだ。

となれば、氏邦はさておき、他の家来たちの目には十兵衛自身も怪しむべき者として映るにちがいなかった。

（いずれにせよ、松田尾張守ほどのものが、内応のさそいに乗るようでは、いたしかたもない）

十兵衛は、嘆息をもらした。

北条氏邦は、こうなると一時(いっとき)も小田原にいることが堪(た)えられなくなったらしい。

「すぐさま、鉢形へもどる。出立(しゅったつ)の仕度をいたせ!!」

と、いい出した。

北条氏邦の一行は、日暮れ前に小田原を発し、鉢形への帰途についた。

異例の出発である。

この時刻だと、夜道をすすまねばならない。

だが氏邦は、自分の激怒を、この出発のありさまに表現したのであろう。
五十余騎の一行は、この夜、松明をつらねて、相模の大山の南麓にある曾屋（神奈川県・秦野市）の宿駅に入り、宿泊した。
小田原から此処まで、六里はあろう。
一行が到着したのは、夜更けであった。
そのころ、小田原城下の法城院では、心山和尚が、ぐっすり寝入っている。
寝入ったまま、心山は、生きて翌朝を迎えることができなかった。
おそらく、死の苦しみはなかったろう。
あったとしても、一瞬のことだったにちがいない。
音も気配もなく、心山の寝間へ忍び入って来た曲者が、眠り込んでいる心山の喉へ手をかけたかとおもうと、たちまちに扼殺してしまったのだ。
心山は、呻き声すらたてずに息絶えた。
曲者の黒い影も、寝所の外の奥庭の闇に消えた。
この曲者は、ほかならぬ山岸十兵衛直勝である。
十兵衛は、たしかに北条氏邦に従って曾屋の宿駅へ入った。
それから一行は、宿駅の民家や寺院に別れて泊ったわけだが、その後に十兵衛は脱け出し、小田原へ引き返したことになる。
そして、苦もなく法城院へ潜入し、心山を扼殺し、夜が明けぬうちに曾屋へ引き返していた。

別に、馬に乗って往復したわけではない。
山岸十兵衛の前身は、武田忍びの〔飯田彦蔵〕なのだ。
一日に四十里を走る忍びの者の脚力を、まだ十兵衛は失っていなかったとみえる。
北条氏邦も、その一行も、この夜のうちに、十兵衛直勝が小田原と曾屋の間を往復したとは、
「夢にも、おもわぬ……」
ことであったろう。

翌朝。
息絶えた心山和尚を発見した法城院の僧たちが大さわぎをしているころ、北条氏邦一行は曾屋を出発し、鉢形へ向っていた。
心山和尚の急死は、たちまち小田原城下へひろまった。
小田原城下に、三年前から住みついている鍛冶師の才九郎の家へ、この夜、甲賀からあらわれた夜張りの助七に、
「助七どの。大変が起きた」
と、お万喜が、心山和尚の変死を告げた。
鍛冶師の才九郎は、甲賀の山中大和守配下の忍びの者だから、この家が忍び宿であることはいうまでもない。

北条氏邦に従って、鉢形へ帰還した山岸十兵衛は、三の丸のわが屋敷へもどった。

十兵衛の家族と共に……というよりは、いまは家族の一員といってよい上田源五郎が十兵衛を迎えて、

「御苦労に存じまする」

と、いった。

「うむ」

うなずいた十兵衛の、源五郎を見る眼の色は、数日前に、この屋敷を出て行ったときとすこしも変らなかった。

だが、笑顔を浮かべるわけにもまいらぬ。小田原での軍議は、十兵衛と氏邦を失望させる結果となってしまったからだ。

早くも源五郎は、それと察したらしい。旅装を解いた十兵衛と、居間で二人きりになるや、

「御評定(ごひょうじょう)が、おもわしくなかったので？」

「うむ……」

「では、何と……？」

「籠城に決まった」

「なれど、御老公様は、御同意なされたのではありませぬか？」

「御屋形も、そのようにおもわれていたのだが、急に……」

「急に……と申されますのは？」

「急に、松田尾張守殿が籠城を唱え、御老公も御本家の御屋形も、これに同意なされ、ついには、諸将いずれも籠城策にかたむいてしまった……」

山岸十兵衛は、しずかに源五郎を見やった。

「何ということを……」

と、落胆の表情を見せた上田源五郎へ、十兵衛が、

「源五は、このことを何とおもうな？」

「わかりませぬ。この数日の間に、尾張守様や御老公のお心が変られたのは、城を出て戦さするのが恐ろしくなったのでありましょう」

そういった源五郎の声や素振りには、いささかも態(わざ)とがましいところが見えなかった。

「これでは、戦うてもむだでござる、父上……」

さも残念そうに、源五郎がいった。

正子と夫婦になって以来、上田源五郎の山岸十兵衛へ対する言葉づかいが、すこしずつ変化をみせてきはじめている。

十兵衛の家来としてではなく、そのむすめ聟としての親しみがあらわれるようになったのだ。

それに、源五郎は気づいていないが、十兵衛を「父上……」とよんだのは、このときが初めてではなかったろうか。

十兵衛も、これに気づいたらしい。

「ほう……」
と、目を細め、
「源五。いま初めて、わしを父とよんでくれたな」
「あ……これは、まことにもって……」
源五郎は恐縮して、頭を下げた。
「何の、それにちがいない。わしはおぬしの父。おぬしは、わしの聟殿じゃ」

甲賀指令

天正十八年二月一日。
豊臣秀吉は、
「三月一日までに、小田原攻めへ参陣すべし」
と、諸将に指令を発した。
この日は、現代の三月六日にあたる。
二月五日。
徳川家康の先鋒部隊をひきいて、早くも酒井家次が駿府を発した。
七日には、蒲生氏郷が伊勢の松坂城を出発した。

この智将は、北条方の伊豆・韮山の城を攻撃することになっている。
十日になると……。
加賀の太守・前田利家の先鋒部隊が金沢城を発し、同日、越後・春日山の城主である上杉景勝も出陣した。
上杉部隊には、北条氏邦に兄の弥八郎を毒殺された藤田信吉が参加している。
藤田信吉にとって、鉢形城を攻めることは、
「兄の敵を討つ」
ことにもなるのだ。
前田・上杉の両軍に、上田城の真田昌幸をはじめ信州の諸将が合流し、上州から関東へかけて、北条方の属城を、つぎつぎに攻め落すことになっている。
この中に、武州・鉢形城がふくまれていることは、いうまでもない。
日いちにちと、春の光りが加わり、冷気・寒気が薄らぎつつあった。
鉢形城も、籠城の準備をほとんど完了している。
鉢形城を囲む大小の砦の防備や修築は、夜を徹して工事がすすめられつつあった。
前田・上杉両軍を主力として、関東へなだれ込んで来る兵力は、
「三万をこえるであろう」
と、北条氏邦はいった。
氏邦が経験する、初めての大戦さといってよい。

北条氏邦は、自分の積極作戦がおこなわれるならば、
「鉢形を捨てても、全軍をひきいて本家の軍勢に加わり、豊臣軍を相手に奮戦する」
ほどの決意であった。
しかし、小田原が籠城となったからには、鉢形の城をまもらねばならぬ。
飯道弥平次のいる高山の鐘撞き堂の周囲にも柵や櫓が設けられ、三百の兵が常時、駐屯することになった。
これは、もしも、鉢形城と高山との間が、敵軍によって遮断されようとしたときのことを考えてのことであろう。
このところ、上田源五郎は、飯道弥平次と会うこともなかった。
甲賀からの指令も絶えている。
ところで、そのころになると……。
小田原・法城院の心山和尚が急死したことが、鉢形城へもつたわっていた。
心山和尚については、
「突然に発病し、急死をとげた」
と、いうことになっている。
あきらかに他殺とわかってはいても、いまこのとき、これをそのままに発表して、小田原城下に混乱が起ることを、北条父子は怖れたのであろう。
また、心山の年齢からいっても、急死したことが異常とは見えなかった。

北条氏邦も、心山の死を聞いて、
「老齢とはいえ、まことに、残念なことをいたした」
と、侍臣に洩らしたそうな。
だが、上田源五郎は、
（これは、妙な……？）
と、直感した。
心山和尚が、甲賀の頭領・山中大和守のために隠密の活動をつづけていたことは、むろん、わきまえている。
おそらく、夜張りの助七やお万喜がいる小田原城下の忍び宿と法城院との間には、密接な連絡があったにちがいない。
（やはり、敵方の忍びの者に殺められたのではないか……？）
ときもときだけに、どうしても源五郎は、心山和尚の死が〔病死〕とはおもえぬ。
心山が息絶えたのは、北条氏邦一行が小田原を発った、その夜から翌朝にかけてである。
源五郎としては、心山の死と山岸十兵衛をむすびつけることができなかった。
源五郎は、十兵衛の前身を、まったく知らぬ。
けれども、いまは、山岸十兵衛が源五郎の〔正体〕を知っている。
確証はないにせよ、
（まさしく、三方ヶ原で、わしが討った甲賀忍びの子じゃ）

十兵衛は、おもいきわめていた。

こうなると、心山和尚の引き合わせによって自分の家来となった一事をとって看ても、

（わしの推測は、間ちがっていない……）

ことになる。

その後の源五郎の言動も、いまにして、十兵衛には、

（いちいち、おもいあたる……）

ことになるわけだが、その自分の胸の内を、十兵衛は気振りにも見せぬ。

ただ、わからぬのは、以前の自分が武田忍びの〔飯田彦蔵〕であることを、

（源五郎は知っての上なのか、どうか……？）

このことであった。

もとより、源五郎は山岸十兵衛そのものを目標にしているのではない。

それは、十兵衛にもわかっている。

自分の家来となって鉢形城へ入り込み、城の内外の様子を正確に探り取ろうとしたのだ。

そして、それを、いま十兵衛が防ごうとしても、間に合わぬ。

（すでに源五めは、何も彼も、この城のすべてを甲賀へ知らせてしまったに相違ない）

からであった。

（これでは、敵勢が攻め寄せて来たとき、ひとたまりもあるまい）

十兵衛は苦笑した。

これは、自分の迂闊さに対しての苦笑であった。

武田忍びの〔飯田彦蔵〕ともあろうものが、である。

（若い源五めに、まんまと仕てやられた……）

ひいては、小田原の本家から長年にわたり、絶大な信頼を受けていた心山和尚に、山岸十兵衛も謀られたことになる。

心山の引き合わせがあったからこそ、十兵衛は源五郎に一点の疑惑も抱かなかった。

さらに、いまの十兵衛直勝が忍びの者としての過去を、いっさい忘れ去ろうと心がけていたことも、源五郎の正体を見破れなかった原因の一つとなるであろう。

何も彼も、

（すでに、遅い）

のである。

しかも十兵衛は、自分のむすめを源五郎にあたえてしまった。

今度の戦さが終ったとき、上田源五郎は、

（わがむすめを捨てて、甲賀へ帰ってしまうのであろう）

そうとしか、おもえぬ。

だが、正子と夫婦になってからの源五郎を見ていると、いかにも夫婦の情愛が濃やかであるし、

「いざとなったとき、わしの妻や子たちをまもり、城外へ脱け出してもらいたい。鉢形の殿

への忠節は、わし一人が死ぬることによって充分につくしたことになる。脱け出る手段は、わしが考えてあるゆえ、たのむぞ、源五」

十兵衛が、わざと念を入れたときも、

「心得まいた」

源五郎のこたえには、一点の曇りもない。

（こやつ、若いが、末怖ろしい忍びじゃ）

源五郎が上辺だけで受けこたえをしているのなら、その偽りの演技のしたたかさは相当なものだといってよい。

おそらく……。

上田源五郎の他にも、何らかのかたちで、甲賀の忍びの網が鉢形城の内外へ張りめぐらされていよう。

源五郎一人のみでは、忍びのはたらきが不可能だからである。

何しろ、心山和尚は二十年も前から小田原の法城院にいて、北条家の動向を甲賀の山中大和守へつたえていた。

それほどに甲賀の忍びの根はひろく、深い。

武田信玄が苦心の末にととのえた諜報網も、

「天下に誇ってよい……」

ものだと十兵衛は確信していたが、いまさらに、

（甲賀には、かなわぬ）

そうおもわずにはいられなかった。

甲賀の忍びの源は、七百年も前にさかのぼるといってよいのだ。

ところで……。

山岸十兵衛の妻・於丹は、

（夫と共に、鉢形城で生涯を終える……）

決意をかためているらしい。

夫婦のことだから、

「於丹には、それなりの分別もあろう」

十兵衛が上田源五郎に洩らしたのは、このことであったろう。

だが、十六歳になった長男の勝千代と正子は、敵軍が城を包囲する前に、上田源五郎をつけて脱出させるという十兵衛の意志を、於丹は正子につたえた。

勝千代には、いざとなったとき、「わしからいおう」と、十兵衛が於丹にいったそうな。

当時の武士の心情としては、たとえ、どのようなかたちになろうとも、自分の血すじと家名を後世に遺しつたえることに強い執着をもつのが当然であった。

ゆえに勝千代も、おそらく、父の説得を受けいれるにちがいないとおもわれる。いまのところ、勝千代は父母と共に、鉢形の攻防戦で〔初陣〕をするつもりらしい。

もともと温順な性格で、無口な勝千代なのだが、上田源五郎には、彼の若い胸の底に秘め

た決意が、あきらかに看て取れた。

「勝千代は、父上のお言葉に従いましょうか？」

「案ずるな、正子どの。もしも勝千代殿が承知をせぬときは、また別の手段もある」

「それは源五郎どの。どのような」

「ま、私にまかせておきなされ」

夫婦の盃をかわしてから日も浅いだけに、源五郎と正子の間には主人のむすめと家来のかたちが、まだ、どこかに残っているようだ。

だが、それも、しだいに薄れてきて、

「日毎に、夫婦らしゅうなってまいりまする」

於丹が十兵衛に、そういった。

父母を城に残し、夫と弟と共に脱出する正子は、その別離の悲しみに堪えているのだろうが、ともかくも、

（源五どのと共に脱け出すのだから……）

その点は、心強いらしい。

これが、源五郎を城へ残して父母と共に脱出するというのであったら、このように落ちついてはいられぬはずだ。

「源五どのさえ、傍にいて下さるなら、それだけで正子は、どのような苦しみにも悲しみにも堪えて行けまする」

この夜も、正子は源五郎の腕に抱かれてささやいた。

うなずきながらも源五郎は、

（さて、城を脱け出した後、正子と勝千代の身をどのようにしたらよいか……？）

そのことのみを、考えつづけている。

源五郎は、勝千代と正子を脱出せしめ、これを何処かの安全な場所へ移しておいてから、ふたたび、鉢形城へ引き返すつもりでいる。

引き返して、どうするのか……。

一には、おそらく豊臣軍の城攻めがはじまると、甲賀から源五郎へ何らかの指令がとどくにちがいないからだ。

源五郎が城内にいれば、曲輪の諸方へ火を放つこともできる。

その混乱に乗じ、内側から豊臣軍を引き入れることもできる。

これは、高山の鐘撞き堂にいる飯道弥平次にしても同じことだ。弥平次一人が鐘撞き堂にいれば、三百の兵がこれをまもっていたところで、どうにもなるまい。

さらに源五郎は、いま一つの計画を胸に秘めている。

それは、

（何としても十兵衛夫婦を、死なせぬ）

このことである。

これは、なかなかにむずかしい。

山岸十兵衛ほどの男が、北条氏邦から受けた恩顧に報いるため、
「死のう！」
と、決意をかためているのだから、源五郎が説得したところで、むだといってよい。
けれども戦局の変転によって、何らかの機会も生まれてくるであろうと、源五郎はおもっている。
源五郎は、十兵衛の前身を、まだ知ってはいなかった。
義理を重んじる実直な武人だと、おもいこんでいるのだ。
それだけに、甲賀忍びとしての自分の全能力をかたむけるなら、十兵衛夫妻を救い出すことができると信じている。
それがせめて、戦争終結後に、わが子を身ごもっている正子を捨てて、甲賀へ帰らねばならぬ自分の、正子へのはなむけだと、源五郎はおもっている。いや、はなむけというよりは、
（おれの詫（わ）びる心をふくめて……）
の、ことであった。
十兵衛夫妻さえ健在なら、正子も腹の子も、
（何とか、生きぬいて行けるにちがいない）
からである。
敵軍が鉢形へせまるまでには、まだ、一、二ヶ月の間があろう。
（それまでには、何とかなる……）

すこやかな正子の寝息と、甘い肌の香りに包まれ、源五郎は眠りに落ちた。
その眠りからさめたのは、源五郎の足に何かが強く触れたからだ。
（あ……）
臥床（ふしど）の裾のほうから、するすると、甲賀の女忍び・お万喜の顔が近寄ってきた。
寝所の中には、いつの間にか、香（こう）の匂いがただよっている。
催眠の薬草を混じた香を、潜入したお万喜が焚（た）いたのであろう。
「源五どの……」
お万喜が口をさしよせ、
「ここにいては、われらも眠ってしまうぞよ」
「この屋敷の、塩部屋（しおべや）を知っているか？」
「あい」
「では、先へ行き、待っていてくれ」
「心得た」
〔墨流（すみなが）し〕をまとった、お万喜の姿が、けむりのように寝所の闇の中へ溶けて消えた。
間もなく……。
上田源五郎は、お万喜が待つ塩部屋へあらわれた。
「ふ、ふふ……」
微（かす）かに、お万喜が笑って、

「今夜、とくと見せてもろうたぞよ、源五どの」
「何を、だ?」
「源五どのと、あの女とがたわむれるありさまを、な……」
「何……」
「天井の裏から、ゆっくりと見せてもろうた」
今夜も、源五郎が正子を愛撫したことはたしかだが、それを、お万喜が天井裏で盗み見ていたとは、どうしてもおもえぬ。
源五郎も甲賀の忍びの者だ。
いかに、お万喜の術技がすぐれていようとも、天井裏の気配に気づかぬはずはない。
（お万喜め。おれを謀かっている……）
源五郎は、気にとめぬことにした。
「お万喜どの。何ぞ、急な事でも起ったのか?」
「そのとおりじゃ。聞いておどろくまいぞ」
擦り寄って来たお万喜が、源五郎の腕をつかみ、
「ま、そこへ坐りなされ」
「む……」
このあたりの梅が、ようやく花をひらいたばかりで、朝夕の冷気は、まだきびしい。
だが、今夜は、春のさかりのように生暖かかった。

お万喜が源五郎の手を、自分の胸もとへみちびいた。
源五郎の手が、薄汗に湿ったお万喜の乳房に触れた。
「な、何をする」
「よいではないか」
「早く、甲賀からのいいつけを聞かせてくれ」
「後でよい」
「何……」
「女忍びにも、これほどのたのしみがのうては、生きて行けぬ」
「よせ、お万喜どの」
お万喜は、もう、こたえなかった。
双腕に源五郎の頸を巻きしめ、男の唇を強く吸いはじめた。
いつしか、源五郎もそれにこたえている。
塩部屋の外の廊下の、曲り角に、山岸十兵衛は佇んでいた。
いまの十兵衛には、かつての武田忍びとしての感能が、よみがえりつつあった。
小田原で杉太兵衛と出合ったとき、十兵衛は上田源五郎の正体に気づいた。
それ以来、
（わしが気づいたことを、源五に悟られてはならぬ）
という緊張感が、自然に十兵衛の感覚をするどいものにした。

この夜半に目ざめて厠房へ小用に行き、用をすませて廊下へ出たときも、十兵衛は忍びの者としての呼吸を忘れぬようになっている。

と……。

廊下の突き当りの闇の中を、ふわりと過って行ったものがある。

(源五か……)

と、おもった。

いずれにせよ、徒者ではない。

(源五め。この夜半に屋敷内を、人知れず、まわり歩いているらしい)

それは、源五郎ではなく、お万喜であった。

お万喜は、厠房から密やかにあらわれた山岸十兵衛に気づかぬまま、源五郎と正子が眠る寝所へ潜入したのである。

十兵衛は、その寝所を彼方の廊下から見まもっていたが、

(源五は、まだ、何を探っているのか?)

怒るよりも苦笑をさそわれ、身を返して自分の寝所へもどろうとした。

そのとき、源五郎の寝所から、お万喜があらわれた。

(や……源五郎ではない……)

お万喜は、十兵衛が身を潜めている場所とは反対の方へ、ふわふわと消えた。

やがて、源五郎があらわれ、お万喜の後から塩部屋へ入るのを、十兵衛はたしかに見とど

けた。

(ふうむ……甲賀から、連絡の者がやって来たのか。しかも、女忍びじゃ)

十兵衛は、塩部屋の傍へは近づかぬ。

何といっても塩部屋の中には、忍びの者が二人もいるのだ。

近づいて、もしも発見されたところで、おどろくのは二人の甲賀忍びなのだが、

(これは知らぬふりをしていたほうがよい。ふむ、ふむ。おもしろくなってまいったぞ)

敗戦に決まっている今度の戦さで、討死の覚悟をした十兵衛だけに、いまは何の怒りもなければ、欲望もない。

(最後の期が来たとき、源五めは、何とするか?)

むしろ、それに興味をそそられているかのようだ。

廊下の彼方の闇に、山岸十兵衛がいることも知らず、お万喜と源五郎は、無言の愛撫に熱中している。

しばらくして……。

お万喜が源五郎の躰から離れ、

「いやな、源五どの……」

「何……?」

「源五どのの肌に、この屋敷のむすめの匂いがした」

「つまらぬことを……」

「怒ったのかえ、源五どの」
「それよりも……」
「それよりも、何？」
「先刻の、甲賀からのいいつけとは何だ。早う聞かせてくれ」
「聞きたいかえ？」
「聞かずともよいのか？」
「そうはまいらぬ」
などと、お万喜は、しきりに源五郎を焦らしていたが、
「では、頭領様よりのおいいつけを……」
「さ、聞こう」
「この屋敷のあるじを討てとのことじゃ」
「う……」
「おどろいたようじゃな、源五どの」
「別に……」
源五郎は、すぐさま平静を取りもどしている。
「いやかえ？」
「何故？」
「可愛ゆい女房どのの父親を討つのじゃ。さぞ、心苦しいことであろ」

「別に……」
「討てるかえ？」
「討てるとも」
そうこたえたが、いま、このときになって、山岸十兵衛一人を暗殺したところで、
（何になろう……）
と、おもった。
しかし、迂闊に問い返したりすることは禁物であった。
こちらの肚の内を、お万喜に嗅ぎつかれる怖れがある。
（だが、これは……）
大変なことになった。
いまの上田源五郎には、自分の手で山岸十兵衛を殺害する理由が何もない。
よほどに、
「いま、このとき、何故、十兵衛を討たねばならぬのか？」
と、お万喜に問いかけようとしたが、源五郎は辛うじて踏みとどまった。
忍びの者の行動に理屈はない。
甲賀の頭領・山中大和守俊房の指令を、遂行するのみだ。
「急ぐのか？」
「いや、それは、まだ先の事じゃ」

「先の事……」
「関白殿下の軍勢が鉢形へ寄せて来たときがよいと、頭領様は申された」
「なるほど」
十兵衛を討てば、すぐさま、源五郎は鉢形を脱出しなくてはならぬ。
それまでに、まだ、源五郎がはたらかねばならぬことの起った場合を、山中俊房は考えているのであろう。
「山岸十兵衛は、なまなかの男ではない。それゆえ、いまのうちに源五どのの耳へつたえておいたがよいと、頭領様のおおせじゃ」
「わかった」
「欲しい忍び道具でもあらば、とどけよう」
「いや、大丈夫だ」
そういってから、上田源五郎が、
「この城の主（あるじ）・北条氏邦を討たぬでもよいのか?」
それならば、まだ、はなしがわかるとおもった。
「氏邦を?」
「うむ……」
お万喜は沈黙し、探るような目つきで源五郎を見据えた。
お万喜の青白い眼の光りが、闇の中でも源五郎には、はっきりとわかる。

「そのようなことを、源五どのが口にするものではない」
お万喜の声が、別人のようなきびしいものに変って、
「何事も、頭領様のお胸の内にあることじゃ」
「わかった」
立ちあがったお万喜は、いおうか、いうまいかというような素振りを見せたのちに、
「実は、な……」
「え……?」
「小田原の、心山和尚様が亡くなられたことは知っていような」
「聞いた」
「心山和尚様を殺めたのは、山岸十兵衛らしい」
「何と……?」
これはまた、源五郎にとって意外なことであった。
「まことか?」
「しかとは申せぬが……」
「まさかに……」
「いや、源五どのは、むかしの十兵衛を知らぬ」
「それは何のことだ?」
「山岸十兵衛は、むかし、武田家の忍びであったらしい」

「…………」
源五郎は、絶句した。
「どうじゃ。知らなんだであろ」
「知らぬ。まことのことか、それは……?」
「これは甲賀の忍びではなく、徳川家に仕えている古川左門(ふるかわさもん)殿が、この正月に、北条氏邦の供をして小田原へあらわれた山岸十兵衛を見かけたそうな」
「ふむ……」
「その古川左門殿が、われらに十兵衛のことを告げた」
「古川左門殿とやらは、いま、小田原に?」
「われらと共に、忍びのはたらきをしていなさる」
「ふうむ……」
「十兵衛の前名は、飯田彦蔵というそうな」
「いいだ、ひこぞう……ふうむ。耳にしたこともない」
飯道弥平次の密告による上田源五郎への嫌疑は、どうやら、
(はれたらしい……)
とも考えられるし、また一面には、
(おれに十兵衛を討てということは、まだ、頭領様のうたがいがはれぬのやも知れぬ……)
ともおもえる。

いずれにせよ、源五郎と会った夜張りの助七が、山中大和守へつたえた報告は、
(おれにとって、不利なものではない……)
はずであった。
事実、これまでの上田源五郎は甲賀を裏切ったおぼえはないし、これからも、そのつもりは毛頭なかった。
となれば、甲賀の命令による山岸十兵衛暗殺の事は、何としても、仕てのけねばなるまい。
(こうなれば、いたしかたもないことだ)
源五郎は、決心をかためた。
これまでは、鉢形落城の直前となったとき、源五郎は源五郎なりに、甲賀に叛(そむ)くことなく、
(山岸十兵衛と、その家人(いえびと)たちを救い出し、おれは、忽然(こつねん)として姿を消そう)
そのつもりであった。
しかし、この計画は断念しなくてはなるまい。
そこは源五郎も、甲賀の忍びの者である。
咄嗟(とっさ)に、源五郎の肚は決まった。
(なれど、十兵衛は、もと武田忍びであったという。これは、よほどに気をつけぬと……)
このことであった。
(だが、十兵衛は、おれの正体を、まだ見破ってはおらぬ)
源五郎には確信がある。

もしも、上田源五郎が敵方の忍びの者だと山岸十兵衛が知っているなら、わがむすめの正子を何で源五郎の妻にあたえようか。
　この一事だけを看ても、十兵衛の疑惑が生まれていないとわかる。
　ちかごろの、自分に対する山岸十兵衛の態度は、以前にくらべて、いささかも変っていないではないか。
「では、源五どの。これで……」
　お万喜が塩部屋から出て行きながら、唇のうごきのみで、こういった。
「飯道弥平次には、わたしも以前に、苦い汁をのまされたおぼえがある。弥平次については頭領様も、よく御承知じゃ。なれど、弥平次は忍びの達者ゆえ、頭領様も大事にしていなさる」
　墨流しに被われた顔を近づけ、お万喜はちろりと舌を出し、いたずらでもするように源五郎の鼻の頭を一撫でして、
「以後は、ぬかるまいぞ」
「うむ……」
「いまのうちに、女房どのを、せいぜい可愛がってやるがよい」
「何をいう」
　にっと笑ったお万喜の顔が、たちまちに廊下の闇へ消えた。

進軍

　この年、天正十八年（一五九〇年）三月一日。
　豊臣秀吉は、三万に近い本軍をひきいて、京都の聚楽第から、小田原攻めの出陣をした。
　北条家攻略のために、秀吉が編成した諸大名の軍勢を合わせると、それは十五万をこえよう。
　ときに、豊臣秀吉は五十四歳である。
「猿……」
　だとか、
「はげ鼠……」
　だとか、亡き織田信長は秀吉をよんでいたそうだが、その小さな皺のふかい顔に、この日の秀吉は薄化粧をほどこしている。
　そして、熊の皮で造った髭を鼻の下へつけ、唐冠の兜をかぶった。
　身につけた鎧は赤く、腰に横たえた太刀は黄金づくりで、手には朱塗りの弓を持ち、愛馬にまたがった豊臣秀吉が、
「いざ、いざ、小田原を攻めろうぞ」

軍列の将兵へ、高らかによびかけた。

三万の将兵が、歓呼のどよめきをあげる。

金銀の飾りを全身につけられた秀吉の愛馬は、いかにも重たげに歩を運ぶ。

軍列の将兵へも、

「おもいきり、着飾るように」

と、秀吉がいいつけてあった。

それだけに、何百何千もの派手やかな戦旗や吹き流しを押し立てた軍列の華麗さは、かつて例を見ぬ出陣風景を現出せしめた。

まるで、祭礼の賑いのような、秀吉の出陣であった。

これを観るために押しかけた人びとは、

「なんと、美しい行列であろ」

「さすがは、天下さまじゃ」

秀吉の威勢のすばらしさに、目をみはった。

秀吉は、わが威風の大きさを誇示すると同時に、全軍の士気を高揚させようとしたのであろう。

「こたびの戦さは、いささかも急いてはならぬ。ゆるりといたそう」

かねてから、秀吉はそういっていた。

北条軍は、秀吉がのぞんだとおりに籠城することになった。

これを、

「蟻の子一匹も逃がさぬよう……」

に、包囲してしまい、悠然として、北条父子の、

「降伏を待とう」

と、いうのである。

やがて……。

秀吉を中央にした軍列は、御所（皇居）の前へさしかかった。

御所の前の広場には、高台が設けられてい、そこに、後陽成天皇がのぼられている。

後陽成天皇は、豊臣秀吉の出陣を見送られようとしている。

なるほど、秀吉は〔関白〕という、最高の地位をきわめてはいるけれども、一箇の大名でもある。

大名の出陣を、天皇がわざわざ外へ出られて見送られるなどということは、おそらく、このときがはじめてではないか……。

尾張の国（愛知県）・中村の貧しい家に生まれ、織田信長の一兵卒を振り出しにして、ついに、この日を迎えた秀吉にしてみれば、まさに、得意満面であったろう。

秀吉は、高台の近くまで来ると馬から下り、恭しく天皇の前へすすみ出て、

「関白の大臣、豊臣秀吉。これより、関東の賊どもを討ち平げてまいりまする」

朗々たる声で、言上をした。

天皇が、にこやかに、うなずかれる。
秀吉は、ふたたび馬へうち乗って、
「いざ、すすめ。すすめや、すすめ！」
意気、天をつくばかりに号令をかけた。
秀吉は、この日にそなえて、鴨川へかかる三条大橋を、
「石造りにせよ」
と、架け直させた。
大軍が通過するからというのであろう。
こうして豊臣秀吉は、この月の十九日に、ようやく徳川家康の駿府（静岡市）城へ入った。
まことに、余裕綽々の進軍ではないか……。
一方、北条軍の布陣も決まった。
先ず、小田原の本城には、北条氏直幕下の五万余。
箱根の山中城に、あの松田憲秀の甥・康長などの四千余。
足柄山の二つの城にも、合わせて三千ほどが詰めた。
また、伊豆の韮山には、北条氏規が三千六百をひきいて防備をかためる。
上州（群馬県）の松井田城・武州（埼玉県）の鉢形城と八王子城など、小田原本城の外郭の備えにも万全を期したつもりであろうが、まことに、こころもとない。
北条軍の備えについて、豊臣秀吉は完璧な資料を得ており、それによって傘下の諸将を配

置した。
また秀吉は、動員した諸大名の部隊に対して、軍律をきびしくしている。

一、放火、略奪、抜け駆けを禁ず。
一、小旗、鉄砲、弓、鑓の順序をまもるべし。
一、わけもなく、他軍と交わるべからず。

この軍律を犯す者は、その罪が主人にまでおよぶという命令を徹底させた。
このため、戦場となる小田原周辺以外の土地では、人びとが平常のまま、日をすごすことを得たという。
豊臣秀吉の本軍が、東海道を小田原にせまるのへ呼吸を合わせ、前田利家・上杉景勝の第二軍は中山道を信濃（長野県）へ出て、追分のあたりで、上田城を発した真田昌幸の部隊と合流した。
第二軍の兵力は、合わせて三万五、六千であったろう。
第二軍は、先ず、上州の松井田城を攻め落さねばならぬ。
それには、嶮岨な碓氷峠を越えて、関東へ出ねばならない。
松井田城は、北条家の老臣・大道寺政繁が、これをまもっていて、その兵力は約二千余だ。
これだけの兵力では、碓氷峠の峻嶮を利して、敵の大軍を防ぐことも、覚束ないといって

よい。

「松井田が敵の手にわたったなら、どうしようもない」

と、北条氏邦はいった。

しかし、自身がまもる武州・鉢形の城も、兵力は四千に満たないのだ。

それでも尚、氏邦は、松井田城の大道寺政繁へ急使を送り、

「援兵をさしむけようか？」

問い質したが、政繁は、

「いまここで、五百や千の援兵をもらったとて同じことでござる。それよりも鉢形を、しっかりとおかため下されl」

と、こたえてよこした。

政繁も、

（ちからをつくして戦うだけは戦い、防ぐだけは防ぐ……）

決心であったが、三万五千の大軍を碓氷峠の彼方へ追い払うことなど、おもいもよらぬ。

大道寺政繁は、敗戦を覚悟の上で、勇戦しようとしている。

松井田と鉢形の間を、双方の使者が馬に鞭打って何度も行き交った。

山岸十兵衛が、北条氏邦へ、

「いかがでござりましょう。小田原から、五千ほどの軍勢を碓氷峠と松井田城の備えに差し向けるよう、御本家へ言上してみては……？」

といったのは、第二軍の接近が、まだ差しせまっていなかったころだ。

「もっともである」

北条氏邦は、すぐさま、老公の北条氏政へあてて、自筆の請願状をしたため、

「急げ」

使者を小田原へ飛ばしたが、北条氏政は、これを無視した。

「小田原のみで、籠城が適うとおもうてか……」

北条氏邦の落胆は、意外に大きかったようだ。

「いま一度、それがしが御使者となって小田原へまいります」

山岸十兵衛は、氏邦をはげますようにいい出たが、

「むだじゃ」

ちからなく、氏邦はかぶりを振るのみであった。

小田原での軍議が籠城と決まり、鉢形へ引き返してからの北条氏邦には、以前の精悍な気魄が感じられない。

鉢形城の防備は、遺憾なくととのえられている。

敵軍が攻め寄せて来たとき、家中の士はもとより、その家族を城内へ収容して、約一年分の食糧をたくわえてあった。

最後まで戦うつもりなら、

（この城は、なかなか落ちぬ）

と、上田源五郎は看ている。

北条氏邦は、ちかごろ、居館の奥ふかく閉じこもり、沈思していることが多い。

しかし、城兵の士気は旺盛である。

山岸十兵衛や源五郎には、それがふしぎでならないのだが、彼らも小田原の本城を、

「難攻不落の名城」

だと、おもいこんでいるらしい。

たしかに、短い月日のうちに攻め落せる城ではないが、孤立してしまってはどうしようもない。

そこのところの感覚が、重臣にも、城兵たちにも欠如しているところがある。

現代のように、新聞やテレビで、たちまちのうちに日本全国の様子が目に見え、耳へもとどく時代ではない。

鉢形にいては、京都や大坂における豊臣秀吉の威勢の実体を、うわさに聞いても、わが目にたしかめたわけではないのだ。

それだけに、長年、関東に君臨しつづけてきた主家への期待が大きい。

「のう、源五郎……」

或日、山岸十兵衛が微笑しつつ、上田源五郎に、

「わしも、このたびの戦さを死場所と決めたからには、おもいきって、はたらいてみたい。それには、鉢形の御屋形（氏邦）に願い出て、小田原へおもむき、戦うたほうが、はたらき

甲斐があるようにおもうが、どうじゃ？」

問いかけたことがある。

すると、源五郎は、

「いや、それは御屋形様が、おゆるしになりますまい」

きっぱりといった。

「そうか、な……」

「はい」

「やはり、な……」

「御屋形様は、父上をたのみにおもわれておわします」

「ふうむ……」

あれから、また一度、お万喜が源五郎と塩部屋で忍び会っていたのに、十兵衛は気づいているが、それを気振りにも見せぬ。

源五郎は源五郎で、以前と少しも変らぬ。

先日、忍んで来たときに、お万喜はこういった。

「山岸十兵衛一人を、いま、このとき殺害したところで、こたびの戦さには関わり合いないともいえようが……けれども、甲賀の頭領様は亡き心山和尚様を、十兵衛が殺めたことに、ことのほかのお怒りなのじゃ」

「なれど、まことに、心山和尚様を殺害したのは山岸十兵衛なのか？」

「ほかに、だれがいる?」
お万喜が反問してきた。
そういわれると、源五郎にはこたえようがない。
いずれにしても、甲賀の山中大和守は、心山和尚の、
「敵を討つ!!」
つもりらしい。
後年のように、武士の敵討ちが封建の世の、一つの制度となるまでには、まだ、長い歳月を必要とする。
それだけに、小田原・法城院の心山を失った山中大和守俊房の悲歎と怒りは激しいものなのであろう。
前田・上杉の第二軍が鉢形を包囲したのちに、上田源五郎は山岸十兵衛を暗殺し、甲賀へ脱出する。
むろん、その前に、源五郎と高山の鐘撞き堂にいる飯道弥平次は、甲賀からの指令を受け、鉢形落城のために、いろいろと暗躍をすることになるであろう。
豊臣秀吉がひきいる本軍が、小田原城を完全に包囲した後は、
「わたしも鉢形の城下へ詰めることになろう」
お万喜は、そういった。
山岸十兵衛直勝は、以前武田家に仕えていた〔飯田彦蔵〕という忍びの者であったと、お

万喜に聞かされたが、
(まことなのか、それは……?)
いま一つ、源五郎には納得できない。
それほどの男にしては、自分に対して、
(あまりにも、迂闊すぎた……)
ようにおもわれる。
これまでは、十兵衛を、
「実直で、武勇にすぐれた男」
とのみ、おもいこんでいたし、甲賀からも格別の指示はなかった。
それがいま、心山の変死と同時に、山岸十兵衛の過去が甲賀にも知れ、源五郎の耳へも入った。
源五郎としては、戸惑わざるを得ないではないか。
これまでに源五郎は……というよりも、連絡にやって来た夜張りの助七も、お万喜も、また、飯道弥平次も、十兵衛が武田忍びであったことを、まったく知らなかった。
つまり、山岸十兵衛を、
(見くびっていたわけではないが、見くびっていた……)
ことにもなる。
ゆえに、源五郎は、

「これからは、お万喜どのと、こうして塩部屋で会うことにも気をつけねばならぬ」

と、いったのだ。

これまでの自分を、十兵衛は、どのような目でながめていたのであろうか……。

自分を聟にしてくれたことをおもえば、先ず、うたがいをかけられてはいないことになろうが、それにしても、今日このごろの上田源五郎の心のうごきは複雑であった。

いまの山岸十兵衛は、

(上田源五郎が、甲賀の忍びであろうとなかろうと、そのようなことは、どうでもよい)

という心境になっている。

十兵衛は、ただ一つ、北条氏邦の、

(恩顧に報いる……)

ことのみに生きもし、死にもすればよいのであって、それが、たとえ、古めかしいと見られようとも、あの杉太兵衛から、

「愚かな事じゃ」

と、いわれようとも、一向にかまわぬのだ。

十兵衛は、武士として生きて行くことが、

(面倒になった……)

のやも知れない。

妻の於丹も、夫と共に、この鉢形城で死ぬつもりらしい。

ともかくも、若い勝千代と正子のみは、城外へ脱出せしめる。

若いだけに、この二人の子は新しい時代のながれへ、何とか乗り移って行けよう。

たとえ、この先、十年十五年を自分が生きていて、妻や子と暮してみたところで、(それが、どうだというのだ。また同じことを繰り返すのみではないか……)

このことであった。

山岸十兵衛の感覚からいえば、この後、豊臣秀吉の天下が永続するとは、とてもおもえぬ。

すでに秀吉は、五十四歳だそうな。

しかも、跡を継ぐべき実子がないという。

武田信玄には勝頼という立派な後継者がいて、しかも勝頼は、小田原の北条父子などが、およびもつかぬ猛将であった。

それでいて、やはり、時流には乗り切れなかったのである。

このときの山岸十兵衛は、当然、後年の徳川幕府を想像し得ない。

十兵衛のみではなく、どの大名も、徳川家康の実力をみとめてはいたが、それが後に、秀吉の後を襲うほどの実りをもたらすとは考えていない。

〔歴史〕の渦中にある者に、それをもとめるのは絶対にむりなのだ。

山岸十兵衛は、この年、五十一歳になった。

現代の男の年齢感覚からすれば、六十にも六十五にも相当したろう。

男が五十で病死しても、当然であって、早死だとはおもわれなかった時代なのである。

（いまここで、わしが一切を捨て去り、鉢形の御屋形と共に死んだところで、何のことやあろう）

決意したのちの十兵衛直勝には、何の欲望もない。

ただ、これより先、鉢形城が敵軍に囲まれてからの、上田源五郎が、

（どのようにうごきはじめるか……？）

十兵衛には、それが興味ぶかいことであった。

（源五めが、甲賀の忍びの者であったとて……それが何じゃ）

いまは、気にもとめなくなってしまっている。

ちかごろの上田源五郎を看ていると、

（すくなくとも、以前の源五郎ではない……）

ように、十兵衛には感じられる。

いや、以前のままにしていよう、していなくてはならぬと、源五郎は口のききようにも、立居振舞いにも慎重になったようにおもわれる。

（それは何故か……？）

であった。

いよいよ、最後の期（とき）がせまり、

（源五も、こころを決しなくてはならなくなったろう）

十兵衛や正子を捨てて、源五郎が甲賀へ帰る日が近づいてきたのだ。

その前に、上田源五郎は甲賀の忍びとしての最後のはたらきをするのであろうが、

（それが、どのようなものか……？）

についても、十兵衛は興味をもっている。

そして、場合によっては、

（わしが、源五めを討たねばならぬやも知れぬ）

とも、考えていた。

その一方では、

（勝千代と正子のみは、源五にあずけても大丈夫……）

のように、おもえる。

源五郎の使命は、鉢形落城のためにはたらくことであって、十六歳の勝千代と、いったんは自分の妻ともなった正子を害するためのものではない。

勝千代と正子は、このたびの戦さの勝敗に、

（何の関わり合いもない……）

ことなのだ。

しかし、甲賀の頭領が、自分を討てと上田源五郎に指令してきたとは、さすがの十兵衛も思いおよばなかった。

小田原で心山和尚を暗殺したことが、甲賀に知られているとも思わぬ。

むかし、同じ武田家に仕えていた古川左門が小田原城下に潜んでいて、左門が密（ひそ）かに自分

を見たことなど、まったく念頭にない。
山岸十兵衛は自分の前身が、まだ、だれの目にもさとられていないとおもっている。
杉太兵衛のように、同じ北条家へ仕えている者は別である。
さて……。
三月の下旬になって、碓氷峠の坂本の砦を落した前田・上杉の第二軍は、北条軍と小戦闘を交えつつ、ついに、大道寺政繁の松井田城を包囲した。
甲賀のお万喜が鉢形城内へ忍び込んで来て、
「頭領様からの、お指図があった」
と、上田源五郎に告げたのは、そのころである。
「何の、お指図だ?」
「すぐさま、山岸十兵衛を討ち取り、この城を脱け出で、小田原の忍び宿へ移れとのお指図じゃ」
「わかった」
上田源五郎は顔色も変えず、即座にこたえた。
「すぐさまというても、今日、明日ではむりであろうが、遅くとも十日のうちには山岸十兵衛を討ち果し、小田原城下へ移ってもらいたいとのおおせじゃ」
「心得た」
「小田原の鍛冶師・才九郎を、源五どのは存じていような?」

「知っている」
「そこが、いまの、われらの忍び宿じゃ」
「うむ……」
「ときに、源五どの。どのようにして山岸十兵衛を討つつもりじゃ?」
「さて……」
「わたしが手伝うてもよい」
「いや、それは却ってまずい」
「ふ、ふふ……」
「何が可笑しい?」
「さほどに、このお万喜が、たよりないかえ?」
「そうではない。二人がかりとなると、却って、おれの気が散ってならぬ」
「なるほど。それもそうじゃな。ともかくも源五どの。わたしは、今夜から鉢形城下へ身を移してきているゆえ、そのつもりでいなされ」
「そうか……では、研師の、長谷重左殿のところへ?」
「そのとおり」
うなずいたお万喜が、
「三日後に、いま一度、忍んで来ようわえ」
「いや、もう、かまわずともよい」

「それも、気が散るかえ?」
「いや、そうではないが……」
「いずれにせよ、十兵衛のむすめと睦び合うのも、長うて、あと十日のことじゃ。せいぜい、可愛がってあげなされ」
「何を、つまらぬ……」
「それはさておき、まことに忍び道具は要らぬのか?」
「よい」
「毒薬は?」
「一通りの物は、隠し持っている。だが、十兵衛を討つときは、忍び道具など使わぬつもりだ」
「大丈夫かえ?」
「それもまた、却って気が散るし、下手すると十兵衛に気取られてしまう。これぞとおもう隙あらば、おれの、この手で刺し殺す」
お万喜が、強くうなずいて、
「よう申された。それでこそ、甲賀の忍びの本道というものじゃ」
めずらしく、ほめてくれたものである。
この夜のお万喜は、塩部屋の中で怪しからぬまねをしようとはしなかった。
そして、別人のようなきびしい顔つきとなり、

「仕損ずまいぞ。これは、頭領様の御恨みをこめた役目なのじゃ。わかっていような」
「わかっているとも」
「それに、山岸十兵衛は最後の最後まで、何を仕出かすか知れたものではない。いまのうちに片をつけてしもうたがよいのじゃ」
そのころ……。
豊臣秀吉の本軍は、沼津へ到着している。
いよいよ、小田原への攻撃が開始されようとしていた。
豊臣軍が小田原へ雪崩れ込むためには、箱根の嶮を越えねばならない。
箱根には、北条方の支城や砦がいくつかあるが、その中でも、東海道を扼している山中城を攻め落さなくてはならぬ。
山中城は、現代の東海道線・三島駅から箱根山へ向う旧東海道を三里（約十二キロ）ほどのぼったところにあり、いまも城址が残っている。
城構えも相当なもので、東西三町、南北二町にわたる城郭は、本丸・二の丸・三の丸などにわかれ、四町ほど三島側へ寄ったところの岱崎に堅固な〔出丸〕を設けてあった。
山中城を攻めるためには、先ず、この岱崎の砦を落してしまわなくてはならぬ。
山中城への攻撃が開始されたのは、三月二十九日の早朝からだ。
豊臣秀吉は、みずから六万七千の兵をひきいて進軍し、これを三方に分け、岱崎と山中城へ攻めかけることとした。

すでに、晩春である。
風が絶えた曇り空の下の箱根の山々は、鮮烈な若葉に包まれていた。
岱崎の砦の〔先陣〕を秀吉から命じられたのは、中村一氏（近江・水口六万石の城主）である。
山中城には、城主の松田康長をたすけて、北条氏勝が入っている。
北条氏勝は相模（神奈川県）の玉縄（いまの鎌倉市・大船）城主なのだが、自分の城を家臣たちにまかせ、小田原の防備に当ることになったのだ。
兵力は、およそ、四千から五千ほどであったろう。
それに岱崎の砦には、間宮康俊という勇将が百二十余名をひきいて守備についた。
深い空濠と崖によろわれた岱崎の砦へ中村部隊が攻めかかったわけだが、このとき、中村一氏の家来で渡辺勘兵衛という勇士が、
「まるで、勘兵衛一人にて岱崎を攻め落した……」
と、いわれるほどの活躍をした。
この豪傑は、
「槍の勘兵衛」
などと、世にうたわれたほどで、これから後にも、さまざまなエピソードを残して波瀾の生涯を終えた男だが、岱崎から山中城へかけての勇猛なはたらきぶりは、だれの目にもあきらかであった。
それにもかかわらず、勘兵衛の主人・中村一氏は当日のはたらきを自分一人のものにして

しまい、豊臣秀吉の賞讃を受けたときも、ついに勘兵衛の名を口にしなかった。
渡辺勘兵衛は、これを不満として、小田原攻めの最中に中村部隊を離脱し、何処かへ行ってしまったそうな。
渡辺勘兵衛の場合は、
「家来のほうで、主人を見限った……」
のである。
家来が、自分の槍一筋にかけた活躍を、主人がみとめなかったので、これを見捨てたことになる。
これは、敗戦と決まったような今度の戦さに、主人と共に死ぬ覚悟を定めた山岸十兵衛とは、まったく異なる行動であるけれども、その大根は、
「同じもの」
と、いってよい。
渡辺勘兵衛も、山岸十兵衛同様に、むかしから中村一氏の家来だったわけではない。
勘兵衛の父は、近江の国（滋賀県）の山本城主・阿閉長之の家来だったそうな。
したがって父亡きのちは、勘兵衛も阿閉の家来になったわけだが、若きころに、早くも主人の阿閉長之を見捨てて牢人となった。
それもこれも、
「おれは、この槍一筋あれば、どこへ行っても負けを取ることはない」

その自信に、みちみちていたからであろう。

戦国の世には、すぐれた戦士を必要とする。

それが証拠に、いま、渡辺勘兵衛一人の勇猛果敢な奮戦があったからこそ、岱崎の砦を短時間のうちに攻め落すことができたではないか。

戦士の武勇は、戦士の立身出世にむすびついている。

戦士は、戦争の〔花形〕であるはずだ。

一命を賭して戦士は闘い、それを正当に評価してもらわなくてはならぬ。

父祖の代から同じ主家に仕えているというなら、はなしは別であるが、渡辺勘兵衛のような〔奉公人〕にとっては、

「恩も義理もない……」

主人のために、いのちがけではたらくのは、その武勇をみとめてもらいたいからだ。

それも、口先だけでみとめられ、ほめてもらったところで、どうにもならぬ。

みとめたからには、それにふさわしい立身の道を、

「ひらいてもらわねばならぬ」

このことであった。

こうした渡辺勘兵衛のような〔戦国奉公人〕のドライな生きざまを裏返してみると、山岸十兵衛にむすびついてしまう。

十兵衛のほうは、

「主人が、おれをみとめてくれたからこそ、負け戦さに出て、共に死のう」

ということになる。

いずれも、戦国の世に生きた男たちの、これが心意気というものなのだ。

さて……。

岱崎の砦が、あまりにも早く落ちたので、豊臣秀吉は大よろこびで、中村一氏をよび寄せた。

「式部少輔、よくぞ仕てのけた」

と、豊臣秀吉が中村一氏をほめそやした。

このとき、中村一氏は、

「わが家来、渡辺勘兵衛が、これこれのはたらきをいたしてくれまいたので……」

と、秀吉へ言上すべきであって、それが家来を持つ武将の心がけというものなのだ。

それなのに中村一氏は、一言も勘兵衛の武勇についてはふれず、手柄を一人じめにしてしまった。

これには、勘兵衛のみか、中村家の足軽たちまでが憤慨したそうである。

しかし、渡辺勘兵衛は、

「よし。それならば、いま一度、おれの槍のはたらきを見せてやろう。否応なく、主人にみとめさせてくれよう」

というので、つぎなる山中城攻撃には、三の丸の城門を打ち破り、単身で山中城の本丸ま

で突入し、本丸の櫓へ、中村一氏の馬印を押し立ててしまった。

　これを望み見た豊臣秀吉は、

「またしても式部少輔が一番乗りをいたしたぞ」

　馬の鞍壺をたたいてよろこんだ。

　こうして、岱崎の砦をふくむ山中城の攻防は、たった一日で終った。

　秀吉は、中村一氏へ、

「駿河の国（静岡県）をあたえようぞ」

　といった。

　駿河の国となれば、十四万石はあろう。

　六万石から十四万石の大名に昇進するわけだから、中村一氏の歓喜は一通りのものではなかった。

　それもこれも、渡辺勘兵衛という〔奉公人〕を抱えていたからこそなのだ。

　だが、ついに、中村一氏は豊臣秀吉へ勘兵衛の名を告げなかった。

　忘れていたのか……それとも功名を自分一人のものにしたかったのか……。

　いずれにしても、中村一氏は、他の武将たちの笑い者になってしまった。

「勘兵衛ほどの男を抱え、あれほどのはたらきをさせながら、中村式部少輔は、まことにもって呆れ果てたる男じゃ」

　そうしたうわさがたちまちにひろまったので、中村一氏もはっと気がつき、あわてて渡辺

勘兵衛をよび、

「本日のはたらき、みごとであった」

　と、自分の陣羽織をぬいであたえようとしたり、乗馬を、

「ほうびにとらせる」

　などと、きげんをとったりしたが、勘兵衛は、一氏に向って、

「おれが主人には不足も不足」

　と、いいはなち、さっさと、この主人の許から立ち去ってしまった。

　もしも、このとき、中村一氏が、

「一万石をあたえよう」

　と、気前をみせたなら、どうであったろう。おそらく勘兵衛は、きげんを直したに相違ない。

　渡辺勘兵衛にせよ、山岸十兵衛にせよ、旧主家から離れ、あるいは旧主家を失って一箇の〔奉公人〕となった戦国武士の生きざまというものは、およそ、こうしたものであった。

　生きることも、死ぬることも、

「自分で選ぶ……」

　ことができたのである。

　さて……。

　山中城への攻撃は、この日の朝から始まり、昼すぎには終ったという。

あまりにも呆気ない敗北ではないか……。

二の丸を守っていた北条氏勝などは、弟の氏成や十数名の家来たちと共に、真先に逃げ出し、小田原を素通りして自分の居城の玉縄へ帰ってしまった。

城将の松田康長は、さすがに最後まで奮戦し、討死をとげている。

六百に近い戦死者を出した山中城の北条勢は、四散して逃げた。

家康の臣・井伊直政は、この逃走兵を討ったり捕えたりしながら、箱根の二子山のふもとまで進み、その近くの鷹巣の砦にいた北条勢が、

「もはや、戦うてもむだじゃ」

「小田原へ引きあげよう」

砦を捨てて出て来るところを捕捉し、七十余名を討ち取った。

さらに、井伊直政は湖尻の峠を越えて宮城野へ向った。

すると今度は、宮城野の支城にいた松田憲秀の兵が、これも、

「山中城が落ちたからには、防げるものではない」

と、城を捨てて小田原へ向いつつあるのを井伊部隊に発見され、追撃されて八十余名を失っている。

このとき、城将・松田尾張守憲秀は、宮城野の城にいて、山中城が落ちたと聞くや、すぐさま、逃走の準備にかかったという説もあるし、当日は小田原城にいたという説もある。

いずれにせよ、松田憲秀には戦意も闘志もあるわけがない。

この日の敗報を耳にしたとき、老公・北条氏政は、

「ま、まさかに……？」

信じきれぬ面もちで、しばらくは虚脱してしまい、口もきけなかったそうな。

箱根の嶮をたのむどころではない。

たった一日で、箱根の防衛線が崩れ去ったのだ。

湯本や、足柄・新荘・片浦などを守っていた部隊も、つぎつぎに小田原へ逃げ込んで来る。

小田原に詰めていた北条氏邦の家来は、この敗報を知らせるべく、翌三十日の早朝に小田原を発し、馬を飛ばして鉢形城へ駆けもどって来た。

「何、たった一日で箱根が破れたとか！……」

北条氏邦も、唖然となった。

積極作戦が北条父子や松田憲秀によって退けられて以来、闘志も消えてしまった北条氏邦であったが、

（な、何ということじゃ）

あまりにも不甲斐ない味方の敗北に、憤慨し、

「このままでは、敵に見くびられるばかりではないか！」

むしろ、怒りに燃えた。

山岸十兵衛も同様である。

ことに、北条一族である北条氏勝が真先に山中城を放棄し、逃走してしまったのでは、今

後の味方の士気に影響する。

「このままではすまされぬ。このままでは……」

と、北条氏邦がいった。

いったが、しかし、いまとなっては、反撃の仕様もない。

敵の第二軍が関東へなだれ込み、上州の松井田城を包囲したからには、北条氏邦も鉢形城を、

「出るに出られぬ……」

のである。

このような結果になるのだったら、

「何としても、わしが箱根の山中城を守るべきであった」

北条氏邦は、侍臣たちへ悔しげにいった。

そのときである。

氏邦の脳裡に閃いたものがあった。

氏邦は、沈黙した。

空間の一点を見つめている北条氏邦の両眼へ、すこしずつ、強い光りが加わってくるのが家臣たちにもよくわかった。

（御屋形は、何を考えておわすのか……？）

彼らが顔を見合わせたとき、脇息にもたれかかっていた北条氏邦が、むっくりと身を起し、

「山岸十兵衛をよべ」

と、命じた。

その声には、あきらかに何かの決意がこもっている。

「早う！　早う、十兵衛をよべ」

「はっ」

三の丸の屋敷にいた山岸十兵衛は、主の使いを受けて、

（何事であろうか……？）

すぐさま、身仕度にかかった。

そこに、上田源五郎がいて、

「急な、お召しでございますな」

「さよう」

「何事でありましょう？」

「わからぬ」

いまさらに、自分がよばれることもない。

それなのに、

「すぐさま、まいれ」

と、北条氏邦はいっている。

これは、尋常のことではないと、十兵衛と源五郎はおもった。

山岸十兵衛が、本丸の居館へ伺候すると、北条氏邦は、
「いずれも、遠慮をいたせ」
と、侍臣たちへいった。
彼らは、不快の色を隠そうとしなかった。
十兵衛への嫉妬なのであろう。
以前の氏邦ならば、その辺のことをよく心得ていたものだが、いま、この期になって、家臣たちへ気をつかうこともない。
人ばらいをしたのち、
「十兵衛。近う寄れ」
「は……」
「もそっと寄れ」
北条氏邦の満面に、血がのぼっている。
はじめ、十兵衛は、何か自分が叱責を受けるのではないかと感じたほどだ。
「箱根が、わずか一日にて破れたそうじゃ。耳にいたしたか?」
「はい」
「なさけなきやつどもではある。十兵衛は、さようにおもわぬか、どうじゃ?」
「まことにもって……」
「このままでは、わしの腹の虫がおさまらぬ」

それならば、どうするというのか。
「のう、十兵衛……」
よびかけた北条氏邦の声が、押し殺したように低くなった。
このままでは、たとえ籠城をしたところで、
「関白に見くびられてしまう」
と、氏邦はいった。
手も足も出せぬままに、押し潰されてしまうばかりである。
小田原の本城のみか、関東の各地に在る支城の士気も、これではおとろえるばかりとなる。
こうなっては、小田原の北条父子をいかに説きつけても、
「むだじゃ」
ために北条氏邦は、自分の独断でもって、一つの作戦をおもい立った。
いや、作戦というほどのこともないが、北条家の意気地を、
「関白に見せつけずには、死ぬるにも死なれぬ」
このことであった。
「鉢形より小田原へ兵を出し、戦さとはこうするものじゃと、敵にも味方にも見せつけてやりたい」
氏邦の語気は鋭く、熱しきっていた。
「なれど、それでは鉢形の防ぎが弱りまする」

「いや、この城など、どうなってもかまわぬ」
氏邦は、自暴自棄でいっているのではない。
その決意が、ゆるぎないものと、山岸十兵衛は看て取った。
「なれど、御屋形が、鉢形を留守にあそばすことはなりますまい」
「なれば、よ……」
北条氏邦が、膝を乗り出した。

出撃

「なれば、わしのかわりに、そのほうが小田原へまいれ」
この氏邦の言葉を山岸十兵衛は、まったく予期していなかった。
「私が、小田原へ……」
「そうじゃ」
氏邦は、五百の兵を十兵衛にあたえ、
「小田原が敵の大軍に囲まれる前に馳せつけ、わしの意を御老公や御当代につたえよ。そして、そのほうがおもいのままに戦い、鉢形勢の意気込みを敵にも味方にも見せつけてくれい」

と、いうのである。
十兵衛は、咄嗟に返事ができかねた。
いま、鉢形城から五百の兵を割くことが防戦のための痛手になることは、いうまでもない。
（なれど……いずれにせよ、この城を守りぬくことはできぬ）
それならば、北条氏邦の意志を生かすべきであろう。
「どうじゃ、十兵衛」
「は……」
「引き受けてくれるか？」
「お受けつかまつる」
「おお……」
氏邦が十兵衛の手を摑みしめ、烈しく打ち振り、
「たのむぞよ、十兵衛」
「はい」
それも、おもしろいと、十兵衛はおもいはじめてきた。
五百の部隊を、自分がおもうままに指揮するとなれば、そのときは山岸十兵衛は尋常の武士ではないはずだ。
それこそ、武田忍びの〔飯田彦蔵〕に立ちもどり、奇襲や攪乱の作戦で豊臣軍を瞠目させることも可能であった。

「十兵衛。兵は、五百でよいか？」
「はい。なれど……」
「何じゃ？」
「このことは、隠密（おんみつ）のうちに事を計らねばなりませぬ。五百の兵をもって、上州・松井田城を援けるというふれこみにて城を出るがよいかと存じます」
「なるほど……」
そして、城を出るや、反転して小田原へ急行するわけだ。
「何事も、十兵衛にまかせよう」
城を出るのは夜に入ってからか、または、夜が明ける前でなくてはならぬ。
今夜というわけにはまいらぬ。
では、明日の夜か、明後日の未明ということになろう。
これから明日にかけて、五百の兵を選び、仕度を急がねばならない。
北条氏邦と山岸十兵衛は、いま一人の部将を選ぶことにした。
この部将の名を、久永但馬守（ひさながたじまのかみ）という。
久永但馬守は、山岸十兵衛の人柄を、かねてから高く評価しており、新参（しんざん）の十兵衛の立身をねたむ人びとへは、
「あれほどの男ならば……」
どのように優遇してもかまわぬと、いいきっている。

これまでにも、何かにつけて十兵衛の味方となってくれたし、月日と共に親交が深まるばかりであった。
「うむ。但馬なら、うってつけじゃ」
北条氏邦も、すぐさま賛成してくれた。
いまの氏邦は、鉢形城が滅び、自分が死ぬことなど念頭になかった。
このままでは、
「死ぬに死ねぬ……」
おもいがしている。
関東の盟主の威風も何も、あったものではない。
たった一日の戦闘で、箱根の嶮（けん）が破れてしまったのだ。
「御屋形……」
いいさして、山岸十兵衛は不敵な笑みを浮かべた。
「かくなれば、おもいきっていたしまする」
「うむ、うむ……」
「関白（かんぱく）の本陣を、奇襲するやも知れませぬ」
「まことか……まことに、仕てのけてくれるか？」
「はい」
「たのむ。たのむぞ、十兵衛」

氏邦の両眼から、熱いものがふきこぼれてきた。
「なれど、御屋形の御供が適いませぬ」
「かまわぬ。わしは鉢形で死ぬる。十兵衛は小田原で死んでくれい」
「はっ」
二人は眼と眼を見合わせ、うなずき合った。
山岸十兵衛のような男には、これが一期の生甲斐ともなり、自分の死に光彩をよぶことにもなるのであろう。
北条氏邦は、久永但馬守をよび、この出撃計画を打ち明けた。
「のぞむところでござる」
と、久永但馬守は言下にいった。
久永もまた、小田原勢の不甲斐なさに呆れ果てていたらしい。
すでに、夜に入っていたが、北条氏邦は重臣たちを居館の広間へあつめ、
「久永但馬守と山岸十兵衛へ五百の兵をあたえ、松井田城へさしむけることにいたした」
と、いった。
重臣たちは、このような計画が、自分たちをさしおいて決定されたことに不満であり、口ぐちに反対を唱えはじめた。
しかし、氏邦の決断は少しも鈍らぬ。
重臣たちが引き下って行った後で、北条氏邦と久永但馬守、山岸十兵衛の三人は密談を重

ねた。
部隊の出発は、早くて、明日の夜になろう。
それに先立ち偵察の士も出しておかねばならぬ。
このとき、豊臣秀吉は箱根の湯本に本陣を構え、諸将を順次、小田原包囲の体形に繰り出しつつあった。
包囲が完了してしまっては、五百の鉢形部隊が小田原城内へ突入することがむずかしくなる。
そこで、十名ほどの偵察隊を先発させることにしたのだ。
「急げ。急がねばならぬ」
と、北条氏邦がいった。
「かしこまった」
久永但馬守は、自分の家来の中から人を選び、今夜のうちに鉢形城を出発させることにした。
表向きは、あくまでも松井田城の救援のためである。
「よいか。くれぐれも、城内の人びとに悟られてはならぬぞ」
念を入れて、但馬守は、選んだ十名を先発せしめた。
この夜の久永但馬守は、多忙をきわめることになる。
五百の部隊を編成することも、

「わしが引き受けよう。おぬしは表に出ぬほうがよい」
但馬守は、山岸十兵衛にそういった。
「そのかわり、小田原へ入ったのちは、何事にも十兵衛殿の指図に従おう」
鉢形城を出るまでは、老巧の久永但馬守が指揮を執るというかたちのほうが、重臣たちや、他の家来たちも納得しやすい。
何といっても、山岸十兵衛は、
「まだ、新参者……」
なのである。
北条氏邦の居館を出て、三の丸の屋敷へもどった十兵衛が、突然、入浴の仕度を命じた。
「いったい、何のことなのでござります?」
妻の於丹が、いぶかしげに問うたのへ、
「申すまでもない。身を浄めるのじゃ。明日、出陣をする」
「どちらへでございますか?」
「松井田の味方を援けにまいる」
於丹は、おどろいたらしい。
松井田城が、すでに敵の大軍に囲まれていることは、於丹も知っていた。
於丹は、入浴の仕度を奉公人にいいつけ、むすめの正子と上田源五郎へ、このことを告げた。

「母上。まことでござるか?」
「はい。たしかに、上州へ御出陣とおおせられました」
源五郎が、すぐさま、十兵衛の居室へおもむくと、
「聞いたか、出陣のことを……」
山岸十兵衛が、笑いかけた。
「はい。松井田の城へ、おもむかれますとか……」
源五郎は、不審げに、
「それは、むだではありませぬのか?」
「いずれにせよ、敗けるのじゃ。なれど、このままでは御屋形も、お気がすまぬらしい」
「では、御屋形様の御指図にて……?」
「いかにも」
うなずいた山岸十兵衛が、
「久永但馬守殿も、わしも、二度と鉢形へはもどれまい」
と、いった。
それにはこたえず、源五郎が、
「いつ出陣なされます?」
「明夜になろう」
「御供は、かないませぬか?」

「ならぬ」

しずかに十兵衛が、かぶりを振って見せ、

「後をたのむ。この鉢形が敵勢に囲まれる前に、勝千代と正子……それに、でき得るならば、わが妻をも城外へ脱け出させてもらいたい。源五郎も、鉢形へ残ることは無用じゃ。わし一人が討死を遂げれば、御屋形への義理が充分に立つ」

「は……」

「どうじゃ。脱け出すことができるか?」

「はい」

いまのところ、城外へ出ることは、さほどにむずかしくない。

ただし、見知らぬ者が外から城内へ入ることは至難の業といわねばならぬ。

城下の検問もきびしくなっているし、甲賀忍びのお万喜や助七などは別としても、外部から鉢形城下へ入って来る者は一人もなかった。

「武蔵（埼玉県）の国境いに近い、甲斐（山梨県）の山里、丹波の村に板垣甚十郎という人が住み暮しておる。この人は、わしの遠縁にあたる。そこへ、引き退くがよい」

そこは、現代の奥多摩湖の北岸の青梅街道を西へすすみ、国境を越えて二里余のところにある山里である。

武田家がほろびて後、板垣甚十郎は家族と共に丹波村へ隠れ棲んでいるらしい。

「いずれにせよ、源五郎をたのむよりほかはない。おもうままにいたしてくれ」

淡々と、山岸十兵衛がいったとき、家来があらわれ、入浴の仕度ができたことを告げた。

「どうじゃ、源五。このところ、おぬしも垢を落してはおるまい。わしと共に湯浴みをせぬか?」

「いえ、私は……」

「かまわぬ。ついでに、わしの垢を掻き除ってくれい」

「はい」

源五郎が、

（十兵衛を討ち取るのは、いまだ）

と、決意したのは、このときであった。

「では、仕度を……」

十兵衛にことわり、上田源五郎は居間から出て行った。

この屋敷の湯殿は、大台所に近く、裏庭にのぞむ三坪ほどのものであった。

山岸十兵衛が湯殿へ入って行ったとき、すでに、上田源五郎は下帯一つの裸体となって待ち受けていた。

湯殿には、湯けむりがたちこめている。

湯釜の焚口は外部に設けられてい、湯は煮え滾っていた。

湯釜の側には、木製の湯槽と水槽がある。

当時は、毎日の入浴という習慣はなかった。

火も水も、貴重な天然資源であって、人間が、これをみだりに使用することはゆるされぬ。
入浴の方法も、季節によって異なる。
いまは、もう、夜ふけの闇が初夏の生暖かさである。
湯気に蒸された十兵衛と源五郎の躰に、うす汗が滲みはじめた。
筋骨たくましい山岸十兵衛の背中へまわった上田源五郎は、長さ二尺ほどの竹製の篦をつかい、肩や腕の垢を刮げ除りはじめた。
源五郎の足許に、湯桶が二つ置いてあった。
一つには、湯が汲み込まれてあるが、別の一つは伏せたままになっている。
その伏せた湯桶の中に、源五郎は得物を隠してあった。
それは、畳針をさらに太く長くしたような武器で、白木の柄には革を巻きつけている。
甲賀の忍びたちは、この武器を、
「潜り蜂」
などと、よんでいるらしい。
十兵衛の垢を刮げ、湯をかけるときに、源五郎は〔潜り蜂〕をつかみ、背後から十兵衛の急所へ突き通すつもりでいた。
源五郎にとって、湯殿で十兵衛の垢を刮げるのは、はじめてではない。
ゆえに、山岸十兵衛の裸身に刻まれている無数の傷痕に目をみはったりはしなかった。
この傷痕は、十兵衛の、これまでの過去をはっきりとものがたっていた。

傷の中には、源五郎の父・小杉重六から受けたものもまじっている。
「ああ……よい心地じゃ」
十兵衛は、こころよげに両眼を閉じた。
いささかも、源五郎を警戒していない。
源五郎には、そのように見えた。
左手で、湯桶の湯を十兵衛の肩口へかけながら、源五郎の右手が伏せてある湯桶にかかった。
「源五……」
よびかけた十兵衛に、源五郎は右手をはなし、
「はい……」
「背中が、痒うなってきた……」
「ただいま」
源五郎は、竹篦を取りあげる振りをして、ふたたび、伏せた湯桶に手をかけた。
このときの上田源五郎は、まったく無我の境地にあったといってよい。
すでに、源五郎は、山岸十兵衛のむすめ聟という自分の一面を、かなぐり捨てていた。
源五郎の右手は、伏せた湯桶を起し、その下にあらわれた〔潜り蜂〕をつかみかけた。
その瞬間であった。
山岸十兵衛が、振り向きもせずに、こういった。

「源五は、いずこの忍びの者じゃ?」
はっと、源五郎が潜り蜂から手を引き、湯桶をかぶせた。
十兵衛の声は低かったが、その呼吸に一分の隙もなく、これまで、いささかも源五郎の正体を見破った態を見せなかっただけに、源五郎は相当の衝撃を受けたといってよい。
その乱れのままに、潜り蜂を突き込んだところで、十兵衛に躱されるのは知れたことだ。
「源五。どうした?」
背中を見せたまま、十兵衛が尋いた。
「は……」
「おぬし、いずこの忍びかと尋ねているのじゃ?」
「忍びと、申されますのは……?」
問い返した源五郎の声に、ほとんど乱れがなかったのは、さすがである。
「ちがうか?」
「ようわかりませぬ。父上の申されることが……」
「さようか……なれど、わしは、おぬしの実の父親を知っておるのだが……」
この言葉は、しずまりかけた源五郎の衝撃を、層倍のものとしてよみがえらせた。
「私の、父を……」
「さよう」
「これは……」

源五郎は、強いて笑った。
「今夜の父上は、ちと、おかしげな……」
「おぬしの亡き父親は、もと、柴田家に仕えていたそうな」
「はい」
「なれど……」
いいさして、山岸十兵衛が、
「背中が痒い」
と、いった。
源五郎は竹篦を取り、十兵衛の背中を刮げにかかったが、その両眼は、一瞬の隙をねらって、鋭く光っている。
「わしが見知っていた、おぬしの父は、柴田家の家来ではなかった」
背中の垢を源五郎に刮げ除らせながら、山岸十兵衛は、依然、振り向きもせずに、
「ところが、さて、名前は知らぬ」
というのだ。
源五郎は、右足をそろりと伸ばした。
伏せてある湯桶を足ではねのけ、猛然と潜り蜂をつかみ、一気に十兵衛の背中へ突き立てるためであった。
そのとき、十兵衛が、

「わしの知っていた、おぬしの父は、徳川方の戦さ忍びであった」

と、いった。

伸ばしかけた源五郎の足が、ぴたりと止まった。

「のう、源五郎。ちがうか？」

「さて……」

おもわず唾をのみこんだ上田源五郎が、

「そうか。知らぬか……」

「私、存じませぬな」

「はい」

また、竹篦を持った源五郎の手が、うごきはじめた。

（やはり……やはり、十兵衛は、おれの正体を見破っていた……）

こうなれば、あとはもう、おもいきって十兵衛を刺すまでである。

必死の気力を振り搾って、また、源五郎が足を伸ばしかけた、その瞬間であった。

「ならば、わしが、おぬしの顔によう似た戦さ忍びを、三方ヶ原で討ち取ったことは、源五にとって何の関わり合いがないことになる」

この山岸十兵衛の言葉に、源五郎は、むしろ唖然となってしまった。

まさに、符合している。

亡父・小杉重六が、三方ヶ原で敵方の戦さ忍びに討たれたことは、たしかに、夜張りの助

七が見とどけている。

重六の遺体は、いまも、討たれた場所の土中深くにねむっているのだ。

「おぬしの父は、まことに立派な戦さ忍びであった。わしも、おぬしの父も、正面から向い合い、いさぎよく闘った。そして、わしが勝った……」

すでに、源五郎が持つ竹篦はうごかなかった。

「そのころ、わしは武田忍びの飯田彦蔵というて、それが本名なのじゃ」

源五郎の手から、竹篦が落ちた。

だが、源五郎の足はうごかぬ。

「つい先ごろまで、わしは、このことを知らなんだ。知っていたなら、まさかに、わがむすめをくれてやるまい」

源五郎は、こたえぬ。

身じろぎもせぬ。

甲賀の指令のみではなく、自分の父親の敵を討てるというのに、目をみはったままの上田源五郎は、声もなく立ちつくしている。

「どうした……わしを討たぬのか？」

はじめて、山岸十兵衛が振り向いた。

このときの、源五郎の心理の変転は、どのようなものだったのか……。

それは、おそらく、源五郎自身にもわからなかったろう。

父の敵と知って、十兵衛を討つための闘志が、さらに燃えあがるはずではなかったか。
しかし反対に、そのことを知った瞬間、源五郎は闘志を失ってしまったかのようだ。
あまりにも、衝撃が激しすぎたのか……。
それとも、これまでの岳父としての十兵衛と自分との間に醸成され、積み重ねられてきたものが、意外な十兵衛の告白により、却って生なましく源五郎の胸の内によみがえってきたからであろうか……。
そうしたものを、すべてなげうち、甲賀忍びとして、
「十兵衛を討つ。討たねばならぬ」
その一念に、源五郎は没入してきた。
自分を暗示にかけ、自分の感情を押えつけてしまうことなどは、忍びの者にとって当然のことなのだ。
それが、亡父・小杉重六を討った男と知って、源五郎は忍びの者の冷静さを失ってしまった。
これは、たしかなことだ。
そうなると、一度に激情が発し、そのくせ、激情のままに行動することができなくなった。
激情が激怒であってくれたなら、たちまちに源五郎は湯桶の中の潜り蜂をつかみ、山岸十兵衛へ躍りかかっていたろう。
だが、いまの源五郎が懸命に堪えている激情は、別のものであった。

どうしても、憎めない。
父の敵と知らされたがために、源五郎のこころを揺さぶりはじめた感情は、怒りではなかった。
感情を押えきっていたからこそ、
「殺せる！」
という自信も抱けた。
その感情が勝手に揺れうごき出したので、殺気から醒めた源五郎は、惑乱しはじめたのである。
源五郎の感情は、山岸十兵衛を憎むどころではない。
十兵衛をも、他の家族と共に、
（何ともして、助け出したい……）
源五郎は、そう考えていたほどなのだ。
それほどの男を、いま、父の敵だから、
「憎め」
といわれても、人間の感情というものは、それほど合理なものではないのである。
愛と憎しみのこころは、まことに紙一重のものといわねばなるまい。
湯殿から、先ず出て来たのは山岸十兵衛である。
それから、かなり長い時間が過ぎて、上田源五郎があらわれた。

そのまま源五郎は、正子が待つ部屋へ入った。
湯殿へは、いま、勝千代が入っている。
「ずいぶんと、長うありましたな」
と、正子が源五郎にいった。
「うむ。父上とな、いろいろと語り合うていたゆえ……」
と、こたえた源五郎の態度には、正子から見て、いささかも異常がない。
もっとも、明日は主の山岸十兵衛が松井田城を救援するため、決死の出陣をするのだから、この屋敷内に笑い声が起るわけもない。
さすがに、正子も沈痛の面もちであった。
「あの……父上は、やはり、明夜に出陣をなされますのか？」
「うむ。お供をいたそうとおもったが、ついに、おゆるしが出なかったのだ」
「いや、いや……」
正子が、ひしと源五郎へ抱きついてきて、
「源五どのまで討死をなされたなら、母上をはじめ、勝千代も私も……」
「待て。父上だとて、敵の囲みを突き破り、松井田の城へ入ることができれば、討死なさることもあるまい」
「なれど……」
「また、この城にいても、生き残ることはむずかしい」

正子は、うなだれた。
山岸十兵衛は、丹波村の板垣甚十郎方へ、三人の家族を逃がそうとして、これを源五郎に依頼した。
だが、このことを家族には打ち明けていないらしいと、源五郎は看ている。
なまじに、家族たちへ生きる期待をあたえてはいけないと思慮したのであろう。
十兵衛は、自分が出撃した後で、甲賀忍びの上田源五郎が、正子や勝千代、於丹を、
（どのように、あつかうであろうか……？）
この一事が、気がかりであったのではないか、と、上田源五郎はおもった。
明夜の出撃をひかえたいま、突然、十兵衛は我から、源五郎の亡父の敵と名乗り出た。
（いったい、山岸十兵衛は何を考えているのか……？）
もしやすると、
「父の敵の自分を討て。そのかわりに、家人たちを逃してやってくれ」
十兵衛は、そう言いたかったのではあるまいか……。
いずれにせよ、ついに、源五郎は潜り蜂をつかみ取ることができなかった。
そして十兵衛直勝は、無言で湯を浴び、源五郎を残して湯殿から去ったのである。
（負けた……おれとしたことが、手も足も、出なかった……）
その夜。不安に戦く正子を抱きしめてやりながらも、上田源五郎は先刻の湯殿での自分の不甲斐なさに、胸の底で舌打ちをしていた。

が、ふしぎなことに……。

山岸十兵衛を亡父の敵として憎む気には、どうしてもなれぬ。

これは源五郎の幼いころから、父の小杉重六が、

「父が、敵に討たれたとても、その敵を怨むまいぞ。憎んではならぬぞ。甲賀忍びが忍び死をすることは、すこしも、めずらしいことではないのだ。いちいち、親の敵へ怨みをかけていたのでは、自分の忍びのはたらきに障りが生ずる。このことを、よくよくおぼえておけ」

口癖のように、いいふくめていた所為なのか……。

私事の憎悪や怨念にとらわれ、本来の役目を忘れてはならぬというのが、甲賀の掟でもある。

むしろ、いまとなっては、

(山岸十兵衛ほどの男と正々堂々と闘って果てたのだから、父も、さぞ、本望であったろう……)

そのおもいを源五郎は、どうしようもないのだ。

けれども、自分が甲賀の指令による山岸十兵衛暗殺を遂行できなかったことについては、

(おれとしたことが、何たる態だ……)

甲賀の忍びの者の生きざまに徹しきれなかった自分が口惜しい。

(よし。このまま、だまってはおらぬぞ)

ようやくに眠りはじめた正子の寝息を左の頬に感じながら、源五郎は唇をかみしめた。

では、どうするか……。

あらためて、山岸十兵衛を討つことはむずかしい。

たとえば、これから源五郎が十兵衛の寝所へ忍んで行き、襲いかかったとしても、

(到底、討てぬ……)

ことは、先刻の湯殿での事をみてもわかろうというものだ。

裸身の背を向けた相手に、源五郎は圧倒されてしまっている。

(だが、おれにも仕様がある。いまに見ておれ、十兵衛……)

これは、憎悪でも怨恨でもない。

また、十兵衛の過去が武田忍びの〔飯田彦蔵〕でなかったら、はなしは別のことになっていたろう。

同じ忍びの者に後れをとったのでは、源五郎の誇りがゆるさぬ。

(さて、どうしてくれようか……)

さまざまに考え、おもいめぐらし、ついに一睡もせずに朝を迎えたわけだが、板戸の隙間から、白い朝の光りがのぞいたとき、

「むうん……」

正子が微かに声を発し、夢現のうちに源五郎の胸肌へ顔を擦り寄せてきた。

そのとき、源五郎の脳裡に閃くものがあった。

(そうだ!)

源五郎の双眸がかがやいてきた。

（これがよい。これならば、うまく仕てのけられそうだ）

頸すじへ、正子の双腕が巻きついてきた。

「正子……」

耳もとへささやきつつ、源五郎が正子を抱きしめた。

「あ……源五どの……」

「間もなく、日が昇ろう。今日は父上が御出陣なさる。辛いことであろうが、笑顔を見せていなくてはならぬ。よいか。よいな……」

「は、はい」

正子が甘え声で、

「源五どののさえ、いて下さるのなら……」

「父上は、供をゆるして下さらぬゆえ、仕方もあるまい」

いいつつ、源五郎の右手が正子の乳房をまさぐりはじめた。

「あ……このような時刻に……」

「よいわ」

「なれど……」

「まだ、だれも目ざめてはおらぬ」

正子を愛撫するのも、

（これが、最後になるやも知れぬ）

源五郎は、そうおもった。

いま、自分がおもいついた計画のすべてが、うまく運ぶとはかぎらぬからだ。

山岸十兵衛のみに対しては、

（今度こそ、後れをとらぬぞ）

その自信があふれてきたけれども、正子や勝千代、於丹などの始末については、

（どうなるか、知れたものではない……）

ことになってしまった。

短いが、激しい一時がすぎて、源五郎は湯殿へ行き、音がせぬように水を浴び、寝所へもどると、身仕まいをすませていた正子へ、

「髪を、ととのえてくれ」

と、いった。

奥庭が、初夏の朝の日ざしに明るみを増し、小鳥のさえずりがわき起りはじめた。

城内のどこかで、軍馬の嘶きが聞こえる。

山岸十兵衛も、目ざめたようである。

朝餉になって、源五郎は十兵衛と顔を合わせたが、平常と変らぬ態度で朝の挨拶をし、十兵衛もまた、微笑をたたえ、これにこたえた。

（いまに見ておれ）

源五郎は、闘志が顔にあらわれるのをおそれ、むしろ、沈痛な表情となっている。
それがまた、この朝には、ふさわしかった。
朝餉をすませた十兵衛直勝は、すぐさま、本丸の御殿へおもむいた。

相模野

この日の夜ふけに……。
久永但馬守と山岸十兵衛がひきいる五百の部隊が、鉢形城を出発して行った。
出発にあたり、北条氏邦は、但馬守と十兵衛へ、
「そのほうたちのみを、死なせはせぬ」
と、いい出たのは、自分も、鉢形城で最後まで戦いぬき、討死を遂げる決意をしめしたのだ。
氏邦の両眼から熱涙がふきこぼれ、
「冥土で会おうぞ」
と、いった。
久永但馬守も感涙を浮かべていたが、山岸十兵衛は、むしろ、さっぱりとした面もちである。

剛気な北条氏邦が、このように感情を露骨にするのは、めずらしいことであった。
氏邦が笑顔を見せて送り出してくれたほうが、十兵衛の意に適っている。
(御屋形は、この期におよんで、何故、涙なぞを見せられるのか……)
そこが、わからなかった。
十兵衛の屋敷では、妻の於丹も、勝千代も正子も、さすがに笑顔は見せなかったけれども、一滴の涙もこぼしてはいない。
死線におもむく戦士を、涙で見送って、その闘志を挫くようなことは女だとてせぬ時代であった。
しかも「冥土で会おう」などという言葉は、北条氏邦に似つかわしくない。
感傷は、戦士に必要がないはずだ。
(御屋形の心は、弱くなっておられる……)
ふと、そう感じたが、氏邦が鉢形城主として玉砕することは、
(まぎれもない……)
ことだと、十兵衛は信じてうたがわなかった。
三の丸の屋敷を出るとき、山岸十兵衛は、見送りに出た家族の人びとへ、にこりと笑いかけたのみで、一言も口には出さなかった。
上田源五郎へは、ついに、この日、一語も洩らしてはいない。
源五郎も、また、十兵衛へ語りかけようとはせぬ。

五百の鉢形勢は、粛然として城門を出て行った。

これを見送る将兵にも、声はない。

見送る者は、いずれも、この決死の部隊が上州・松井田城を包囲する敵の背後から突進し、うまくいけば城内へ入って、その戦力となるための奇襲作戦だと、おもいこんでいる。

それから間もなく、上田源五郎の姿が鉢形城内から消えた。

源五郎の姿が屋敷内に見えぬのに、先(ま)ず気づいたのは正子であった。

「まさかに、父上の後を追うたのでは……？」

たまりかねて勝千代にいった正子へ、

「姉上。ま、落ちつきなされ」

十六歳の勝千代が、ものしずかに、

「源五どのは、父上のいいつけに叛(そむ)くような人(じん)ではない」

姉をなぐさめるようにいったが、その後で、

「なれど、もしも、源五どのが父上と共に死場所をもとめているとなれば、それも、いたしかたのないこと」

と、いったものである。

昨日の夜から今日にかけて、勝千代の言動が変った。

正子から見ても、この弟が急に、自分よりも年上の男……一人前(ひとりまえ)の大人(おとな)になったようにおもえてきた。

「先ず、気をしずめなされ」

姉の肩へ手を置き、勝千代がやさしく、

「この勝千代がついています」

「か、勝千代どの……」

「父上より、昨夜、うけたまわったこともあります。母上と姉上のことは、生くるにせよ死ぬにせよ、勝千代が引き受けまする」

いかにも、たのもしげな勝千代ではないか。

つい先頃までは、子供のようにおもっていた弟の顔を、正子は声もなく見まもった。

「源五どのは鉢形勢の出立(しゅったつ)を城門まで見送りに出たのち、御城内の何処(どこ)かにいるのでしょう。間もなく、もどってまいります」

「は、はい……」

「さ、気をしずめなされ。そして、母上のお側にいてあげて下され」

「はい。そういたします」

おのずから、正子が弟へ対する言葉づかいもあらたまってきている。

勝千代は、屋敷へ居残った家来たちへ、何か指図をするため、部屋を出て行った。

（そうじゃ。源五どのが父上の後を追うて行くはずもない）

源五郎は、武装もしていなかったのだ。

正子は気を取り直し、母の於丹の部屋へおもむいた。

そのころ……。

上田源五郎は、難なく鉢形城を脱け出していた。

源五郎は、城外の森の中へ走り込み、身仕度にかかった。

月も星もない暗夜である。

このとき、上田源五郎は、本丸の西側の崖から、鉤縄を使って荒川の河原へ下りた。

この経路は、お万喜や夜張りの助七が城内へ潜入して来るときのものだ。

いまもって、このあたりの警備は手薄になっている。

このような、切り立った崖と樹木の密生した箇所から城内へ忍び入って来る者があろうとは、おもってもみないらしい。

これは、鉢形城の北条方に、忍びの者がいないからであった。

敵の城や領国を探りに出たりする家来はいても、それは、かつての武田忍びや甲賀忍びのように、幼少のころから専門の訓練を受けたわけではない。

すぐれた忍びの者が北条方にいたなら、この本丸・西側の崖へ密かに設けられた〔忍び道〕も、すでに発見されていたにちがいない。

源五郎は、かつて、自分が寝起きしていた部屋の床下を掘り、埋め込んでおいた忍び道具のうちから、

(これぞ……)

と、おもう物をえらび、これを小さな荷物にしておいた。

いま、源五郎は河原の繁みに隠れて、その荷物を解き、小袖と袴を脱ぎ捨てた。

その下に、源五郎は灰色の筒袖の上着をあらかじめ着込んでおいたのである。上着の丈は膝のあたりまでで、これも灰色の股引をつけていた。

荷物の中から〔忍び草鞋〕をつけ、例の墨流しを懐中にし、腰には脇差を帯びた源五郎は、二、三の忍び道具を身につけてから、

「これで、よし」

河原の闇に溶け込み、小走りに走り出した。

さて……。

久永但馬守と山岸十兵衛がひきいる五百の鉢形勢は、松明の数も少なくして、あくまでもひそやかに荒川を越え、丘陵の狭間の道を北東へ進む。

これは、まさしく、松井田へ向っているとしかおもわれぬ。

ところが、鉢形城を出て三里ほども進むと、部隊はゆるやかに右へまわりはじめた。

松井田へ進むと見せて、反転したのである。

(あ……)

部隊の後を尾けていた上田源五郎は、

(なるほど……そうだったのか)

はじめて、この出撃の意味がわかってきた。

(そうか……松井田を助けるほどならば、小田原での戦さで、おもいきり荒れまわろうとい

うのだな。おもしろい。そのほうが、おれにとってもおもしろい）

源五郎は、勇躍した。

（さて、こうなったからには、どうしてくれようか……）

ひそやかに闇の中を行進する鉢形勢を尾行しつつ、源五郎の想念は目まぐるしく回転した。

それも、長い時間ではなかった。

（よし）

源五郎は決意し、いったん、鉢形勢から離れた。

五百の鉢形勢が、小田原へ向いつつあることは、もはや判然としている。

鉢形部隊から離脱した源五郎は、反転して疾走しはじめた。

丘を下り、田畑の道を、すばらしい速度で荒川の東岸へ出た源五郎が、高山の鐘撞き堂へあらわれたのは、それから半刻（一時間）を要さなかったろう。

この夜。

飯道弥平次は、一人で鐘撞き堂下の小屋に詰めていた。これは、異変が起ったとき、諸方へ連絡に走ることになっている。

上の鐘撞き堂には二人の足軽が詰めており、他の四名の足軽は、いま、すこしはなれた窪地に設けられた小屋で眠っているはずだ。

「弥平次……弥平次……」

「お……源五どのか」

「久永但馬守と山岸十兵衛が五百の鉢形勢をひきい、小田原へ向った」

「なに……すりゃ、まことか？」

鐘撞き堂の足軽たちの耳へは、まだ、鉢形勢が松井田城の救援におもむくことも入っていないらしい。

これは、久永但馬守が、よほどに厳しく、鉢形城内の将兵の口を緘したにちがいない。

「源五どの。何故に早う、知らせてはくれなんだのでござる？」

弥平次の目が鋭く、源五郎を見据えた。

「おれだとて、先刻、知ったばかりなのだ」

「ふうむ……」

「これは、北条氏邦と久永但馬守が密かに、しかも突然、兵馬をととのえた上で、山岸十兵衛へ呼び出しがかかったのだ。十兵衛もおどろいていた」

「なるほど……」

飯道弥平次は、自分の耳へも出撃のうわさが聞こえていないことから、一応、源五郎の言葉を信用したようである。

「弥平次。おれは、甲賀の頭領様から、山岸十兵衛を討てと御指図を受けている」

「まことでござるか？」

弥平次の視線が探るように、源五郎の顔を、躰を執拗に見まわした。

十兵衛暗殺の件を、お万喜は弥平次に、まだ洩らしてはいないらしい。

「弥平次。このことを、一時も早く知らせねばならぬ」
と、源五郎がいった。
小田原は、まだ、完全に包囲されつくしてはいないが、豊臣軍の諸部隊へ、鉢形勢の小田原突入のことを知らせておかぬと、その入城を、やすやすとゆるしてしまうことになる。
「おれは、これから後を追って、鉢形勢が小田原へ近づく前に、山岸十兵衛を討たねばならぬ」
「源五どの一人にて？」
「そうだ」
「大丈夫でござるかな……」
飯道弥平次が、薄笑いを浮かべた。
言下に上田源五郎が、
「では弥平次。おれと共に来てくれるか？」
「む……」
弥平次は、苦い顔つきになった。
行きたくても、行かれぬはずである。
源五郎が、このまま鉢形を脱け出してしまえば、城内に残る甲賀忍びは、飯道弥平次一人のみだ。
せめて一人は鉢形城内に残っていないと、これからの前田・上杉両軍の城攻めを城内から

たすけることができぬ。
また、頭領・山中大和守俊房から、飯道弥平次に「城を脱出せよ」との下命はない。
いまの弥平次にとっては、この鐘撞き堂から城下へ急行し、研師・長谷重左の忍び宿へ、源五郎からの報告を伝えることが何よりも大事なことであった。
そして、だれにも気づかれぬうち、すぐさま弥平次は此処へ引き返して来なければならぬ。
「それとも弥平次。おれが城下の忍び宿へ駆けつけてもよい。城下の何処に、甲賀の忍び宿があるのだ？」
「う……」
弥平次が、忍び宿の所在を自分に打ち明けたくないことを、源五郎はよくわきまえている。
すでに源五郎は、この一月に夜張りの助七が山岸屋敷へ忍んで来たとき、長谷重左が鉢形城下へ住みついていることを察知してしまっている。
けれども、それを、気振りにも見せなかった。
「よろしゅうござる。わしが手配りをいたそう」
しぶしぶと、弥平次が腰をあげた。
「おれは十兵衛を討ち取ったなら、その足で甲賀へおもむき、二度と鉢形へはもどらぬ。では、たのむぞ」
「心得た」
源五郎は、お万喜から、十兵衛を討ったのち、小田原の忍び宿へ入るように指図を受けて

いる。

だが、それを、そのまま弥平次へ語ったのでは、怪しまれることになるのだ。

これから飯道弥平次が、長谷重左の忍び宿へ鉢形勢の出撃を知らせると、重左は待機していた山中忍びを小田原へ急行させるであろう。

小田原城下に住みついている鍛冶師・才九郎の忍び宿へ急報すれば、たちまちこれが、豊臣軍の〔指令部〕へ報告される。

ゆえに、源五郎が傍目もふらず、一気に小田原へ急報し、すぐさま引き返して、小田原へ近づく鉢形勢の中の山岸十兵衛を襲ってもよいことになる。忍びの者の脚力をもってすれば、さほどに、

「困難なことではない」

はずであった。

しかし、十兵衛を殺してのち、すぐに甲賀へもどるとなれば、いかに上田源五郎といえども、一度にいくつものことをやってのけられるはずがない。

いずれにせよ、これから鉢形勢へ追いつき、軍列の中の山岸十兵衛の隙をねらわねばならぬのだから、

「目は離せぬ……」

ことになるし、みだりに諸方を飛びまわって、気を散らせてはならぬ。

これは、飯道弥平次も心得ているはずである。

ただ、このさい、どこまでも弥平次に疑念を生じさせてはならぬと考えたまでだ。

「では、たのむぞ、弥平次」

いいおいて、上田源五郎は小屋から出て行った。

高山の木戸の見張りを突破することなど、源五郎にとって、わけもないことであった。

鉢形城外へ出てから、源五郎は闇を切って疾走した。

（弥平次が後になって、怪しむやも知れぬ……）

走りつつ、源五郎は、そうおもいはじめている。

もとより、甲賀からの下命と、今夜の源五郎の言動とを後になって照らし合わせてみれば、いろいろと不自然なところも出てくるにちがいない。

「何故、山岸十兵衛が出陣する前に討たなかったか？」

と、先ず、頭領・山中俊房が疑念を抱くのではないか……。

（仕方もないことよ。おれは、まさに甲賀を裏切ろうとしているのだ）

まだ、汗も滲んでいない自分の若い躰が夜気を切り裂いて走るのは快いことであった。

いまの源五郎は、湯殿の中で十兵衛に後れをとった無念さを、これから、

（はらしてくれる！）

その一念に、忍びの者の情熱を燃やしている。

ただ、そのためには、何としても豊臣軍が鉢形勢を迎え撃ってくれぬと困る。

五百の鉢形部隊は、大きく迂回しつつ、鉢形城の東方約五里の地点で荒川を南へわたった。

まだ、夜は明けていない。

「急げ」

と、山岸十兵衛が命じた。

いまのところ、松明を連ねてというわけにはまいらぬ。

それだけに、松明をかかげた先導の騎士たちと、連絡・伝令をつとめる兵士の苦労は、ひとかたならぬものがある。

（ついに、源五めは、わしを討てなかった……）

前方の闇にゆれている先導の騎士たちの松明の火に眼を凝らしながら、山岸十兵衛は、

（かくなれば、家人のことは源五郎にまかせるより仕方がない）

と、おもった。

さすがの十兵衛も、いまの源五郎の意中を推しはかることはできぬ。

何といっても、上田源五郎は甲賀の忍びなのだ。

源五郎は、どうやら、この鉢形勢が松井田城の救援のためのものであると、信じているようにおもわれる。

もしやすると源五郎は、このことを、松井田城の包囲を完了した前田・上杉軍へ急報するための、

（手を打ったやも知れぬ……）

いや、その可能性は大いにあるといってよい。

この奇襲を万全のものとするためには、

（先ず、源五めを討ち取ってしまわねばならぬ）

と、山岸十兵衛はおもった。

だが、あえて討たなかった。

いや、討てなかったといったほうがよいであろう。

（何故か……何故、討てなかったのか……？）

いまにして十兵衛は、自分の胸に問いかけてみる。

むすめ聟としての源五郎に、岳父としての愛情をおぼえていたからであろうか……。

源五郎を討たずに鉢形へ残しておいたのは、妻や子たちの脱出のちからになってもらいたかったからなのか……。

それとも、立派に闘って自分に討たれた源五郎の亡父のことをおもい、われ知らず、情をかけてしまったのか……。

（わからぬ……）

馬上にゆられつつ、十兵衛は微かに笑った。

強いていうなら、そうした一つ一つの要因が、さらに、一つの直感として十兵衛をうごかしたといえよう。

十兵衛は、裸の背中を相手に向けたままで、我から源五郎の父の敵だと打ち明けた。

そして、上田源五郎は十兵衛の気魄に負けたのである。

湯殿での対決に、山岸十兵衛は、すべてを賭（か）けたといってよい。

のぞむところは、源五郎が妻や子たちを、無事に丹波の里の板垣甚十郎方へ送りとどけてくれることだ。

しかし、今朝早く、十兵衛は念のために、息（そく）・勝千代へ、板垣甚十郎の所在をつたえておいた。

「この城は、やがて落ちる」

十兵衛は、はっきりと、十六歳の勝千代へいいわたした。

「なれど、そのときには、すでに、父は討死をしていよう」

このたびの出撃で戦死することにより、鉢形城主・北条氏邦へ対する義理と忠誠を、山岸十兵衛は、

「じゅうぶんに果した……」

ことになる。

「なれば、これよりは勝千代が山岸家の当主として、おもうままに母をまもり、姉をまもってもらいたい。この城で、むざむざと犬死をすることはいささかもないのじゃ。わかったか」

勝千代は、意外に動揺を見せず、

「父上。板垣甚十郎殿のことは、上田源五郎殿へも？」

「おお。しかと申し聞かせてある。なれど源五郎は、われらの血筋ではない。いざとなった

るとき、源五郎をたのむもよし、たのまざるもよし。何事も、勝千代が決めてよい」

「わかりました、父上」

上田源五郎は、湯殿の事あってより、口をきかなかったし、十兵衛も声をかけなかった。

（いま、わしが胸におもうていることを、源五郎も、おもうていよう）

鉢形勢は、比企（ひき）の丘陵地帯の東端を南へ進みつつあった。

雨が、落ちてきたようだ。

夜明けも近い。

上田源五郎が鉢形部隊へ追いついたのは、このときであった。

鉢形勢の所在をつきとめたからには、自由自在の尾行が可能である。離れたり接近したり、前になり、後になり、または側面から、軍列のうごきを注視しつつ、源五郎は木立を縫い、野面（のづら）に身を低めて走っている。

（何故、十兵衛は、出陣にあたって、おれを討たなかったのか……？）

源五郎も、走りながら、十兵衛の意中を推し測っている。

（おれが、山岸の家人を丹波の里へ送りとどけるとでも、十兵衛はおもっているのであろうか……）

敵味方の立場をはなれ、一箇の忍びの者として、勝負を決しようとしている源五郎だとは、

（十兵衛も、おもってはいまい）

これは、たしかなことだ。

空が白みはじめると、風が出てきて、雨も熄んだ。
雲が、しきりにうごいている。
先発させておいた十名の物見（偵察）のうちの三名が引き返して来て、鉢形勢と出合った。
この三名は、まだ、小田原までは行き着いていない。
とりあえず、行手の多摩の丘陵地帯あたりまでの様子を、たしかめてきたのであった。
それより先は、残る七名の物見が進み、順次、後続の鉢形勢へ状況を知らせてくることになっている。
三名の物見の報告によると、これは予想したことだが、果して豊臣軍は、まだ侵入していないとのことだ。
「よし。尚もぬかりなきように」
久永但馬守は、三名の物見にいった。
多摩の兵陵には、味方の八王子城があるし、この城へ敵が攻めかかるためには、松井田・鉢形の両城を落してしまわなくてはならぬ。
しかし、山岸十兵衛は、
（もしや、甲州の方向から、敵が侵入してはいないか……？）
そうおもって、慎重に物見をさせたのである。
三名の物見は、小田原の方へ引き返して行った。
「どうやら、戦わずに小田原へ入城できそうじゃ」

と、久永但馬守がいった。
豊臣軍は、一応、箱根の諸城や砦を制圧したと見てよい。
だが、そのまま、全軍が小田原へなだれ込むわけにはまいるまい。
先ず箱根の備えをかため、徐々に小田原を囲むことになろう。
「なれど、急がねばなりませぬ」
山岸十兵衛は、前夜からの行軍にも、まだ疲れをみせていない鉢形勢を、
「このあたりで、二手に分けてはいかがでござろう」
但馬守へ進言した。
「なるほど……」
二手にわけて、つかずはなれずのかたちをとりながら、小田原へ進むのだ。
万一の事があった場合、このほうが、うごきやすい。
ともかくも、今夜のうちに小田原へ入ることはむずかしい。
全員が馬に乗っているわけではないのである。
また、折々は、兵をやすませなくてはならぬ。
小田原へ入るのは、早くとも、明日の昼ごろになるとみてよい。
飯道弥平次の急報を受けた研師・長谷重左がさしむけたはずの忍びの者は、別の道を全力疾走して、今日の午後には、小田原の忍び宿へ走り込むにちがいなかった。
鉢形勢は、二手にわかれた。

先鋒は、山岸十兵衛が二百の部隊をひきい、それから約半里の後方を、久永但馬守が三百の部隊を指揮してつづく。

鉢形勢は、日が昇りきってから朝食をすませ、およそ二刻（四時間）の仮眠をとった。

それから、全速力で進みはじめた。

武蔵野台地の北から西の端を進んでいた鉢形勢が、狭山丘陵を越えたのは、午後になってからである。

前方に、多摩丘陵が横たわっている。

その右方に、味方の八王子城があるわけだが、山岸十兵衛は、部隊を斜め左の方へ移動させた。

これは、八王子城の見張りの目を避けたのだ。

何も、いまは、味方の目を避けることもないのだが、

「味方をも、あざむかねばならぬ」

このことであった。

味方のみではない。

すでに、八王子城の近くへは、豊臣方の探りの目が光っているやも知れぬ。

鉢形城にさえ、三年も前から、上田源五郎という甲賀忍びが、ほかならぬ山岸十兵衛の家来になりすまして潜入していたではないか。

鉢形勢の行進は、途中の農家の人びとの目にとまっているし、旅人にも見られている。

日数をかけられるなら、夜の行軍にして、昼は人の目につかぬところにとどまっているほうがよい。

しかし、いまは、その余裕がない。

豊臣軍の包囲が完了しきらぬうちに——小田原城へ入ってしまわねばならぬ。

夕闇が濃くなったころ、また、三名の物見があらわれた。

これは、今朝の物見たちとは別の三名だ。

「いかがじゃ？」

と、尋ねる山岸十兵衛へ、

「久野口、井細田口、荻窪口のあたりには、いまだ敵勢の影も見えませせぬ」

物見たちが、口ぐちに報告をした。

そこは、小田原城・外郭の北面にあたり、北条方の太田氏房（武州・岩槻城主）が主将となり、一万二千ほどの兵力で守備をかためているという。

太田氏房は、老公・北条氏政の次男にあたる。

岩槻の居城を家来たちにまもらせ、氏房は、父・氏政や兄・氏直の本城へ駆けつけて来たのであった。

「海の方は、いかがじゃ？」

「は。酒匂口の海には、徳川・長宗我部などの軍船が、およそ、二、三十ほど……」

「ふうむ……」

「早川口の海上にも、数多の軍船が見えまいてござる」

豊臣軍の小田原城包囲は着々とすすめられている。

小田原の海上に、それほどの敵の軍船が浮かんでいるのでは、北条方の水軍も、

「手も足も出ぬ……」

といってよい。

海上は、完全に封鎖されてしまった。

小田原城の南方から西方にかけては、おそらく豊臣軍の諸部隊が陣を構えてしまったろうが、北方へは包囲の線が伸びて来てはいないらしい。

（どうやら、間に合うたな……）

山岸十兵衛は、微かに笑った。

小田原へ入城した後の鉢形勢については、

「本家の指図を受けなくともよい。おもうままに荒れまわってほしい」

と、北条氏邦が十兵衛と久永但馬守にいった。

小田原へ入り、敵状を見てからでないとわからぬが、山岸十兵衛は敵も味方もおもいおよばぬような、

（暴れ方をしてくれよう！）

決意をかためている。

十兵衛は、豊臣秀吉の本陣を奇襲するつもりだ。

敵が、北条方を、

「手も足も出ぬ……」

と、見きわめをつけていることこそ、

（われらの付け目じゃ）

なのである。

包囲された小田原城内から出て行って、敵の総大将がいる本陣を襲う、などということは、だれの目にも不可能に見えよう。

それこそ、忍びの者の感覚からいえば、付け目なのだ。

夜の闇にまぎれ、分散して密かに城を脱け出し、敵中へまぎれ込みながら、本陣へ迫る。

そして、一斉に攻撃を仕掛ける。

「何を愚かな……」

と、本家の北条父子は笑うやも知れぬ。

だが、十兵衛には自信があった。

小田原城へ入り、敵の包囲が完了したのちに、十兵衛は単身、城を脱け出し、〔武田忍びの飯田彦蔵〕の自分となって、敵陣を探るつもりだ。

敵は、勝利をうたがっていない。

そこに、隙も油断も生ずる。

（いくらも、手段はある……）

けれども、秀吉の本陣を奇襲したとて、秀吉の首を獲ることはむずかしい。

それでもよい。

五百の鉢形勢が秀吉の本陣へ奇襲し、全員が玉砕する。

それだけで、山岸十兵衛の目的は充分に達せられたことになる。

これから、夏が来る。

海が荒れる夜もあろうし、豪雨・雷雨の夜もあろう。

奇襲の敢行にふさわしい天候や夜が、

（いくらでもあるにちがいない）

と、十兵衛は考えていた。

「よし、尚も見張りをたのむ。どのようなことでもよい。気がついたことあらば、すぐさま知らせよ。いずれにしても連絡を絶やすな。よいか」

十兵衛が、三名の物見にいい、このうちの一人を、後方にいる久永但馬守へ報告に走らせた。

他の二人の物見は、すぐさま、小田原の方へ引き返して行った。

夜に入ってから、多摩川をわたった鉢形勢は、八王子城の東方五里をはなれた地点で、この日、二度目の腹ごしらえをした。

久永但馬守の部隊も、ここで合流し、兵士たちへ一刻（二時間）休みがあたえられた。

あとは、夜道をかけて一気に進み、小田原へ入る。

「これなら、大丈夫じゃ」

久永但馬守の声も力強い。

「のう、十兵衛殿。小田原へ入ったのちは、わしは一言も口を出さぬ」

「何と申されます……？」

「おぬしの指図に従って、はたらくつもりじゃ」

「いや、それは……」

「おぬしが鉢形の御屋形へ仕えてより、この方、わしはおぬしの戦場でのはたらきぶりを見きわめている。さすがに信玄公以来の武田の遺臣。戦陣の駆け引きは、わしもおよばぬ」

指揮官が二人いては、鉢形勢の機動性が失われるというのだ。

わずかに、五百の部隊なのである。

これを、指揮官が手足のようにはたらかせてこそ、出撃の意図が生かされる。

「わしも、おぬしの手足の一つとなろうよ」

久永但馬守は、こういってくれた。

「かたじけのうござる」

あえて十兵衛は、こころにもない辞退をしなかった。

いったんは熄んだ風が、また、出てきはじめた。

雲間に、星が光っている。

山林の中には、新緑の匂いが生ぐさいまでにたちこめていた。

鉢形勢は、夜半に多摩丘陵を越えた。

上田源五郎の眼が、これを見まもりつつ、闇の中を音もなく移動して行く。

（はて……？）

山岸十兵衛は、ふたたび、久永隊とは半里の距離をおいて先に進んでいたが、

（物見の知らせが、そろそろ、あってもよいはずだが……）

ふと、おもった。

しかし、それは、危惧というほどのものではなかった。

夜のことだし、物見の者たちも、おもうさまの活動ができるわけではない。

それに彼らも、かわるがわるに躰をやすめなくてはならぬ。

（わしも、どうかしている……）

十兵衛は、苦笑を浮かべた。

多摩丘陵をこえた鉢形勢は、相模台地を、やや斜めに突切り、相模川をわたって、丹沢の山脈の東の裾へ取りつこうとしている。

それから、相模の大山の南麓にある曾屋（神奈川県・秦野市）の宿駅へ到着し、そこで一息入れ、腹ごしらえをしてから、

「一気に、小田原へ入る……」

ことになっていた。

この一月に、小田原での軍議を終えた北条氏邦が、鉢形へもどる第一夜を曾屋ですごした折に、山岸十兵衛が密かに脱け出し、小田原へ引き返した。

そして、法城院へ潜入し、心山和尚を暗殺したのち、十兵衛は疾風のように曾屋へもどり、何くわぬ顔をしていたものである。

曾屋の宿駅から小田原城下までは、六里ほどだ。

曾屋へ到着したなら、こちらからも物見を出し、先発の物見たちをたすけてやらねばなるまい。

いずれにせよ、夜が明けぬうちに小田原へ入ることはできぬ。

夜が明ければ、当然、豊臣軍もうごき出すにちがいない。

だが、包囲の線が小田原城の北面へ伸びてくるまでには、

（まだ、二日ほどはかかるにちがいない）

と、十兵衛は看ていた。

先発の物見たちの報告から推してみてもそうなる。

ともあれ、豊臣軍は事を急がなくともよい。

北条軍は小田原城へ立てこもってしまったのだ。

これを、焦って取り囲むよりも、万全の包囲陣形をととのえる必要がある。

ことに北面は、太田氏房が一万二千の兵をひきい、備えをかためているのだから、豊臣軍が迂闊に包囲線を伸ばした場合、城内から北条勢が出撃して、端から、

「打ち叩く……」

ことも考えられる。

(敵が小田原城の囲みを終えるのは、早くとも明後日になろう)

これは、久永但馬守も同意見であった。

「小田原へ入ったなら、おもうさま、やすませてつかわす。それまでは気をゆるめてはならぬぞ」

十兵衛は、二百の兵に、この言葉をつたえさせた。

「急げ!」

山岸十兵衛は、命を下した。

久永但馬守がひきいる三百の部隊は、半里の後方を進んでおり、双方の間を絶えず、伝令が往き来している。

鉢形勢も、すっかり夜の行軍に慣れてきたようだ。

松明をかかげた先導の一隊は、相模台地の草原をまっしぐらに進み、伝令の騎士は後続の部隊をつなぐために、馬腹を蹴って走る。

鉢形の家来たちは、このあたりの地形にくわしい。

本城の小田原との往復に、むかしから通い慣れている。

夜明けも間近くなってきたが、また、風が強くなりはじめた。

雲が、しきりにうごいているらしい。

二手にわかれた鉢形勢は、曾屋の宿駅で落ち合い、あとは合流して小田原へ入ることになっていた。

山岸十兵衛の部隊は、細長い丘陵を越え、相模川に近づきつつあった。

相模川をわたると、曾屋までは五里にみたぬ。

(物見たちは、いかがしたのであろう……?)

今度は、微かな不安をともなったおもいが、十兵衛の脳裡を過った。

(妙な……?)

鉢形勢が、このあたりまで進んで来ていることを、先発の物見たちは、

(よく、わきまえているはず……)

であった。

曾屋の宿駅も、近づきつつある。

これまでの物見たちの、行きとどいた報告からみても、異常がなければ、ないと知らせてくるはずではないか。

「連絡を絶やすな」

と、十兵衛は、物見たちへ念を入れてあった。

(ぬかりはないとおもうが、こなたからも物見を出しておいたほうがよい)

十兵衛が部隊を停止させ、五名の騎士をえらび、前方を警戒させることにした。

一里ほどの間隔をたもち、つぎつぎに、前方の異常の有無を、

「知らせてまいれ」
と、十兵衛は命じた。
「かしこまった」
五名の騎士の馬蹄の音が消えたのちに、
「しばらくは、ゆるゆると進め」
先導の騎士たちへ命じた十兵衛は、このことを後方の久永隊へもつたえさせた。
風が、いよいよ激しさを増してきた。
馬上の山岸十兵衛は、むずかしげな顔色になっていた。
異変が起ったのは、このときである。
歩調をゆるめて進む鉢形勢の、右手の闇が、
（突如、膨れあがった……）
かのようにおもったとき、
「うわあ!!」
一斉に、鬨の声があがった。
味方ではない。
まさしく、敵なのだ。
敵が、暁の闇の底に、待ち受けていたのだ。
「槍を、槍!!」

山岸十兵衛は、馬側に従っていた足軽の手から自分の槍を引きつかんだ。
おもいもかけぬことであった。
（源五郎が、われらの小田原入りを知って、徳川方に知らせたのか……？）
そこまでは、十兵衛も考えてみなかった。
事実、上田源五郎も、鉢形城を出て行く部隊は松井田城救援のためのものと、おもいこんでいたのである。
反転して小田原へ向う鉢形勢を、わが目に見とどけなかったら、源五郎は飯道弥平次へ、
「山岸十兵衛が五百の兵をひきいて、松井田城へ向った」
と、知らせたにちがいない。
「引け、引けい!!」
叫ぶうちにも、闇の幕を割って敵勢が殺到して来る。
隊伍をととのえる間とてなかった。
微かに明るみが加わった暁闇に敵の槍が無数に煌めき、押し寄せて来る。
たちまちに、山岸十兵衛は戦闘の渦の中へ巻き込まれた。
「うぬ!!」
馬首をめぐらし、十兵衛は二人の敵を突き殪した。
どこかで、けたたましく陣鉦が鳴りはじめた。
馬が嘶き、狂奔する。

叩き合い、突き合う槍と槍……。

怒号と絶叫……。

十兵衛は焦った。

(このことを、早く、久永但馬守殿へ知らせなくては……)

だが、命を下す余裕とてなかった。

馬を駆け寄せて来て組み付こうとした敵の、兜の下の顎のあたりを十兵衛は槍の柄で打ち払った。

敵も味方もわからぬほどの乱戦といってよい。

その、渦を巻くような乱戦の中を、上田源五郎は槍もなく、腰の脇差も抜かず、すいすいと身を移している。

忍びの者にとって、このような、闇の中の乱戦の中で、冷静にうごきまわることはわけもないことなのだ。

傷も受けず、相手と闘うこともなく、源五郎は山岸十兵衛の姿を探しもとめた。

槍や刀のかわりに、源五郎は別の物を右手につかみしめていた。

このとき、鉢形勢を迎え撃ったのは、徳川軍の部将・榊原康政であった。

鉢形城下の忍び宿をまもる長谷重左は、飯道弥平次から受けた上田源五郎の報告を、

「すぐさま、小田原へ……」

と、下中の清松へ命じた。

清松は荒川沿いに東へ走り、のちの東海道を小田原へ到着したのである。

小田原の忍び宿をまもっている鍛冶師の才九郎は、

「それは一大事じゃ」

すぐさま、手配りにかかった。

折よく、小田原の忍び宿には、お万喜と夜張りの助七がいた。

いま、豊臣秀吉は、その本営を箱根の湯本においている。

しかし、湯本へ知らせていたのでは、

(間に合わぬ……)

ようにもおもわれたので、才九郎は、

「助七。これは徳川の御陣所へお知らせしたほうが早いとおもうが、どうじゃ?」

「それがようござる」

すぐさま助七は、小田原城下を東へ駆けぬけた。

いまは、さすがに城下も緊迫しており、諸方の木戸へは武装の部隊が詰めかけ、警戒もきびしい。

豊臣軍の戦旗が日毎に数を増し、それが日々刻々と小田原を取り巻いて行く様が、はっきりと看てとれる。

だが、お万喜や助七は、鍛冶師・才九郎の家族に見られているし、城下を通行するための切手をあたえられており、怪しまれることは少しもない。

徳川家康は三万の軍団をひきい、城下の東、酒匂川の東岸に、陣を張ったばかりだ。

夜張りの助七からの知らせによって、徳川軍の部将・榊原康政が、これを迎え撃つことになった。

小田原へ接近しつつある鉢形勢は、約五百だという。

これに対して、榊原康政は、自分の手勢三百だけで、

「じゅうぶんである」

といったが、着陣したばかりの徳川家康は、

「それでは、こころもとなし」

と、さらに三百の兵をあたえ、康政を出発せしめた。

家康は、そのとき、降伏する者を、

「討つな」

と、命じている。

やむなく、敵として戦わなくてはならぬ北条家に対し、家康は、

（愚かな……）

と、おもいながらも、同情を寄せていたのであろう。

ところで……。

夜張りの助七が出て行ったあとで、鍛冶師・才九郎は、お万喜に、

「助七が、もどって来たなら、こなたからも人を出し、鉢形勢のうごきを探らねばなるま

い」

と、いった。

「はい。わたしがまいりましょう。清松にも、ついでのことに手つどうてもらってはいかが？」

「承知」

と、清松がこたえた。

小田原城下に潜入している山中忍びたちは十五名ほどだが、いよいよ豊臣軍の包囲がはじまったので、諸方へ散り、それぞれに暗躍を開始している。

それゆえ、才九郎の手許(てもと)には、お万喜と助七のみしか残っていなかったのだ。

「ときに……」

ふと、下中の清松がお万喜に、

「上田源五郎どのは、すでに、山岸十兵衛を討ち取っておりましょうかな……」

「そうじゃな……」

お万喜は、しばらく沈思していたが、

「源五どのは、こなたの軍勢が鉢形勢を迎え撃つのを待っているのであろ。戦さがはじまってからでないと、十兵衛には近づけまい」

「このようなことになる前に、何故、十兵衛を討ち果してしまわなんだので？」

「ふ、ふふ……」

「何を、笑いなさる？」
「山岸十兵衛は、清松がおもうているよりも、もっと手強い男じゃ。源五どのも、同じ屋敷に住み暮しているだけに、なかなか手が出なかったのであろう」
「すると、以前より、甲賀の頭領様から源五郎どのへ、十兵衛を討てとの御指図があったので？」
「以前と申しても、つい、先ごろのことじゃ」
と、才九郎が口をはさんだ。
下中の清松が、
（どうも、腑に落ちぬ……）
というような顔つきになり、黙りこんでしまったのを見て、お万喜が、
「これ……これ、清松。どうしたのじゃ？」
「いや、別に……」
いいさして、口ごもってから、清松が、
「源五郎どのは、十兵衛を討ってのち、急ぎ、甲賀へもどるとのことでござったが……」
つぶやくようにいったのを聞いて、お万喜の顔色が、わずかに変った。
「これ、清松。いま、何というた？」
お万喜の問いに、下中の清松は、また、同じ言葉を繰り返した。
「ふうむ……」

お万喜のみではない。
鍛冶師・才九郎も、
「お万喜。これは、妙じゃな」
と、いった。
「いったい、どうなされたのでござる？」
「清松。源五郎は山岸十兵衛を討ったのち、ただちに、この小田原の忍び宿へ来て、われらと共に忍びばたらきをすることになっていたのじゃ」
「えっ……そりゃ、まことでござるか」
清松は、空間の一点を睨むように見据えて、
「では何故に、源五郎どのは甲賀へもどるというたのか……？」
「源五どのが、飯道弥平次にしかと、そのように申したのかえ？」
「さようでござる」
と、清松が片膝を立て、
「このことを、すぐさま、鉢形の忍び宿へ知らせておきませぬと……」
「まあ、待て」
と、才九郎が、
「それよりも清松。こうなってみると、上田源五郎からの知らせを、そのままに受け取ってよいものか、どうかじゃ」

「以前にも、飯道弥平次殿から、源五郎どのについて、妙なうわさを聞いたことがござる」

「そのことについては夜張りの助七が鉢形へおもむき、真偽をたしかめてあるはず。源五郎へのうたがいは霽れたことになっている」

「ともかくも才九郎どの。こなたより出張って、小田原へ近づく鉢形勢の様子を探りとらねばなりますまい」

と、お万喜がいった。

「そのとおりじゃ。すぐさま、行ってくれるか？」

うなずいたお万喜が、

「清松も共に……鉢形の忍び宿へ知らせるより、このほうが先じゃ」

「承知」

「助七へも、このことを知らせておかねばならぬ」

夜張りの助七は、鉢形勢を迎え撃つために出発した榊原部隊に先がけて、様子を探りに出たはずであった。

「急げ」

鍛冶師・才九郎が、

「このようなまねを仕出かしたからには、それ相応の覚悟をしてのことにちがいないが……それにしても、はて、わからぬ。源五郎は、いったい何を考えてのことか……」

いううちにも、お万喜は手早く身仕度をととのえている。

「よし。わしもまいろう」

才九郎も、容易ならぬ事と看て取ったらしく、立ちあがって仕度にかかった。

榊原康政がひきいる六百の部隊が夕闇の中を出発したとき、すでに才九郎・お万喜・清松の三人は、これに先行し、近づいて来る鉢形勢のうごきを探りに出ていた。

これより先に、夜張りの助七は、

（鉢形勢が小田原へ入るとなれば、曾屋で一息いれるにちがいない）

見きわめをつけて、迷うことなく、曾屋へ走った。

助七が曾屋の宿駅へ着いて間もなく、先ず、お万喜が追いついて来た。

宿駅の外れの、雑木林の丘の狭間に身を潜めていた助七は、すぐ前の畑道をやって来たお万喜に気づき、

「お万喜どの。此処じゃ」

と、声をかけた。

「助七どのか……」

お万喜も、甲賀の老練な忍びの者である助七へは、敬意をはらっている。

「まだ、あらわれぬようでござる」

「助七どの。実は……」

お万喜が、上田源五郎の不可解な言動を語って、

「何と、おもわれる?」
「ふうむ……」
夜の闇の中で、助七は微かに唸った。
これは、助七にとって意外なことである。
（まさかに……?）
と、おもうものの、たしかに怪しい。
「山岸十兵衛を討ったるのち、すぐさま甲賀へもどると、源五どのは申したのでござるな」
「そのとおりじゃ。飯道弥平次へ、そのようにいうたそうな」
しかし、夜張りの助七から看ると、
（飯道弥平次は、源五どのについて、あることないことを、いいふらす気味がある……）
のであって、一方的に弥平次や下中の清松の言葉を信じきれない。
「お万喜どの。これは、わしにまかせて下されぬか……」
「まかすとは?」
「しかと?」
「源五どのが、万一にも甲賀に叛くことあらば、この助七が手にかけ申す」
「嘘いつわりは申さぬ。源五どのの知らせのとおりに、鉢形勢があらわれたなら、何をもって源五どのが裏切ったといわれる?」
「わかった。ともかくも、よくよく見とどけてからに……」

「そのことでござる」
才九郎と清松は、榊原部隊との連絡をつけてから、追いついて来るはずであった。
（それにしても、妙な……）
夜張りの助七も、上田源五郎が何故、小田原の忍び宿へ来ることを隠し、甲賀へもどるなどといったのか、不審であった。
また、
（何故に、逸早く、十兵衛を討たなかったのか?）
これもわからぬ。
討つ隙がなかったのであろうか……。
だが、忍びの世界では、そうした「いいわけ」は通用せぬ。
助七の胸がさわいだ。
「果して源五どのは、鉢形勢の後を尾けてあらわれようか?」
と、お万喜が横眼をつかって、探るように助七を見やった。
「いや、それよりも、すでに源五どのは、山岸十兵衛を討ち果しているやも知れぬ」
「まさかに……」
お万喜は笑った。
武装をし、兵をひきい、心身を引きしめて進みつつある山岸十兵衛を討てるほどなら、これまでにも山岸屋敷にいた数日の間に、

（討てぬはずはない……）

ではないか。

お万喜の疑惑は深くなるばかりであった。

間もなく、榊原康政がひきいる六百の部隊は、全速力をもって曾屋の宿駅へ到着した。

徳川家康は、先ず、鉢形勢を迎撃させるために榊原部隊を出発させておき、すぐさま、急使を船で早川口へ送り、ここから箱根・湯本の豊臣秀吉本陣へ、事態を報告せしめた。

そこで秀吉は、急ぎ、織田信雄（信長の次男で尾張・清洲城主）の部隊一万七千を、小田原城下の北面へ配置することにしたのである。

織田部隊が、小田原の北方へ進出したのは翌日の午前であった。

曾屋に着いた榊原康政は、

「間に合うたぞ」

闘志をみなぎらせ、才九郎・助七・お万喜・清松の山中忍びへ、二十余名の物見の兵をあたえ、前方へ出発せしめた。

夜明け前に、山中忍びたちは、多摩丘陵をこえて前進して来る鉢形勢を発見した。

このとき、榊原部隊は、すでに相模川をわたっていたので、知らせをうけるや、たちまちに迎撃の体勢をととのえてしまった。

この間に、先行していた鉢形勢の物見たちのほとんどが討たれたり、捕われたりした。

榊原部隊は二手にわかれ、鉢形勢を挟み撃つかたちで、突如、襲いかかった。

五百と六百の兵力ゆえ、これが日中の戦場で正面から戦うというのなら、鉢形勢も後れをとらなかったろう。

だが、この場合、完全に、

「虚をつかれた……」

といってよい。

「立場が逆になってしまった！」

のである。

榊原部隊の攻撃は、敵ながら見事であった。

夜戦の経験も豊富な徳川軍の部将だけに、榊原康政の指揮ぶりも水際立っている。

乱れ立ち、逃げ走る鉢形勢を捕捉しては、榊原部隊が突き捲り、叩き伏せた。

（しまった……）

山岸十兵衛は、雑木林の低い丘の狭間を北へ向って馬を走らせつつ、槍を揮って闘った。

「逃すな！」

叫びつつ、敵の騎士が五名ほど、追って来る。

これは、十兵衛を敵将と見たからであろう。

「引っ捕えよ！」

敵の声が、すぐ背後に聞こえた。

十兵衛は左手に手綱を引きしぼった。

十兵衛を乗せた馬が足を停め、竿立(さおだ)ちとなった。
敵の騎士たちが、これを見て、あわてて手綱を引きしぼった。
しかし、遅い。
早くも馬首をめぐらし、反転した山岸十兵衛が逆襲のかたちで敵の中へ突き込んで来た。
十兵衛が繰り出す槍は敵の一人を馬上から突き落し、さらに、敵の馬を突き捲った。
馬が狂奔し、敵を振り落す。
「うぬ！」
馬腹を蹴り、馬を煽(あお)って十兵衛へ肉薄する敵が、十兵衛の槍の柄に顔を叩かれ、落馬した。
目ざましい十兵衛の駆け引きであった。
たちまちに、十兵衛は敵を混乱させ、重囲を脱している。
「それっ……」
十兵衛は馬腹を蹴り、狭間の道を走りつづけた。
敵の声が遠ざかったとおもったとき、別の一騎が丘の向う側からあらわれ、十兵衛へ向って突き進んで来た。
十兵衛は、槍をつかみ直した。
その敵が、馬の鞍坪(くらつぼ)へ立ちあがったのを見て、
（や……？）
十兵衛は、わが目をうたぐった。

暁の闇も、いまは明るみを増しつつあった。
十兵衛の正面から突進して来た一人の騎士は、武装もしておらず、槍も手にしてはいない。
兜のかわりに黒い布をもって顔(おもて)を覆っているのみだ。
敵方の騎士ではない。
（源五郎だ……）
と、十兵衛は直感した。
まさに、上田源五郎である。
源五郎は、乱戦の中から一頭の軍馬を手に入れ、これに跨(またが)って、山岸十兵衛の退路を絶つかたちで襲いかかろうとしている。
いまや十兵衛は、何事も、
（腑に落ちた……）
ようにおもった。
（そうか。そうであったのか……）
源五郎は、鉢形城を出た五百の部隊の後を尾け、これが松井田へではなく小田原へ向うことを突きとめ、急ぎ味方の忍びの者へ知らせ、連絡をとると共に、自分は此処まで密(ひそ)かに尾行してきて、
（わしを討とうというのか……）
突き進んで来る源五郎に備えて、十兵衛は槍を構えた。

源五郎は馬の鞍坪に立ちあがり、たちまちに接近して来た。

（源五め。わしに飛びついてくるつもりじゃ）

すべては、一瞬のことであった。

源五郎を乗せた馬が、十兵衛の馬と擦れちがった。

「うぬ!!」

突き入れた十兵衛の槍よりも早く、源五郎の躰が宙に舞いあがった。

さすがの山岸十兵衛も、これまでの激烈な戦闘で、かなり疲労していたといってよい。

つぎの瞬間、十兵衛は、自分へ組みついてくる源五郎を感じた。

これに対応するためには、槍が邪魔となる。

十兵衛は槍を捨てて、組み打ちのための身構えをした。

だが、十兵衛の予測は、みごとに外れた。

上田源五郎の躰が、怪鳥（けちょう）のように十兵衛の頭上へ高く躍りあがり、その背後へ飛びぬけたのである。

飛びぬけつつ、源五郎は手にした物を十兵衛の頭上から投げ落した。

これは、甲賀忍びが使う一種の〔投げ網〕であった。

「あっ……」

躱（かわ）そうとして、馬上の十兵衛は躱しきれなかった。

投げ網は、十兵衛の頭から被（おお）いかぶさり、その五体へ絡みついた。

跨っている馬が嘶いて向きを変えたとき、躰の自由を失った十兵衛は、これを制御することができなかった。

山岸十兵衛に投げ網を打って、その頭上を飛びこえた上田源五郎が、

「む!!」

飛び下りざま、鐙（あぶみ）へ踏みかけている十兵衛の左足を摑（つか）み、ぐいと引いた。

投げ網に上半身を絡まれた十兵衛直勝が、これを躱すことも防ぐこともできなかったのは当然であったろう。

ちょうど、そのとき、十兵衛の馬が向きを変えたものだから、尚更（なおさら）に、たまったものではない。

「あっ……」

網の中で、十兵衛が叫んだ。

十兵衛の躰が、馬から落ちた。

榊原部隊の騎士が五名ほど、馬を駆け寄せて来た。

それへ、源五郎が、

「敵将でござるぞ。生け捕りになされ」

と、いった。

「応!!」

「でかしたぞ!!」

騎士たちは源五郎へ声をかけて、馬から飛び下り、網を毟り取ろうと踠いている山岸十兵衛を押え込みにかかった。
彼らは源五郎を、味方の戦さ忍びだとおもっている。
事実、それにちがいないのだが、この場合、源五郎としては、
(一時も早く……)
この場から離脱しなくてはならぬ。
後も見ずに、源五郎は丘の上へ駆けあがり、林の中へ走り込んだ。
戦闘は、まだつづいている。
これは、山岸十兵衛の後方を進んでいた久永但馬守が、連絡の兵の急報によって、三百の兵をひきい、戦場へ突入して来たのであった。
「十兵衛殿を救わねばならぬ」
これも、榊原康政は予期していた。
早くも前方に出ていた夜張りの助七の報告により、後方にも別の鉢形勢が進みつつあることを知ったのだ。
そこで榊原康政は、山岸十兵衛の一隊を襲う前に、三十名の鉄砲隊と百余の弓隊を配置しておいた。
そこへ、久永隊が駆けつけて来たのである。
すでに、あかつきの闇はうすれ、朝の光りがただよっていたことだし、両側から撃ってくる鉄砲の弾丸や、一斉に飛び疾ってくる矢の雨を受け、たちまちに死傷者が続出した。
鉢形勢は乱れ立った。
山岸隊の兵と合流することもできず、久永隊は戦闘力を失ってしまった。
(これは、いかぬ……)
久永但馬守は、絶望と口惜しさに歯軋りをした。
「引け。引け。引けい!!」
ついに、久永但馬守は退却を決意した。
このままでいたなら、鉢形勢は全滅してしまうにちがいない。
但馬守は、
(敵が此処まで出張って来たからには、もはや、小田原へ入ることはかなわぬ)
と、看て、七十余名ほどの兵をまとめ、退却にかかった。
これをまた、榊原部隊が追撃し、矢を射かける。
こうして、久永但馬守が鉢形城へもどったとき、これに従う兵は三十七名に減じていたという。
徳川勢が相模野にまで出張っており、これに発見された鉢形勢が殲滅に近い敗北を受けたと聞き、北条氏邦は、
「ああ……もはや、これまでじゃ」
失望のあまり、これからはじまる鉢形の攻防戦への闘志を、完全に失ってしまったといっ

てよい。

尚、山岸隊にいた兵たちが、その後、二人、三人……または単身で、傷ついた躰で鉢形へ引き返して来たが、その人数は合わせて二十名ほどにすぎなかった。

山岸十兵衛直勝は、

「討死（うちじに）をとげられた……」

と、だれもがおもった。

さて……。

相模野の戦闘が終ったのち、曾屋の宿駅へあつまった鍛冶師・才九郎、夜張りの助七、お万喜が、

「源五郎を見かけたか？」

「いや、見かけませなんだ」

「わたしも、ずいぶんと駆けまわったなれど……」

「ときに、お万喜。山岸十兵衛が捕えられたそうじゃな」

「はい。先刻、この曾屋で榊原式部（しきぶ）（康政）様の前へ引き出されたのち、徳川御本陣へ護送されて行きました」

「ふうむ……」

と、才九郎が、

「こうなっては、十兵衛を討つこともかなわぬ」

「何の……」

お万喜は、ふてぶてしい笑いを浮かべ、

「これより先、いくらも討つ折がありまする」

「ま、それもそうじゃ。ときに……」

あたりを見まわした才九郎が、

「下中の清松は、いかがしたぞ」

「あ……そう申せば……」

清松の姿が見えぬことに、三人は気づいた。

榊原部隊が百名ほどの兵を曾屋の宿駅へ残し、引きあげて行った後も、三人の山中忍びは清松が帰るのを待ってみたが、ついに、姿をあらわさなかった。

落城

そのころ……。

下中の清松は、上田源五郎を追っていた。

すでに朝となっていたが、丘の斜面の雑木林の中は小暗（こぐら）かった。

日は密雲に遮（さえぎ）られている。

相模野の戦闘の渦の中に、清松は、ちらりと源五郎を見かけた。

そのとき源五郎は、山岸十兵衛に投げ網を打ち掛け、落馬した十兵衛へ榊原部隊の騎士たちが飛びつき、押え込んだのを尻目に、丘の狭間の櫟林の中へ駆け込んだところであった。

その姿を、清松は見た。

(おのれ、源五め!!)

すぐさま、清松は追跡にかかった。

源五郎の姿を見かけはしたが、山岸十兵衛が捕えられたことを知らぬままに、

(逃さぬぞ、源五……)

と、清松は、つづいて櫟林の中へ躍り込んだ。

この時点において……。

考えてみれば、何も清松が、これほどに源五郎へ敵意を抱かなくともよいはずなのだ。

源五郎が飯道弥平次へ急報したとおりに、鉢形勢が小田原へ接近して来たのだし、これを榊原康政が迎え撃ち、圧勝したのである。

ただ一つ、上田源五郎は、この後、小田原の忍び宿へ入ることについて、いつわりの報告を弥平次にしている。

源五郎は、

「甲賀へもどる」

と、たしかにいったそうな。

この一事だけで、下中の清松は、

(怪しい……)

と、直感した。

(源五め。これより先、何をたくらむか知れたものではない)

山岸十兵衛を討ったのかどうか、それも怪しい。

ともかくも、源五郎の姿を見失ってはならぬ。

一気に戦場から離脱して行く源五郎を追いながら、清松の疑惑は、いよいよ深まるばかりとなった。

源五郎は、曾屋の方へも小田原の方へも、また甲賀へ向う様子もない。

(源五め。鉢形へ引き返そうとしている……)

このことであった。

あきらかに源五郎は、北へ向って走りつづけている。

後方から進んで来た久永但馬守の一隊が、待ち構えていた榊原勢の急襲を受けつつある、その戦闘の響みからも遠ざかり、源五郎は北へ北へと走りつづけているのだ。

(いざともなれば、おれが源五を成敗してくれる!!)

清松は、決意をかためた。

もとより下中の清松は、飯道弥平次や長谷重左が源五郎へ抱いている嫌悪の感情に、少なからず影響を受けている。

それだけに、

（やはり、源五めは甲賀に叛き、何事か、たくらんでいるに相違ない）

このおもいは、もはや、ゆるぎがたいものとなってきた。

そして……。

まさに、清松の直感は外れていなかったのである。

上田源五郎は、

（二度と、甲賀へは帰らぬ……）

決意をし、鉢形へ引き返そうとしている。

源五郎は、八王子城南方二里ほどの地点から多摩丘陵の山林へ走り込んだ。

そうして、今度は八王子から離れつつ、北東の方へ進みはじめている。

（源五め。おれが追っていることに気づかぬらしい）

清松は自信にあふれていた。

接近して襲いかかろうかとも考えたが、

（いや、待て。いますこし、源五の後を尾けてみよう。もしも鉢形へもどるのなら、このことを長谷重左様へお知らせしてから、源五郎を討ってもよい）

と、おもい直した。

忍びの者の尾行は、何も相手の姿が見えなくともよい。

相手の進路が、およそ、つかめていれば、獣のような嗅覚でもって、相手が通った道を辿

ることができるのだ。

（たしかに、此処を通ったにちがいない）

丘の斜面の、むせ返るような若葉の繁りの下を、身を低めた清松は呼吸をととのえ、音もなく、すべるようにすすむ。木蔭に、細い道が、わずかに伸びていた。

暗い、その木蔭に白い花が咲きこぼれている。

源五郎のものとみてよい足跡が、湿った土の上につづいていた。

（源五め。まだまだ、忍びのわざが未熟だ。おれが尾けていることに、いささかも気づかぬ）

清松は、薄笑いを浮かべた。

（それにしても源五郎は、いったい、何をたくらんでいるのか……？）

そこが、まだ、はっきりとつかめてはいない。

雨の音が、してきはじめた。

雨が強くなると、源五郎の足跡を消すおそれがある。

（いますこし、源五めに近づかねばならぬ）

清松が、足を速めた。

そのとき、丘の斜面の雑木林の何処かで、

「下中の清松」

よびかける声がした。

清松が、はっと振り向いたときには、すでに遅かった。

木立の、鮮烈な緑の幕の中から飛び疾ってきた小さな鉄片が清松の右眼に突き刺さった。

これは、かつて、武田家の忍びの者が使用していた〔投爪〕に形態が似ている甲賀の得物である。

甲賀の忍びたちは、この一種の手裏剣といってよい忍び道具を、

「飛苦無」

と、よんでいる。

右眼へ突き刺さった飛苦無をそのままに、下中の清松は繁みへ身を投げ、忍び刀を引き抜いた。

（おのれ、よくも……）

自分の油断が、悔まれてならぬ。

だが、清松は、ずっと先までつづいている上田源五郎の足跡から、目をはなしてはいなかった。

つまり、清松が後を尾けていることに、源五郎は気づいていたのだ。

なればこそ、わざと足跡を前方にまで残しておき、それから、丘の斜面の雑木林へ飛び込み、源五郎は引き返して来ていたことになる。

それに、清松は気づかなかった。

（し、しまった……）

飛苦無が右眼へ深く喰い込んでいるため、出血はひどくない。

そのかわりに激痛が襲ってきた。

しかし、呻くこともできぬ。

こちらの気配をさとられては、

（おれの最期……）

なのである。

こうなれば、源五郎に闘いを挑む愚を、

（避けねばならぬ）

と、こころを決めたのは、さすがに山中忍びの清松であった。

（何としても、鉢形城下の忍び宿へ逃げ込まねばならぬ）

懸命に呼吸をつめ、刀を構えながら、清松は繁みの底を這うようにして移動しはじめた。

源五郎の声も、気配も消えている。

それが、不気味であった。

清松は、左手で腰の革袋を探り、これも飛苦無を二箇、つかみ取った。

木立に雨音がこもっている。

雨は、人の気配を消してくれる。

それが清松の救いともなるかわりに、源五郎にも有利であった。

（おのれ、源五め。きっと、逃げぬいてみせるぞ）

今度は、立場が逆転したことになる。

激痛を堪え、下中の清松は必死に逃げはじめた。

源五郎が追って来る気配は、まったくなかった。

（待てよ……）

このとき、清松の脳裡に閃くものがあった。

（おれは、鉢形へ逃げるよりも、むしろ、小田原の方へ逃げたほうがよいのではないか……）

清松が思いついたのは、このことである。

上田源五郎も、おそらく、清松が鉢形城下の忍び宿へ逃げ込むのだとおもい、追って来るにちがいない。

その裏をかき、曾屋の宿駅まで逃げれば、おそらく、そこには榊原康政勢の一部が、とどまっているにちがいなかった。

下中の清松の推測は正しかった。

曾屋へ残った榊原部隊の一部は、その後に増強されはしたが、引きあげることはなかった。

だが、曾屋へ着くまでが、清松にとっては、

（生くるか、死ぬるか……）

の、難儀となった。

上田源五郎が、自分の推測を、はるかに上廻った忍びの者であることに、はじめて気づいた清松であった。

清松が、源五郎と共に忍びのはたらきをしたのは、今度がはじめてといってよい。

高山の鐘撞き堂から、鉢形城下の忍び宿へ連絡にあらわれる飯道弥平次の言葉を耳にしていると、

「上田源五郎は、若い未熟な忍びであるから、よほど、目を光らせていないとあぶない」

そのような印象を受けてしまう。

ところが、どうだ。

下中の清松ほどの男が、まんまと源五郎の術中に陥ってしまったではないか。

清松は、いったん鉢形へ逃げ込むように、土の上へ足跡を残しておいてから、蛇のように身をくねらせ、方角を変えた。

この間の、清松の苦痛は言語に絶した。

片眼に突き刺さった〔飛苦無〕を抜き出し、甲賀の忍びがいつも携帯している傷薬で手当をおこなったのは、それから一刻も後のことであった。

雨に打ち叩かれる葉の音にも、清松は神経を磨り減らした。

そのころ……。

すでに上田源五郎は多摩の丘陵を走りぬけ、下中の清松などに目もくれず、鉢形へ向って駆けつづけていた。

清松を殺すつもりなら、飛苦無を彼の喉笛へ命中させればよかったのだが、あえて源五郎

は、それをしなかった。清松は不快な男だが、昨日までは味方の忍びであったのだし、そして今日の自分は、頭領・山中俊房と甲賀に叛いた裏切り者なのである。

清松の右眼に傷をあたえ、追跡を絶つや、源五郎は見返りもせずに鉢形を目ざしていたのだ。

清松は、それを知らぬ。

源五郎は走りながらも、

（おれは、山岸十兵衛に勝った……）

などと、得意になっていたわけではない。

それが源五郎の性格だといってよい。

戦闘で疲労していた十兵衛を待ち構えての奇襲であった。

（運が、よかったのだ）

そうした条件がなくて、十兵衛と正面から闘ったなら、

（おれは、十兵衛の敵ではなかったろう）

ただ、山岸屋敷の湯殿における完敗の恥だけは、

（どうやら、雪ぐことができた……）

といってよい。

しかも、源五郎が念願したように、山岸十兵衛は榊原部隊の騎士たちによって、

（生け捕られた……）

のである。

後のことは知らぬが、あのとき、源五郎は、

「敵将でござるぞ。生け捕りになされ」

と、叫んだ。

騎士たちは、それにこたえて馬から飛び下り、投げ網の中で跪いている十兵衛を押え込んだようであった。

（なれば十兵衛は、討死をせずにすんだ……）

ことになる。

このことこそ、源五郎にとっては、欣快の事といってよかった。

これで、甲賀からの、

「十兵衛を討て」

との指令が事前になかったら、あるいは源五郎の行動も甲賀の忍びたちに気づかれぬよう、事を計ることができたやも知れぬ。

しかし、いまとなっては、

（二度と甲賀の土を踏めぬ……）

身となってしまった。

まして、下中の清松を傷つけてしまったのだから、

（いい逃れるすべはない……）

のである。

清松を抹殺することは、わけもないことであったし、また、そのようにすべきであったろうが、源五郎はおもいとどまった。

これもまた、源五郎の資性によるものといえる。

親子兄弟や男女の縁も、忍びの世界においては無用のことで、あくまでも頭領の指令のままにはたらき、暗く重い秘密の闇の底で、血も凍るような生き方をするのが、真の忍びの者だとされている。

だが、忍びのはたらきの底に、人間の血が暖かくながれていてこそ、

「真の忍びじゃ」

と、いう者もいないではない。

源五郎の亡父・小杉重六も、その一人であった。

夜張りの助七も、同じ意見らしい。

たとえ頭領の下にあっても、一人ひとりの忍びの者の〔自主性〕がなくては、

「真の忍びではない。すくなくとも、甲賀の忍びではない」

と、いうことになる。

となれば、助七や亡父・小杉重六の教えを受けて甲賀忍びとなり、いま、頭領・山中大和守俊房に叛いた上田源五郎の行動が、真の甲賀忍びの生き方なのであろうか……。

いや、それも、時と場合による。

いかに自主的な行動をとったとしても、それが単なる〔臆病〕や〔卑怯〕であったなら、それこそ、

「忍びの風上にもおけぬ……」

といってよい。

源五郎の場合は、

（このように愚かな戦さに……申せば、戦わずして勝敗の決まった戦さに、山岸十兵衛ほどの男を討ち取ったところで、それは尚更に愚かな事だ）

つきつめていうと、その一事につきている。

甲賀から、十兵衛暗殺の秘命が下る前には、

（何ともして、十兵衛の一命を救いたい）

と、考えていた源五郎なのだ。

十兵衛の救出は、鉢形攻防戦の中で、おこなうつもりでいたのだ。

それが、おもいもかけぬ十兵衛の小田原突入となり、源五郎は相模野の戦闘で、どうやら所期の目的を果したことになったのである。

（それにしても……小父ごは、さぞ、おれの裏切りを知って悲しむであろうな……）

いまとなっては、夜張りの助七との別離のほうが源五郎には辛い。

「いや……小父ごのことゆえ、おれの胸の内は察してくれるにちがいない」

そうはおもうものの、もしやすると夜張りの助七が責任をとらされ、

（おれを討ちにくるやも知れぬ、な……）

助七のみではない。下中の清松も飯道弥平次も、

そうなると、これからの源五郎は、ただ一人で、甲賀の復讐と追跡から逃げまわらねばならぬ。

（黙ってはいまい）

ところで……。

このとき、すでに上州の松井田城は、前田・上杉の第二軍の攻撃を受けて降伏し、第二軍は、西牧・厩橋（現・前橋市）・沼田などの、上州における北条方の城をつぎつぎに包囲しつつあった。

これは、鉢形攻防の戦闘が間近にせまってきたことを意味している。

鉢形城内の人びとは、いずれも、山岸十兵衛直勝が討死をとげたとおもいこんでいる。

小田原へ向った五百の鉢形勢のうち、鉢形へ逃げもどったのは、きわめてわずかであったから、十兵衛が捕えられた場面を目撃した者は一人もいなかった。

十兵衛の妻・於丹も、長男の勝千代も、そして正子も、十兵衛の生存を夢にも想わなかった。

於丹は、

「小田原へ入ることが叶わず、さぞ、御無念であったろう」

と、洩らしたのみで、いささかも取り乱すことなく、日々、仏間へ入り、読経を絶やさぬ。

十六歳の勝千代も、口数が少なくなり、沈痛の面もちになるのは仕方もないことであろうが、見たところは落ちついている。

正子のみが、

（これより先、私たちは、どうなってゆくのであろう。源五郎どのは何故、私を捨てて姿を晦ましてしもうたのか……？）

正子も日中は、それでも悲歎のおもいを懸命に堪えているのだが、夜に入り、ひとりきりの寝間の臥床へ入ると、たちまちに泪があふれてくるのだ。

父・十兵衛の討死の悲しさよりも、自分を捨てて、

（逃げて行った……）

夫の源五郎が、うらめしい。

於丹も勝千代も、また奉公人たちも、正子の心情を察して口には出さぬが、源五郎の逃亡をうたがわぬ者は一人もいない。

敗戦必至の攻防戦が近づくにつれ、わが子を身ごもった若妻をも捨てて、上田源五郎は密かに脱出逃走したと見られている。

うらめしさと悲しさに泣き疲れて、ようやく浅い眠りにつく正子であった。

その夜は、どうしたわけか、臥床へ入って間もなく正子は深い眠りへ落ち込んで行った。

この夜にかぎって、夢も見なかった。

その深い眠りから目ざめたのは、だれかが、正子の躰をゆさぶったからである。

「あ……」
目ざめた正子の傍へ、だれかが添い寝をしているではないか。
眠り燈台の微かな灯影にたしかめるまでもなく、その男が夫の源五郎だということが、正子には、すぐわかった。
「げ、源五郎どの……」
「しずかに……」
「ど、どうして……?」
「先ず、落ちつくがよい」
源五郎の左腕が、しずかに正子の項の下へ差し入れられてきた。
「よいか、落ちついたか?」
「は、はい……」
「ほう……胸が、このように、まだ……」
「おどろいてしもうて……」
「むりもない。だが、もっと、おどろいてもらわねばならぬ」
「ま……」
「よいか、大きな声をたててはならぬぞ」
「はい」
源五郎が、正子の耳朶へ唇を押しつけるようにして、

「父上は、生きておわすぞ」
と、ささやいた。
おどろくなといわれても、これが、おどろかずにはいられぬ。
「ま、まさかに……?」
「まことじゃ。私が、この目で、しかと見とどけたのだ」
「な、何を……?」
「父上が、徳川勢に取り囲まれ、生け捕りになられたところを、な……」
「まあ……」
正子は頸を引いて、源五郎を睨むようにした。
(見ていながら、何故、源五郎どのは父上をお助けしなかったのか?)
このことである。
その正子のおもいを、源五郎は、すぐさま察知した。
「父上を助けようとして、この私も共に生け捕られたほうがよかったか、どうか……いや、そのようなまねをしていたら、私の息の根は絶えていたやも知れぬ。こうして、いま、父上が生きておわすことを、そなたの耳へつたえることもできなかったろう」
そういわれてみると、まさに、そのとおりなのだ。
「どうだ、そのほうがよかったか?」
正子は激しくかぶりを振り、源五郎の胸へ顔を押しつけた。

「よし、よし」
その顔を仰向けさせ、源五郎は、やさしく正子の唇を吸ってやった。
「なれど……あの、何故、私にも黙って、この城を脱け出されたのです?」
「ありのまま告げたなら、城外へ出してもらえたかな。どうだ」
「それは、あの……」
「それ見よ。私は何としても、父上の御最期を見とどけたかったまでだ。それが、討死をなされず、生け捕られたのは何よりもめでたい」
「え……?」
「そうではないか。父上ほどの勇者を、このように愚かな戦さで、むざむざ死なせては勿体ない。そうはおもわぬか?」
「は、はい」
いまはもう、何よりも源五郎の言葉にたよるよりほかはない正子であった。
「なれど、ようも、御城内へ……?」
「苦労をして、何とか忍び込めた。私のような者が忍び込めるほどなのだから、この城の備えも、およそ知れてある」
そうはいったが、いよいよ、敵軍がせまる日が近づいたので、鉢形城の内外の防備は厳重をきわめている。
源五郎が忍びの者でなかったら、城内へ潜入することは不可能であったろう。

源五郎は鉢形城を脱出するとき、荒川の河原の繁みの奥に隠しておいた小袖と袴に着替えていたので、正子は少しも怪しまぬ。
「なれど、私も断わりなく城を脱け出したからには、いまさらにもどれぬ」
源五郎にそういわれ、正子の動悸が、また激しくなってきた。
「源五郎どの。それでは、あの、私たちの身は、このまま御城と共に……」
「先を急ぐな。たとえ、この屋敷にはおらなくとも、私は、鉢形の何処かにいて、そなたを見まもっている。それよりも……」
と、源五郎が正子の肩を抱きしめ、
「先ず、父上が生きておわすことを、母上と勝千代殿へ申しつたえるがよい」
「二人とも、どのようによろこびますことか……」
「うむ。なれど、余人には決して洩らさぬよう。これは母上へも勝千代殿へも、かならず念を入れておくがよい。よいか?」
「はい。かならず……」
「近いうちに城攻めがはじまろうが、あわててはならぬ。いざというときには、かならず源五郎が救いにまいる」
「まことに……?」
「わが妻へ嘘を申したとて、何になる」
「うれしい……」

正子は、よろこびの泪があふれるにまかせ、夫の肌身のぬくもりを、

(夢ではないのか……?)

と、おもい、狂おしげに、源五郎の愛撫にこたえはじめた。

「もう……もう、お逃げになりませぬな?」

「逃げぬとも」

「きっと?」

「この城が落ちた後は、また、もとの暮しにもどるのだ」

「うれしい……うれしい……」

正子にとっては、鉢形の城が落ちようが落ちまいが、そんなことは、どうでもよくなってきた。

(源五郎どのさえ、傍にいてくれるなら、もう何も要らぬ)

上田源五郎は寝所を出るとき、

「腹の子を大事にしてくれ」

いい残して、あかつきの闇の中へ消えて行った。

さて……。

松井田城を落しての後の、前田・上杉の第二軍は、破竹の勢いであった。

上州の西牧、国峰、岩城の諸城を、たちまちに攻め落し、四月十九日には、ついに厩橋の城を攻略した。

厩橋城は、沼田城と共に、上州における北条軍の重要な基地である。

これが落ちてしまったので、沼田城にいた猪股能登守は一戦も交えず、身をもって脱出し、上州の箕輪城へ逃げた。

豊臣秀吉は、後に捕えられた猪股能登守を磔の刑に処したという。

能登守が、秀吉の許しも得ず、真田家の名胡桃城を、

「偽計をもって奪い取った……」

罪もあったろうが、それよりも、秀吉は一戦もせずに城を捨てて逃げ出した事を、

「捨ておけぬ。天下の見せしめじゃ」

と、いったそうな。

いずれにせよ、たとえ敵であっても、その進退が立派であり、卑怯の振舞いがなかった者は、敗北の後も生きる道をあたえられることが多かった。

これは秀吉のみならず、信長や家康にしてもそうである。

敵にとっても、

「たよりにならなかった……」

男は、これを味方にしても、たよりにならぬ。

いつ、裏切られるか、知れたものではないからだ。

豊臣秀吉は、

「一時も早く、関東の諸城のすべてを攻略せよ」

と、厳命を下し、浅野長政・本多忠勝・平岩親吉がひきいる諸部隊を応援にさしむけている。

すでに包囲を完了した小田原城を、一日も早く、孤立させてしまいたいのであろう。

四月の末になると……。

浅野長政の部隊が、武州の江戸城を落した。申すまでもなく、いまの東京都である。

ついで、浅野長政は本多忠勝と共に、武州の岩槻城へ迫った。

同じころに、相模の玉縄城をまもっていた北条氏勝が、降伏した。

箱根・山中城の攻防戦に敗れて、自分の城へ逃げもどっていた氏勝へ対し、徳川家康が、

「速かに、降伏されるがよい」

しきりに勧告したのを、氏勝は素直に受け入れたのだ。

その素直さが買われたのかどうか知らぬが、家康が秀吉に取りなしてくれたので処刑をまぬがれた氏勝は、のちに家康の家臣となる。

豊臣軍は、いよいよ、武州へ雪崩れこんで来た。

鉢形城にとっても、心強い味方の城であった武州の松山城（いまの埼玉県・東松山市）が落ちたのは、五月一日である。

同じ日に、川越城も落ちている。

すでに、夏であった。

鉢形城では、城主の北条氏邦が依然として奥に引きこもったままだ。

山岸十兵衛・久永但馬守がひきいる部隊の殲滅は、氏邦へ非常な衝撃をあたえたといってよい。

闘志を失った北条氏邦に引きかえ、将兵たちの過半数は、

「落せるならば落してみるがよい。なかなか落ちぬぞ」

決死の覚悟を決めて、戦意が旺盛である。

三の丸の山岸十兵衛屋敷は「多門屋敷」とよばれ、いざともなれば城塁の上の防備のための設計がしてあるし、地下蔵は武器庫になっているだけに、いまは武装の将兵が詰めかけており、十兵衛の家族たちは、奥庭へ面した二間に起居していた。

於丹も勝千代も、正子も、落ちつきはらって、毎日を暮している。

「さすがに、十兵衛殿の妻や子たちじゃ」

「十兵衛殿の討死を、気振りにも見せぬわ」

城内の士たちは、ひそかに賞讃しているらしい。

正子は上田源五郎が忍んで来たときのことを、母と弟に告げてある。

山岸十兵衛が捕えられて、まだ生きていると知り、於丹も勝千代も、すっかり落ちついてしまった。

しかも、源五郎は、

「心配することは、いささかもない。自分が鉢形城下に潜み、見まもっている」

という心強い言葉を、正子に残していってくれた。

また、十兵衛にも会えるという望みがないでもないのだ。

すでにのべておいたが、徳川家康に仕えている武田の遺臣は少なくない。

家康が、武田家の遺臣へ寄せる好意は、

「なみなみのものではないそうな」

と、以前に山岸十兵衛の口から聞いたこともある於丹と勝千代であった。

しかも、十兵衛直勝は、徳川譜代の家臣である榊原康政に捕えられた。

鉢形勢を迎撃したのが榊原康政だったことについて、源五郎も正子に、

「父上にとっては、まことに、運のよい事であった」

と、語っている。

そのころ……。

豊臣秀吉は、城を築きつつあった。

小田原城の西方一里弱のところに、笠懸山とよばれている海抜二百五十メートルの山の頂きが、築城地にえらばれた。

この山は箱根南部の外輪山の一部で、小田原城下の人びとは〔西の高山〕なぞとよんでもいる。

山は、松の密林におおわれていたが、ここに、いわゆる〔一夜城〕を築いたといわれているのは、およそ、つぎのようなことであったらしい。

豊臣秀吉はまず、簡短な木組みをし、板を張りつけ、これへ白紙を張りめぐらし、城の天

守のかたちに造りあげておき、

「それ！」

一夜のうちに、木と紙の城のまわりを囲んでいる松林を切りはらったというのだ。

朝になって、一里彼方の小田原城の北条軍が、西の山をながめ、

「あっ……」

驚愕した。

昨日までは、松林の山だったものが、その頂きに忽然として城の天守があらわれたのである。

当時は、むろん、精度のすぐれた望遠鏡があったわけではない。

一里もへだてて、これを松林の彼方に望見したのでは、まさかに木と紙の城ともおもえぬ。

「いつの間に、城を……」

籠城の北条軍は、色を失ったという。

「一夜のうちに、あのような城を築いた関白は、天魔の化身か……」

身ぶるいをした士もいたそうな。

こうした奇智によって、敵の戦意を阻喪せしめたのは、いかにも秀吉らしいが、その一方で秀吉は、本格的な城を築きつつあったのだ。

いまも、この山（いまは石垣山とよばれている）の城址へのぼって見ると、建築物は少しも残っていないが、城の石垣に使用した巨石を、かなり見ることができる。

その巨石を目にしただけでも、この城が、どのようなスケールを持っていたかが判然とする。

城は、六月の下旬に完成した。本丸・二の丸・西曲輪などの城郭へ、今度は本物の天守を築きあげた。

山岸十兵衛を捕えた榊原康政が、完成した城を見て、

「いやはや、まことにもって、おどろき入ったものでござる。関白殿下の御城は、山の頂きに十余丈の石垣を築かれ、箱根の山々の上、雲をつらぬくがごときありさまにて……」

と、九州の留守居を秀吉から命じられていた加藤清正へ、書き送っている。

秀吉は、従軍の諸将へも、自分の実力をたっぷりと見せつけたことになる。

「その城内に造営された、いくつもの御屋敷の立派さ、華やかさは、口にも筆にもつくせぬほどでござる。

清正殿も、よく御承知の、大坂城や聚楽の第にも劣らぬものと、それがしにはおもわれる。

その大小の御屋敷の間には花を咲かせ、木草を植え込み、茶室もあれば書院もござる。

空に聳える天守の屋根をながめていると、これが、まことの戦陣なのか……と、われらも夢を見ているような心地がいたし、こうして日々を不自由なく、陣中で暮していると、いささかも退屈をおぼえ申さぬ」

榊原康政が、加藤清正へ送った文面の大意は、およそ、このようなものであった。

豊臣秀吉は、この城へ移り、わざわざ最愛の側室・淀の方をよびよせ、そのほかにも三人

の側室をもよび、日々、能楽や茶の湯の会を催した。

秀吉の茶道をつとめる千利休がよびよせられたのは、いうまでもない。

秀吉は、自分のみではなく、従軍の諸大名へも、

「みなも、妻妾を国許からよぶがよい」

しきりにすすめたし、将兵のためには諸方から多数の遊女をあつめて小屋づくりをさせ、陣中の労苦をなぐさめてやることにした。

労苦も何も、あったものではない。

これでは、遊びながら戦争をしているようなものだ。

京都の公家たちや勅使も、この城へあらわれると、

「後学のために、戦さ見物をいたしたい」

などといい、あまりの居心地のよさに、なかなか、京都へ帰ろうとはせぬ。

それに引きかえて、小田原城に立てこもる北条軍の将兵は、毎日の食糧でさえ節約をしなくてはならぬ。

豊臣軍の陣中から、にぎやかな笑い声や唄声が風に乗って聞こえてくると、

「おのれ!!」

たまらなくなって、城中から打って出ても、豊臣軍はよいかげんにあしらうので、激怒のやり場がないのだ。

一日一日と、北条軍の闘志はおとろえ、

(もはや、これでは、どうにもならぬ……)

屈服へのあきらめに変りつつあった。

ところで……。

この石垣山の城が完成した六月下旬には、すでに武州・鉢形城は豊臣軍の手に落ちていた。

これより先、北条氏邦は、夫人の大福御前と末の子の光福丸を、家臣の町田土佐守と小前田越前守にあずけ、城外へ脱出せしめている。

氏邦の長男は、すでに病歿しており、次男は僧籍に入っていた。

町田土佐守は数名の家来と共に、氏邦夫人と光福丸を、先ず秩父の岩田天神山城へ移すことにした。

このとき、小前田は追撃して来る敵を防ぎとめ、討死をしている。

鉢形城は完全に包囲され、小戦闘が開始された。

上杉景勝と共に第二軍を指揮していた前田利家は、総攻撃の準備を急ぐのと同時に、

(無益の血をながしたくはない)

というので、景勝と相談をし、上杉家に仕えている藤田信吉をまねき、いろいろと語り合った。

藤田信吉は、ほかならぬ北条氏邦夫人の弟である。

若いころの北条氏邦は、はじめ妻の実家の実権を摑み取るため、妻の弟の弥八郎重連を毒殺したことがあった。

それほどの謀略家であったわけだ。

そのとき、次弟の藤田信吉は、

(このままでいては、自分も義兄に殺害されてしまうにちがいない)

と、おもいきわめ、当時はまだ健在だった武田勝頼の許へ逃げた。

武田家がほろびてのちの藤田信吉は、越後(新潟県)の上杉景勝に仕え、その信頼を得て、いまは越後の長島城主となっている。

したがって、今度の戦さにも、信吉は上杉景勝と共に従軍していた。

藤田信吉にとって、北条氏邦は、

「兄・弥八郎の敵」

であり、

「姉の夫」

でもある。

氏邦への憎しみと怨みは深いけれども、姉の大福御前への愛情も同じ比重といってよい。

それに、藤田信吉は亡き父や兄と共に、かつては北条本家に仕えていたのである。

義兄・北条氏邦の、血なまぐさい陰謀がなかったら、いまも氏邦と協力し、豊臣軍と戦っていたはずではないか……。

鉢形城には、かつての藤田信吉を、

「若君」

と、よんだ家来たちが立てこもっているのだ。
また、姉の大福御前も城内にいると、信吉はおもいこんでいた。
つまりは、藤田信吉も、鉢形の無血開城を、
（のぞんでいる……）
と、いってよい。
前田利家は、むかし、豊臣秀吉と共に織田信長へ仕え、信長亡きのちは秀吉をたすけて、これを賢明に補佐し、いまは加賀（石川県）の尾山（おやま）（いまの金沢）城主として北陸を治めている立派な人物だ。
その利家も、無血開城をのぞんでいると聞いて、藤田信吉は心強くおもった。
「されば、われら藤田家の菩提所（ぼだいしょ）になっております正龍寺（しょうりゅうじ）の和尚（おしょう）殿をもって、安房守（あわのかみ）（氏邦）を説き伏せていただくがよいかと……」
と、信吉が言い出た。
「ほう。それは何よりのことじゃ」
前田利家は、膝（ひざ）をすすめ、
「では、そこもと、正龍寺へおもむいて下さるか？」
「承知いたした」
正龍寺は、鉢形城の北西半里ほどの末野村にある。
禅宗曹洞派（そうとうは）の寺で、この寺を開基させたのは、藤田家の先祖であった。

前田利家は、すぐさま上杉景勝の陣所へ行き、この事をはかると、景勝も同意した。
そこで、藤田信吉が正龍寺へ向い、良英（りょうえい）和尚に会った。
和尚も、賛成である。
鉢形城を死守したところで、それが、いまは何の意味もなくなっているからだ。
また、死守しきれるものでもない。
そもそも、このたびの戦役は、北条家にとって、
「何の意義もない……」
のである。
前田利家と上杉景勝が出した降伏の条件は、
「北条氏邦が頭をまるめ、降伏をして、無事に城を明け渡すならば、これを客分として迎え入れたい。そして、鉢形の城兵のすべての命をたすけよう」
と、いうものだ。
良英和尚は、この条件を抱いて、鉢形城内へ入った。
城門の外までは、藤田信吉の部隊が護衛についた。
北条氏邦も、良英和尚の入城を拒むわけにはまいらぬ。
和尚は氏邦と会い、率直に自分の考えをのべた。
入城する前に、和尚は、前田・上杉の両将と面談し、開城申し入れの条件に、両将の誠実がこもっていることを見ぬいていただけに、氏邦を説得する声にも熱がこもった。

良英和尚の説得は、かなりの効果があったとみてよい。

和尚は手ごたえを感じ、辞去した。

いうまでもなく、これが交渉の始まりであって、この間にも鉢形城への攻撃は続けられている。

大手口へは上杉景勝、搦手からは前田利家の両軍が攻撃し、鉢形の守備兵もよく戦い、敵を城壁へ近寄せぬ。

豊臣秀吉の命によって攻撃に参加した徳川軍の勇将・本多忠勝は、鉢形城の南方にある車山へ石火矢を運びあげた。

この〔石火矢〕は二十八人持ちの大筒であって、これを車山の山頂へ運びあげるため、大力の足軽五十六人が交替で裏山づたいに道を拓き、ようやくに〔砲撃陣地〕を構えたのであった。

この日。

良英和尚が、ふたたび、鉢形城内へ入り、北条氏邦と会談をした。

氏邦の気力は、すでに萎えつくしている。

まったく、この戦さには、

（何の救いもない……）

のであって、山岸十兵衛・久永但馬守がひきいる小田原入城部隊も全滅のかたちとなったいまは、氏邦が城と共に死ぬる意味も失せた。

いかに籠城の苦難に耐えたところで、いまは何の期待も生まれぬ。

氏邦自身が死ぬるのはよいが、まったく意義のない敗戦のために、多くの将兵が討死をするのは、良英和尚の進言のとおり、無益きわまることなのだ。

北条氏邦は、重臣たちをまねき、会議をおこなったが、開城を支持するものが多かった。

これも、氏邦に決意をさせた一因といってよいであろう。

むろん、城と命運を共にしたい、最後まで戦いぬいて、ほろび果てるべきだと主張する家臣もいる。

しかし、氏邦は、再度あらわれた良英和尚に、

「城を明け渡せば、家来たちの一命をたすけるという証拠がほしい」

と、いい出た。

こうなれば、開城を前提として、双方が納得のいくように実質的な交渉へ入ることが可能となったわけだ。

良英和尚は、すぐさま城を出て、前田利家と上杉景勝に計った。

このとき北条氏邦は、もしも臣下のすべての命がたすけられるのなら、もはや自分は、武人として生き長らえるつもりはなく、

「剃髪し、仏門に入るつもりでござる」

と、和尚に語っている。

前田利家・上杉景勝と会見を終えた良英和尚は、三度び、鉢形城へ入り、北条氏邦との交

渉に入った。

この最中に、車山の石火矢が砲撃を開始し、泉水坂と朽木小路をむすぶ桝形門や立原小路・寺町などに命中し、このあたりの寺院や侍屋敷が燃えはじめ、同じに大手口からの攻撃も、激烈となった。

「いまがよい」

と、北条氏邦はいった。

石火矢の砲撃に、城兵も怯えはじめている。

このような新兵器は、この城に備えられていない。

砲撃の猛攻が尚もつづくなら、城内の諸方に火災が起る。

そうなれば、押し寄せる敵の大軍を防げるものではない。

城内には、女子供をふくめた家臣の家族をも収容しているのだ。

「すぐに、頭を……」

と、氏邦は和尚にたのみ、剃髪してしまい、

「御坊の僧衣を貸していただきたい」

「ようござる」

良英和尚が脱いだ僧衣をまとい、北条氏邦は、

「このたびの御坊の御はたらき、かたじけなく存ずる」

厚く礼をのべ、北条家の什宝三点を和尚へ贈った。

こうなると北条氏邦の行動には、すこしのためらいもない。

氏邦自身、これまでの苦悩から解き放たれたからである。

氏邦は、重臣の諏訪部遠江守をよび、自分が投降した後の始末を依頼した。

「城を明け渡したのちは、みなみな、おもいのままにいたすがよい」

諏訪部は開城を唱えていただけに、反対はせぬ。

だが、あまりにも淡々として、一介の僧侶の姿となった主君の姿を見ては、さすがに堪えきれず、噎び泣いた。

「では……」

と、良英和尚が先導し、北条氏邦は大手口を出て、上杉景勝の陣へ降ろうとしたが、大手口は石火矢の砲撃につづいて戦闘がおこなわれている。

そこで、本丸の氏邦居館からも近い搦手口の城門を出て、前田利家の陣営へ投降した。

従うものは侍臣十名ほどにすぎず、僧侶の姿となった氏邦が通るのを見た兵士たちも、

（あれが、御屋形様とは……？）

そのときは、気づかなかったほどだという。

諏訪部遠江守は、氏邦が城下へ出たのちに、はじめて城内の将兵へ、すべてを告げた。

同時に、敵の攻撃も熄んだ。

僧形となって投降した北条氏邦を、前田利家は、あたたかく迎え入れた。

利家は、わが陣営の奥深く氏邦をみちびき、客分として丁重にあつかった。

（これなれば、開城のための約定を違えることもあるまい）

氏邦も安心をしたらしく、この夜は、まるで、

「死人のごとく……」

眠りこけたという。

停戦となった鉢形城内では、諏訪部遠江守が中心となって、城兵の鎮静にあたった。

それでも尚、

「無念である!!」

というので、自害する者もなかったとはいえぬ。

だが、大半は、虚脱状態になっていたのであろう。

上田源五郎が、正子の寝間へ忍んで来たのは、この夜ふけであった。

正子ばかりではない。

いまは、この寝間に、於丹も勝千代もいる。

源五郎が、鉢形城兵の武具をつけていたので、正子も於丹も瞠目した。

「兄上は、戦うておられましたか?」

と、勝千代がいった。

「いや、戦うてはおらぬが、戦さ見物をしておりまいた」

源五郎は満面に、さも、うれしげな笑いを浮かべ、

「母上。ようござりましたな」

於丹へ語りかけた。

「これにて、父上との御対面は、いずれは適いましょう」

於丹は、

（そのように、うまく事が運ぶものであろうか?）

半信半疑であった。

「明日か明後日のうちには、この城も明け渡されましょう。その後は、父上のおおせに従い、丹波の里の板垣甚十郎様の許へまいられるがよいと存じます」

「して、源五郎どのは?」

「母上、申すまでもござりませぬ。源五が御供をいたします」

源五郎の、このたのもしい言葉を聞いて、さすがに三人の顔へ喜色があふれた。

「なれど、いったんは城内から脱け出した私ゆえ、鉢形を遠ざかるまでは御供も適いますまい。余人の目もござります」

源五郎は、丹念に描いた一枚の絵図を勝千代の前へ、ひろげて見せた。

「よう、ごらんなされ。これが丹波への道筋でござる。よろしいか、この絵図のとおりにおすすみなされ。私は蔭ながら、おまもりいたす」

於丹は、勝千代に眴せをし、次の間へ退いて行った。

正子と源五郎を、二人きりにさせてやりたかったのであろう。

昨夜までの城内にくらべると、いまは、まったく静穏になってしまったが、それでも時折、

夏の夜の闇の底で、喚き合う声や、あわただしく走りまわる足音が聞こえてくる。
まだ、自害をする者や、悲憤の叫びをあげる者がいるらしい。
「よかったな、正子どの」
源五郎が擦り寄って来て、正子の耳もとへ唇(くち)をさし寄せ、
「いまは、抱き合うわけにもまいるまい」
ささやいて、正子の耳朶へ軽く歯を当てた。
「うれしゅうございます」
「おもいのほかに、万事が、うまく運んだ……」
「え……?」
「いやなに、こちらのことだ」
「これからは、丹波の里で、また、以前のように暮せまする」
「いや、私は、そうもなるまい」
「何故でございます?」
不安に駆られる正子へ、
「案ずるな。月毎というわけにもまいるまいが……さよう、三月(みつき)に一度は会いにもどれよう。鉢形の城の始末もつき、やがて小田原の本城も落ち、関東の盟主といわれた北条家も、これで滅び去って、いよいよ、関白殿下の天下(てんが)となるわけだが……」
いいさした上田源五郎の口元へ、苦い微笑がただよって、

「なれど、私のほうは、これからが大変なのだ」
「何がでございます?」
源五郎は、こたえなかったが、目は笑っている。
「何が、大変なのでございます?」
たまりかねて、正子が源五郎の胸へ取り縋(すが)った。
「それは、な……」
「それは?」
「いささか、後始末をせねばならぬことあって……」
「何の後始末を?」
「たとえば……」
「たとえば?」
「さよう。ほれ、たとえば、父上のことだ」
「あ……」
「私は、かならず生き長らえておられるとおもうが、それにしても、父上の安否をしかとたしかめねばなるまい。どうだ?」
「それは、あの……」
「そして、そなたにも母上にも、安心をしていただかねばならぬし、父上の耳へも、こちらの様子をつたえておかねばならぬ」

正子が目をみはって、

「そのようなことが、できるのでございますか？」

「むずかしいが、やらねばならぬ。それが山岸家のむすめを娶った私のつとめではないか」

「うれしい……」

何という、たのもしい夫なのであろうか。

（源五どのに、これほどのたのもしさがあろうとは、おもわなんだ……）

夫婦となってからも、正子には、どこかに、

（源五どのは、父上の家来でもある……）

というおもいが、無意識のうちに残ってい、口のききようにも態度にも、おもわず、それがあらわれてしまっていたものだ。

いまは、そうした言動のすべてが、正子から消えてしまったといってよい。

それから間もなく……。

上田源五郎は、奥庭の闇へ消え去った。

翌日。

鉢形城の明け渡しがおこなわれた。

僧形の主君・北条氏邦を、敵将・前田利家の傍に見た鉢形城兵のおもいは、怒りと悲歎と、安堵と不安が綯い交ざった複雑なものであった。

このときまで堪えていた家来の中で、二人ほどが、たまりかねたらしく、

「ごめん下され!!」

大声を発し、短刀で、わが喉笛を掻き切り、打ち倒れた。

しかし、北条氏邦は、あくまでも安らかに落ちついていたし、前田利家も氏邦へ対して、みじんも勝者の奢りを見せぬ。

これが鉢形の将兵を落ちつかせた。

夏の朝の日ざしが、しだいに輝きと強さを増してゆく。

戦闘の絶えた城内の、深い木立に蟬が鳴きこめていた。

前田利家は、しずかにすすみ出て、

「和論がととのうたいまは、敵も味方もない。これより、みなみなは、おもうままに、おもうところへおもむかれよ。また、これより先、武人として生くるのぞみあるものは、不肖ながら、それがしが手許へ引き取り申そう」

誠意のこもった口調で、さらに、これより先の北条氏邦については、

「この利家が身に替えても、守護いたす」

いいはなったとき、鉢形将兵の間に、感動のどよめきが起った。

後に前田利家は、この誓いを実行している。

それだけの決意がこもった利家の声なればこそ、城兵たちを納得せしめたのであろう。

城を明け渡したのち、鉢形・北条家に仕えていた将兵と、その家族は、それぞれに散って行った。

山岸十兵衛の妻子は、上田源五郎の絵図に書き入れられた進路に従って甲斐の丹波の里へ向った。

勝千代は、山岸家に仕えていた奉公人のすべてに暇をあたえたが、その折、家財や金銀の大半をあたえたそうな。

三人は、これを護る従者もなしに、秩父の方へ向った。

しかし、何となく心強い。

見えぬところから、

（源五どのが、見まもっていてくれる）

と、おもっているからであろう。

源五郎は、道中の泊る場所まで指定してあった。

それは、すべて民家であったが、そこへ到着すると、家の人びとが待ち構えていたように迎え入れてくれるのだ。

これは、あらかじめ、源五郎が宿泊の費用をわたしておき、よくよく、たのみこんでおいたにちがいない。

もっとも、これは丹波の里までの全行程ではなかった。

三人が、秩父の武甲山のふもとをすすみつつあったとき、早くも源五郎が追いついて来てくれたのである。

そして、源五郎は、三人を無事に丹波の里へ送りとどけてくれた。

丹波の里に住む板垣甚十郎は、山岸十兵衛の遠縁にあたる人物だが、同じ武田家に仕えていたわけだから、十兵衛の妻子を、よく見知っている。

「おお。ようまいられたな」

いまは、すっかり山村の生活に溶け込んでいる板垣甚十郎と、その家族はよろこんで四人を迎えてくれた。

山岸十兵衛は、すでに、板垣甚十郎へあてて、妻子のことを依頼する手紙を届けておいたという。

「わしも気になってのう。いっそ、鉢形まで出向き、様子を見にまいろうかとおもうていたのじゃ。やはり、城は落ちたか。いたしかたもないことよ」

甚十郎は、十兵衛がとらわれの身となったことを聞き、

「案じられるな。徳川家へは武田の遺臣が多く召し抱えられていることじゃ」

自信ありげに、そういってくれた。

正子の夫として、上田源五郎が引き合わされ、源五郎は丹波の里に、およそ一ヶ月もとどまっていたろうか。

或夜、源五郎が正子に、

「明日は、此処を発ち、父上の安否を探りにまいるつもりだ」

「大丈夫でございますか？」

「何の。小田原の落城も間近いことだろう」

この年の七月十三日。

小田原城の北条氏政・氏直父子は豊臣秀吉に降伏し、秀吉は小田原へ入城した。

その後、秀吉は傘下の将兵の賞罰をおこない、北条方の処分に取りかかった。

「御老公」とよばれた北条氏政は切腹を命ぜられた。

北条氏照（八王子城主）も自決したが、当主の北条氏直は高野山へ放逐され、一命を助けられた。

これは北条氏直が、徳川家康の女婿であったからでもあろう。のちに氏直は秀吉から一万石をあたえられたが、文禄元年（一五九二年）に三十一歳で病死している。

その他、それぞれに処分をされたわけだが、早くから豊臣方に内応していた松田尾張守憲秀は、それが発覚して捕えられ、北条氏政から切腹をいいわたされた。これは、小田原落城前のことである。

松田憲秀が、密かに豊臣方と通じていることを摘発したのは、憲秀の次男・松田秀治だという。

鉢形城主・北条氏邦は、どうしたろうか……。

氏邦は、前田利家に引き取られ、加賀（石川県）の金沢城内に暮していたが、鉢形落城の七年後（慶長二年）に、五十七歳の生涯を終えた。

これより先、弟の藤田信吉に引き取られ、尼僧となっていた氏邦夫人は自害をとげ、氏邦の末子・光福丸も慶長四年に病歿している。

さて……。

関東の北条氏を討滅した豊臣秀吉は、奥州をも平定し、名実ともに、

「天下人」

となった。

そして、徳川家康は、小田原落城の後に、秀吉から、

「関東を治められよ」

と、すすめられ、その本拠を駿府から江戸へ移すことになった。

関東の諸国を合わせ、二百四十二万石の太守となったわけである。

これより、徳川家康のエネルギッシュな関東経営が開始される。

家康は、榊原康政に捕えられた山岸十兵衛直勝のことを耳にして、

「連れてまいれ」

わざわざ、目通りをゆるし、

「十兵衛は、わしが許へよこすがよい」

榊原康政から十兵衛を引き取り、徳川の家臣とした。

こうして、すべてが決着したように見えたが、そうではない。

日本の天下も、これより先、おもいがけぬ動乱期を迎えるわけだが、それよりも上田源五郎であった。

源五郎の苦闘は、実に、小田原落城の後から始まったといってよい。

再十七年後

寝所の臥床の中で、山岸十兵衛は浅い眠りから覚めた。

夜明けには、まだ、程遠い時刻であった。

老いた所為もあって、近年の十兵衛直勝の目覚めが早いこともあるが、いまは、そればかりではない。

寝所の外の、奥庭の闇の中に、人の気配を感じたからだ。

その相手は、むしろ、十兵衛へ、自分が忍んで来たことを知らせようとしているかのように、戸の外に佇んでいる。

（源五郎じゃな……）

と、十兵衛にはわかった。

この、江戸城下の山岸屋敷にいる妻の正子と、わが女の松代に会うため、上田源五郎は年に二度ほど姿を見せる。ときには、三ヶ月に一度のこともあるし、つづけざまに忍んで来ることもある。

邸内の別棟に、正子と松代は暮しているわけだが、源五郎がやって来ると、この別棟には余人を近寄せぬ。

そのことを、だれよりも主人の山岸十兵衛が、

「暗黙のうちに、了解をしている……」

のだから、家来たちも奉公人も、何もいわぬ。

鉢形と小田原が落城し、関東の北条氏が滅びてより、十七年の歳月がすぎていた。

いまの山岸十兵衛は、徳川家康に仕え、千石の旗本になっていて、その名も、

「山岸主膳之助景行」

と、あらためているが、この物語では最後まで「十兵衛直勝」の名で通したい。

同じように、上田源五郎も、ほんらいの「小杉虎松」の名前にもどったわけだが、これもまた従来の名で通したい。

あのときから十七年を経て、山岸十兵衛は、もう七十に近い老齢に達している。

妻の於丹は、五年前の夏、発病して安らかに息を引き取った。

長男の勝千代も三十をこえ、妻を迎え、一男一女をもうけている。

そして、上田源五郎も四十をこえてしまった。

正子も三十六歳というわけで、二人の間に生まれた松代は、この年、慶長十二年（一六〇七年）で十七歳になった。

こうして、源五郎と正子は、十七年もの間、まことに変則的な夫婦生活を送ってきたわけだが、いまは正子も、すっかり慣れてしまったらしい。

正子と松代の許へ忍んで来て数日をすごしたのち、源五郎は、また何処かへ消え去って行

く。

いまは源五郎も、自分の過去のすべてを、正子に語っていると看てよい。

そして、いまも尚、源五郎は危険の日々を送りつつあった。

(源五には、却って気の毒なことをしてしもうた……)

つくづくと、十兵衛はおもう。

甲賀の頭領・山中大和守俊房に叛いた上田源五郎が、

「裏切り者」

の汚名を着せられ、この十七年の間に甲賀忍びから一命をつけ狙われていることは、十兵衛にも察しがつく。

なればこそ、いまもって、源五郎は妻子と共に暮すことができないのだ。

「かまわぬから、この屋敷で生涯を送るように、源五へ伝えるがよい。わしが、どのようにしても源五の身の立つようにする」

いつであったか、山岸十兵衛は正子に、そういったことがある。

正子は、そのつぎに源五郎が忍んで来たとき、父の言葉を伝えたが、

「父上の御言葉は、かたじけないが……まだまだ、そのときではない」

との源五郎の声を、父に告げたのである。

これはつまり、いまもって源五郎が、甲賀の執拗な追及を受け、一命の危険を感じているからに相違ない。

「自分が、この屋敷に長く住み暮していては、そなたや松代のみではなく、父上へも迷惑がかかることになる」

と、源五郎は正子にいったそうな。

(わしの迷惑など、どうでもよい)

と、十兵衛はおもっている。

この十七年間は、十兵衛にとって、

「まさに、拾いもの……」

の、長い歳月であった。

あのとき、相模原で死ぬべき身を捕えられたのちも、十兵衛は何度か自決の事を考えていた。

以前は武田家の忍びの者だった十兵衛直勝ゆえ、刃物がなくとも、自決の方法はいくらもある。

しかし、十兵衛は鉢形城攻防戦の結末を、

(何としても知りたい)

と、おもった。

これは、当然であろう。

城は落ちるに決まっているが、その折の北条氏邦の生死の様子を知りたい。また、落城のとき、城に立てこもっていた将兵の家族の安否を知りたかった。

その中には当然、十兵衛の妻子もふくまれていたからである。

もしも、北条氏邦が最後まで戦いぬき、討死をするなり、城内で自決を遂げるなりしていたら、おそらく十兵衛も後を追ったにちがいない。

ところが、鉢形落城は、すでにのべたような結果を見た。

必死の防戦があったわけでもなく、城主の北条氏邦は、たちまちに頭をまるめ、僧の姿となって、敵陣へ降ったのである。

それを耳にしたとき、十兵衛の決意は変った。

これでは、北条氏邦に義理立てをして自決することもないではないか……。

だが、心身のちからが萎えつくして、真先に降伏をしてしまった氏邦を軽蔑してのことではない。

いかなる豪勇の士とて、時と場合によっては、

「別人のごとく……」

弱さと衰えを見せることがある。

また、平常は弱者であったものが、何かの衝動を受けた瞬間に、

「見ちがえるばかりの……」

強者ともなり得るのだ。

それが人間であることを、山岸十兵衛はわきまえている。

ゆえに、当時の氏邦の心痛を、

（さぞ、御苦労なことであったろう）

おもいやったとき、われ知らず泪が滲んできたほどであった。

しかし、こうなれば、死をもって氏邦の恩顧にむくいることもなくなったことは事実だ。

鉢形将兵と、その家族が、おもいおもいに散って行ったことも、十兵衛は知らされた。

捕えられたのち、十兵衛は箱根・湯本に設けられた〔締り所〕に軟禁されたけれども、榊原康政をはじめ、徳川方の扱いは丁重なものだったといえよう。

こうなると、やはり、妻子の行方が気にかかってくる。

（おそらく、源五郎は密かに鉢形へもどり、於丹や子たちを見まもっていてくれよう）

これは、十兵衛の直感であった。

鉢形勢五百が小田原へ向ったことを、敵方へ知らせたのは、おそらく上田源五郎にちがいない。

十兵衛は、源五郎の目をもあざむいたつもりでいた。まさかに源五郎が城外へ脱け出し、いったんは松井田城へ進むと見せかけた鉢形勢の後を、尾行して来るとはおもわなかった。

何故なら、いったん城外へ脱出してしまえば、二度と城内へはもどれなくなる。

つまり、山岸十兵衛の家来になりきって城内に残り、城攻めの折に、甲賀忍びとしての、

（はたらきができなくなる……）

と、十兵衛は考えていた。

ところが上田源五郎は、すべてをなげうち、城外へ脱出し、独自の活動をはじめた。

そして、あくまでも忍びの者どうしの一対一の闘いを山岸十兵衛へ挑んできた。

源五郎の投げ網に敗北したとき、

（みごとに、仕てやられたわ……）

むしろ十兵衛は、苦笑をおぼえたほどだ。

（そうか。源五は、このことをおもいつめていたのか……）

十兵衛の目にも、このときの源五郎の行動は、忍びの者として〔異色〕だったといえよう。

そして、その後、天下は、おもいもかけぬ激しさでうごきはじめた。

小田原攻めが終って後、山岸十兵衛は、

（少なくとも、わしが、この世に在るうちは戦さも起るまい）

と、おもっていた。

豊臣秀吉の天下なのである。

小田原攻めに見せつけた、あの恐るべき秀吉の威勢をおもえば、十兵衛ならずとも、今度こそ天下の統一が成ったと考えていたろう。

ところが、その後、豊臣秀吉はわずか八年で世を去ったのである。六十三歳であった。

小田原攻めが、秀吉の頂点といってよかった。

その後、秀吉は日本諸国の経営に全力をそそぐのかとおもわれたが、突如、朝鮮国への侵攻を計画し、実行に移しはじめた。

この無謀きわまる海外への出兵に賛成をした大名は一人もいないといってよい。

日本の国力をかたむけ、海を渡っての、数年におよぶ戦役は秀吉にも日本にも、何一つ益をもたらさなかった。

秀吉も疲れ果て、諸大名も相次ぐ戦役のために困憊した。

秀吉ほどの人物が、何故、このような戦さを始めたのか、山岸十兵衛にもわからなかった。

秀吉は、側室の淀の方が生んだ我子の鶴松が三歳にして急死をとげた、その切実な悲しみから逃れようとして、異国への侵攻を開始したのであろうという説もある。

何といっても五十をこえてから、はじめて得た跡つぎの男子を失ったのだから、この説もうなずけぬことはない。

それに、いま一つ。

秀吉が、もっとも信頼をしていた異父弟の豊臣秀長（大和の郡山城主・権大納言）も相ついで急死してしまった。

豊臣秀長は父こそ違え、秀吉にとっては血を分けた、ただ一人の弟で、人格も立派であり、政治家としてもすぐれていた。

鶴松が夭折しても、弟の秀長が、いつまでも健在で兄・秀吉を補佐していたら、たとえ朝鮮出兵が実行されたとしても、あのように愚かな結果をまねくには至らなかったろう。

のちに秀吉は、またも淀の方との間に、秀頼という男子をもうけた。

このときの秀吉のよろこびようは非常なものであったが、朝鮮での戦闘は尚もつづけられ、秀吉は、やがて病患にさいなまれ、幼い世つぎの秀頼を残して、病歿してしまう。

豊臣秀吉の死後、朝鮮戦役も終結したが、同時に、豊臣家の大老として、秀吉から後事を托されていた徳川家康の威望が、にわかに強大なものとなってきた。

もはや、家康は、

「天下を、わがものに……」

との決意を隠そうとはしなかった。

秀吉の遺子で、まだ幼い豊臣秀頼を大坂城に擁している豊臣家恩顧の大名たちは、家康に対抗し、ついに兵をあげた。

もとより、徳川家康は、

「のぞむところ……」

であって、この東西両軍の決戦が関ヶ原でおこなわれ、豊臣勢力の西軍は、家康の東軍によって敗北した。

これが七年前（慶長五年）のことである。

家康は、西軍の総帥・石田三成をはじめ、敵方にまわった諸大名を、勝者の常として厳しく処罰したけれども、幼い豊臣秀頼の身には手をのばさなかった。

そのかわりに、三年後の慶長八年、徳川家康は征夷大将軍に補せられ、江戸幕府を開いた。

ここに、徳川の天下平定が成ったわけだ。

家康は、豊臣秀頼へ、わが孫女の千姫を嫁がしめて、徳川・豊臣両家の、

「絆をむすぶ……」

と共に、豊臣家へ対して、

「われに従うべし」

の態度を、明示しはじめた。

これまでは、豊臣秀吉の遺子へ対しての礼節をまもり、たとえば新年の挨拶にも、家康のほうから大坂城へおもむいていたが、

「いまは、あきらかに徳川の天下となったのであるから、豊臣家も、よくよく、その事をわきまえなくてはならぬ」

と、家康は事あるたびに、豊臣家へ自分の意思を通じさせようとはかっている。

だが、大坂城には、秀頼の生母の淀の方をはじめ、豊臣家の家臣たちの家康への対応ぶりが、依然として、

「徳川は、豊臣家の臣下であった」

という感覚からぬけきれぬ。

家康が、名実ともに、

「天下人」

となったことを、みとめざるを得ないのだが、さりとて、いさぎよく、これに従いかねている。

（このままで行くと、いまに、もう一戦さあるやも知れぬ。なれど、そのとき、わしはこの

世の人ではあるまい）

山岸十兵衛は、そうおもっている。

近ごろ、十兵衛の躰（からだ）は、おとろえてきはじめていた。

この十七年の間に、上田源五郎の顔を見たことがない山岸十兵衛だが、声を耳にしたことはある。はじめは、相模野で捕えられ、箱根・湯本の締り所で日を送っていたときのことだ。

締り所には、捕えられた北条方の武将たちが何人か軟禁されていたが、それぞれに一間（ひとま）をあたえられていたらしい。

それでも、厚い壁と牢格子（ろうこうし）に囲まれた部屋から、自由に外へ出ることもできなかったし、外から入ることもできなかった。

むろん、見張りもきびしい。

ところが、或夜（あるよ）……。

源五郎の声が、天井裏から落ちてきた。

「父上……父上……」

ささやくような声に目覚めた十兵衛へ、

「そのまま、そのまま……」

「源五じゃな」

「はい」

声は、天井の隙間から洩れてくる。

「源五。ひどい目に合わせたのう」

十兵衛の声には、みじんも憎悪がなかった。

「申しわけもありませぬ」

「何の。見事であったぞ」

「恐れ入ります。ときに、父上……」

「まだ、岳父（ちち）とおもうてくれるのか？」

「いけませぬか……」

「いや、かまわぬ。この後も、正子を妻にしていてよいのか？」

「はい……」

「甲賀との間は、いかが相なっておるのじゃ？」

「もはや、手が切れましてござる」

「ふうむ……」

「それよりも、申しあげておくことがありまする」

と、源五郎は、十兵衛の家族たちが無事に丹波の里へ到着したことを告げ、

「また、折あらば、忍んでまいります。ごめん下され」

「源五……待て。待たぬか」

こたえは、なかった。

こうして山岸十兵衛は、小田原攻めが終った後、徳川の家臣となって、丹波の里へ妻や子

たちを迎えにおもむいたのである。

すでに、そのとき、上田源五郎は自分と甲賀との関係や、相模野における顚末を、

「おどろいてはならぬぞ」

と、前置きをして、正子に打ち明けていた。

「なれど父上、これが、おどろかずにはいられましょうか……」

正子は十兵衛へ、すべてを語り、

「一時は、夢を見ているかのようにおもわれました」

「さもあろう」

やがて……。

山岸十兵衛は江戸城下に屋敷を拝領した。

だが、正子のみは、それからも三年ほど、丹波の板垣家へとどまっていたのである。

十兵衛は、

「源五にとって、しばらくは正子が、この里にいるほうがよいはずじゃ」

と、いった。

十兵衛は、これより先の上田源五郎が、どのような危難の道を歩むか、

（知れたものではない……）

ことを充分に察知していた。

裏切った忍びの者への、甲賀の制裁はまことにきびしい。

これを見逃しておいては、他の忍びたちの、

「見せしめにならぬ」

からであった。

徳川家の臣となり、江戸に屋敷を構えることを得てのち、山岸十兵衛は丹波にいる正子へ、

「これを、源五にわたしてやるがよい」

と、相応の金銀を届けておいたが、上田源五郎は丹波へ忍んで来たとき、正子から、この岳父の言葉を聞き、

「なに、忍びの者に金子は無用だ。それは父上にもおわかりのはず。なれど、折角のおこころざしゆえ、ありがたくいただこう。これよりは、あまりに御心配をなさらぬよう、父上へおつたえしてくれ」

と、いったそうな。

徳川家康は、時折、十兵衛直勝を召し出し、かつて十兵衛が仕えていた武田・北条の両家の国情や、種々の仕法についての下問があったという。

両家ともに滅び消えたことでもあり、十兵衛は家康の下問にこたえ、家康をよろこばせた。

両家の内情や政治・軍備のありかたなどを聞き取り、家康は自分の参考にしたのであろう。

山岸十兵衛のみではない。

他家から身を移した家臣に対して、家康は暇あるごとに召し出し、いろいろと下問をした

そうな。

こうしたわけで、おそらく徳川家から甲賀の頭領・山中大和守俊房へ、山岸十兵衛についての通達があったものとおもわれる。

何故なら、甲賀は十兵衛暗殺の事をあきらめたからだ。

やがて……。

鉢形時代に、十兵衛へ仕えていた家来たちも五人ほど戻って来てくれた。

慶長五年の関ヶ原戦役に、山岸十兵衛は出陣している。

ただし、十兵衛は、家康の息・徳川秀忠がひきいる第二軍に加わっており、決戦の日には木曾路にいたので、戦闘をしたわけではない。

関ヶ原戦後七年を経たいまも尚、上田源五郎は、山岸十兵衛に会おうとはせぬ。

それでいて、密かに同じ邸内に住む正子と松代の許へ忍んで来て、数日をすごしてゆく。

(何故、わしを避けているのであろうか?)

いろいろと憶測はできるが、

(これだ)

と、おもいあたるふしはないのだ。

十兵衛は正子に、

「もはや、このように天下も落ちついたことゆえ、わしと源五が会うわけにはまいらぬのか?」

尋ねたこともある。

「私も、さように申しつたえましたなれど……」

なれど、源五郎は、

「いや、会わぬがよい。会うたところで、父上とは別に語り合う事柄もない。私は、こうして、たまさかに、そなたと松代の、すこやかな顔を見ることができればそれでよい」

「いまもさほどに、甲賀の追手が?」

「絶え間もないことよ。よほどに、こころをつけねばならぬ」

こういって、源五郎は笑い出したそうな。

「甲賀の追手から逃れる事と、こうして、そなたたちに会う事が、いまの私の生甲斐となってしもうたようだ」

その源五郎の言葉に、山岸十兵衛は一種の共感をおぼえた。

源五郎を探し求める甲賀の忍びたちの目を晦ませ、ときには闘うことが、

(源五郎の忍びの血を燃え立たせているのやも知れぬ……)

このことであった。

十兵衛が時折、正子へわたしておく金銀は、

「父のおこころざしを無にしてもなるまい」

素直に、源五郎は受けおさめるという。

正子も長年にわたって、このような夫婦の暮しをつづけてきたので、いまは、それがすっ

かり身についてしまっている。

そして、正子は、いつまでも若々しかった。

たまさかに会う夫婦だけに、十七年後のいまも、源五郎との交情が新鮮さをたもっているのであろうか。

臥床に身を横たえたまま山岸十兵衛は、依然、外の気配に耳をすませている。

微かに、外の闇がゆれうごいたようだ。

（あ……）

おもわず、十兵衛は半身を起した。

（いま、源五が去って行った……何処へ帰るのであろうか？）

山岸十兵衛の屋敷は、江戸城・本丸の東方、芝崎口（現代の神田橋）にある。

徳川家康が江戸へ入ってより、これまた、十七年を経過しているわけだが、城下の建設は熄むことを知らぬ。

この年の春からは、江戸城の天守閣の工事が開始された。

古い、むかしの江戸は武蔵の国・豊島郡・江戸郷といった。

武蔵野の一村落にすぎなかったのである。

それが鎌倉時代に、武蔵の国でも強力な豪族として知られた江戸氏の居館がいとなまれるようになったが、その後の戦乱によって江戸氏がおとろえると共に、江戸郷も、

「無人の廃墟となった……」

などと、いわれている。

関東管領・上杉氏の重臣・太田道灌が江戸へ城を築いたのは、それより後のことだ。

太田道灌は、主家の内紛に関わり合い、暗殺されてしまったが、以後は、小田原の北条氏が江戸を領有していた。

しかし、江戸城は戦略的に重要な意味をもたなかったので、北条氏もちからを入れて城を修築したわけでもなく、小田原戦後に徳川家康が江戸へ移って来たときは、

「これは、いかにもひどい」

「ひどすぎる」

徳川の家臣たちが茫然となったそうな。

城といっても、竹を植えつけた低い土塁をめぐらした中に、板葺きや茅葺き屋根の粗末な建物があるだけなのだ。

それまでの、駿府の徳川家の堂々たる本城にくらべたなら……と、いうより、まったく、

「くらべものにならぬ」

江戸城であった。

城の南面の土塁の下は、日比谷の入海で、千鳥が群れ飛んでいる。

現代の皇居前の入江に沿って、漁村が点在しているという、まことに物さびしいところだったのである。

豊臣秀吉は、このような城へ、家康を移した。

父祖の代から血と汗をながし、辛酸をなめつくして、わが領国とした東海の地から、家康が関東へ移されたのは、やはり、その実力を秀吉が怖れたからであろう。

家康は一言も不満をもらさず、この宿命を好運への出発とし、江戸城と城下町の建設に全力をそそいできた。

そして、天下人となったいまも、徳川家康は江戸からうごこうとはせぬ。

徳川家康の領所は、関東六ヶ国二百四十二万石におよぶ。

その本拠が、江戸であった。

江戸の地は南西から東北にかけて、五つの台地が海（江戸湾）へ向って張り出している。

この中で、麹町台地と、神田・本郷台地の間をながれる平川は、川幅も大きく、江戸城にも近い。

となれば、町づくりが平川を中心におこなわれたのも当然であったろう。

むかしから、平川へは海陸から諸国の物産が集散したという。

家康もまた、平川を利用し、ここへ海からも舟を引き入れ、材木や物資を運べるようにした。

したがって、このあたりから江戸の町は拡大していったのである。

いまは江戸湾の埋め立ても、しきりにおこなわれているし、江戸城下には活気がみなぎりわたっていた。

さて……。

この日の夜明けを待たずに、山岸十兵衛屋敷の塀を軽がると飛び越え、外へ出た上田源五郎は、あかつきの闇にまぎれ、平川沿いの道を北へすすむ。

現代の皇居の田安門があるあたり……すなわち、千代田区・九段のあたりまで来ると、樹木が鬱蒼としており、武家屋敷も疎であった。

夏が、近づいている。

若葉の匂いが、闇の中に、なまぐさいまでにたちこめていた。

源五郎は、江戸城の北面から西側へまわりつつあった。

その足取りには、いささかの乱れもなく、ためらいもなかったけれども、

（はて……？）

背後から、自分を尾けて来る者の気配を、早くも源五郎は感じている。

（山岸屋敷を出るところを、見つけられたか……）

とすれば、山岸屋敷へ甲賀の目が光っていたことになる。

それは、以前から予期していたことゆえ、山岸屋敷への出入りには、充分に気をつけていたのだ。

山岸十兵衛については、心配することもない。

徳川家から甲賀の頭領・山中俊房へ、十兵衛を害さぬようにと、念を入れてあるからだ。

それゆえ、源五郎は自分自身をまもりぬけばよい。

（もしやして、こたび、山岸屋敷の見張りについていたのは、夜張りの助七ではなかったろ

うか……?）

この十七年の間に、源五郎は助七によって数度、発見されている。

だが、そのたびに助七は、自分から源五郎に襲いかかろうとはしなかった。

夜張りの助七にとっては、

「手塩にかけて育てあげた我子同様……」

の、上田源五郎であった。

ゆえに、源五郎の所在を探ることはしても、これを襲うことは他の甲賀忍びにまかせたのやも知れぬ。

いまの助七は、六十をこえている。

源五郎と闘っても、これを打ち殪すだけのちからはないと看てよい。

小田原攻めが終って後、甲賀の忍びたちの報告を総合してみると、あのときの上田源五郎がとった行動は、あきらかに甲賀の指令を無視したものに見えてきた。

ただし、山岸屋敷の湯殿における十兵衛と源五郎の対決だけは、だれも知らぬ。

それだけに、

「源五郎は、山岸十兵衛の一命を助けんがため、生け捕りにさせた」

ことのみが大きく浮き出てしまった。

甲賀の頭領・山中俊房が、お万喜を通じて、

「山岸十兵衛を討て」

と指令をあたえたにもかかわらず、源五郎はこれに叛いたことになる。

そうなると、鉢形勢の小田原入城の事を急報した上田源五郎の手柄も、

（何やら、怪しげな……?）

ものに看られてしまう。

戦後の、山岸十兵衛の安泰を見ても、

（源五郎と十兵衛と、しめし合わせていたのではないか?）

この疑惑が、いまは正しい判定となって、甲賀の忍びたちに定着してしまった。

夜張りの助七とて、これを、みとめざるを得なかったろう。

しかも、山岸十兵衛の女・正子は、源五郎の子とおもわれる松代を生んでいるのだ。

小田原・法城院の心山和尚は、十兵衛に暗殺されたとおもいこんでいる山中俊房だけに、

（おのれ、源五め!!）

甲賀としては十兵衛を討てなくなった無念さが、上田源五郎への怒りを層倍のものとしたといってよい。

だが、十七年もかかって、甲賀は、ただ一人の源五郎を討ち取ることができないでいる。

その口惜しさが、山中俊房のみか、配下の忍びたちの探索と追及への執念を、さらに激しいものとしているといってよい。

これまでに源五郎は、数度、甲賀の襲撃を受けていた。

甲賀の忍びに襲われたとき、源五郎は、逃げるために闘ったけれども、一人も殺害しては

いない。

かつて、多摩丘陵の山林で、下中の清松の右眼へ〔飛苦無〕を撃ち込んだように、その程度の打撃をあたえはしたが、

（甲賀の者を殺めることだけはすまい）

と、源五郎は、決意していた。

（この、おれのこころは、夜張りの小父ごだけがわかってくれよう。それでよいのだ）

十七年前の、あのときの自分の行動に、

（いささかも、疾しいところはない）

と、源五郎は自負している。

人間の熱い血と、忍びの者としての任務を、

（おれは、溶け合わせてはたらいてみた）

そう、おもっている。

その結果はさておいて、

（おれでなくてはできぬ忍びのはたらきをした）

このことを、みじんも疑ったことはない。

江戸城の半蔵門のあたりから、源五郎は赤坂の台地へさしかかっていた。

このあたりには、近年、おどろくほどに町屋が増えてきている。

暁闇は、まだ濃かった。

源五郎は例の墨流しもかぶっていなかった。

わが手で細目に縫いあげた袴に、これも袖の短い小袖をつけ、脇差を腰に帯しているのみだ。

源五郎は、闇の中を、音もなく、ふわふわと浮くようにして歩む。

ゆっくりと歩んでいるように見えて、実はそうでない。

やや斜めに右肩を突き出すようにして、一定の速度をくずさずに歩んでいるのだが、それは常人が小走りをしているのと同様の速力であった。

それでいて源五郎は、駆けている姿勢にはならない。

（やはり、尾けられている……）

尾行して来る者も、足音を消し、気配を起さぬのだが、源五郎の鋭敏な感能に狂いはないはずだ。

（夜張りの小父ごではないらしい）

もしやすると、下中の清松ではないか……。

麻布台地の木立や坂道を縫ってすすみながら、

（これでは、いまの棲家から離れねばなるまい）

と、源五郎はおもった。

いま、上田源五郎は高輪台地の片隅の小さな家に棲み暮している。

「地勢の高下均整ならず、崖谷分裂して山丘起伏多し」

などと、物の本に記してあるこの麻布台地には、まだ、野武士のような強盗が出没するそうな。

声

高輪と白銀の台地の狭間に、土地の人びとが、

「地獄谷」

などとよんでいる谷間がある。

このあたりは、現代の東京都・港区白金台となり、東京の一等住宅地といってよいが、当時は樹木の生い繁る谷間が多く、住む人も多くはなかった。

上田源五郎が、地獄谷の奥にある我家に近づいたとき、ようやくに東の空が白みはじめた。

だが、鬱蒼とした樹木の底にある源五郎の小屋のあたりに、その暁の光りはとどいていない。

それでも冬の間は、まだ見通しがきかぬものでもないのだが、初夏のいまは繁茂する樹々の葉が厚い壁のようになって、源五郎の小屋を覆いつくしている。

冬の季節だとて、崖の上の細道を通る人の目にも、源五郎の小屋はみとめられなかった。

崖の上の小道まで来た源五郎は、しずかに身を屈め、うごかなくなった。

暁闇が、桔梗色ほどの明るみをたたえてきている。

（どうやら、尾けて来てはおらぬような……）

そのように感じられる。

迷路が多い麻布台地の谷間で、尾行者を振り切ってしまったと、源五郎はおもっている。

（よし。大丈夫のようだ）

ふわりと、源五郎の躰が崖下へ飛んだ。

そこは、小さな沼のほとりである。

また屈み込み、しばらくはうごかず、源五郎はあたりの気配をうかがった。

ややあって、源五郎は立ちあがり、彼方の小屋へ歩みはじめた。

その小屋は、源五郎が自分で建てたものだ。

小屋の中には、わずかな身のまわりの品と、簡便な自炊道具があるのみであったが、雨や雪の日以外は、ほとんど、夜眠るときにだけ小屋へ帰って来る源五郎であった。

いまの源五郎は腰に帯びている脇差のほか、何の武器もない。

あの甲賀の〔飛苦無〕さえも使い果してしまっている。

（むしろ、そうしたものを手にしていないほうがよい。おれはもう、ただの一人も殺めるつもりはない。甲賀の忍びに見出され、逃げ切れずに殺されてしまうのなら、それもよいだろう）

その覚悟は、すでにきまっているといってよい。

（だが、むざむざと殺されはせぬ。どこまで逃げきれるか、それを試してみるのもおもしろい）

それは、上田源五郎と甲賀との、奇妙な闘いでもあった。

その闘いは、源五郎にとり、一つの生甲斐ともなってしまったようである。

（どこまで逃げきれるか……）

行手の展開が、源五郎にとっては、まことに興味ぶかいものとなりつつある。

それだけに、年に何度か、正子と松代の許を密かに訪れることがたまらなくたのしい。

正子との夫婦生活が正常にいとなまれていたなら、

（到底、このたのしみは味わえまい）

とすら、おもうのだ。

これはやはり、源五郎の神経のはたらきが忍びの者のそれだからだ、といってよい。

時折、山岸十兵衛が正子を通じてわたしてくれる金子で、源五郎は充分に暮して行ける。

そうした金がなくとも、源五郎は生きて行くに、すこしの不自由もない。

忍びの者は、常人にくらべたなら、万能といってもよい。

気候のよい国の、山の中へでも入ってしまえば、木の実や薬草や鳥獣を食糧にしても生きて行けるだけの体力と術技をそなえているからだ。

いまも時折は、そうした暮しをしてみることがある。

そのほうが、甲賀の眼から逃れるためには適当だといえよう。

けれども源五郎は、人里へ出て来て、

（さあ、見つけられるものなら見つけてみよ）

むしろ、甲賀へ挑戦するような気分になっている。

それはつまり、いまも尚、上田源五郎が忍びの者としての情熱を失わぬからではないのか……。

このような忍びの者が、他にいるだろうか。

おそらく、いないだろう。

とすれば、源五郎は独自の忍びの者として、いまも生きていることになる。

山岸十兵衛は、さすがに、これを察知して、

「源五の生き方も、まんざらではないのじゃ。そなたたちが案ずるほどのことはない」

いつであったか、正子と松代に、しみじみといい聞かせたことがある。

（さて……今日は、ゆるりと眠ろうか）

暗い木立の中に、自分の小屋が見えてきた。

（よい時候になった。久しぶりに伊豆の国へおもむき、こころゆくまで、あの青い海で泳ぎまわるのもよいな）

そのとき、沼のほとりに黒い影が一つ、滲み出るようにあらわれた。

同時に、源五郎の小屋の、裏手の木蔭からも一つ二つと黒い影が浮き出してきた。

上田源五郎は、すこしも気づかぬ様子で小屋の戸を開け、中へ入って行った。

そのとき、沼のほとりの人影は合わせて三つに増えている。

彼らは、甲賀・山中家の忍びの者で、はじめに沼のほとりへあらわれたのは、下中の清松であった。

五人の山中忍びは、このあたりに住む百姓と同じような姿(いでたち)をしているが、足ごしらえを厳重にし、それぞれに脇差や、杖(つえ)に見せかけた〔継(つ)ぎ手槍(てやり)〕を手にしている。

継ぎ手槍とは、杖の中に槍が仕込んであり、これを引きぬいて杖の上部へつなぎ合わせるようになっている甲賀の武器だ。

下中の清松は、右眼に灰色の布でつくった〔眼帯〕をあてている。

清松は、怨みと憎悪に光る左眼で、源五郎が小屋へ入るのを見とどけるや、

「それ」

うなずいて見せ、沼のほとりにいた二人の忍びと共に、音もなく、小屋へ向って走り出した。

そのとき、小屋の裏手にいた二人の忍びたちも、うごき出している。

その姿が、小屋に隠れて見えなくなった。

清松は、小屋の前方の、およそ五、六間ほど手前まで走り寄って、ぱっと地に伏せた。

小屋の裏手から、突然、黄色の煙がたちのぼったかとおもうと、つぎの瞬間には、小屋の屋根が、めらめらと燃えはじめたではないか。

そして……。

わずかな間を置いて、爆発音がとどろき、小屋が崩れ壊れた。

得物(えもの)を振りかざし、または飛苦無を投げ撃ちながら、裏と表から五人の忍びの者が一斉に小屋へ向って殺到した。

何分にも、せまい小屋である。

中は三坪ほどにすぎない。

もしも、火薬の爆発を受けて尚、源五郎の息が絶えなかったとしたら、よろめきつつ、潰(つぶ)れた小屋の残骸の中から姿を見せるはずであった。

だが……。

いない。源五郎の姿が、見えなかった。

五人の山中忍びは、燃えあがる小屋の周辺を走りまわっている。

「おらぬぞ」

だれかが、叫んだ。

そのとき、小屋の左側の崖下から何かが突風のように疾(はし)り出て来た。

それは、上田源五郎であった。

源五郎は、小屋へ入って間もなく、異常を感じた。

裏手の、小屋の外側から何者かが火を放ったからだ。

しかも、すでに、油や火薬により、小屋の内部へまでも仕掛けが施してあったのだ。

たちまち、小屋の中に黄色の煙が渦を巻くようにたちこめてきた。

源五郎が、甲賀でいう〔目晦しの穴道〕へ飛び込んだのは、そのときである。

この小屋を建てるときに、万一の事を考え、穴道を設けておいた事がよかった。

穴道がなかったら、源五郎は、つぎの爆発によって死ぬか、死なぬにしても手足を吹き飛ばされていたろう。

また、爆発の直前に、外へ飛び出したにせよ、待ち構えていた忍びたちの、

「ねらいをすました……」

飛苦無か手槍を投げつけられ、打ち殪されていたにちがいない。

目晦しの穴道は、小屋の一隅に掘られてあった。

蓋をしている板をはね退けた源五郎が、その穴へ飛び込んだとき、屋根から火炎があがりはじめた。

穴は、約一間ほどの深さだが、それだけではない。

源五郎が這って行けるほどの穴道が、小屋の左側の崖下の繁みへ通じているのである。

その穴道へ這い込んだとき、小屋が爆発したのであった。

そうして源五郎は、崖下の穴の出口から外へ躍り出た。

五人の忍びの者の傍を、源五郎は野生の獣のような速さで走りぬけた。

「あっ！」

「逃すな!!」

振り向いた下中の清松は、つづけざまに飛苦無を投げ撃ったが、あわてていたので一箇も

命中をせぬ。

「おのれ!!」

清松は左手に摑んでいた継ぎ手槍を右手に持ちかえ、猛然と源五郎に向って走り出した。

他の忍びたちも、身を翻して源五郎を追う。

源五郎は、沼へ向って走る。

背後から投げ撃ってくる飛苦無を躱すために、走る源五郎の躰が微妙にうごいている。そのため、速力が落ちることは仕方もないことだ。

鋭い音を発して、源五郎の躰をかすめた飛苦無が、沼の水面に飛び交った。

沼が、源五郎の眼前にせまってきた。

上田源五郎は、ためらうことなく沼の面へ駆け入った。

すると、どうであろう。

源五郎の躰は、わずかに脹ら脛のあたりまで沼の水に浸っただけで、そのまま沼の中を逃げつづけて行くではないか。

追いせまった山中忍びの二人も、沼へ走り込んだ。

この沼の深さは、まことに浅いと看て取ったのであろう。

ところが、この二人は、ずぶずぶと沼の水へ沈みかけ、

「あっ……」

あわてて、つづく三人の忍びへ手を振って見せた。

つまり、源五郎は、あらかじめ沼を渡って逃げるための用意をしておいたのだ。

沼の一部に、木と竹で〔隠れ橋〕をつくっておいたのである。

しかも、橋を水面より浅いところへ架けわたし、外見には少しもわからぬようにしておいた。

二人の忍びが、沼の泥水へ沈みながら合図を送ったので、沼の縁まで駆けて来た下中の清松以下三人の忍びたちは、はっとして、源五郎が渡りつつある水面へ足を入れた。

たしかに、水の下に橋が隠れていた。

「追え。逃すな!!」

下中の清松が凄まじい形相となって、叫んだ。

このとき、上田源五郎は、ほとんど隠れ橋を渡り切ろうとしている。

清松の後から一人、隠れ橋をわたりはじめたが、最後の一人は、身をひるがえして沼の縁を迂回し、走りはじめた。

この方が速いと、咄嗟に考えたのであろうか。

また、水に隠れた橋ゆえ、簡略なものにちがいなく、三人もの男が渡っては、

（橋が落ちる……）

と、おもったにちがいない。

だが幅一尺ほどの隠れ橋は、意外にしっかりと架けられてい、清松と、いま一人の忍びは源五郎の後を追い、沼を渡りつつある。

さっと沼の一部に、朝の日が射し込んで来た。

それを、あたかも待ち構えていたように、木立で鳥が囀りはじめた。

沼へ沈みかけた二人の忍びが、懸命に水を掻き、縁へ這いあがろうとしている。

上田源五郎は隠れ橋を渡り切り、追って来る清松たちへ振り向いた。

清松は右手に残った一箇の飛苦無を、源五郎めがけて投げつけた。

源五郎は、頸を振って飛苦無を躱した。

そして、沼の縁の木蔭へ隠してあった綱のようなものを摑み出し、ぐいと引いた。

これが、隠れ橋の仕掛けだったのである。

綱の先端は、隠れ橋を支えている何処かに結びついていた。

「あっ……」

と、いう間もない。

隠れ橋が、折れてしまったのだ。

下中の清松と、いま一人の忍びの者が、たちまちに沼に呑まれた。

上田源五郎が、さもうれしげに笑った、その白い歯が、清松の眼の中へ飛び込んできた。

（おのれ、源五め……）

無念の一瞥を源五郎へ投げたのはよいが、つぎの瞬間には、沼底へ引き込まれる自分の躰を、必死のおもいで助けねばならぬ清松であった。

沼の向うは崖である。

その崖へ向って走り出した上田源五郎へ、沼を迂回して走って来た山中忍びが、

「うぬ!!」

矢のごとく走りかかり、忍び刀を叩きつけてきた。

源五郎の躰が、仰向けに宙へ舞いあがった。

空間に一回転した源五郎は、足が地に着くやいなや身を沈めて、

「む!!」

腰の脇差を抜き打ちざまに、山中忍びの左股のあたりを深く切り払った。

血が、しぶいた。

「うっ……」

のめり込むように倒れかけた山中忍びの右の肩先を浅く傷つけておいて、源五郎は切り立った崖へ向って走った。

この崖にも、あらかじめ仕掛けがほどこしてある。

その仕掛けの綱を手繰り、あたかも山猿のような素早さで、源五郎は崖を登り切るや、すぐさま綱を切り落してしまった。

こうして、上田源五郎は、五人の山中忍びを一人も殺害することなく、その追跡を、

「絶ち切ってしまった……」

ことになる。

真の忍びの術というものは、

「三年、五年の先を見きわめてせねばならぬ」

というのが、甲賀忍法の基盤といってよい。

源五郎は正しく、これをまもって、危急を脱したといえるのだ。

その夜ふけに……。

上田源五郎は、深い森の中に眠っていた。

この森は、天神森などとよばれているようだ。

小高い丘の上から裾にかけての、櫟・朴の木・松などが入りまじった雑木の森であった。

このあたりは、武蔵の国・多摩郡の内で、現代の東京都・世田谷区喜多見ということになる。

鎌倉時代には江戸氏の領地であったというから、いま、源五郎が眠っている森の中にも、古い濠の跡のようなものがある。

とすれば、この丘も、小さな城か砦が築かれていたのやも知れぬ。

此処も、源五郎の〔隠れ小屋〕の一つといってよい。

もっとも、小屋を建ててあるわけではなかった。

丘の斜面を利用し、横穴が掘ってある。

この横穴は、源五郎が坐ったり身を横たえるだけの広さがあり、さらに脱出用の穴道まで掘ってあった。

横穴の入口は、樹々に隠れ、冬の季節でもまったく見えぬし、そもそも、この森の中へ入

って来る者はだれもいない。

地獄谷の隠れ小屋を脱出した上田源五郎は、長い時間をかけ、油断なく気をくばり、此処まで来た。

地獄谷の小屋に残してきた品物には、何一つ未練はない。

必要な物は、いつも身につけているからだ。

（なれど、あの小屋を、よう突きとめたものだ）

源五郎は、苦笑を浮かべた。

おそらく山中忍びたちは、山岸十兵衛屋敷を見張っていたにちがいない。

源五郎も山岸屋敷にいる妻と娘を訪れるときは、あらゆる方法を講じ、山中忍びの見張りの目をかすめることを忘れてはいなかった。

（だが、見つけられてしもうた。これよりは、よほどに気をつけぬと……）

このことであった。

それにしても、一年前に地獄谷の小屋を建てるとき、脱出のための用意を充分にととのえておいたからこそ、

（またしても、おれは、甲賀に勝った……）

ことになる。

いまは日本の国内に戦乱が絶え、徳川幕府の天下統一が成ったので、山中忍びたちも、上田源五郎探索に、ふたたび、ちからを入れはじめたのであろうか……。

今度の襲撃も、危うかったといえば危うかったが、源五郎は、いささかもあわてなかった。

そして、用意しておいた脱出路から冷静に逃げることを得た。

（あの小屋には、二、三年ほど住み暮すつもりでいたのだが……）

それは、あきらめなくてはなるまい。

甲賀が、山岸屋敷の人びとへ手をつけぬのは、さすがであった。

しかし、源五郎が山岸屋敷へ住みついてしまったなら、はなしは別のことになる。

かならず、彼らは邸内へ潜入し、源五郎を襲うにちがいない。

なればこそ源五郎は、山岸十兵衛のすすめをも拒否しつづけてきたし、十兵衛と会うことも避けてきている。

（しばらくは、江戸の地を離れるほうがよい。正子と松代にも一年ほどは会うまい）

松代には、いま、縁談が起っている。

松代は、祖父・山岸十兵衛の養女ということになっているので、その点は、すこしも心配がない。

今度、正子に会ったとき、正子は、松代の縁談について、源五郎へくわしく語ろうとしたが、

「いや、聞かずともよい」

源五郎は妻を制して、

「何事も、父上におまかせしてあることだ。わしは、たしかに松代の父ではあるが……父親として何一つできかねる男だ。ゆえに、他家へ嫁入った松代を、わがむすめとはおもわぬことにしている」

松代も傍にいたが、故意に、冷たい口調でいいきっておいた。

正子との、奇妙な夫婦関係は、それなりにまた、たがいに納得をしているけれども、やはり松代としては、源五郎に甘えたり、父としての親しみをもって語り合ったりすることができぬらしい。

それも、当然であろう。

源五郎は胸の内に、松代への愛情があふれ、それが、ほとばしり出ることを押えていた。

前々から、源五郎は松代にいい聞かせてある。

「そなたの父は、山岸十兵衛様のみじゃ。よいか、そのことを忘れてはならぬぞ」

(このつぎに、山岸屋敷を訪ねる折には、もはや、松代の姿は見えぬかも知れぬ……)

いつしか、眠りに落ちた上田源五郎は、むかしの自分の名を呼ぶ声に、はっと目覚めた。

「もし……もし、虎松どの。虎松どのよ」

しわがれた声が、横穴の入口を被っている樹林の何処からか、呼びかけてきたのだ。

まさしく、それは、夜張りの助七の声であった。

身を起した源五郎は、脇差に手をふれようともせぬ。

小杉虎松の本名で呼ばれたのは何年ぶりのことであったろう。

「虎松どの。目覚めてか……」

「小父ごか……」

「さよう。助七におざる」

声は、近寄って来ない。

樹木の闇の底から、低いが、はっきりとした声で、

「今日は、みごとに脱けられたのう」

「小父ごは、見ていたのか?」

「たしかに……」

「ふうむ……」

「あの小屋を突きとめたのは、この助七でおざる。なれど、この手で、虎松どのを討つことはできぬ」

「何故だ?」

「では、虎松どのは、わしを討てますかの?」

「いや討てぬ、と申すより、討つ積りはない。小父ごのみならず、十七年前の、あのときより、わしは人を殺めることをやめたのだ」

「そのように、見受けられた。おかげで、またも下中の清松は命拾いをいたしたようじゃ」

「またも、とは?」

「清松の右眼を奪ったのは、虎松どのであろ」

「よう、わかったな」
「助七は、わが手で虎松どのを討ちはいたさぬが、いのちあるかぎり、居処を突きとめねばなりませぬ。それが、せめてもの、わしが頭領様への義理立てと申すものゆえ」
「よう、わかっている」
「頭領様も、わしの胸の内は見ぬいておられてのう」
「お変りはないのか、頭領様は……」
「すこやかにおわす」
「お万喜どのは、どうしている?」
夜張りの助七が微かに笑い、
「お万喜には気をつけなされよ。まだまだ、虎松どのの一命をねろうているゆえ、な」
「そうか。ところで小父ご。早う、助勢の忍びをよんで来たらどうだ」
「いまは、わし一人でおざる。これより、忍びたちをあつめても、その間に、虎松どのは逃げてしまわれよう」
「では、何故、私の名を呼んだ」
「久しぶりに、語り合いたくなり申して……」
夜張りの助七の、さも、なつかしげな声を聞いて、上田源五郎が、
「小父ご。いまは二人きりだ。だれも見てはおらぬ。そうだな?」
「さよう」

「なれば、かまわぬではないか。此処へ来てくれぬか」
「さて……」
「久しぶりだ。顔が見たい」
「…………」
「小父ごは、いくつになったのだ?」
「六十の坂は、たしかにこえまいた」
「そうか……そうだのう」
「虎松どのは、たしか……たしか、四十をこえられたはず」
「わずかに、な……」
「早いものでおざる」
「さ、此処へ来てくれ、小父ご……」
「さて……それは、遠慮せねばなりますまい」
「だれに遠慮がいるものか。さ、来ぬか……」
「いや、甲賀の頭領様へ、たがいに遠慮をせねばなりますまい」
「相変らず、義理堅いことよ」
「なればこそ、虎松どのの行方をも探り申した」
「小父ごに襲われたなら、ひとたまりもなかったろう。よう、見逃してくれた」
助七の返事はなかった。

「小父ご。これ、小父ご……」
よびかけたが、こたえぬので、源五郎は、
(去ったのか……)
あわてて腰をあげ、
「小父ご。こなたから、まいるぞ」
やや、声を張った。
すると、
「なりませぬ」
助七の、きびしい声が返ってきた。
「何のことだ?」
「虎松どの。よう、お聞きなされ」
「い、いたか。いてくれたか……」
「いま、このとき、わしが虎松どのへ声をかけたについては、わけがおざる」
「ふむ……?」
「ちかごろ、甲賀の頭領様の御怒りも、大分(だいぶん)に解けたようにおもわれて……」
「わしへの御怒りが?」
「さよう。それと申すのも、これまでに何度か、甲賀の忍びたちに襲われながら、虎松どのが、ただの一人も殺めておらぬゆえ」

「わしは、十七年前の、あのときより、人を殺めることを絶ったのだ。今朝も殺めてはおらぬ」
「しかと、見とどけ申した」
甲賀の頭領・山中大和守俊房は、いま、何歳になっているだろう。
それは、上田源五郎も知らぬ。
いや、夜張りの助七も、はっきりとは知るまい。
いずれにせよ、十七年前の山中俊房ではない。
年齢(よわい)を重ねるにしたがい、おのずから、その思念も変ってきているらしい。
「それに……」
と、夜張りの助七は、苦笑をふくんだ声で、
「むかしの、古い忍びたちも、数少のうなって……」
と、洩らした。
その短い言葉の中に、いろいろな意味がふくまれているように源五郎はおもった。
甲賀の忍びの者といっても、山中家に仕えている者だけではない。
大小それぞれの頭領家があり、それに属している忍びたちを合わせれば、山中家のそれに匹敵しよう。
むかしは、これらの頭領たちも、一つの目的のために結束していたといってよい。
その目的とは、

「戦乱の世がしずまるまで、ちからを合わせて甲賀の地をまもりぬく」

このことであった。

そのためには、最後に天下を我物とする戦国大名へ、

「味方をしておかねばならぬ」

わけであって、戦国の様相が、いよいよ、いくつかの大勢力に分けられ、情勢が混沌（こんとん）となったとき、甲賀の頭領たちの意見もわかれはじめた。

山中俊房にしても、この三十年ほどの間に、織田信長から豊臣秀吉、徳川家康へ、その目標を変えてきている。

だが、大和守俊房の場合、その転身は、いつも他の頭領たちより、

「一歩も二歩も先んじていた……」

と、いえよう。

それだけ、山中俊房の時勢を看る目がすぐれていたことになる。

他の頭領の中には、進退を誤り、配下の忍びたちと共に、戦場で全滅した例もある。

また、織田信長の怒りを買って、甲賀の屋敷を焼き払われた頭領もいた。

さて、ともかくも……。

いまは、徳川家康の天下である。

ゆえに、山中俊房以外にも、徳川家のためにはたらいている頭領たちも少なくない。

中には、徳川家の家来になってしまった者もいる。

だが、これから先、二度と戦争が起らぬともいいきれぬのだ。

「これよりは、われらも、いささか忙しゅうなろう」

夜張りの助七が、源五郎にそういったのも、山中忍びたちが新しい活動に入ることを匂わせたのではあるまいか。

江戸の徳川家康と、大坂の豊臣家の間が不穏であるというばかりではない。

徳川将軍といい、江戸幕府といっても、その実績は、まだ四、五年のものにすぎぬ。

すべての大名たちが、完全に、徳川の天下に心から屈服したというわけでもない。

徳川家康は、関ヶ原戦争以来、一応は天下を我物としたということで、いまのところ、それが磐石（ばんじゃく）の重みをそなえているわけでもないのだ。

家康は、いま、つぎからつぎへ、息をつく間もなく政令を発しつつ、徳川の天下を不動のものにすべく手を打っている。

それは、上田源五郎のように、

「世を捨てた……」

男の目にも看てとれる。

山中忍びたちが、またも多忙のはたらきをせねばならぬというのは、日本の諸国へ散って、諸大名のうごきを探るということもあるだろうし、あるいは、つぎに起るであろう戦争にそなえてのことやも知れぬ。

いずれにせよ、事が起ってからでは間に合わぬ。

源五郎が、隠れ小屋の備えを怠らなかったように、すべての忍びの活動は、
「前もってのそなえ……」
がなくては、充分な成果をあげることができぬのだ。
「虎松どのよ。これより先、もはや語り合うこともあるまい」
樹林の闇の底で、夜張りの助七が、
「虎松どのは、亡き父(てて)ごによう似ておじゃる。ま、それもよかろう。それも甲賀の忍びの本体といえよう」
「わかってくれるか、小父ご」
「わしはわかる。なれど、わからぬ者もいるわえ。これよりは、しばらく、虎松どのも安穏(あんのん)に暮せようが、油断は禁物じゃ。忘れまいぞ、虎松どの。わかっていような……」
助七は低く笑い、その笑い声が、ふっと消えた。
「小父ご……小父ご……いま一度、声を聞かせてくれ。たのむ、小父ご……」
だが、夜張りの助七のこたえは、二度と返ってはこなかった。

星霜

上田源五郎と正子の間に生まれた松代が、祖父・山岸十兵衛直勝の養女として嫁いで行っ

たのは、翌慶長十三年の秋である。
松代の夫となった人物は、これも徳川の旗本・柴田(しばた)忠盛(ただもり)の長男・又右衛門(またえもん)忠重(ただしげ)であった。
ときに松代は十八歳で、当時の女(むすめ)としては、やや婚期が遅れていたといってよいだろう。
松代の婚儀については、何事も岳父の山岸十兵衛に、
「おまかせいたす」
と、源五郎は正子を通じ、十兵衛の耳へとどけてあった。
それにしても、
「この、めでたい婚儀を、早う源五郎へ知らせてやりたいものじゃ」
山岸十兵衛は、源五郎が忍んで来るのを待ちかねていたようだ。
しかし、この年に入ってから一度も源五郎が姿を見せぬ。
(はて……?)
もしやして、甲賀の忍びたちに発見され、襲撃を受けたのではあるまいかと、十兵衛は気が気ではなかった。
正子のほうは、そこまで深く考えてはいないらしい。
「そのうちに、かならず、姿を見せましょう」
と、いい、落ちついた明け暮れを送り迎えている。
それにしても、松代を手許(てもと)から放したことは、さびしかったにちがいない。
いまの正子にとっては、父・十兵衛の身のまわりの世話をすることと、夫の源五郎の訪れ

る日を待つことだけが、生甲斐となった。
「そなたも、ふしあわせな……」
　老いた十兵衛が、おもわず、哀れみの言葉を口にのぼせると、正子は、
「父上。それを申しては切りがございませぬ」
「何と……」
「おもうてもごらんなされませ。鉢形落城の折のことを……」
「ふうむ……」
「私たちが、このように生き残って、山岸の家も、いまは安泰となりましたのも、源五郎どののはたらきがあったからこそと申せましょう」
　正子は、あのときの夫の活躍を、誇りにおもっている。
　相模野での戦闘に、源五郎があらわれなかったとすれば、おそらく山岸十兵衛は討死をとげていたにちがいない。
「それにしても、源五郎が、そろそろ姿を見せてもよいはずじゃ」
「はい」
「この前に、屋敷を去るときには、何と申していたのじゃ?」
「この前と申されますのは、あれは、去年の……」
「春……いや、夏のはじめのころであった」
「さようでございました。あの折には、年の内に、かならず一度は訪ねてまいると申されて

ございましたが……」
「なれど、姿を見せなんだのう」
「はい」
「正子。今度、源五郎がまいったなら、どうあっても会いたいと、わしが申していたことをつたえてもらいたい。たのむぞよ」
「はい。なれど何故、源五どのは父上に、お目にかかることを避けているのでありましょう?」
「さて……」
　十兵衛は、いい澱んだ。
　それは、十兵衛にもわからぬことであったが、ただ一つ、正子も知らぬ事について、
(もしや……?)
と、おもうことがないでもない。
　それは十兵衛が、源五郎の父・小杉重六を三方ヶ原の戦場で討ち果した事である。
(わしは、源五郎にとって父の敵なのだ……)
　それにもかかわらず、源五郎は十兵衛の一命を救った。
　十兵衛への憎悪があったとすれば、できることではない。
　だが、それだけに、山岸十兵衛と顔を合わせ、親しく語り合ったりしては、
(亡き父にすまぬ……)

源五郎は、そうおもっているのではあるまいか。
十兵衛に会わぬことを、せめて、亡父・小杉重六への申しわけにしているのではないのか……。
そのほかには、源五郎が自分との面談を避ける理由も見当らぬ山岸十兵衛なのだ。
「のう、正子。近きうちに、またしても戦さが起ろうやも知れぬ」
ふと、十兵衛は話題を変じた。
「まことでございますのか？」
「大坂が、いまのままではのう……」
大坂というのは、大坂城の豊臣秀頼をさしている。
徳川家康は孫女の千姫を豊臣秀頼に嫁がせていることでもあるし、それにいまは徳川の天下なのだから、徳川と豊臣との戦さが起ろうはずもないと、正子はおもっている。
「むずかしいことよ」
十兵衛は腕を組み、瞑目した。
両眼を閉じている父の顔に、おもいなしか窶れが浮いて見える。
何がなしに、正子は胸をつかれるようなおもいがした。
朝夕に顔を合わせているので、父の顔色が冴えぬことにも気づかなかったのである。
皺が深く、白い髭が顎の下までたれている父の顔が、このときは、
（別人のように……）

見えたのだ。
十兵衛は、
（わしが源五郎の父を討ったことを、正子に打ち明けてしまおうか……）
おもい迷っていた。
小田原戦役の折、十兵衛が箱根・湯本の締り所に軟禁されていたとき、天井裏に忍び入って来た上田源五郎は、
「三方ヶ原の折のことを、決して他言してはなりませぬ」
と、十兵衛に念を入れた。
この秘密は、十兵衛と自分だけのことにしておくがよい。
たとえば、正子がこのことを知ったなら、
（自分の父が、夫の父を討った……）
わけなのだから、当然、そこに苦悩が生じるであろう。
何も知らぬ正子や於丹に、そうした事実を打ち明けたところで、
「何の益もないことでござる」
と、源五郎はいった。
山岸十兵衛は、いわれるままに、妻の於丹や正子、勝千代にも秘密を打ち明けぬまま、二十年に近い歳月をすごしたことになる。
そして、この間、十兵衛は徳川家の旗本として家族と共に安穏な、めぐまれた明け暮れを

送り迎えてきた。

それに引きかえ、十兵衛とその家族のために甲賀を裏切った上田源五郎は、いまも甲賀の追跡を逃れながら、妻や我子と共に暮すこともできぬのだ。

それはそれで納得していたつもりなのだが、孫女の松代を、わが養女として嫁がせてからの山岸十兵衛は、

（わがむすめの婚儀をも知らぬ源五郎が、哀れでならぬ）

日毎に、そのおもいが募ってきて、居たたまれぬ。

これも七十に近い老齢に達した所為ともいえようが、

（せめて、わしが源五の父を討った事を正子に打ち明けることが、源五への申しわけになるのではないか……）

しきりに、おもわれてならぬ。

何とはなしに、山岸十兵衛は、

（わしは、間もなく死ぬるのではないか……）

松代が、自分や正子の手許をはなれ、嫁ぎ去った後に、そうおもいはじめている。

むかしは、武田信玄に仕えて、忍びのはたらきをしてきた十兵衛直勝だけに、おのれの肉体の機能を、よくよく、わきまえているといってよい。

跡つぎの勝千代は、すでに三十をこえ、自分が亡き後のことは、

（いささかも、案ずることはない）

のである。

そして十兵衛は、

（この上、生きているのは、面倒になってきた……）

二、三年前から、しきりに、そのことを考えはじめるようになった。

十兵衛は、かならず、徳川と豊臣との戦さが起ると直感している。

理屈も何もない。

武田・織田・北条・豊臣と、戦国の大勢力がつぎつぎに栄え、たちまちに崩壊するありさまを、十兵衛は、わが目に見とどけてきている。

大坂の豊臣家が、どこまでも低く頭を下げ、徳川家へ臣従のかたちをとらぬかぎり、徳川家康は豊臣家の存続をゆるすまい。

京・大坂における豊臣家の人気は、いまも非常に高い。

家康は、いつまでも、これを黙認してはいないだろう。

近い将来に、家康は、徳川幕府の方針として、豊臣家を大坂から他国へ移すことを考えているのではあるまいか……。

かつての日本の政局の中心であった大坂から、亡き太閤秀吉が遺した栄光の幻影を、徹底的に追い退け、消滅させてしまうつもりであろう。

「他国へ移られよ」

と、命じて、豊臣家がこれに従わぬときは、

「徳川の天下に叛いた……」
　ことになる。
　それならば、
「天下の平安を乱す謀叛人を討つ」
　という名目が立つのだ。
　徳川家康は、将軍位を息・秀忠へゆずりわたしたが、むろん、引退をしたわけではない。七十に近くなった老齢にもかかわらず、家康の活動は熄むことを知らなかった。
　徳川家康は、
「わが目の黒いうちに……」
　徳川家と、その幕府の土台を、しっかりと打ち固めておかねばならぬと、決意しているにちがいなかった。
　自分が元気なうちに、早くも将軍位を息・秀忠へゆずりわたし、これに老臣・重臣を配して、幕府政治の体制をととのえようとしている。
　関ヶ原の戦さにおいて敗北した西軍（豊臣派）の諸大名たちの始末についても、家康は万全を期したつもりではあるが、死をまぬがれて諸方へ散った敗軍の将兵たちは、おびただしい数にのぼる。
　これらの人びとは、いまも尚、豊臣家が往年の栄光を取りもどす日を、
「待ちのぞんでいる……」

のではあるまいか。
　いや、豊臣家が旧臣たちをあつめ、徳川家康と戦う日が来ることを、
「待ち構えている……」
　のであろうか。
（なれど、その日まで、わしは生きていまい）
医師の診察を受けもせず、薬湯も口にせず、病床につくこともないが、実は、自分の躰が病魔に蝕まれていることを十兵衛は承知している。
　死ぬることは、いささかも怖くないし、この世にも未練のない十兵衛なのだが、
（わしが亡き後の正子は、いかがになろう……？）
　気にかかるのは、この一事であった。
　山岸家は、正子の弟である勝千代が跡をつぐわけで、正子が引きつづいて、この屋敷に住み暮すことは、何のさしさわりもないことだ。
　だが、夫の上田源五郎の消息をも知らぬまま、その帰りを待ちながら暮す正子のさびしさをおもいやるとき、
（いま少しは、正子のために、生きていてやらねばならぬ）
　と、十兵衛はおもう。
　わがむすめの松代も他家へ嫁いだからには、めったに会うこともできぬわけだし、その上、十兵衛が死去してしまえば、正子の身辺は、いよいよ寂しくなってしまう。

(わしの、いのちは、二年と保(も)つまい)

それだけに十兵衛は、上田源五郎の来訪を待ちかねている。

そして、

(今度は、何としても源五に会わねばならぬ)

おもいきわめていた。

山岸十兵衛は、上田源五郎に会ったなら、このようにいうつもりだ。

「もうよいではないか。正子の許へ帰って来てくれぬか。それがために、われらが危難を受けることなど、もはや取るに足らぬことじゃ。わしがこの世に在る日々も、指を折って数えることができるほどになった。独りきりになってしまう正子の許へ、どうか、帰って来てもらいたい」

源五郎が、自分のたのみを受けいれてくれたなら、

(二人を、丹波の里の板垣家へ送り、そこでしずかに生涯を終えさせたい)

と、十兵衛は考えている。

板垣甚十郎は、すでに病歿(びょうぼつ)してしまったが、長男の甚之介(じんのすけ)が跡をつぎ、いまも山岸家との交誼(こうぎ)は絶えていない。

板垣甚之介は、よろこんで源五郎夫婦を迎え入れてくれるであろう。

また、十兵衛直勝は、源五郎と正子が一生を暮して困らぬほどの金銀を用意しておいた。

この年の瀬も押しつまった或夜。

山岸十兵衛は、正子を居間にまねき、

「これを、源五郎がまいった折に、わたしてもらいたい」

厚みのある、一通の書状を出した。

「これは、何でございましょう」

「わしの遺言じゃ」

「何と、おおせられまする」

「間に合わぬやも知れぬゆえ、な……」

「源五郎どのがまいりましたときは、かならず、父上に会うていただきまする」

「いや、それまで、わしが生きておればよいが……」

「そのような、不吉なことをおおせられては……」

と、正子は泪(なみだ)ぐみ、

「いやでございます。いやでございます」

さすがに、心細げに肩をふるわせた。

「ま、聞くがよい。わしがまだ生きていたとしても、源五郎が会うのを拒むとしたら何とするぞ。そのときには、その遺言状を読んでもらわなくてはならぬ。よいか。父はそなたのために生くるだけは生きるつもりじゃ。なれど、覚悟だけはしておかねばなるまい。そなたにも、その遺言のことを語っておこう。さ、もそっと、こちらへ寄らぬか。今夜は父娘(おやこ)して、ゆるりと語りあかそうではないか」

新しい年が明けた。

慶長十四年である。

依然として、上田源五郎の消息は知れなかった。

だが、何とおもったか、山岸十兵衛が正子にこういった。

「近きうちに、源五が姿を見せるにちがいない」

「ま……そのようなことが、どうして、おわかりになりますのか？」

「何とのう、わかる」

正子は、笑わなかった。

むかしから、こうした父の予感が、よく適中することを知っていたからだ。

これは、鉢形にいたころだが、或日の午後に、

「あ……」

居間で書見をしていた山岸十兵衛が、突然、顔をあげ、

「いま、但馬守(たじまのかみ)殿が屋敷を出られた」

と、いう。

傍にいた妻の於丹が、

「……？」

妙な顔をしていると、十兵衛がいった。

「間もなく、この屋敷へまいられよう」

「御約束でもございましてか？」

「いや、そうではないが……」

但馬守とは、十兵衛と共に部隊をひきいて小田原へ向った久永(ひさなが)但馬守のことだ。

かねて親密の間柄だった久永但馬守が、いま御殿下曲輪(ごてんしたぐるわ)にある自邸を出て、三の丸の自分の屋敷を訪問する姿が、十兵衛の脳裡(のうり)に浮かんだというのだ。

「さようでござりましたか……」

と、於丹はうなずいたが、母の後ろにいた正子は、

（まさかに、そのようなことが……）

父にわかるはずがないとおもった。

於丹は、十兵衛の妻になってより、二、三度、このような経験をしていたので、夫の勘のはたらきの鋭さをわきまえていたが、正子にとっては、はじめてのことであった。

すると、どうであろう。

間もなく、久永但馬守が十兵衛を訪ねて来たではないか。

これには、正子もおどろいた。

後になって、於丹が正子に、

「父上には、このようなことが以前にもありました」

と、語った。

それは、武田家が滅びる前のことだが……。

於丹の父・杉坂五兵衛勝重が古府中（甲府）城下の屋敷で病死したときも、十兵衛は突然、五兵衛勝重の死を直感している。

その夜、そのとき……。

十兵衛は寝所の臥床の中で、於丹の乳房へ顔を埋めていたのだが、

「あ……」

急に、顔をあげた。

「いかがなされました？」

「いや……」

口ごもった十兵衛が、

「いま、杉坂の父上が亡くなられた……」

と、いう。

於丹は夫が冗談をいっているのだとおもい、ふたたび、あえぎをたかめつつ、双腕を十兵衛の頸へ巻きつけると、

「いや、まことじゃ」

「またしても、そのような……」

実家の父が、軽い風邪にかかっていることを耳にしていたが、死に至る病いだとはおもえぬ。

「まことじゃ。いま、父上の息絶えるお姿が胸の内へ、急に、浮かんでまいったのだ」

「まさかに……」

「ともかくも起きて、身仕度をせねばなるまい」

そして間もなく、杉坂屋敷から使いの者が山岸屋敷へ駆けつけて来て、杉坂五兵衛の急死を知らせたというのだ。

だが、十兵衛の勘のはたらきも万能ではない。

万能のものであったら、相模野での敗戦もなかったはずだ。

あのときの上田源五郎のうごきも、徳川方の部隊が待ち伏せていたことも、すべて事前に感じ取っていたはずではないか。

そのときどきの心身の状態によって、十兵衛は我ながら、おもいもかけぬ予感をおぼえるらしい。

ことに、武田家の忍びの者として活躍していたころの、十兵衛の勘の冴えは、当時、十兵衛の配下であった武田忍びなら、だれでも知っていよう。

「昨夜、ふと、源五郎の姿が胸の内に浮かんでまいったのじゃ」

と、山岸十兵衛が正子にいった。

「父上。それは、どのような……？」

「海じゃ」

「うみ……？」

「うむ。海原が見える山の頂きから、源五が下って来る姿を見たわ」

「夢ではありませぬのか?」
「いや、夢ではない。わしは目覚めていた」
正子は、息を呑んだ。
「山を下った源五は、江戸へ、この屋敷へ向って歩んで来る……」
「まことに……?」
「まことじゃ」
十兵衛の声は、確信にみちていた。
山岸十兵衛のように、勘のはたらきのすぐれた人びとは、現代にも、いないことはない。
ことに、武道家に多いようだ。
それは、自分の心身を鍛えに鍛えぬいているから、常人には計り知れぬ感能がはたらくのであろう。
明治から大正・昭和にかけて、
「近代の剣聖」
と、うたわれた直心影流の剣士・山田次朗吉が、大正八年に〔新時代〕という雑誌の第三巻第一号へ、
「大正十二、三年ごろまでに、東京に一大天災が起る。それは、おそらく大地震かと思う。そのとき、市民の七、八万人は死滅するかも知れぬ」
と、予言をしている。

果して四年後の大正十二年、東京は、あの関東大震災によって崩壊した。
山田次朗吉は、
「まことに、おのれの一切を捨て切ることができると鉄砲の弾丸も当るものではないのです。私は此処(東京市中)にいて、太平洋の波の音を聴くことができます」
とも、いっている。
また、関東大震災が起る三年前(大正九年)の正月に、門人の堀越某が山田次朗吉宅へ年始にあらわれ、
「先生。明けまして、おめでとうございます」
と、挨拶をしたところ、
「何が、おめでたいことがあるものかね」
山田次朗吉は苦笑をして、
「近いうちに、おそらく大地震が起って、東京の市民が多勢、死んでしまうというのに……」
と、いう。
堀越は、おどろいて、
「先生、易でもなさいましたか?」
「冗談ではない。剣下に易などをやっていては間に合わぬよ」
「では、何故、そのような……?」

「よいかね。鼠でさえ、火事や地震が起る前には家の中から逃げて行くというのに、人間が、それほどの予測ができぬはずはないのだ」

と、大地震のときの注意を細かにあたえてくれた。

その後、間もなく堀越某は渡米し、ニューヨークで暮すうち、師の言葉を忘れてしまっていたが、大正十二年九月一日、あの関東大震災の知らせを受け、

「さては、このことだったのか……」

あらためて、師の予感の鋭さ適確さに瞠目（どうもく）したという。

それは、この年の二月七日の朝のことであったが……。

山岸十兵衛直勝は臥床から身を起さず、

「何とのう、疲れたようじゃ。今日は、一日ゆるりと臥していたい」

と、いった。

侍女から、そのことを聞いた正子が父の寝所へおもむき、

「父上。いかがなされました?」

十兵衛は無言で、正子に微笑（ほほえ）んで見せた。

顔色が、やや蒼（あお）ざめている。

しかし、これは、近ごろの十兵衛として、

(めずらしくない……)

ことだといってよい。

十兵衛の枕頭（ちんとう）には、勝千代もいて、

「姉上。父上は、医薬の手も要らぬと申されるのです」

気づかわしげにいうのへ、十兵衛が、

「そのとおりじゃ」

その声には張りがあった。

「風邪の気味にすぎぬ。案ずるな。明日には起きられよう」

正子は勝千代と、顔を見合わせた。

姉弟は、幼年のころから、父が朝の臥床から離れぬなどという姿を見たこともない。

だが、新しい年を迎えた父は七十歳の老齢に達しているのだし、心身の衰えは当然といってよい。

「医師に、この躰を診せたところで何になろう。わしの躰は、わしがよくわきまえているゆえ、案じるにはおよばぬ」

この言葉も、姉弟には、

(もっとものこと……)

と、おもわれた。

(父上は、常人ではない……)

のである。

医術の心得もあるし、むかしは妻や我子の病気の折に、みずから薬草を調合し、服用させ

てくれたほどの父なのだ。
　そこで正子は、みずから白粥を煮て寝所へ運び、
「父上。召しあがりますか?」
　いかにも、うれしげに十兵衛は臥床の上へ起きあがった。
「おお。いただこう」
　そして、
「うまい。うまい」
　舌鼓を打つようにして、粥を二椀も食べた。
　風も絶えて、奥庭の日ざしも暖かい。
　春は、すぐ近くまでやってきて、勿体らしく足をとどめているかのようだ。
「何、粥を二椀もあがられたか。それならば大丈夫」
　正子から聞き、勝千代の微かな不安も消えた。
　粥を食べ終えると、
「ああ、うまかった。まことに快い」
　こういって、深い眠りに入った。
　一度、様子を看にあらわれた正子と勝千代であったが、
「これならば大丈夫」
「なれど、念のため、医師を迎えては……?」

「父上が、あれほどに医師を嫌われていることとゆえ、いまはむりに、いたさずとも、よろしいのではありませぬか。明日は、きっと床を払われましょう」
「はい」
　正子も、勝千代と同じおもいであった。
　午後になって、正子が父の寝所へおもむくと、山岸十兵衛は目覚めていた。
「父上。御気分は、いかがでございますか?」
「うむ。まことに、よい」
「夕餉には、父上のお好みのものにいたします。何を召しあがりますか?」
「そうじゃな……では、味噌粥をたのみたい」
「はい」
　正子は、父の食欲が出てきたことがうれしくてならぬ。
「父上。ようございましたな」
「うむ……」
　うなずいた十兵衛の目が正子へ笑いかけてきて、
「でき得るなれば、源五郎に会うてから、あの世へまいりたい」
「ま、何を申されますことか……」
「どうやら、間に合いそうじゃ」
「間に、合う……?」

「近づいて来る。源五が、この屋敷へ近づいて来る」
目を閉じて、十兵衛が譫言（うわごと）のようにつぶやいた。
「父上……もし、父上……」
「近づいて来る……近づいてくる」
つぶやきながら、またも十兵衛は眠りに落ちてゆく。
正子は勝千代の居間へ行き、このことを告げた。
いまは勝千代も、上田源五郎と姉とのことを、すべて、わきまえているといってよい。
「それにしても姉上。よう、お眠りなされる」
「私とおはなしなされるうち、急に、譫言のように申されましてな」
「ふうむ……」
「これは、やはり……」
「よろしゅうござる。明日には、私がおすすめして、医師に診ていただこう」
「かならず……」
「そうして下さるか」
何とはなしに、正子は不安をおぼえてきはじめている。
夕闇が奥庭にただよいはじめたころ、正子は、侍女をよんで、
「殿様の御様子は？」
と尋ねた。

「よう、おやすみでござりまする」
「そろそろ、お目ざめになるとよいが……」
台所で味噌粥の仕度にかかりつつ、正子がいった。
やがて、粥が煮あがったので、正子は身なりをととのえ、侍女に味噌粥を持たせ、父の寝所へおもむいた。
次の間に家来が一人、ひかえていた。
正子が入って行くと、その家来は、すこし前に山岸十兵衛が目ざめたことを告げた。
「これ……これ」
十兵衛の呼ぶ声に、家来が境いの襖（ふすま）を開け、
「およびにござりまするか？」
声をかけると、十兵衛は、
「味噌粥は、まだか？」
と、いったそうな。
正子は、ほっとした。
味噌粥は、むかし、古府中の城下に住み暮していたころからの、十兵衛の好物である。
境いの襖を開けさせ、侍女を従えた正子が寝所へ入り、
「父上。味噌粥をもってまいりました」
十兵衛のこたえはない。

仰向けに寝た十兵衛の端正な横顔が、障子越しの夕明りに浮かんでいる。

「父上……父……」

よびかけつつ、近寄った正子が、はっと息をのんだ。

父の顔が、空間に貼りついているかのように見えたからだ。

家来が、燭台の大蠟燭へ火を点じて次の間から入って来た。

粥の膳を置いた侍女は、早くも異常を感じたらしく、家来へ眴せをした。

家来の顔が、凍りついたようになった。

「父上……」

絶望的な正子の呟きが、微かに聞こえた。

家来が、外の廊下へ走り出て行った。勝千代へ、急を告げに行ったのであろう。

正子の目にも、侍女の目にも、山岸十兵衛直勝が息絶えていることはあきらかであった。

それと知りながら、

「父上。何故……？」

正子は問いかけずにはいられなかった。

あれほどに自分を知りつくしていたはずの父が、いまこのときの死を予知できなかったのであろうか……。

上田源五郎が忽然として山岸屋敷へあらわれたのは、十兵衛直勝の死後、八日を経てからであった。

これはまさに、十兵衛の予感が適中していたことになる。

「父上は、海原が見える山の頂きから、源五が下って来る姿を見た、と、さように申されて……」

と、正子が源五郎に告げるや、

深く、うなずいた源五郎は、

「うむ」

「そのとおりじゃ」

「まあ……やはり……」

「たしかに、わしは、伊豆の国の、海が見える山に棲み暮していた」

「いますこし、生きていて下されば……」

「泣くな」

「なれど、あれほどの父上が何故、今日まで……」

「この、わしへあてた書き置きをしたためられたので、父上は、これでよしとおもわれたのではあるまいか……われらには、よくわからぬことであったが、父上の病患は、おもいのほかに重かったに相違ない。それを押し隠し、だれにもさとられぬよう、父上は気を張っておられたのじゃ」

「なれど、亡くなられました当日、父上は粥を二椀も召しあがられましたのに……」

「それはよかった」

「それゆえ、勝千代どのも私も、ほっといたしましたが、急に……」
「ふむ、ふむ……」
源五郎は、何度もうなずき、瞑目した。
おそらく山岸十兵衛の胃腸のはたらきは、最後まで衰えなかったのではあるまいか。
ゆえに、食欲をみたすことのよろこびを、息絶える直前に味わうことを得た。
そして眠り、眠りから覚めては、また眠った。
このとき、衰弱しきっていた心ノ臓のはたらきが、突然、停止してしまったのであろうか……。
「ともあれ、仏間へ……」
しきりに、正子がすすめたけれども、
「いや、それにはおよばぬ。父上の冥福を祈るには、此処で充分。なるべくは、わしの顔を、この屋敷の人びとに見られたくはない。いや、見られぬほうがよい」
源五郎は、そういって、また、ゆっくりと岳父・十兵衛の遺書を読みはじめた。
二度三度と、源五郎は読み返している。
上田源五郎は、この年（慶長十四年）を迎えて、四十五歳になった。
父・十兵衛の遺書を丹念に読み返している源五郎の髪にも、白いものがまじりはじめていたが、引きしまった体軀には少しも贅肉がなく、日に灼けつくした顔は、十歳も若く見えた。

「正子。勝千代殿に会うてもよいかな？」
「いささかも、かまいませぬ。勝千代どのも待っておりました」
「なれど、わしのほうから出向くのは憚られる。まことにすまぬことだが、そっと、此処へ来てはいただけぬだろうか？」
「いまこのときになって、何の遠慮がいりましょう。勝千代どのも、お前さまのことはすべて承知しておりまする」
「いや、そうでない」
きびしい口調で、源五郎が、
「わしは、世を捨て、世を憚って生きている忍びの者じゃ。この世との繋りは正子ひとりのみ。それでよい」
「では……」
仕方もなく、正子が出て行きかけたとき、はじめて源五郎が、
「どうじゃ、松代は、すこやかに暮しているようかな？」
と、尋ねた。
「はい」
振り向いた正子が、にっこりと笑った。
「ふむ。そうか。それならばよし」
凝と正子を見返した源五郎の顔へ、さすがに父親らしい安堵とよろこびの色が浮きあがっ

ている。

この夫婦は、こうした異状の環境に慣れきってしまったらしい。

目と目を見かわし、うなずき合うことだけでも、たがいの心が通うのであろう。

知らせを受けた勝千代は、すぐさま、正子の居間へあらわれ、

「兄上……」

あまりのなつかしさに、後の言葉がつづかなかった。

何年ぶりのことであろう。

少年のころの勝千代が、母や姉と共に鉢形から丹波の里へ移ったとき、しばらくの間、源五郎も共に暮した。

しかし、父の十兵衛がもどってからは、勝千代も、ほとんど源五郎を見ていない。

この山岸屋敷にいる姉の正子の許（もと）へ、年に二度か三度、忍んで来るようになってからも、源五郎は勝千代に会うことを避けていたのである。

源五郎は勝千代に向って両手をつき、丁重に挨拶をし、悔みの言葉をのべた。

やがて源五郎が、自分にあてた山岸十兵衛の遺書を勝千代の前へ置き、

「ごらん下され」

「これは？」

「亡き父上の書き置きでござる」

「私が読んで、かまいませぬか？」

「読んでいただきたい」

「では……」

勝千代は遺書を手にして、押しいただくようにしてから読みはじめた。

二度三度と読み返してから遺書を元のようにたたみ、源五郎の前へ置き、

「たしかに、うけたまわりました」

と、勝千代が、

「それで、兄上には……？」

「よくよく考えてみまいたが、これは、亡き父上の申されるとおりに、いたしたく存ずる」

「では、丹波の板垣家へ姉上を……」

「さよう」

「もっともではござるが、なれど、いま一度、おもい直していただきたい」

「と、申されるのは？」

「姉上が、このまま当屋敷に住み暮すことが、何故いけませぬ？」

「いや、それは……」

「兄上のことは、すべて承知をしております」

と、勝千代がいさぎよく、

「兄上の苦しみを、この勝千代へも分けて下され」

「いや……それは、なりませぬ」

「亡き父上や勝千代が、いまこのときまで、安泰に生きておれたのも、みな、兄上のおかげでござる」
「そのように申されては……」
「何とぞ、姉上と共に、この屋敷で暮していただきたい」
「それはなりませぬ」
「甲賀の仕返しがあらば、勝千代も共に受け申そう」
鉢形落城のころ、勝千代は感受性の強い少年であったので、当時の義兄・上田源五郎の言動については、きわめて深い印象をもっている。
それだけに、源五郎が甲賀を裏切ってまで（これは後にわかったことだが……）父母や姉、自分を救ってくれたことを片時も忘れたことがない。
「いや、しばらく……」
源五郎は微笑して、こういった。
「まことに、勝千代殿のお言葉をうれしく聞き申した。かたじけのうござる。いまの私は、格別に甲賀を怖れているのでもないが……さて、何と申したらよいのか、つまりは自分の勝手に生きることが身についてしまい、常の人びとと共に暮せぬようになってしまいましてな……」
正子が、江戸の山岸屋敷を密かに出て、甲斐の丹波の里の板垣家へ身を移したのは、この年の秋であった。

この移転に際して、上田源五郎は丹波の板垣家や山岸勝千代と打ち合わせ、細心綿密に事を運んだ。
つまり、先ず板垣家の当主・板垣甚之介が荷物を背負わせた五名の従者を連れて江戸の山岸屋敷へ入る。
従者の内の二人は、丹波の里の女である。
そして、三日ほど滞在したのち、板垣甚之介は五名の従者と共に丹波の里へ帰って行く。
そのとき、従者の女のひとりと正子が入れ替っていた。
山岸屋敷に残された丹波の里の女が帰郷したのは、半年後のことであった。
正子の荷物は、ごく少量のもので、家具などはすべて山岸屋敷へ残しておいたのだ。
「かほどに、要心をいたさなくとも……」
正子は源五郎にいったが、
「ま、わしのいうとおりにいたしてくれ。たのむ」
源五郎は、承知をしなかった。
従者に変装し、笠で顔を隠した正子が、板垣甚之介一行と共に山岸屋敷を出たとき、上田源五郎は姿を見せていない。
源五郎は、その数ヶ月前に山岸屋敷を去っていた。
だが、板垣甚之介一行が江戸を出てから、おそらく源五郎は、一行の前後を見張りながら、丹波の里へおもむいたにちがいない。

正子が板垣家へ到着して三日後の夕暮れに、源五郎は表の門から入って来て、
「大丈夫じゃ。だれにも気づかれてはおらぬ」
明るく笑った。
そのときの源五郎の白い歯が、いかにも若々しく、
「これよりは、忍んでまいられずとも、ようございますな」
うれしげに、正子がいった。
「うむ。この家（や）には、な……なれど、丹波の里へ入るまでは、これまでのごとく、気をつけねばなるまい」
「では、あの……また、何処かへお出かけになりますのか？」
「さてな。出かけたくなるやも知れぬ。なれど、これまでのようなことにはならぬ。安心をするがよい」
こうして、四十五になった上田源五郎と、四十に近くなった正子との、新しい生活が始まったのである。
正子にとって、生涯のうちで、これほど落ちついた、たのしい明け暮れはなかった。
板垣家の敷地に、二人の小さな家が建てられ、
「正子。こうなると、いま一人、子がほしくなった」
と、源五郎がいった。
「私も……」

「そうか、正子もか……」
「はい」
「そなたには相すまぬ。いや、嫁いだ松代にも申しわけがない」
この甲斐の山里へ来てしまっては、旗本・柴田又右衛門忠重の妻となった松代と会う機会もないからだ。
この年の夏。柴田又右衛門は病歿した父の跡を継いでいた。
正子は、丹波の里で生涯を終えるつもりでいる。
この後、源五郎と正子の間には、ついに子が生まれなかった。
さて……。
丹波の里に一年ほども暮してから、突然、源五郎が正子に、
「しばらく、留守にしてよいか？」
「ま……何処へ、おいでになりまする？」
「決めてはおらぬが、天下（てんか）の様子を見てまいるつもりだ」
「なれど、甲賀の者たちが……」
「うむ。まだまだ、わしの命を絶つことを、あきらめてはおるまい」
「それなのに、何故……？」
「危ういおもいをせずに暮していると、何（なに）とはなしに、自分（おのれ）が生きているようなおもいがせぬ」

「まあ……」

「これも、忍びの者の宿世というものであろうか……女の、そなたにはわかるまいが……」

正子は、哀しげに目を伏せた。

まったく、正子にはわからぬ。

せっかく、安住の地を得たというのに、危険を冒して外へ出て行く夫の心がわからぬ。

源五郎は、天下のありさまを見物に行く、などといっているけれども、何で、そのような見物をせねばならぬのか……。

「ま、案ずるな」

源五郎は優しく正子を抱き寄せ、

「いまのわしには、帰る巣があるのだ。かならず帰って来る。さよう、半年もすれば、な……」

「まことに……?」

「まことじゃ」

「かならず、半年の後に……?」

「約束しよう」

大坂の陣

古寺の、崩れかけた土塀の向うに、柿の木が実をつけている。

何処かで、鵙が鳴いた。

古寺の土塀の内の木立は深い。

その木隠れの、土塀の上に、お万喜は身を伏せている。

ここは、京都である。

東山の山裾にある八坂の塔の裏側は起伏の多い道が曲りくねっていて、竹藪や木立が多い。

その中に、小さな寺院や隠宅ふうの茅屋根の家などが散在していた。

「京の都にも、このようなところがあるのか……」

と、おもうほどに、このあたりの風光は鄙びている。

お万喜は、百姓女のような姿で、土塀の上に身を横たえている。

この年、慶長十八年を迎えて、お万喜は何歳になっているのか……。

むろん、五十はとうにこえていよう。

それにしても、むかしのお万喜の面影は、まったくない。

二十数年前に、鉢形城内の山岸十兵衛屋敷にいた上田源五郎の部屋へ忍んで来て、源五郎

を誘い、豊満な肌身をあたえたときのお万喜にくらべると、いまのお万喜は痩せて骨張った躰つきになってい、白いものがまじった髪を無造作に束ね、灰色の布を頭からかぶり、顔は日に灼けつくしている。

見たところは、六十をこえた百姓の老婆そのものだ。

お万喜は、木隠れにいて、道の向うの竹林の中の家を見張っている。

その家は、竹林の外に風雅な門があり、門を入ると竹林の中の通路が奥の居宅へつづいていた。

だれかの隠宅らしい。

秋晴れの午後であった。

上田源五郎と正子が江戸を離れ、甲斐の丹波の里へ隠れ住むようになってより、四年の歳月がすぎている。

源五郎は四十九歳。正子は四十二歳になっているはずだ。

と……。

隠宅から、牢人ふうの男があらわれ、門の外へ出て来た。

壮年の、たくましい男である。

この牢人は、あたりを注意ぶかく見まわしてから、八坂の塔の方へ立ち去った。

お万喜が身を横たえたまま、口笛を鳴らした。

それは、鳥の声に似ている。

すると、竹林の傍から、これも百姓姿の男があらわれ、土塀の上のお万喜を見上げた。

お万喜が手をあげて合図をし、男は牢人の後を尾けて行った。

百姓姿の男は、お万喜と同様に甲賀の山中忍びで、名を堂五という。

してみると、お万喜と堂五は、竹林の中の隠宅を見張っていたことになる。

そのとおりであった。

この隠宅には、長宗我部盛親が、ひそかに棲み暮していることを、すでに山中忍びたちはつきとめていた。

長宗我部盛親は、四国の土佐（高知県）・浦戸城主として二十二万石を領していた大名である。

それが、あの関ヶ原の戦さに、西軍に参加した為、西軍大敗となったのち、領地は徳川家康に没収されてしまった。

その後、長宗我部盛親は姿をくらましてしまい、甲賀の忍びたちは長らく、盛親の行方を探しまわっていた。

そして、ようやく、京都へあらわれ、盛親を見つけ出すことを得た。

これが、関ヶ原戦後、間もないころであったなら、長宗我部盛親は徳川方に捕えられてしまったろうが、いまは、また、状況が変ってきた。

いまは、長宗我部盛親をわざと放置しておき、そのうごきを、

「密かに見張るべし」

と、甲賀の頭領・山中大和守俊房からの指令が下っている。

この慶長十八年で、徳川家康は七十二歳となった。

そして、

「自分の目の黒いうち、何としても大坂の豊臣家を討ちほろぼしてしまわねばならぬ」

と、決意をかためたようだ。

家康は、征夷大将軍を息・秀忠へゆずりわたし、着々と徳川幕府の基盤をかため、内外の政治をととのえつつある。

家康は、自分の孫女の千姫を、大坂の豊臣秀頼へ嫁がせており、

「豊臣家が、徳川の天下に屈服する姿勢を見せるならば、悪しゅうは計らわぬ」

つもりであった。

ところが、去る慶長十年の四月に、家康が将軍位を息・秀忠へゆずりわたしたとき、江戸から上洛をした家康父子は、将軍宣下の儀式をすませたのち、伏見城へとどまり、三日にわたる賀宴をひらいた。

諸大名が、これに参集し、徳川の天下をよろこび、忠誠を誓ったのはいうまでもない。

だが、大坂の豊臣秀頼だけが、この賀宴にあらわれぬ。

そこで、徳川家康は、豊臣秀吉の未亡人・高台院を通じて、

「久しく対面もいたさぬ。この機に、伏見までお運び下さらぬか」

と、大坂城の秀頼へ、つたえてもらった。

これを聞いた秀頼の生母の淀の方は、

「ゆめゆめ、あるまじきことじゃ」

断乎として、秀頼が伏見へおもむくことを押しとどめてしまった。

秀頼を伏見へやったなら、家康が、

「何をするか、わからぬ」

と、いうのだ。

「もしも、強いて秀頼殿の上洛をすすめられるならば、われら母子は大坂において自害をしてしまいたいほどじゃ」

などと、淀の方はいっている。

徳川方の記録には、

「これは、故太閤（秀吉）恩顧の輩、秀頼上洛あらば、不慮の変あるべし、などと、うちうち告げし者ありしためなり」

と、ある。

徳川家康は、淀の方の返答を耳にして激怒した。

このため、

「いよいよ、戦さが始まるらしい」

との、うわさがひろまり、京・大坂の住民たちは、

「老いたるをたすけ、幼きをたずさえ、家財を山林へ持ち運び、騒動ななめならず」

と、いうことになった。
このときに、家康の豊臣討滅の決意が、略、かためられたといわれている。
しかし、徳川家康は、一昨年の慶長十六年の春に、京都へのぼった折、
「京へ、まいられたい」
かなり強い態度で、豊臣秀頼へ上洛をうながした。
このときも淀の方は強気に、
「右大臣（秀頼）との対面をのぞむなれば、そちらから大坂へまいるがよいのじゃ」
と、いった。
淀の方は、秀頼が大坂から出て行って、家康に毒殺でもされたなら取り返しがつかぬと考えていたらしい。
けれども、このときは、加藤清正・浅野幸長・片桐且元など、豊臣恩顧の大名たちが、豊臣家の将来をおもい、
懸命に、説得をした。
「このたび、右府様の御上洛なきときは、かならず関東と不和になり、合戦となりまする。先ず、御上洛あって、徳川へ異心なきことをしめさねばなりませぬ」
加藤清正は、豊臣秀吉未亡人の高台院にたのみ、わざわざ大坂城へおもむいてもらい、淀の方と秀頼とを説き伏せてもらった。
加藤清正は、豊臣家の名臣であり、九州の熊本城主として五十四万石を領している。

数年前に、清正は六年がかりで熊本に、本城を完成した。
心血をそそいで築きあげた、この熊本城が、周囲二里余にわたる実戦用の大城郭であることは、だれの目にもあきらかだ。
他の大名が、このような城郭を築いたなら、徳川家康は絶対にゆるさなかったろう。
清正なればこそ、家康も黙認をしたのである。
それほど、関ヶ原戦後の加藤清正の存在は、豊臣家にとっても徳川家にとっても、まことに重要なものとなってきた。
「いや、まことに、みごとな城じゃ。わしもこれまでに、数えきれぬほどの城を見てまいったが……あの熊本城ほどの城は見たことがない」
と、上田源五郎が正子にいったものだ。
丹波の里で正子と暮すようになって一年後に、
「世の中の様子を見てまいる」
こういって、丹波の里を留守にし、半年ほど後に帰って来たときのことであった。
「あの城は、大坂の城よりも堅固に築かれている。わしがもし、双方の城を攻めるとして……大坂城なれば、何とか攻め落す手段があるようにおもうが、熊本城は攻めきれぬ。いずれにせよ、あれほどの城を築くことを、徳川が、よくゆるしたものだ」
つくづくと、源五郎が感服しているので、正子がおどろき、
「では、九州まで、まいられたのでございますか？」

「なればこそ、こうして、熊本の城のことを語っているのではないか」
「何をしに遠い九州までも……?」
「九州など、わしにとっては、すこしも遠くはない。何をしに行ったと問われても困るが、ま、見物に行ったのだ。やはり、たまさかに諸国をまわって見るのは、おもしろい」
「甲賀の者に、見つけられるようなことは……?」
「一度もなかった」
源五郎は苦笑し、
「甲賀も、いろいろと忙しいのであろうよ」
そして、源五郎はこういった。
「熊本に、加藤主計頭（清正）が生きてあるかぎりは、戦さは始まるまい。どうも、そのような気がしてきた」
その加藤清正と高台院に説得され、ついに、豊臣秀頼は大坂から京都の二条城へおもむき、徳川家康と対面することになった。
秀頼には、加藤清正・浅野幸長がつきそい、身辺をはなれなかった。
このときの会見で、徳川家康は上機嫌で豊臣秀頼をもてなし、首尾は上々に見えた。
ところが、家康は久しぶりに成長した秀頼を見て、
（これは、どうあっても、豊臣家を討ち滅ぼさねばならぬ）
却って、決意をかためるにいたったともいわれている。

十九歳の豊臣秀頼は、六尺余の堂々たる体格で、生母の淀の方ゆずりの美貌に、若さと気品がみなぎっており、しかも、その言動がおおらかで、老いた家康が圧倒されるほどであった。
（この秀頼が、さらに成長をしたら、どうなるであろう……?）
いまも、京・大坂における豊臣家の人気は高い。
それだけに、この豊臣秀頼を目のあたりに見た徳川家康の胸の内は、おだやかではなかった。
だが、ともかくも、徳川・豊臣両家の間は、二条城の家康と秀頼の会見によって小康をたもつかに見えた。
けれども、この年の夏。発病して、いったん熊本の居城へ帰った加藤清正が吐血して急死をとげてしまうと、大坂の豊臣家を、
「わが実力をもって……」
護りぬくだけの人物がいなくなってしまった。
加藤清正は、すばらしい実戦用の堅城を築き、無言のうちに徳川家康へ、
「あなたが、ちからずくで豊臣家を滅ぼそうとなさるなら、それがしは秀頼公を熊本城へ迎えて、一歩も退きませぬぞ」
その決意をしめす一方で、あくまでも徳川家康へは逆らわず、家康に命じられた築城その他の課役にはすすんで参加し、柔順な態度をくずさなかった。

さすがの家康も、清正だけには、つけこむ隙がなかったといえよう。

それだけに、加藤清正が急死したときには、

「毒殺されたのではあるまいか……？」

との風評が、京・大坂にもひろまったそうな。

さらに、二年後の、今年の夏には、池田輝政・浅野幸長など、豊臣家と関係の深い有力大名が相ついで病歿してしまった。

これが、豊臣家にとって、決定的な損失となったのである。

徳川家康は、いよいよ、腰をあげはじめたらしい。

長宗我部盛親をはじめ、関ヶ原で徳川家康に敗れた豊臣派の大名や武将たちは、

「いつの日か、天下は豊臣家にもたらさねばならぬ」

と、おもいきわめ、たがいに連絡をとり、つぎの決戦の日にそなえているらしい。

関ヶ原以来、敗れた西軍に参加していた武士たちは、いま、牢人となって諸方に隠れ棲んでいる。

それは、おびただしい数にのぼる。

もしも、東西の間が不和となり、ついに手切れとなって戦争にもちこまれたなら、これらの人びとが槍をつかみ、武装をととのえ、大坂城へ駆けあつまることは、

「目に見えている……」

のである。

甲賀の山中忍びたちが、こうした牢人たちのうごきを懸命に探っているのも、来るべき戦さにそなえてのことであった。

このところ、お万喜は堂五と共に、長宗我部盛親の隠宅から、目をはなさぬ。

盛親は三人ほどの家来と共に、この隠宅で暮しているが、何処からともなくあらわれ、盛親を訪ねる牢人が少なくない。

また、長宗我部盛親も家来を使者に出したりして、絶えず、諸方の牢人たちや、旧家来と連絡をとりつづけている。

ゆえに、長宗我部の隠宅へ出入りする牢人たちを尾行し、隠れ家をつきとめ、それからまた探りをひろげてゆくと、おもいがけぬ武将たちが京・大坂の周辺に隠れていることもわかってきた。

いま、山中忍びの堂五が後を尾けて行った牢人は、昨日の夕暮れに長宗我部盛親を訪ねて来た二人連れのうちの一人であった。

二人の牢人は、昨夜、隠宅へ泊り、そのうちの一人が何処かへ帰って行った。

いま一人の牢人が、まだ、隠宅の内に残っている。

その牢人が出て来たら、今度は、お万喜が後を尾けねばならぬ。

五十をこえてからのお万喜は、むかしのように、おもうようなはたらきができなくなってきた。

八年ほど前に大病をした所為もあろうが、何といっても女の身で、少女のころから男の忍

びたちと同様にはたらきつづけてきたのだから、気力も体力も、おとろえてくるのが当然なのだ。

けれども、尾行ならば、いまのお万喜でも充分にやってのけられる。

やがて、いま一人の牢人が、隠宅から出て来た。

今度の牢人は、先に出て来て去った牢人よりも年長に見えた。

もっとも、長宗我部の隠宅へ入るときも出るときも笠をかぶっているので、面体はあきらかでない。

だが、躰つきは中年の男に見える。

この牢人の後から、長宗我部盛親の家来があらわれ、牢人の姿が見えなくなるまで見送っていた。

牢人は、これも八坂の塔の方へ歩み去った。

長宗我部の家来が、あたりに注意ぶかく目をくばってから門の内へ消えた。

もとより、お万喜は、このときまで土塀の上にいたのではない。

いったんは土塀から荒寺の境内へ飛び下り、一陣の風のように木立の間を走りぬけてから、ふたたび土塀の上へ躍りあがった。

深めの塗笠をかぶった牢人が、曲りくねった坂道を下りかけていた。

ふわりと、お万喜は路上へ飛び下り、背中に結びつけていた破れ笠をかぶり、細い竹の杖をついて、牢人の後を尾けはじめた。

秋晴れの午後である。

芒の穂が、風にゆれていた。

牢人は、お万喜の尾行に、まったく気づかぬらしい。

鴨川の東岸へ下って来た牢人は、川沿いの道を南へすすむ。

五条の橋のあたりは、よい日和でもあるし、人馬の往来も多く、お万喜としては、こうした町中のほうが尾行しやすい。

牢人は五条の橋を西へわたり、尚も南下して、鴨川の河原へ降りた。

右側は、豊臣秀吉が築いた土居である。

この高さ五メートルにおよぶ堤で京都の周囲五里二十六町を囲み、万一にも悪徒の軍勢が攻めかけて来たときは、土居の木戸を閉ざし、洛中を防衛すると同時に、この土居によって、鴨川の氾濫をふせぐこともできる。

牢人は、ゆっくりと歩み、やがて土居の南端をはなれた。

鴨川は京都の五条から七条を経て西へ屈曲し、やがて京都の南方を南下する桂川に合流する。

京都の竹田口から出た街道を、牢人が伏見へ向って歩みつつある。

荷馬の手綱を持った百姓や旅人たちの姿がちらほらと見える街道の両側は、いちめんの荒野であった。

日がかたむきはじめている。

と、急に、牢人が街道を外れて、右手の小道へ入って行った。
かなり離れたところから、お万喜は、これを見とどけた。
その小道の突き当りは、こんもりとした森であった。
この森の中に、古びて朽ちかけた、小さな社がある。
このあたりの産土神を祀ったものだ。
お万喜は、竹田街道を通るたびに、この森を目にしていたが、その中に社があることまでは知っていなかった。
（はて……？）
森の中へ消えた牢人の姿を、お万喜は、いぶかしげに見送った。
（あの森の中で、豊臣方の者と会うつもりなのか？）
そこへ、老いた百姓が通りかかったので、お万喜が、
「もし……」
よびとめて、森の中に社があることを聞き出した。
「さようでごじゃりまいたか。なるほど、なるほど」
しきりにうなずいて見て、百姓が去るのを待ち、お万喜は小道を右へ切れ込んで行った。
産土神の社があるのなら、百姓の老婆になりすました自分が近づいて行き、これに手を合わせても、
（ふしぎはない……）

のである。
万一、牢人に気づかれたとしても、見咎められることもないではないか……。
音もなく、お万喜は森へ近づいた。
何処かで、しきりに鴉が鳴いている。
森の中は、木暗かった。
欅の木蔭へ身を寄せ、お万喜は、あたりを見まわした。
まだ、社は見えぬ。
牢人の姿も、見えなかった。
耳をすましたが、何も聞こえぬ。
すこしずつ、お万喜は森の奥へ入って行った。
樹々の間に、牢人の後姿が、ちらりと見えた。
牢人は、社の前に佇んでいる。
（やはり、だれかを待っているらしい……）
そのとき牢人が、かぶっていた塗笠をぬいだので、
（よし、顔をあらためてくりょう）
お万喜は、木蔭から木蔭へつたわりながら、尚も近寄って行った。
甲賀の女忍びとしての経験と自信が、五十をこえて尚、お万喜をささえている。
これまで、すこしも気づかれずに尾行してきたと、お万喜は、おもいこんでいたのである。

社の前に立つ牢人の側面へ出て、その横顔がお万喜の視界に入った。
その瞬間に、樹間を縫って飛び疾ってきた物が、お万喜の背中を襲った。
それは、樫の木で造られた、ふとい杖であった。
その杖が突き刺さるように、お万喜の背中を襲った。
「う……」
あまりの衝撃に息がつまり、お万喜は、がっくりと両膝をついた。
転倒しなかったのはさすがだが、そのとき、社の前に立っていた牢人が身をひるがえし、駆け寄って来た。
お万喜は、よろめきながらも立って、逃げようとした。
そこへ、別の大きな人影が、お万喜の背後から走って来て、
「こやつめ!!」
怒号し、お万喜の顔を撲りつけた。
その一撃には、怖ろしいちからがこもってい、今度はたまらず、お万喜が倒れた。
その背中を大男が踏みつけ、
「この婆か？」
と、牢人にいった。
大男は旅僧の姿をしている。
頭は青々と剃りあげてあるが、両眼も鼻も口も大きく、岩壁のように圧倒的な体軀をしている。

徒の旅僧ではあるまい。
それは、樫の杖を投げつけた手練のほどをみてもわかる。
笠をぬいだ牢人の顔も、立派なものであった。
お万喜は、旅僧の足をはねのけて逃げようとしたが、うごくものではない。
何といっても、むかしのお万喜ではないのだ。
「婆。何で、わしの後を尾けて来たのじゃ」
と、牢人はいった。
お万喜は、こたえなかった。
お万喜の口から、血がながれている。
旅僧の殴打の強烈さが、それを見てもわかる。
「おのれは、何処の者じゃ？」
「尋ねても無駄だわ」
と、旅僧が、
「かまわぬ。成敗してしまうがよい」
押し伏せられながら、お万喜は、わからぬように手をうごかし、着物の襟に隠し持っていた三本の針を口に含んだ。
牢人は、落ちている樫の杖を拾って、大男の旅僧へわたした。

「よし。これで……」
いいさして旅僧が、ふとくて長い杖を摑み直した。
杖で、お万喜を撲殺するつもりらしい。
「まあ、待て」
と、牢人が、
「この婆、何処のまわし者なのか、糾明してくれよう」
「面倒なことよ。糾明せずともわかっている」
お万喜は全身のちからを抜き、旅僧に踏みつけられたまま、息を殺している。
「それもそうじゃな」
と、牢人。
「よし。まかせておけ」
いうなり旅僧が、お万喜の背中を踏みつけていた右足を外した。そして、杖を振りかぶり、お万喜の白髪頭へ打ち込もうとした。
このときを、お万喜は待っていた。
突如、仰向いたお万喜の口から、細い光芒がふき出し、旅僧の顔をめがけて疾った。
甲賀の女忍びが得意とする含み針である。
三本の含み針は、旅僧の目や鼻や口のあたりを刺した。
「おのれ!!」

いったんは飛び退いた旅僧が、猛然と杖を打ち込んだ。
身をひるがえして、身をかわしたお万喜の前へ、素早く立ちふさがった牢人が、
「こやつ」
お万喜の腹のあたりへ、拳を突き入れた。
これをかわすことができなかったのは、やはり往年のお万喜ではなかったからだ。
「う……」
強烈な当身に、お万喜は気を失ってしまった。
「うぬ。この婆……」
旅僧が喚いて走り寄り、またも杖を振りかぶった。
そのときである。
頭上から飛び疾ってきた何かが、旅僧の腕へ命中し、
「あっ……」
旅僧が杖を落し、よろめいた。
どこからか、怪鳥のように飛び下りて来た人影が、おどろいて腰の刀を引き抜こうとする牢人の左足を脇差で切りはらった。
前へのめった牢人の膝の下から血が噴いた。
黒い人影が、倒れているお万喜を引き起した。
上田源五郎であった。

左手にお万喜の躰を引き起しつつ、源五郎の右手は二箇の飛苦無を旅僧へ投げ撃っている。

そのうちの一箇は外れたけれども、別の一箇は風を切って旅僧の右の太股へ突き刺さった。

すでに旅僧は、この小さくて鋭利な手裏剣を右腕に受けている。

「おのれ……」

源五郎へ躍りかかろうとしたが、どうにもならなかった。

すべては、一瞬の間のことであった。

お万喜の痩せた躰を横抱えにして、上田源五郎は産土神を祀った社の方へ走った。

「待て!!」

「逃すな。逃してはならぬ!!」

牢人と旅僧が叫び、牢人はようやく刀を抜き、旅僧は杖を拾いあげ、よろめきよろめき追いかけたが、到底、間に合うものではなかった。

お万喜を抱えた源五郎の躰を、社の背後の森が呑み込んでしまい、その後には、傷を負った牢人と旅僧の呻き声が聞こえるのみだ。

いつの間にか、夕闇が濃くなっている。

西の空の裾に、血のような残照が見えた。

やがて、夜が来た。

そこも、暗い森の中であった。

お万喜は意識を取りもどしたとき、その森の中の、竹と筵の小屋の中に寝かされていた。

「お万喜どの。気づいたか……」

男の声がした。

男の顔が、こちらをのぞき込んでいる。

「あっ……」

お万喜は、驚愕の叫びを発した。

「げ、源五郎……」

飛び起きようとしたが、お万喜の手足は、きびしく縛りつけられていた。

源五郎が低く笑い出した。

「おのれ、源五……」

「お万喜どの。危うかったな」

「な、何の……」

「わしが助けなかったら、いまごろは冥土への旅に立っていたことであろうな」

「う、うう……」

「それにしても、まことに久しぶりであったな、お万喜どの」

お万喜が、鉢形城内の山岸屋敷へ度び度び忍んで来たのは、二十三、四年も前のことになる。

「たがいに、変ったのう」

いいかけた源五郎を、お万喜は口惜しげに睨みつけ、

「この縄を解け」
「いずれは解いてあげよう」
「な、何と……」
「その前に、すこし語り合おうではないか。なつかしいのだ、お万喜どの」
「聞く耳もたぬ」
お万喜は、吐き捨てるようにいった。
「甲賀の頭領様は、いまも、お達者か?」
「知らぬ」
「下中の清松は?」
この問いには、お万喜がこたえた。
憎悪をこめた眼で、源五郎を睨み据えながら、
「清松は達者じゃ。かならず、おのれは清松に首を掻かれるにちがいない。よいか、源五郎。甲賀が、おのれのことを忘れたとおもうたら大間違いじゃぞ。おのれが鉢形の折の裏切りは、頭領様とて忘れてはおらぬ。きっと……きっと、その首を掻き切ってくれようぞ」
「ふうむ。では頭領様も、お達者なのか」
「さ、この縄を解け」
「解いたら、どうする?」
「解け、解かぬか!!」

「解いたら逃げるつもりか?」
「だまれ!!」
「では、何とする?」
「おのれを討つ!!」
「は、はは……」
「何を笑う。何が可笑しい」
お万喜には、源五郎の笑いの意味が、わかりすぎるほどにわかっていた。
忍びの者でもない牢人の尾行をして、それを相手に気づかれ、却って社の森の中へさそい込まれてしまった自分の不甲斐なさに、お万喜は気が狂いそうになっている。
(これでも甲賀の女忍びか……これが、お万喜の成れの果てか……)
その、お万喜が上田源五郎の首を討てようはずもない。
お万喜に引きくらべて、源五郎のはたらきは、往年をしのばせるに足るものがある。
先刻の牢人と旅僧は、おそらく、関ヶ原の戦さで西軍に参加した武士たちであろう。
彼らは、長宗我部盛親などを中心にして連絡を取り合い、豊臣家の再起をかけた戦さが始まることを、
「待ちのぞんでいる……」
に、ちがいなかった。
お万喜を見やっている源五郎の微笑は、あくまでも明るい。

お万喜は、痩せて日灼けした皺の深い顔をうつむけた。

四十九歳になった上田源五郎の顔も、さすがに若さを失っていたが、しかし、先刻の機敏な躰のうごきには年齢を感じさせないものがあった。

「のう、お万喜どの。一つ、わしの問いに、こたえてはくれぬか。どうじゃ?」

と、源五郎が身を寄せてきた。

「お万喜どの。夜張りの小父ごは……助七殿は、いまも達者か?」

この一事を尋ねたいので、源五郎は、お万喜の手足を縛り、逃走をふせいだのであろう。

「知らぬわえ」

さも憎さげに、お万喜がいい、傍を向いてしまった。

「知らぬ、と……」

「おお、知らぬ。夜張りだとか、助七だとか、そのような名は聞いたこともないわえ」

いうまでもなく、お万喜が夜張りの助七を知らぬはずはない。

知っていながら、このように惚け顔をするのは、やはり甲賀を裏切った源五郎を憎んでいるのであろう。

お万喜の骨張った細い躰は、汗と埃にまみれつくし、異臭をはなっている。

肉がそげ落ち、尖った鼻すじや、まるで爬虫のように冷たく光っている眼や、白髪まじりのそそけ立った髪の毛や、

(これが、あの、お万喜か……)

源五郎は憮然となった。

二十何年もの歳月が経過したのだから、自分もお万喜も変貌をとげるのが当然だし、見張りのための変装をしていることゆえ、お万喜は百姓の老婆になりきっているわけだが、それにしても、

(おとろえたものじゃ)

と、源五郎は看てとった。

いまも丹波の里に暮し、自分の帰りを待っていてくれる妻の正子も、すでに四十をこえたが、

(むかしと、あまり変っていない……)

ようにおもわれる。

田園の暮しにも慣れ、正子は健康そのものであった。

「お万喜どのは、大病をされたのではないか?」

と、源五郎が尋ねた。

「うるさい!!」

噛みつくような、お万喜のこたえである。

一時は、この女の豊満な肌身を掻き抱き、何ともいえぬ妖しい肌の香りに酔った源五郎なのである。

「縄を解け。解かぬか、源五郎」

「夜張りの小父ごの消息をいわぬうちは解かぬ」
「何……」
屹と、源五郎を睨み据えたお万喜が乾いた声で、
「勝手にせよ」
と、いった。
こうなれば、どうあっても源五郎の問いにこたえぬ決意をかためたものと見える。
「そうか……」
源五郎は、ふところから一通の書状を出して見せ、
「これでもか、お万喜どの」
と、笑いかけた。
お万喜が、不審げに、
「その書状が、どうしたというのじゃ？」
「わからぬか」
「知らぬ」
「先刻、お万喜どのを手ひどい目にあわせた牢人の懐中に入っていたのだ」
「何……」
「いずれ、長宗我部盛親が、何処ぞの豊臣方の人へあてたものであろうかな」
「どうして、それを？」

「お万喜どのは気を失っていたので、知らなんだのもむりはない」
「では、あの……？」
「わしが、あの牢人と旅僧を打ち倒し、双方の懐中をあらためたところ、牢人が、この書状を所持していたのじゃ」
これは、嘘である。
牢人と旅僧を打ち倒すこともできたろうが、上田源五郎はあえて闘わず、お万喜を抱え、すぐさま逃げたのである。
失神していたお万喜は、これを知らぬ。
「どうじゃ。この書状が欲しくはないか？」
「う……」
「甲賀の頭領様へ、この書状を届けたなら、さぞ、よろこばれよう」
「よこせ」
「渡さぬとはいわぬ。そのかわり、夜張りの小父ごの消息が知りたい」
はじめて、お万喜の口もとへ苦笑が浮かんだ。
「いまの源五郎はな、お万喜どの。甲賀でもない、伊賀でもない。また、徳川・豊臣の、いずれのためにもはたらいておらぬ」
「では、何のため、このあたりを徘徊しているのじゃ？」
「山の中で木や草や鳥を相手に暮していると、飽き飽きしてしもうてな。たまさかにはこう

して、天下のありさま、世の移り変りを、この目でたしかめたくなるのじゃ。わしは、年少のころから甲賀の忍びとして、一つ場所に長く住み暮したことがない。その習性が、いまもって直らぬと見えるわ。ふ、ふふ……」

「では、江戸の山岸屋敷に隠れ住んではおらぬのか？」

お万喜の問いに、源五郎はうなずいて見せ、

「甲賀では、まだ、おれの一命を絶つつもりなのか？」

「いうまでもないわえ。山岸屋敷へ踏み込むことだけはならぬと、頭領様からのきびしいお達しゆえ、これまで、おのれは生きのびてこられたのじゃ」

「わかっているとも」

お万喜は、口惜しげに舌打ちをした。

「ほれ、此処にいるではないか……」

「いま、何処にいるのじゃ？」

「負けた……」

がっくりと肩を落して、お万喜が、

「仕方もないことよ」

「わかってくれたか」

「夜張りの助七どのについて申せばよいのじゃな」

「そうだ」

と、身を乗り出した上田源五郎へ、

「死んだわえ」

お万喜がいった。

「死……いつじゃ？」

「あれは、一昨年の夏であったが……」

予期せぬことではなかった。

夜張りの助七は、すでに七十をこえていたはずだ。

「病いで、死んだのか？」

源五郎の声は、呻きに近かった。

お万喜が、微かにうなずき、

「案ずるな、源五郎。甲賀の者たちが、手をつくして看病をしたわえ」

「そ、そうか……」

「助七どのが手塩にかけた、おのれのみが甲賀を裏切り、死水をもとれなかったのじゃ」

「む……」

お万喜に、こういわれては返す言葉もない。

自分を憎み、蔑んでいるお万喜ゆえ、その言葉の真偽のほどはわからぬ。

だが、嘘をついているようにも感じられなかった。

夜張りの助七の死を源五郎へ告げたところで、甲賀には何の損失もないのだ。

「さ、よこせ」
お万喜が、また、叫び出した。
「約束じゃ。その書状をわたせ。この縄を解け!!」
「そうか……、やはり、死んでいたか……」
「何をしている。早うせぬか」
「よし……よし」
源五郎は、腰の脇差を引き抜いた。
「おのれ、殺す気か……」
「つまらぬことをいうな。殺す気なら救いはせぬ」
「早う……早う、せぬか」
「ほれ、書状は此処に置くぞ」
小屋の中には灯もない。
それでいて、たがいの顔が見えるのは、やはり若いころから鍛えぬいた眼力が物をいうのであろう。
「お万喜どのも、これよりは、あまりむりなはたらきをせぬがよいな」
「うるさい。よけいなことじゃ」
「まさに、そうであるな」
わずかに、脇差を持った源五郎の右手がうごいた。

お万喜の両腕を縛っていた細縄が、ばらりと切り放たれている。
同時に源五郎は、脇差を鞘へ納めつつ、するりと小屋の外へ脱け出て、
「足の縄は、自分で解くがよい。お万喜どの、さらばじゃ。二度と会うこともあるまい。達者に暮せ」
声を投げ、森の闇に消えた。
お万喜は、ふところへ手を差し入れ、小さな刃物を取り出し、もどかしげに足の縄を切りほどいた。
そして、小屋の片隅へ源五郎が置き残した書状をつかんだ。
書状は、絹の布に包まれている。
中には、宛名も書きしたためてない書状があった。
いや、それは、書状というよりも、数枚の紙を折りたたんだものにすぎぬ。
「おのれ、源五め……」
お万喜は、紙を叩きつけ、小屋の外へ飛び出した。
「おのれ、ようも謀かったな」
両手で重くたれこめた夜の闇を掻き毟るようにして、
「返せ、源五郎。もどって来いやい!!」
お万喜は喚いた。
「おのれ、おのれ……夜張りの助七どのがことを正直に打ち明けたのに、ようも騙したな」

細い足で地を蹴り、お万喜は泣き叫んだ。

「ようも、ようも……この仕返しをせいではおかぬぞ。おぼえておれよ、源五郎……」

もはや、源五郎を追いかける気力も体力も、お万喜にはないらしい。

「甲賀の、お万喜ともあろうものが、この態は何としたことじゃ。ええもう、口惜しや、口惜しや……」

其処へ伏し倒れ、お万喜は、いつまでもいつまでも泣き噎んでいた。

上田源五郎は、闇を切り裂いて走っている。

夜張りの助七の死亡を告げた、お万喜の言葉は、

（嘘ではない……）

ように感じられた。

たとえ、嘘であっても、源五郎の胸の内に蟠っていた事が幾分は溶けたかのようにおもわれる。

もしも、お万喜が真実を告げてくれたとしたら、

（わしは、悪いことをしてしもうたことになる……）

走りつつ、源五郎は笑いを浮かべた。

それは何故か、寂しげな笑いであった。

（まさに、お万喜がいうたとおりじゃ。わしは、父親同様の夜張りの小父ごの死水も、とらなかったのだものな……）

他国ではたらいている忍びの者が、親の死水をとれなかったことは、決して恥ではない。

だが、いまの源五郎は忍びの者ではなかった。

それだけに、

（小父ご。ゆるして下されよ）

常人の感覚になっていたのであろうか。

走る源五郎の目から、熱いものがふきこぼれてきた。

さて……。

徳川家康が約二十万の大軍をひきいて、豊臣秀頼の大坂城を包囲したのは、翌年の慶長十九年十月である。

この年の夏。

豊臣秀頼と生母の淀の方は、京都の方広寺の再建に取りかかってい、寺の鐘楼へ掛ける釣鐘に、

〔国家安康、君臣豊楽〕

の文字を彫りつけさせた。

これを知った家康が〔家〕と〔康〕の間に〔安〕の一字を入れたのは、

「自分の名を、安の一字によって二つに断ち切ったことになる。まことに奇怪なことじゃ。しかも、その下に君臣豊楽の四文字があって、これは、やがて豊臣家を天下にいただくという含みがある」

と、難癖をつけた。

文字どおり、これは無理押しの抗議であった。

家康は、すでに七十をこえている。

自分が元気なうちに、何としても豊臣家を名実ともに屈服させてしまわねばならぬと決意したのだ。

鐘楼の文字を切掛（きっかけ）にして、徳川家康は激怒の態（さま）を見せ、

「かくなれば、いたしかたもなし。大坂へ攻めかけ、謀叛（むほん）の根を絶ち切らねばなるまい」

と、戦備に取りかかった。

おどろいたのは豊臣家である。

そこで、使者を家康の許（もと）へつかわし、懸命に弁疏（べんそ）したが、家康の態度は強硬をきわめていた。

「では、最後に申し入れる。秀頼殿が徳川将軍に従うとあらば、大坂城を出て、別の領国へおもむいていただこう。それでなくば、御生母の淀の方を人質として江戸へ送ってもらいたい。この二つのうちの一つを選ばぬかぎり、家康は承服できぬゆえ、東西の手切れとおもうがよい」

この家康の言葉には、自分の言葉を受け入れるなら、豊臣家の存続を、

(ゆるしてもよい)

と、考えていたことが察せられる。

淀の方を江戸へ引きわたせば、秀頼が大坂にいてもよいというのである。

つまりは、さほどに、淀の方の権力が非常なものであったのだろう。

家康の申し入れに対し、淀の方は、

「亡き太閤（たいこう）殿下の臣下であった家康の許へ、何で自分が人質にまいらねばならぬのじゃ。もってのほかのことである」

火がついたように怒り出した。

この間の事情をくわしく書きのべるまでもあるまい。

ともかくもこうして、再び東西両勢力が戦うことになったのだ。

関ヶ原に敗れた武将たち、それに太閤秀吉恩顧の人びとや、最後の大戦になろうとおもわれる、この戦陣へ参加して身を立てたいと願う牢人（ろうにん）たちのうごきを、豊臣家もわきまえていた。

そこで、

「かくなれば仕方もなし。関東と戦うべし!!」

と、なった。

徳川家康は、七十三歳の老齢にもかかわらず、凄（すさ）まじいばかりの闘志をみなぎらせ、十月十一日に駿府の城を発し、二十三日に京都の二条城へ入った。

つづいて、二代将軍・徳川秀忠が大軍をひきいて入洛し、諸大名の軍団もつぎつぎに集結した。

山岸十兵衛直勝亡きのち、家を継いだ勝千代は、このとき四十歳になってい、十兵衛直元（なおもと）

を名乗り、将軍・秀忠の旗本として出陣している。

豊臣家としては、

「関東と戦さになれば、これまで、こころならずも関東に従っていた太閤恩顧の大名たちの中には、かならず、兵をひきいて大坂へ駆けつけてくれる者もあらわれよう」

と、考えていたようだが、これは、まったく目算が外れた。

つまりは、それだけ、徳川将軍とその幕府の威勢が強固なものとなっていたからであろう。

そこで大坂方は、豊臣家に仕えている家臣と、寄せ集めの牢人たちをもって戦うことになった。

牢人といっても、中には、あの長宗我部盛親もいたし、真田幸村・毛利勝永・後藤又兵衛など、かつては天下に名を知られた武将も少なくない。

それでも、約十万ほどの兵力が大坂城へあつまったのである。

真田幸村は、関ヶ原の戦いで、父の昌幸と共に西軍へ味方し、信州の上田城へたてこもり、徳川秀忠の第二軍を引き受け、一歩も退かなかった。

ところが、西軍の敗戦となってしまったので、真田父子は紀州の九度山へ押しこめられていたが、このたび、豊臣秀頼から、

「ぜひとも、味方をしてくれるように」

と、まねかれたので、真田幸村は九度山を脱出し、大坂へ入城した。

すでに、幸村の父・昌幸は九度山で病死しており、また兄の信幸は関ヶ原以来、徳川家に

従っている。

真田幸村の智謀を、徳川家康は非常に警戒したというが、大坂方は、幸村の進言や作戦を生かすことができなかった。

それでも、いざ戦闘が始まると、幸村をはじめ諸将の奮戦を、徳川軍がもてあますほどになったのである。

亡き太閤・豊臣秀吉は、大坂城を築いたとき、こういったそうな。

「この城を攻め落すに、二つの道よりほかはない。一つは、二年三年も大軍をもって城を囲み、城中の兵糧が絶えるのを待つことじゃ。残る一つは、うまくもちかけて、いったんは戦さをやめ、その隙に城の濠を埋め、壊してしまうことじゃ。その上で再び攻めかかれば、もちこたえることはできまい」

築城家としても第一人者であった秀吉が、

「天下一の城を……」

と、築いた大坂城は、本丸・二の丸・三の丸を囲む周囲が三里にもおよび、城を囲む濠の幅が広いところで七、八十メートルもあったという。

この、たとえようもないスケールの大坂城を、徳川家康は攻めきれなかった。

そうかといって、二年三年も包囲をつづけるわけにはまいらぬ。

それでなくても〔冬の陣〕とよばれた、このときの戦さで、

「もしやすると、関東は負けてしまうのではないか……?」

との声も、聞かれるようになった。

さほどに東軍の攻撃は、はかばかしくなかったのである。

そこで徳川家康は、豊臣秀吉が洩らした二つの方法のうちの後者をえらんだ。

巧妙に、講和へもちこみ、休戦となるや、たちまちに、大坂城の濠を埋めてしまったのである。

大坂方は、老獪な家康の駆け引きに対応することができなかった。

淀の方をはじめ、豊臣家の重臣たちが、いくつもの派に分れてしまい、敏速に決断が下せないのだ。

真田幸村が、

「まだしも、関ヶ原の折の、治部少輔殿のほうがよろしかった」

と、嘆いたのは、関ヶ原の決戦では、たとえ敗北したにせよ、石田治部少輔三成という総司令官がいて、最後の決断を下すことができたことをさしたのであろう。

徳川家康は、大坂城の濠を埋めてしまうと、またも難癖をつけて、戦闘再開となった。

これが、翌元和元年（一六一五年）の〔夏の陣〕である。

丸裸となった大坂城は、たった一日の戦闘で陥落してしまった。

豊臣秀頼と淀の方は城内で自害をとげ、真田幸村などの勇将も戦死し、長宗我部盛親は戦場から脱出したが、すぐに捕えられ、首を斬られてしまった。

こうして、豊臣家は完全に滅亡した。

この戦さにおいても、甲賀の忍びたちが、大いにはたらいたことであろう。

ところで……。

上田源五郎は、丹波の里から大坂の冬・夏の戦陣を、わざわざ見にあらわれたらしい。勝千代が……いや、義弟にあたる山岸十兵衛直元が討死もせずに終戦を迎えたことを、江戸の山岸屋敷へ逸速く知らせたのは、ほかならぬ源五郎であった。

それから丹波の里へ帰り、

「いやはや、最後の戦さは、実に大変なものであった」

と、源五郎が正子にいった。

それがまた、いかにも敵味方が必死に戦う戦場の中にいて見物をしてきたように語るので、正子が目をみはり、

「それでは、戦さをなされたのでございますか？」

「わしが？」

「はい」

「まさかに……」

源五郎は笑って、

「戦場の見物などは、わけもないことじゃ」

「まあ……」

「双方が血眼となって戦っているのじゃもの、わし一人がふわふわと歩いていたところで目

には入らぬ」

正子には、どうしても信じられなかった。

「勝千代殿も、ようはたらかれたぞ。なれど無事で何より。傷を負われたが、なに、一命にかかわるほどのことではない。このことを江戸の屋敷へも知らせておいた」

「まあ……」

正子は、ただ、おどろくばかりである。

「わしも、五十をこえた。これよりは、あまり出歩くまい」

「そりゃ、まことでございますか？」

「まことじゃ。さすがに、ちかごろは、おもうように、この手足がうごいてはくれぬわ」

ときに、上田源五郎は五十一歳。正子は、四十四歳になっている。

「案ずるな。これよりは死ぬるまで、そなたの傍から離れぬ」

「うれしゅうございます」

「これよりは、年寄りどうし、仲よう日を送ろうではないか」

「はい」

「豊臣家がほろびつくしては、もはや、徳川の天下は容易にくずれまい」

徳川家康が七十五歳で病歿したのは、翌年の四月十七日であった。

それから五年後の、元和七年の夏に、あれほど健康だった正子が、丹波の里で急病のため、生涯を終えた。

このとき正子は五十歳。源五郎は五十七歳になっている。

そして……。

正子を葬って後、上田源五郎の姿が、忽然と丹波の里から消え去った。

春の海

正子が病歿してのち、上田源五郎は、甲斐の丹波の里へ、一度も姿を見せなかった。

いや、これは、丹波の里の板垣家へあらわれなかったということだ。

すくなくとも、年に一度は、板垣家の裏山の裾にある小さな寺の墓所へはあらわれ、正子の冥福を祈っていたらしい。

しかし、源五郎はみずから、板垣家とも、また山岸家とも絶縁の姿勢をとった。

娘の松代が嫁いだ柴田家へは、むろんのこと、音信もせぬ。

こうして、いつの間にやら、正子が亡くなってより八年の歳月が経過してしまった。

その年、寛永六年（一六二九年）の、冬も終ろうとする或日の夕暮れに、一年ぶりで上田源五郎の姿を、丹波の里の正子の墓の前に見ることができる。

源五郎が、亡き妻の墓の前へあらわれるのは、きまって日暮れに近い頃おいである。そして、人の気配もない墓の前へ坐り込み、腰の瓢の酒を独りで酌みながら、何やらぶつぶつと

妻の墓へ向って語りかけているようだ。

夜を徹して、源五郎は墓の前に坐りつづけ、空が白むころに、

「さらば……」

墓へ一礼し、何処(いずこ)へともなく消え去ってしまう。

このときも、そうであった。

空は晴れていたが、山里には、昨日の雪がまだ残っている。

だが、源五郎は、いつものように背負ってきた筵(むしろ)を墓の前へ敷きのべ、

「正子。この世の中も、あまり、おもしろうなくなってきたわえ」

しずかに墓へ語りかけつつ、筵の上へ腰をおろし、腰に吊(つる)した瓢を手に取った。

上田源五郎は、六十五歳になっていた。

その体力も、さすがに衰えたとみえて、源五郎は暖かそうな熊の皮を荷物の中から取り出し、背に羽織った。

めっきりと薄くなった髪が、真白になっている。

顔の皺(しわ)は深く、躰(からだ)も、ひとまわり細く小さくなったようだ。

年少のころから、激しく心身をはたらかせ、やすむこともなかった忍びの者が老齢に達すると、急に衰えてくるのだそうな。

「つまらぬ……つまらぬ世の中になったものよ」

酒を含みつつ、源五郎は墓へ向って呟(つぶや)きをくり返す。

山間(やまあい)の夜空に、星が凍りついたように光っていた。

大坂の陣の後、日本の諸国に戦乱が絶えてより、十四年がすぎている。

甲賀の頭領・山中大和守俊房は、大坂の陣が終った後、元和四年に、甲賀の屋敷で病歿している。山中内匠(たくみ)長俊も、すでに、この世の人ではない。

このことを、上田源五郎は知っていたか、どうか……。

そして、寛永六年のいまになると、山中家の忍びの組織は、一応、解体されたものとみてよいだろう。

徳川幕府は、新たな組織をもって、諸国の大名を監視すべく、間諜網(かんちょうもう)をととのえた。

徳川家直属の家臣と、甲賀・伊賀の忍びの者により、再編成をされたわけで、つまり、甲賀・伊賀の忍びの組織は、ここにおいて完全に徳川幕府の傘下(さんか)に組み入れられたといってよい。

むろん、例外はある。

上田源五郎のように、ただ一人、甲賀を離脱した者もいたろうし、他の大名家へ仕えた者もいたろう。

しかし、甲賀の頭領の指揮の下(もと)に、独自の活動をするという形態は、ほとんど影をひそめてしまった。

このことは、おおよそ、源五郎にもわかっていたのではあるまいか。

徳川幕府は、諸大名を征服し、我手につかみ取った政権を尚(なお)も不動のものとするため、諸

大名への統制をきびしくし、監視の目をゆるめなくなった。

大坂戦後、間もなく病歿した徳川家康にかわって、二代将軍の秀忠は、幕府の重臣層とはかり、複雑な諸制度をつぎつぎと設け、改易（領主の入れ替え）や取り潰しを容赦なくおこなった。

まだ、残存している諸大名の出城（本城以外の小さな城）も徹底して破壊せしめた。

豊臣家と関係の深かった上杉景勝・福島正則・毛利輝元などの諸大名たちも相ついで病歿し、あるいは幕府の苛酷な統制によって解体されつつある。

二代将軍の徳川秀忠は、亡父・家康にならい、早くから隠居して、三代将軍位を息・家光へゆずり、みずからは〔大御所〕として家光をたすけている。

三年前には、秀忠・家光が徳川幕府の威風をしめす大行列をもって上洛し、後水尾天皇に拝謁をした。

これは、皇室と朝廷へ対する、幕府の大デモンストレーションというべきものであった。

この大がかりで、華美をつくした徳川将軍の上洛の行列を、おそらく、上田源五郎は見物していたにちがいない。

だが、何も彼も、

「つまらぬ……」

世の中になったと、源五郎は亡き妻の墓へ語りかけている。

「躰が……この、わしの躰が、むかしのままならば、いまも、わし一人にて、おもしろいことも仕てのけられるのじゃが……」

夜の闇の中で、源五郎は、いつまでも墓へ向って語りかける。

「そなたが亡くなってのち、もはや、いつ死んでもよいとおもいさだめ、それならば、おもいきって、天下がおどろくようなことを仕てのけようとおもうたが……ちょうど、そのとき、前にも申したことだが、わしは大病をしてのう。伊豆の国の、山の中で半年近くも臥せっていたものじゃ。若いころからの無理が、いまになって、こうしてあらわれてくる……」

なめるように、冷え切った酒をのみながら、

「さもなくば、若い三代将軍が上洛した折に、忍び殺してもおもしろかったろう。なに、わしにできぬことではなかった。そうなると、天下は大さわぎとなったろうなあ。ふ、ふふ……」

源五郎の含み笑いが、いつまでもつづいた。

「あの大形な行列を見物して、つくづくと、そうおもうたが……もはや、この躰がいうことをきかぬ」

春の足音は間近にせまっていたが、この丹波の山村の夜更けの寒気はきびしい。

けれども源五郎は、火を焚こうとはしなかった。

「この墓の前へまいるのも、今年が最後やも知れぬ。いや……いや、あと一、二度はまいれるかな……ともあれ、間もなく、そなたの傍へまいれよう」

翌朝になって、朝の光りが墓所にただよいはじめたとき、もはや、上田源五郎の姿は何処にも見えなかったし、正子の墓の前に人が坐っていた痕跡も残っていない。

それから数日後の夕暮れになって……。
遠州・浜松の北方にある三方ヶ原の小松原を歩む源五郎の姿を見出すことができる。
風の強かった一日が終ろうとしている。
血のかたまりのような夕陽が沈もうとしている。
いま、このとき、この南北三里・東西二里にわたる高原を歩む者は、上田源五郎一人であったやも知れぬ。
三方ヶ原で、上田源五郎の父・小杉重六が、武田忍びの飯田彦蔵（後の山岸十兵衛）に討たれてから、六十年に近い歳月がすぎてしまっていた。
源五郎は、亡き夜張りの助七に教えられた小松原の一隅の、父の亡骸を埋めた箇所まで来ると、丹波の里の墓所でのときと同様に筵を敷きのべ、その上へ坐り込み、
「父上。しばらくでござった」
と、呟き、腰の瓢を手に取った。
源五郎は、腰の瓢のほかに、背負っていた小さな荷物の中から、竹製の水筒を取り出した。
水筒の中にも、酒が入っている。
その水筒の中の酒を、父の亡骸が埋め込まれている土の上へ、源五郎は丁寧にかけまわした。
小松原の土は、たちまちに、酒を吸い込んでゆく。
「父上。おのみ下され」

源五郎は声に出して、土の底へよびかけた。
だが、それからの源五郎は沈黙したままであった。
そこが、正子の墓の前に坐るときとはちがう。
ほとんど、独言のような呟きも洩らさなかった。
日が沈みきって、夜の闇が三方ヶ原を包んだ。
いつの間にか、風は熄んでおり、晴れわたった夜空に、無数の星が煌めいている。
源五郎は、星空を仰ぎつつ、瓢の酒をのみはじめた。
そして……。
夜が明け、朝の太陽が昇りはじめたとき、上田源五郎は筵や竹の水筒、熊の毛皮を荷物にまとめ、瓢を腰に提げた。
それから、父・小杉重六が眠る土の底へ向って両手をつき、
「父上。源五郎の心身も、ようやくに衰えてござる。間もなく、お傍へまいれましょう」
呟いてから、合掌をしたまま身じろぎもせぬ。
その源五郎の口が、微かにうごいている。
何を、呟いているのであろう。
それとも、経文でもとなえているのであろうか……。
やがて、源五郎は立ちあがり、歩み出した。
日は、いよいよ高く昇った。

一点の雲もなく晴れわたった空の下の、はるかに遠い野面（のづら）から、野火のけむりが立ちのぼっている。

三方ヶ原の台地から、浜松の方へ下って行く上田源五郎の姿は、もはや、かつての源五郎のものではなかった。

杖（つえ）こそつかぬが、一歩一歩と足を踏みしめて歩む足取りに慎重さは見えても、老いは隠せぬ。

浜松城下へ出た源五郎は、笠を深くかぶり、顔をうつ向けたまま、東海道を東へ……江戸の方へ下りはじめた。

だが、源五郎は江戸を目ざしているのではない。

遠州から駿河（するが）の国へ入り、伊豆の国の三島まで、むかしの源五郎ならば二日で到着したろうが、いまは五日もかかった。

それから、源五郎は東海道を逸（そ）れ、駿河湾に沿って、伊豆半島を南へ歩みはじめたのである。

そこは、駿河湾の海原をのぞむ丘の上の、小さな板屋根の家であった。

伊豆半島の突端へも、さしわたしにすれば六里ほどの地点である。

丘の下には漁師の家々が海辺の近くにまで連なっていた。

上田源五郎が、この丘の上の家へもどって来たとき、家のうしろの梅の木が白い花をつけ、しきりに山鶯（やまうぐいす）が鳴いていた。

暖かい伊豆の国には、もう、春が来ている。

源五郎は、二年ほど前から、この漁村に住み暮すようになっていた。

もっとも、伊豆の国の、この辺りへはこれまでに何度も足を運び、漁村の人たちとも顔見知りの間柄であったし、漁師たちは、源五郎のことを、

「小杉さま」

と、よんでいる。

彼らは、源五郎を、何処かの戦さに敗れた落人（おちゅうど）だとおもっているらしい。

むかしから何度も、漁師の家へ泊めてもらっていたし、いつであったか、六名の野盗（やとう）が峠を越えて来て、この漁村を襲ったことがあり、そのとき、折よく滞在していた源五郎が、ただ一人で野盗どもを討ち取ってしまったのを見て、漁師たちの源五郎への敬愛は非常なものとなった。

そればかりではなく、源五郎は忍びの者としての体験から、さまざまな智能にすぐれていたし、医薬の心得もある。

いまも、源五郎の家から少し離れた斜面には、種々の薬草を栽培しており、源五郎は、その用法をも漁村の人びとに教えてあった。

こうしたわけで、気が向けば、いつでも、この漁村へ来て滞在することができたのだが、

三年前に大病にかかってからは、

（此処を死場所にしよう）

と、源五郎はこころに決めた。

漁村の人びとは、源五郎が永住すると知って、

「それは何よりじゃ」

大よろこびで、丘の上へ家を建ててくれたのだ。

丹波の里から三方ヶ原へまわり、我家へ帰ってきた源五郎は、先ず釜に湯を沸かし、頭や躰を洗った。

丘の上の家から煙りのあがるのを見て、漁村の人びとが新鮮な魚や酒を持ち、あつまってきてくれた。

時折、源五郎は家を留守にするので、人びとは別に不審を抱く様子もない。

酒をのみ、淳朴な人たちと語り合い、魚を食べた。

そして、人びとが帰ってゆくと、すぐに源五郎は臥床へ身を横たえ、ぐっすりと寝入った。

躰中の骨も肉も、蕩けるような快さであった。

源五郎が眠りからさめたとき、太陽は高く昇ってい、朝のうちにやって来た漁師の女房たちが、土間の大きな水瓶へ水を満たし、朝餉の粥を火に掛ければよいように仕度しておいてくれた。

そうした物音にも気配にも気づかぬほどに、上田源五郎は深い眠りをむさぼっていたらしい。

（わしとしたことが……）

半身を起して、源五郎は茫然となった。

このようなことは、はじめてといってよい。

（わしも、老いたものじゃ。これでは甲賀忍びの成れの果てともいえぬわ）

今日も、裏手で、しきりに山鶯が囀鳴している。

（もはや、昼近いころか……）

源五郎は、寝床をたたみ終えた。

そのとき、

「見つけた……見つけたぞよ」

女房たちが開け放したままになっている裏の戸の向うから、しわがれた声が、

「小杉虎松よ……」

と、源五郎を本名で呼びかけ、

「わしを、おぼえているか」

影がさし込むように土間へ入って来たものがある。

痩せ細った老人であった。

頭髪も、ほとんど脱け落ち、襤褸切れを継ぎ合わせた着物を身につけている。

老人の顔は、あまりに、たくさんの皺が深く刻まれているので表情もさだかではない。

顔色は蒼ざめ、息切れが激しく、竹の杖を持った手がぶるぶるとふるえていた。

「おお……」

老人を凝視した源五郎が、おどろきの声をあげ、
「下中の清松。まだ、生きていたのか……」
「おのれを討ち取るまでは、死ぬにも死ねぬわえ」
源五郎の飛苦無に突き刺された清松の右眼には、眼帯もかかっていない。
そして、いま、たれ下った瞼の底から、清松の左眼が白く剝き出された。
「清松。わしが此処にいることを、どこで聞いた?」
「この辺りの村々で、おのれのことを、知らぬ者はない。もそっと早く、伊豆の国を、探しまわればよかったものを……」
息を切らせながらも、下中の清松は竹杖を持ち直し、ぎらりと抜き放った。
杖の中に、刃が仕込んであったのだ。
「清松は、何歳になったのじゃ?」
「だまれえ!!」
叫んだ清松が板の間へあがり、源五郎へ切りつけた。
事もなげに、これを躱した源五郎が、軽く清松の躰を突くと、清松はよろめき、仕込み杖を落したまま、縁から外へ転げ出てしまった。
下中の清松は悲痛な呻き声を発し、這うようにして後退しながら、ふところを探り、短刀を引き抜いた。
清松は、すでに七十をこえていよう。その体力も限界にきているらしい。

上田源五郎が、縁へ出て来て、感慨をこめ、
「ようも今日まで、たゆむことなく、わしを探しつづけてきた。さすがに甲賀の忍びじゃ。ときに清松。お万喜どのは、もはや、この世の人ではあるまいな?」
「お万喜は、おのれに騙されたことを、怨みにおもい、十年前に、狂い死んだわ」
「あの折のことを、お万喜どのはおぬしへ洩らしたのか……」
「おのれ、ようも……お万喜の怨みも、共に、はらしてくれる」
よろよろと立ち、短刀を構えた下中の清松へ、
「そうか……お万喜どのが、狂い死を、な……」
源五郎は、両眼を閉じた。
春の光りが、丘にも海にもみちあふれていた。
凪いだ海面の彼方には、漁舟も出ている。
じりじりと迫って来た清松は、源五郎が両眼をひらいたので、あわてて飛び退った。
まともに突きかかったところで、到底、討ち取れるものではない。
口惜しげに、清松は唸った。
源五郎は、清松を凝視している。しずかな、おだやかな眼の色であった。
そして、板の間の落ちていた清松の仕込み杖をつかみ、
「清松。おぬしと闘うのも、久しぶりのことじゃな」
こういって、源五郎が縁先から下りた。

清松は喘ぎながら、必死の形相となり、両手に短刀の柄をにぎりしめ、源五郎の胸もとへねらいをつけた。

「よし。そうじゃ。それでよい」

うなずきつつ、源五郎が仕込み杖を振りかぶると、

「う、うう……」

圧倒された清松が、じりじりと退って行く。

「それ、突け。清松。おもいきって、突いてまいれ‼」

はげますかのように声をかけつつ、上田源五郎が仕込み杖を振りかぶったまま、清松へ近寄った。

清松が片眼を瞑り、掠れ声をあげ、躰ごと短刀を突き入れてきた。

それを、源五郎は、わが左の胸下へ受けた。

仕込み杖は、ついに振り下されなかった。

「よう、やった……」

この一語を残し、上田源五郎の息は絶えた。

「う、討った……とうとう、源五めを、討った……」

源五郎に折り重なって倒れ、よろこびの声をあげたのが、下中の清松の最期であった。

精根のかぎりをつくした清松の心ノ臓も、このとき急に、はたらきを熄めたのである。

晴れた空に、鳥の群れが渡っていた。

解説

佐藤隆介

終戦後すでに三十八年。戦争というものをまったく知らない世代が現代社会の中心となりつつある。だから「平和」があたりまえのことになり、人びとは「死」というものの存在を忘れはじめた。

しかし、それでいいのだろうか。この平和な日々は、われわれがそれと意識していないだけで、実は一種の幻想なのではあるまいか。つい先頃、またNHKテレビでジャン・ルノワールの名作『大いなる幻影』を放映していたが、人間という生きものの本質が変わらない以上、戦争がなくなるということは、所詮〝幻影〟でしかないのではないか。

たとえ、長い歴史を尺度として見ればほんの一時的な幻影に過ぎない平和でも、その貴重さは何にもかえがたい。われわれは、ほとんど奇跡ともいうべき幸運に恵まれて生きているのである。にもかかわらず、多くの人びとはその幸運を何とも思っていない。生まれたときから平和だった。だからそれがあたりまえ。そういう若い世代をうらやましいと思うと同時に、逆に彼らの不幸をも考えないではいられない。「死」を意識しなくなった彼らは「生」の何たるかをも知らない。そして、あたら有限の生をまるで永遠に続くもののように錯覚し、

貴重な人生の日々を浪費している。そこに彼らの不幸がある。

かつて、この国には百年も続いた戦乱の時代があった。鎌倉幕府から室町幕府へと受け継がれた武家の政権が、本来の武家ならではのたくましさを失い、貴族化し、下克上の世の中で無残に崩壊して行き、弱肉強食の戦乱が絶え間もなく続いた。やがて、小勢力は中勢力に、中勢力は大勢力に、次第にふくみこまれて行き、戦国大名と呼ばれる大勢力同士が天下の統一を競う時代となる。

越後に上杉謙信。中国地方に毛利家。尾張の小さな大名から急激に擡頭してきた織田信長。甲斐には、上杉謙信の宿敵・武田信玄。彼らのだれが天下の大権を握るか、予断を許さぬ状況であった。やがて三河の小大名・徳川家康が二百六十余年も続く大政権を確立するとは何人も考えもしなかったろう。

この小説は、あと一歩で覇権を掌中に収めようとしていた武田信玄が、織田信長との対決を前に、まず眼前の邪魔ものともいうべき徳川家康を一気に討ちほろぼそうと、遠江三方ヶ原へ三万余の大軍を進めたところからはじまる。ときに元亀三年（一五七二）十二月。怒濤のような信玄の軍勢を迎えて、家康軍はなすすべもなく敗走し、辛うじて浜松城へ逃げもどる。

信玄は病に没し、謙信またたおれ、ついに信長が天下人となるが、明智光秀のいわゆる三日天下の後、光秀を討った羽柴秀吉がようやくにして日本全国を平定し、名実共に天下統一をなしとげたのは天正十八年（一五九〇）、秀吉軍が北条氏を小田原に攻め、これをほろぼしたときであった。だが、戦乱はこれで終結したのではない。秀吉の没後、天下は再び二つにわかれ、慶長五年（一六〇〇）、関ヶ原の大戦となる。徳川家康は、慶長八年（一六〇三）江戸幕府を開くが、その政権がゆるぎないものとなるのは、さらに十数年を経て慶長十九年（一六一四）大坂冬の陣、翌元和元年（一六一五）大坂夏の陣によって豊臣方の息の根をとめてからであった。

元和九年（一六二三）、徳川秀忠および家光、徳川幕府の威風をしめす大行列をもって上洛、後水尾天皇に拝謁、秀忠将軍位を辞し、家光これを継いで三代将軍となる。

三方ヶ原からここまで五十余年。この半世紀は日本の歴史の中でも最も興味深い時代である。当然、多くの文学のテーマとしてとりあげられ、さまざまな秀作が生まれている。本篇『忍びの旗』も、その白眉として長く後世まで読みつがれて行くべき作品であることを私は疑わない。

その題名からもうかがわれるように、これは「忍び」を主人公とした忍者小説に属する。しかし、これを単なる忍者小説とすることはできない。主人公・上田源五郎は、甲賀忍び・小杉重六の遺児であり、ものごころがつくかつかないうちから厳しい肉体的修練をつみかさねた一流の忍びであるが、源五郎の体内を流れる熱い血は、彼を忍びの枠からともすればはみ出させてしまう。

忍びはあくまでも血が冷え切っていなければならぬ。目的のためには手段を選ばず、ときには親子兄弟であろうとも、平然としてこれを殺すほどの忍びとしての割り切りかたが必要となる。上田源五郎にはそれができない。その意味で源五郎は、忍びの世界におけるドロッ

プ・アウトである。

上田源五郎とて、忍びとしての矜持心は一瞬たりとも忘れることはない。しかし、ふとした運命のいたずらから、敵方の家臣・山岸十兵衛の娘・正子を愛してしまい、のっぴきならぬいきさつから、ついに正子を正式にめとることになる。やがては子もできる。夫であり、父親であるという平穏な人間の暮らしを営む源五郎が、その暮らしを守りたいと思うのは自然の道理である。しかし、忍びとしての源五郎は、その家族のしあわせを根底からくつがえすことを、即ち義理の父・山岸十兵衛が仕える北条家を内部から攪乱し、崩壊させることを絶対の使命としている。

プロフェッショナルとしての誇りにかけて己れの仕事はなしとげねばならぬ。同時に、愛する者たちをも守りぬかねばならぬ。厳しい忍びの掟の中で、上田源五郎がいかにこの二律背反を一つにしようとするか。そこのところに注目して読めば、この長篇小説は、忍者小説というよりも家族というものを主題とした文学であることに気付くだろう。上田源五郎の置かれた立場を、非情な企業組織に属してその歯車として働きつづけながら、しかも家庭の幸福をも追求しようとする、現代のサラリーマンのそれに重ね合わせてみるのは読者の自由である。

源五郎の実の父・小杉重六は、三方ヶ原の合戦で、敵方の忍びと出会い、死闘の後、戦場の露と消える。その敵方の忍びは果たしてだれであったのか。源五郎自身はそれを知らない。実に意外な、思いもかけぬ身近なところに源五郎の父の敵はいる。これから読もうとする読

者のために、それが一体だれであるかを明かすことはしないが、作者・池波正太郎の二重にも三重にも手をつくした、厚みのある小説作法のうまさには、ただ、おどろくほかはない。

二十年、三十年と本来の姿を隠したまま、いざというときに備えているいわゆるサイレント・スパイの物語は、欧米ことにイギリスが伝統的に得意とするジャンルだが、なにも翻訳物ばかりをありがたがることはないのである。われわれの国に池波正太郎あり、だ。

池波正太郎は、激動波乱の戦国時代を一人の忍びの目を通じて、さながら水の流れのごとく淡々と描き切っているが、これは「時の流れ」というものに対する感覚が人一倍鋭い作者にして初めてなしうることだとご承知だろうか。池波正太郎は、すべての物事を、有限の「人生」というスパンでとらえて、そこから今日を逆算して生きる、そういう独特の時間感覚の持ち主である。そこが、われわれ凡人とちがう。

たとえば、池波正太郎は、まだ正月気分がぬけきらないうちから、早くも翌年の賀状を考え、みずからデザインし、絵を描き、印刷の発注をしてしまうので有名である。たいていの人はそのせっかちぶりを笑う。しかし、有限の人生を、その結末から逆算して今日を充実せしめようとすれば、つねに早めに先へ先へと手を打って行く池波正太郎流の生きかた以外にはないのだ。

池波正太郎のどの作品を読んでもいえることとは、「生きかたとは死にかたなり」という一事が根本に据えられて在ることである。とくに本篇『忍びの旗』では、そのことを強く感じる。

忍びの道と、一人の生身の人間としての道の間に、その二つを両立させようとして生涯を賭(か)けた男は、すべてが落着して老齢に達したとき、どのように死ぬべきか。この小説における大きなテーマの一つはそこにある。そして、この長篇小説が池波正太郎の数々の作品の中でもひときわ異彩を放っているのは、主人公の死にかたの鮮やかさゆえであろうと私は思う。

それにしても、である。上田源五郎ほどの男の生涯を決めたのは、結局、まだ十八歳の女(むすめ)・正子ではなかったか。武州鉢形(はちがた)城下、山岸十兵衛家の塩部屋で源五郎が正子を愛したときから、源五郎の生きる道は必然的に決められていたともいえる。男が女を愛し、女が男の愛にこたえる。この人間的な営みは人類の歴史がはじまってこのかた、少しも変わっていない。そして、その営みによって限りなく人間は強くもなり弱くもなる。あらゆる人生や文学や歴史の原点は、煎(せん)じつめれば、いつも「男と女」のことに帰着するようである。逆にまた、これこそが人間生活の原点であることを教えるのが、すぐれた文学というものだと私は思う。

（昭和五十八年八月、コピーライター）

この作品は「忍びの旗」（前編・後編）として昭和五十四年二月新潮社より刊行された。

文字づかいについて

新潮文庫の文字表記については、なるべく原文を尊重するという見地に立ち、次のように方針を定めた。

一、口語文の作品は、旧仮名づかいで書かれているものは現代仮名づかいに改める。
二、文語文の作品は旧仮名づかいのままとする。
三、一般には常用漢字表以外の漢字も音訓も使用する。
四、難読と思われる漢字には振仮名をつける。
五、送り仮名はなるべく原文を重んじて、みだりに送らない。
六、極端な宛て字と思われるもの及び代名詞、副詞、接続詞等のうち、仮名にしても原文を損うおそれが少ないと思われるものを仮名に改める。

新潮文庫最新刊

渡辺淳一著　風の噂
熱烈な恋愛の果てに別な女性と結婚した男が15年たってなお女の消息に心を揺らす表題作など、男女の心の機微を絶妙に捉えた短編集。

連城三紀彦著　飾り火（上・下）
夫が、息子が、そして娘が……。静かに家庭の幸福を破壊してゆく見えざる敵に挑む女の姿を描く。ＴＶドラマ化された愛憎の巨編。

片岡義男著　最愛の人たち
女優、作家、写真家、そして年上の美しい女性……。ある夏の日に語られる永遠の恋人たちの物語が大人の愛のかたちを教えてくれる。

落合恵子著　セカンド・カミング
愛も別離も孤独も、すべてわたしのもの——鮮やかにアメリカの今を生きる、それぞれの彼女たちの第二章。書下ろし恋愛小説。

安西水丸著　アマリリス
病んだ大都会・ニューヨークを漂流する〝ぼく〟と、小さな刺青を入れられた中国人女性。エロチシズムとリリシズム豊かな連作短編集。

大庭みな子著　王女の涙
鬱蒼と樹木が繁る都心の高台にある古屋敷に住む父と娘の哀しい過去の出来事。官能的で挑発的な匂いが誘惑する現代人の愛の悲劇。

新潮文庫最新刊

山本夏彦著
やぶから棒 —夏彦の写真コラム—
世の常識がそのまま道理ではない。一読三嘆、ああそうだったのかと胸のすく思いがする名物コラム。一五〇編を収録した文庫版第一弾。

週刊朝日風俗リサーチ特別局編著
デキゴトロジー vol.7 —ホントだから情けねえ！の巻—
この世に生を受けてから、棺をおおうその時まで、誰にも逃れられない浮世の宿命、それがデキゴト！　新潮文庫オリジナル編集版。

永倉万治著
恋はあせらず —You Can't Hurry Love—
愛と人生に悩む「いまどきのひとびと」に贈る、とっておきの人生得本。読めばたちまち救われる!?　本書の主人公はアナタです。

三浦綾子著
生かされてある日々
日々のうつろいの中に感じる確かな創造の意思。北国の毎日にことよせて、愛と信仰について優しく語りかける感動のエッセイ。

小松重男著
川柳侍
巷に流行る川柳に魅せられた職人、公事師、無宿人。そればかりか、なんと殿様までが密かに作りはじめた。文庫書下ろし時代長編。

澤田ふじ子著
冬のつばめ —新選組外伝・京都町奉行所同心日記—
世情騒然とした幕末の京都。頻発する難事件を名推理で解決する同心・伝七郎の活躍と粛清を繰り返す新選組の内幕を描く連作短編集。

新潮文庫最新刊

M・モンテシーノ　石田善彦訳
大いなる時（上・下）
ギャングに追われるピアノ弾きサルと、ビリー・ホリデイの再来のような娘イザベル。二人が織りなす華麗な運命のタペストリー。

D・スティール　白石朗訳
情熱のエトランゼ
エメラルド色の瞳と炎のような赤毛の持ち主ゾーヤ。ロシア、パリ、ニューヨークで繰り広げられる波瀾に満ちたラブ・ロマンス。

J・キャメロン　P・J・クリストマン　高橋良平訳
風と共に去りぬ 写真集
今なお読みつがれる名作『風と共に去りぬ』の映画作りの舞台裏を、スカーレット役探しのエピソードや幻のフィルムなどで紹介する。

C・ブラント　土屋政雄訳
黙秘権
ラッツィは腕利き刑事だった。が、15年ぶりに戻った現場で、彼の捜査法はすっかり時代遅れに……。元検事が描いた本物の刑事魂。

R・ハーマンJr.　大久保寛訳
第45航空団
中東情勢が緊迫し、急遽サウジアラビアの岬に配備された合衆国空軍第45航空団。強力なイスラム人民軍との死闘に挑む男たちを描く。

G・シーモア　田中昌太郎訳
レッド・フォックス
「赤い旅団」の血を引くテロリスト〝狐(フォックス)〟。目の前で熱愛する女闘士が当局の手に陥ちたとき、彼が画策した不敵な要求とは……。

忍びの旗

新潮文庫　い－16－19

昭和五十八年九月二十五日　発行
平成四年十一月二十日　二十四刷

著者　池波正太郎

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社 新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　営業部(〇三)三二六六—五一一一
編集部(〇三)三二六六—五四四〇
振替　東京四—八〇八番

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社　製本・加藤製本株式会社

© Toyoko Ikenami 1979 Printed in Japan

ISBN4-10-115619-0 C0193